宮城県文化財調査報告書第140集

合戦原遺跡ほか

平成３年３月

宮城県教育委員会

序　　文

埋蔵文化財とは文字どおり「土地に埋蔵されている文化財」のことであり、地下に埋もれている点に最大の特徴をもっています。したがって、一般にその存在が分かりにくく、目立たないため、今日まで保存されてきたとも言えます。また、表面的な観察ではその内容を充分に把握することは困難であり、専門的な学術調査を行うことによって、その歴史的な価値がはじめて明らかになるという性格をもっています。

ところが、埋蔵文化財を包蔵する土地の多くは文化財としての価値とは無関係の目的で私有地や公共用地として所有されているのが普通です。そのため、埋蔵文化財は土地の財産としての利用を目的とした各種の開発によって破壊されてしまう運命に絶えずさらされていると言っても過言ではありません。したがって、積極的に保護していかなければ、埋蔵文化財はたちまち消滅してしまうことになりかねません。

当教育委員会としては、県内の貴重な埋蔵文化財を保護し、後世に伝えて行くことに日夜努力しているところであります。しかし、開発関係の方々との協議の結果、埋蔵文化財を包蔵する土地＝遺跡の一部ないしは全体がどうしても開発区域にかかり、やむを得ず破壊されてしまう事例も年々多くなっています。この場合は、開発にかかる部分について徹底約な発掘調査を実施し、その歴史的な価値を明らかにすると共に、それを記録として後世に伝えて行くことにしております。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき、平成２年度に当教育委員会が行った発掘調査のうち、国庫補助金を得て実施した遺跡の発掘調査の内容を収録したものであります。この成果がそれぞれの地域の歴史の解明と文化財保護に貢献できれば幸いです。

最後に各遺跡の保護に理解を示され、調査に協力頂きました関係各位および直接発掘作業にあたられた方々に敬意を表しまして序文といたします。

平成３年３月

宮城県教育委員会 教育長　**大立目　謙直**

目　　次

平成２年度発掘調査の概要 …… 1
合戦原遺跡 …… 9
田東山寂光寺跡 …… 121
大嶺八幡遺跡・八幡遺跡 …… 167
要害原遺跡 …… 223
吉野城跡 …… 229
川袋古墳群・山中遺跡 …… 237
中組遺跡ほか …… 245
薬莱山麓遺跡群 …… 271
小泉東山遺跡 …… 299
堀合館跡 …… 311
都遺跡 …… 321
西浦遺跡 …… 329
清水遺跡 …… 337
中屋敷前遺跡 …… 343

例　　言

１．本書は宮城県が平成２年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した発掘調査等の調査報告書である。

２．開発工事等にかかる埋蔵文化財保護のための協議や発掘調査にあたっては、次の開発担当機関および地元教育委員会等から多大なご協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

　宮城県教育庁財務課、宮城前田コンクリート工業株式会社、正和建設株式会社、宮城県農業公社、玉田建設株式会社、宮城県農政部耕地課、宮城県大河原土地改良事務所、宮城県迫土地改良事務所、積水化学工業株式会社

３．本書で使用した土色については『新版標準土色帖』（1973）を参照した。

４．本書に各遺跡の位置図として掲載した地形図は建設省国土地理院発行の1/25,000の地図を複製して使用したものである。

5．本書は調査員全員の協議を経て下記の者が執筆・編集した。

平成元年度発掘調査等の現状－小井川和夫、合戦原遺跡－岩見和泰・佐藤憲幸、寂光寺跡－木皿直幸、大嶺八幡遺跡・八幡遺跡－小村田達也、要害原遺跡－真山悟、吉野城跡－手塚均、川袋古墳群･山中遺跡－庄子敦(利府町教委)、中組遺跡他－村上利雅、薬莱山遺跡群－佐藤則之･山田晃弘（東北歴史資料館）・藤村新一（東北計器工業株式会社）、小泉東山遺跡－梶原洋(東北福祉大)、堀合館跡－真山悟、都遺跡･西浦遺跡･清水遺跡－森貢喜(蔵王町教委)、中屋敷前遺跡－佐々木安彦(大河原町教委)

6．発掘調査で出土した遺物および調査記録類などは宮城県教育委員会ないしは地元市町村教育委員会で保管している。

平成２年度発掘調査の概要

１．国庫補助事業関係発掘調査

(1)　事業の概要

宮城県教育委員会が平成２年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金（総事業費 14,000 千円、補助率 1/2）を得て実施した分布調査・発掘調査は 18 件である(表１)。いずれも、おのおのの市町教育委員会の協力のもとで、埋蔵文化保護の観点に基づき、土木工事等の各種開発計画に対応して実施したものである。調査の内容としては、開発計画が具体化する前に遺跡の範囲・内容を把握するための分布調査・発掘調査(薬莱山遺跡群、寂光寺跡等)、開発計画地内における遺跡の範囲や遺構のあり方を確認しそれらの保存のための資料を得ることを目的とした発掘調査(堀合館跡、大嶺八幡遺跡等)、個人の用に供する宅地造成等の開発行為に対処するための発掘調査(吉野城跡等)などがある。

本書は各遺跡の調査結果を収録したものであるが、舘南囲遺跡・小堤城跡（表１－17・18）については、別に町道改良工事に伴って調査を行った舘南囲遺跡の内容との関わりから県報告 144 集において報告した。

(2)　調査に至る経過及び調査結果の概要

〔合戦原遺跡〕

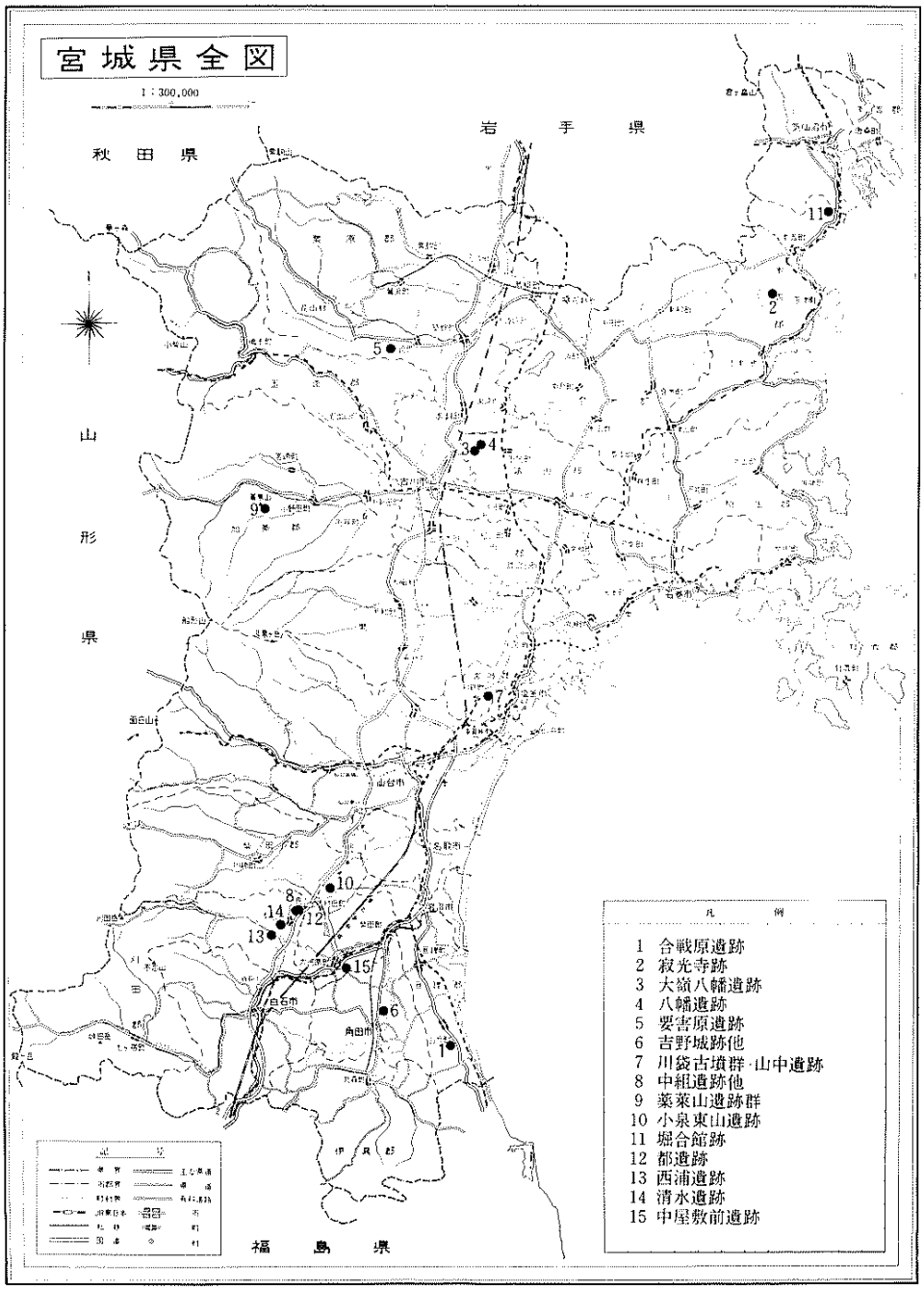
遺跡は山元町南部の平地に臨んだ丘陵斜面に立地する。周辺に前方後円墳・円墳群が分布することから合戦原古墳群として登録されていた。

調査の契機は宮城県山元養護学校グランド整備事業計画が提示されたことによる。計画地は南東方にゆるやかに傾斜する丘陵裾部であるが、隣接する宮城病院の敷地として既に造成され各種施設が配置されていた地区である。しかし工事に先立って確認調査を実施したところ、削平は受けているものの古墳時代の竪穴住居跡・奈良時代の須恵器窯跡が検出された。このため、これらの遺構の保存について協議を重ねた結果、事業は一部計画を変更して計画地西側の新たな造成予定地域から検出された遺構の大部分は盛土によって保存を図ることとなった。

〔寂光寺跡〕

本遺跡は本吉郡歌津町と本吉町にまたがる田束山の南斜面に展開する山岳寺院及び修験道にかかわる遺跡である。

江戸時代半ば、佐久間洞厳が著した地誌「奥羽観蹟聞老志」には、平安時代末に藤原秀衡が山頂に羽黒山清水寺、山腹に田束山寂光寺、北嶺に幌羽山金峰寺の七堂伽藍をはじめとする 70 余坊を造営したことを始まりとし、中世に至って葛西氏によって再興されたと記


宮城県全図
1：300,000
秋田県
岩手県
山形県
福島県
凡例
1 合戦原遺跡
2 寂光寺跡
3 大嶺八幡遺跡
4 八幡遺跡
5 要害原遺跡
6 吉野城跡他
7 川袋古墳群・山中遺跡
8 中組遺跡他
9 薬莱山遺跡群
10 小泉東山遺跡
11 堀合館跡
12 都遺跡
13 西浦遺跡
14 清水遺跡
15 中屋敷前遺跡

されている。

本遺跡の調査は平成２年度が第３年次であるが、調査の直接の契機は昭和62年５月に提示された、現在中腹に建つ計仙麻大島神社の建て替え計画であった。さらに翌63年６月には生活環境保全計画の協議も提出された。これらの計画との調整を図るためにも県教育委員会・歌津町教育委員会は緊急範囲確認調査を実施し、遺跡の規模・内容を把握することとした。

遺跡名称は計仙麻大島神社の建つ地が「奥羽観蹟聞老志」に記載のある田束山寂光寺の故地であるとの伝承に由来する。

第１次調査は昭和63年８～９月に、神社境内（標高460mの平坦面）およびそれから約15m低い位置に造成された平坦面を対象に実施された。その結果両平坦面から礎石建物跡・基壇などの遺構・整地地業の痕跡などが検出された。建物跡はいずれも近世以降のものであったが、整地地業は中世であり基壇もその時期まで遡る可能性が考えられた。この結果を受けて平成元年５月に実施された第２次調査は、この一帯の各所に認められる平坦面の遺構の在り方・年代さらにその性格の解明を目的に、第１次調査における下段平坦面から約50m西の位置にある平坦面を対象として実施された。調査の結果、塀跡･基壇･鏡埋納遺構や整地地業の痕跡などが検出され、それらは中世陶器や鏡などの遺物から鎌倉～室町時代頃に位置づけられた。

本年度の第３次調査は、第２次調査が日程等の関係から部分的なものに留まったため、平坦面全域を対象として調査を継続したものである。成果については本文を参照されたい。

〔大嶺八幡・八幡遺跡〕

田尻町北部の丘陵地上に立地する遺跡である。平成元年９月に八幡地区で古代に属する土塁状遺跡およびそれに伴う溝跡が発見された。土塁状遺構はおよそ２mの高さで東西約300mにわたって残存している。この地域では以前から古代の瓦なども採集され、『続日本記』に記載のある新田柵の擬定地にも挙げられていたが、この発見はその説を補強するものとして注目された。こうしたことから平成２年３月あらためて周辺一帯の分布調査を実施したが、本遺跡はその際確認された遺跡で、土師器･須恵器などが散布しており、土塁･溝とも近接していることからその関連性も考えられた。

本調査は両遺跡について住宅団地造成計画、工場用地拡張計画が相次いで提出されたことに対応して保存協議のための確認調査を実施したものである。大嶺八幡遺跡では奈良時代の竪穴住居跡が３棟検出されたが、協議の結果、住宅跡部分は団地内の緑地として使用することとし、その保存が図られることになった。八幡遺跡においても奈良時代の竪穴住居が４棟検出され拡張計画地外にもさらに多数の遺構の存在が予想された。調査の結果に

基づき本遺跡の保存について協議を重ねたが、この計画は用地の狭隘化に伴い多年準備されてきたものであり検出された遺構を現状のまま保存することは困難な状況に至っていることから止むを得ず記録保存のための調査を実施することとした。ただし今後に予定されていた新たな拡張計画は遺跡保存の観点から全面的な見直しが加えられることになった。

〔要害原遺跡〕

一迫町西部の丘陵上に立地する。草地造成に伴い発掘調査を実施した。計画は当初東側にある中世城館・鹿鼻館跡地内で予定されていたが、同館跡の保存のための協議の結果計画地は西側に変更された。ただしその部分も周知の要害原遺跡に近接しており、その範囲外ではあるが地形的には連続していることから遺構確認調査を実施したものである。調査の結果、表土中から若干の縄文土器・土師質土器が出土したが遺構の検出はなかった。

〔吉野城跡〕

角田市北部、阿武隈川左岸の自然堤防防止に立地しており、内外二重の堀で囲まれた方形の城跡であろうと考えられている。内堀のすぐ外側にあたる地点で個人住宅建築計画が提示されたため調査を実施したものである。調査の結果、土壙４基が検出され若干の土師器片が出土したが、城跡に関連するとみられる遺構は検出されなかった。

詳細については市教育委員会により別途報告書が刊行される予定である。

〔川袋古墳群・山中遺跡〕

利府町南東部の標高 37～38mの丘陵上に立地する。川袋遺跡群は円墳３基からなり周囲には縄文・古墳時代の遺跡と考えられる山中遺跡が展開している。この調査は川袋古墳群第３号墳およびその周辺について建築資材置場としての造成計画が提示されたため、それ

表１　平成２年度国庫補助事業一覧

No.	遺　跡　名	所　在　地	開発事業の種別	開発担当部局
1	合戦原遺跡	亘理郡山元町高瀬字合戦原	グラウンド造成	宮城県教育委員会
2	寂光寺跡	本吉郡歌津町字樋の口	重要遺跡確認調査	
3	大嶺八幡遺跡	遠田郡田尻町八幡字白山	宅地造成	一般開発業者
4	八幡遺跡	遠田郡田尻町八幡字袋沢	工場用地造成	一般開発業者
5	要害原遺跡	栗原郡一迫町字要害	草地造成	個人
6	吉野城跡	角田市佐倉字上北原	宅地建設	個人
7	川袋古墳群・他	宮城郡利府町森郷字川袋	資材置き場整地事業	一般開発業者
8	中組遺跡・他	刈田郡蔵王町円田字新石橋他	県営圃場整備事業	大河原土地改良事務所
9	薬莱山遺跡群	加美郡小野田町字芋沢柏木平他	分布調査	
10	小泉東山遺跡	柴田郡村田町大字小泉朝東山	畑地整備	個人
11	堀合館跡	本吉郡本吉町岩尻後田	県営圃場整備事業	迫土地改良事務所
12	都遺跡	刈田郡蔵王町大字平沢字都	重要遺跡確認調査	
13	西浦遺跡	刈田郡蔵王町大字円田字西浦	牛舎建設	個人
14	清水遺跡	刈田郡蔵王町大字円田字清水上	住宅建設	個人
15	中屋敷前遺跡	大河原町字広瀬町12の3	住宅建設	個人
16	中屋敷前遺跡	大河原町字広瀬町７の3	住宅建設	個人
17	舘南囲遺跡	亘理郡亘理町字舘南・雪穴	ビニールハウス建設	個人
18	小堤城跡	亘理郡亘理町字泉ケ入	庫裡建て替え	個人

に対応して実施されたものである。調査の結果、古墳の周辺からは底部穿孔の土師器を伴う周溝墓の一部、古墳時代中期頃とみられる竪穴住居跡４が検出された。また古墳は 22～23 mの規模の横穴式石室墳で、主体部奥壁は失われていたが側壁基底部・床面等は良好に残存していた。こうした結果に基づいた遺構の保存協議により、古墳については現状のまま保存が図られることになっている。

なお、調査結果の詳細については追って町教育委員会により報告書が刊行される予定である。

〔中組遺跡他〕

蔵王町北部の円田地区を対象とした県営圃場整備事業に関わる一連の遺跡の発掘調査である。中組・堂の入・屋木戸内・立目場・中沢Ａ遺跡について実施したが、遺構が検出されたのは中組遺跡だけであった。中組遺跡は円田盆地西縁の丘陵暖斜面から微高地にかけて立地する遺跡で、調査の結果、縄文時代中期頃とみられる陥穴状土壙・近世期の掘立柱建物跡などが検出された。

〔薬莱山遺跡群〕

小野田町西部の薬莱山の東西に広がる標高 200～300mのなだらかな丘陵に展開する。昭和50年頃からの断続的な分布調査によって火山灰層が良好に堆積していることが明らかになっており、旧石器時代を含む数ヵ所の遺跡も発見されている。今回の調査は、この地域一帯が総合保養地域整備法に基づく特定地域に組み込まれて大規模なリゾート開発整備構想が打ち出されたことから、これに対応するために集中的に分布調査を実施したものである。調査の結果51遺跡の存在が確認されその中には旧石器時代の遺跡14が含まれている。

この調査に基づいて協議を重ねた結果、遺跡についてはその立地環境を含め極力保存する方向で整備計画を立案することで調整が図られた。

〔小泉東山遺跡〕

村田町北東部の丘陵上に立地する旧石器時代の遺跡である。平成元年度夏に新たに発見された遺跡であるが、同年冬、畑地造成工事に伴い土取りされるという事態が生じた。このため翌平成２年春、残存部分について緊急に発掘調査が実施された結果、後期旧石器の文化層４、前期旧石器の文化層２が確認され、これまで内容の不明であった宮城県南部の旧石器文化を知る上での貴重な資料が得られた。今回の調査は、春に実施した調査において未了であった部分を対象とした第２次調査であり、後期旧石器の追加資料が得られた。

なお調査報告書は町教育委員会により平成３年度に刊行される予定である。

〔堀合館跡〕

本吉町北部にあり、標高 20mの海岸段丘東端（沖積地との比高 10m）に築かれた館跡で

ある。ただし北辺部は昭和30～40年代の開田によって旧地形が失われ現状では範囲なども明確でない。この調査はその北辺部が県営圃場整備事業地内に含まれたことから内容把握のための確認調査を実施したものである。調査の結果、調査区南端で空堀１条、その北約20mの地点で併走する２条の空堀が確認された。南端の空堀は館跡の中心的平場の裾を巡るものであり、北の２条の空堀は中心的平場の北側に一段下がってとりつく平場を画すものであった。平場内は全面が削平を受けており他の遺構などは検出されなかったが、不明確であった北辺部分の調査によってこの館跡の全体的な構造が明らかになった。

なお圃場整備事業は田面高・水路位置などを変更し、検出された空堀に影響をおよぼさないようなかたちで実施することになった。

〔都遺跡〕

蔵王町北東部の沖積地内にある。以前は周囲より一段高い地形であったといわれるが、昭和37・38年、付近を流れる藪川の堤防構築に際し土取り・削平され現在はその範囲も明確でない。しかし、削平の際、大量の土器類とともに古代の瓦が採集され“都”という地名もあって、古代苅田郡に何らかの関わりのある遺跡と考えられている。

この調査は、周辺一帯について将来圃場整備計画が構想されていることから、事前に確認調査を実施してその保存のための資料を得ることを目的としたものである。水田として利用されている地域であり、調査地点・時期も限定されていたが、遺跡の範囲・内容について一定の資料が得られた。調査は平成３年度も継続する予定である。

〔西浦遺跡〕

蔵王町南部の河岸段丘上に立地する遺跡で、弥生時代円田式の標式となった長頸壺の出土遺跡として知られている。地権者から牛舎建築計画が提示されたため確認調査を実施した。調査の結果、表土下80ｃｍで平安時代の竪穴住居跡が１棟検出されたが、建築に際し建物基礎部分が住居跡に及ばないように工法を変更し、その保存が図られることとなった。

〔清水遺跡〕

蔵王町北部にあり、丘陵の南斜面に立地している。個人住宅建築計画に伴い調査を実施した。計画は過去において畑地構造のため一部削平されている。調査の結果は平安時代頃と考えられるピットなど若干の遺構と、土師器・須恵器片数点が発見されただけであった。

〔中屋敷前遺跡〕

遺跡は大河原町南部の自然堤防上に立地している。昭和53年、周辺一帯の区画整理事業に伴う水路掘削の際多くの古代の瓦が出土したことから遺跡として周知された。県南地方では数少ない瓦出土地であり、また瓦は東北地方においても類例の少ない平安時代中頃の特徴を示すことから注目されている。

今回の調査は瓦出土地点の近接地における２件の個人住宅建設協議が提出されたことに対応して実施したものである。

調査の結果、１件は旧河道部にあたっており、遺構・遺物の発見はなかった。他の１件の地点では、径１m前後の礎石が数個発見され、その配置から少なくとも２棟の建物跡の存在が確認された。このことにもとづく協議の結果、住宅は建物跡部分を避けて建設しその保存を図ることとした。

２．国庫補助事業以外の発掘調査等

宮城県教育委員会が平成２年度に実施した国庫補助事業以外の発掘調査および県内市町村教育委員会が実施した発掘調査に対し協力を行った件数は以下の41件である。(表２)。

表２　平成２年度発掘調査一覧（国庫補助以外）

No.	遺跡名	所在地	開発事業の種別	開発担当部局	備考
1	佐沼城跡	登米郡佐沼字内町	県道改良工事	迫土木事務所	立会調査
2	蒲切沢遺跡	黒川郡大衡村字蒲切沢	村道改良工事	大衡村	県報告第144 集
3	上桜木製鉄遺跡	黒川郡富谷町板坂字上桜木	土地区画整理	成田土地区画整理組合	立会調査
4	大畑Ｂ遺跡	白石市字大畑	国道 113号改良工事	大河原土木事務所	県報告第144 集
5	野田山遺跡	名取市愛島塩手字野田山	県立ガンセンター建設	宮城県医務課	平成３年度報告
6	大嶺八幡遺跡	遠田郡田尻町八幡字白山	宅地造成	一般開発業者	県報告第140 集
7	深沢山遺跡	柴田郡村田町沼田字深沢山	町道改良工事	村田町	県報告第144 集
8	八幡遺跡	遠田郡田尻町八幡字袋沢	工事用地造成	一般開発業者	県報告第140 集
9	双樹館跡	登米郡中田町字石森二ツ木	町道改良工事	中田町	町報告
10	日向山遺跡	栗原郡花山村字草木沢日向山	県道改良工事	築館土木事務所	立会調査
11	台町古墳群	伊具郡丸森町字二本木	阿武隈川築堤工事	建設省東北地方建設局	県報告第144 集
12	菅無遺跡	宮城郡松島町根廻字人笹	国道45号線付替工事	宮城県道路公社	県報告第144 集
13	下南山遺跡	伊具郡丸森町華甫字下南山	松ケ房ダム建設	福島県農政部	県報告第144 集
14	藤田新田遺跡	仙台市若林区荒井字藤田	仙台東道路建設	日本道路公団	県報告第142 集
15	僧坊遺跡	桃生郡矢本町大塩字中沢	宅地造成	一般開発業者	遺構・遺物なし
16	住社遺跡	角田市角田字町田	共済組合事務所建設	角田地方農業共済組合	市報告
17	田町裏遺跡	角田市梶賀字高畑北	工事用地造成	角田市	市報告
18	上野館跡	志田郡松山町千石字松山	松山高校校舎建設	宮城県教育委員会	県報告第143 集
19	丹波谷地遺跡	玉造郡岩出山町字轟	産業廃棄物処理場建設	一般開発業者	遺構・遺物なし
20	玉荻台遺跡	栗原郡築館町字照越新田	町道改良工事	築館町	立会調査
21	伊治城跡	栗原郡築館町字城生野大堀	重要遺跡確認調査	築館町	町報告
22	南館跡	仙台市青葉区字峰岸前	河川改修工事	仙台東土木事務所	遺構・遺物なし
23	長石武山館跡	桃生郡河北町釜谷	県道改良工事	石巻土木事務所	立会調査
24	西風Ｂ遺跡	桃生郡鳴瀬町高松字西風	矢本道路建設	建設省東北地方建設局	遺構なし
25	山王遺跡	多賀城市南宮字八幡	仙塩道路建設	建設省東北地方建設局	県報告第141 集
26	一里塚遺跡	黒川郡大和町吉岡字桧木	土地区画整理	吉岡東土地区画整理組合	町報告
27	車遺跡	黒川郡大和町吉岡字車	土地区画整理	吉岡南土地区画整理組合	町報告
28	東新熊野堂遺跡	黒川郡大和町吉岡字新熊野堂	土地区画整理	吉岡南土地区画整理組合	町報告
29	湯坂山Ｂ遺跡	刈田郡蔵王町円田字湯坂山	町道改良工事	蔵王町	町報告
30	川袋古墳群	宮城郡利府町森郷字川袋	資材置き場造成	一般開発業者	町報告
31	上原遺跡	刈田郡蔵王町大字曲竹字桜所	パチンコ店建設	一般開発業者	遺構・遺物なし
32	硯沢窯跡	宮城郡利府町二ツ石	松島有料道路	宮城県道路公社	町報告
33	西浦Ｂ遺跡	刈田郡蔵王町大字円田字西浦	スーパーマーケット	一般開発業者	町報告
34	高田遺跡	仙台市若林区日辺字千刈田	仙台南道路建設	宮城県道路公社	県報告第144 集
35	桑折城跡	志田郡三本木町	県道改良工事	古川土木事務所	立会調査
36	荒町遺跡	角田市尾山字荒町	屋内運動場建設	角田市教育委員会	市報告
37	舘南囲遺跡	亘理郡亘理町字舘南・雪穴	町道改良工事	亘理町	県報告第144 集
38	市川橋遺跡	宮城郡利府町加瀬字新一本杉	仙塩道路建設	建設省東北地方建設局	町報告
39	大多古墳塚	登米郡迫町北方字大田河前	県営圃場整備	迫土地改良事務所	立会調査
40	羽山館跡	白石市白川犬卒都婆字羽山	砕石採取	一般開発業者	市報告
41	日の出山窯跡群	加美郡色麻町四釜字東原・他	分布状況確認調査・他		町報告

合戦原遺跡（かっせんはらいせき）

目　　次

Ⅰ　はじめに 11
位置と地理的環境　　歴史的環境　　調査の経過
Ⅱ　発見された遺構と遺物..... 18
竪穴住居跡
窯跡
その他の遺構（土壙、溝、ピット）
その他の遺物
Ⅲ　考察 69
遺物の検討　　土師器について　　窯跡出土遺物について　　鉄鏃について
遺構の検討　　大型住居跡について　　窯跡について
Ⅳ　まとめ 97
写真図版

調 査 要 項

遺 跡 名：かっせんはらいせき
遺跡記号：ＫＺ　（遺跡地名表登載番号　14014）
所 在 地：亘理郡山元町高瀬字合戦原
調査原因：宮城県山元養護学校のグラウンド造成
調査期間：平成２年(1990 年) ５月22 日～23 日(確認調査)、７月２日～８月10 日(事前調査)
調査面積：約 2900 ㎡
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：白鳥良一・阿部恵・真山悟・菊地逸夫・須田良平・古川一明・鈴木真一郎・近藤和夫・岩見和泰・木皿直幸・佐藤憲幸・吾妻俊典・村上利雅
調査参加者：赤沢靖章(坂元中学校教諭)・岩佐てつい・菅野弘治・菊地儀三郎・佐藤みどり・鈴木金之助・高橋泰治・高橋みさ子・富田かね子・三浦京子・武者要介・渡辺孝吉
調査協力：山元町教育委員会・宮城県山元養護学校・国立療養所宮城病院・渡辺常吉(山元町文化財保護審議委員)・伊東　繁（山元町合戦原地区区長）

合戦原遺跡（かっせんはらいせき）

Ⅰ　はじめに

１．位置と地理的環境

亘理郡山元町は宮城県の南東端に位置し、東側は太平洋、西側は福島県から延びる阿武隈山地の支脈によって画されている。阿武隈山地は宮城県に入ると二つに枝分かれし、東側の支脈は海岸線に沿って北上し、北端が阿武隈川と接する。この支脈は標高 200～300mの丘陵で、その縁辺には小河川によって開折された小丘陵や海岸段丘が分布している。小丘陵の東側には浜堤の発達が著しく、海岸線に平行して約７列認められる(田崎：1971)。海岸線と小丘陵の間には沖積地が広がっており、現在は水田として利用されている。

合戦原遺跡は亘理郡山元町高瀬字合戦原に所在し、常磐線山下駅の南方約 2.8ｋｍの地点にある。阿武隈山地の縁辺に発達した、東へと延びる小丘陵の南東部に位置し、海岸段丘の下位面に立地する。この小丘陵のすぐ南側には、現在水田化されている沖積平野が広がっており、さらに南側には同様の小丘陵が東西に横たわっている。合戦原遺跡の東側は緩やかに傾斜して沖積地へと続き、南東側には合戦原遺跡が存在する丘陵に接するように独立丘陵が南北に延び、合戦原遺跡はこれらに囲まれた小丘陵の緩やかな斜面にある。

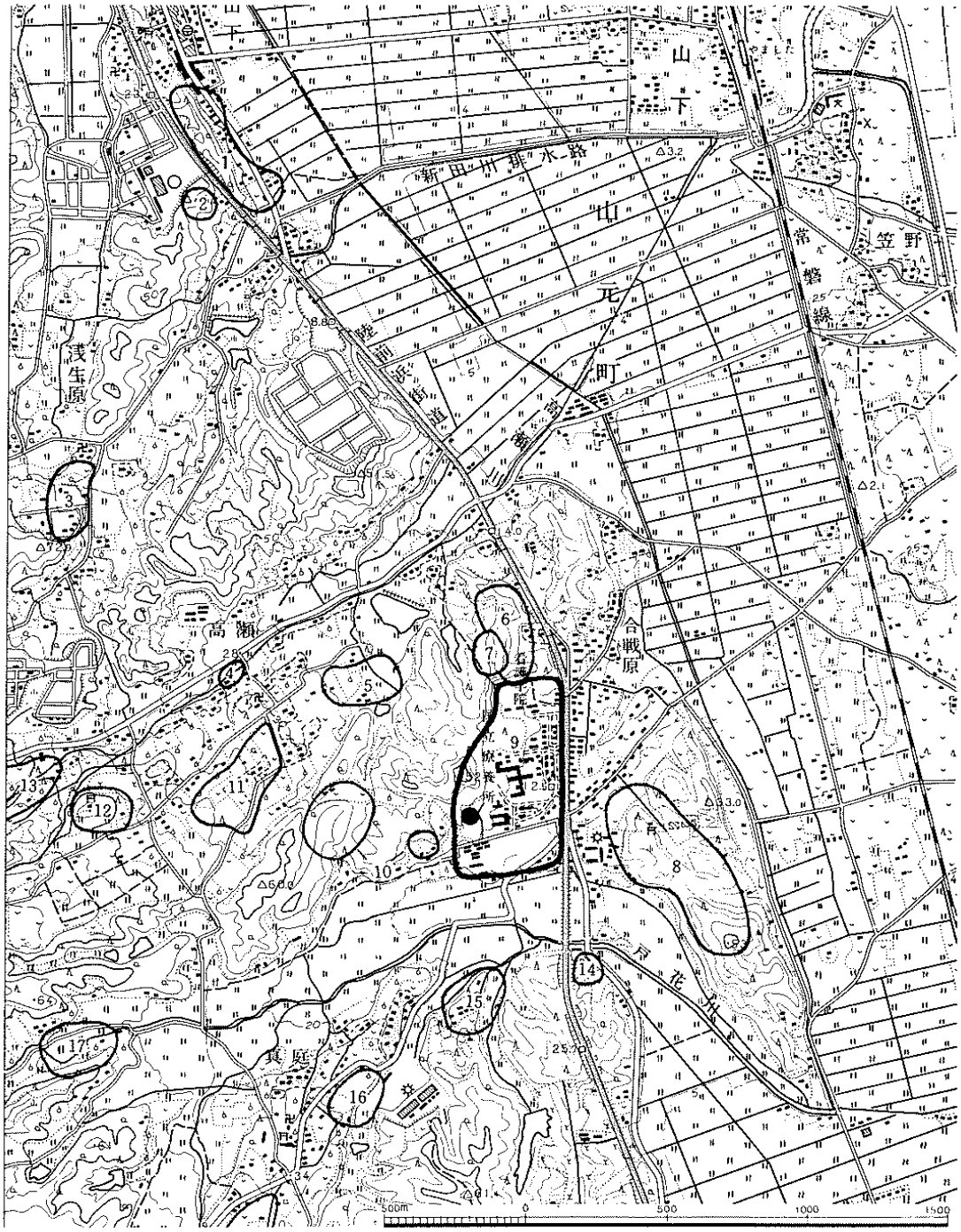
今回調査したところは合戦原遺跡の南西部にあたり、標高 20～26mの緩斜面にある。調査区の北側と西側は丘陵の急斜面となっており、ここから緩斜面が南と東側に広がっている。調査以前は温室などの国立療養所宮城病院の施設が作られており、遺構のほとんどは何らかの撹乱を受けていた。周りは丘陵の形を残している北側と西側を除いて、既に開発によって旧地形は失われており、調査区の東側及び南東側には国立療養所宮城病院の施設などが作られ、南側には宮城県山元養護学校の校舎などが建てられている。

２．歴史的環境

合戦原遺跡の周辺には、館下窯跡・戸花山窯跡・北名生東窯跡といった古代の窯跡群をはじめとして、多くの遺跡が分布することで知られている。合戦原遺跡とその周辺の遺跡について概観してみたい（第１図）。

合戦原遺跡は総面積が約 19 万㎡の大遺跡で、地点によって性格が異なる。遺跡内の北東部分には、従来より８基の円墳からなる古墳群として知られている合戦原古墳群があり、1989 年度の分布調査の際に全長約 40mの前方後円墳が存在することが明らかとなった。また、古墳群の南東には数基の横穴墓からなる合戦原横穴墓群があるほか、古代の窯跡が存在することが指摘されていた[1)]。

合戦原遺跡の周辺には、縄文時代以来数多くの遺跡が営まれている。合戦原遺跡の南西



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	山下館跡	城館	中世	7	館下館跡	窯跡	古代	13	石山原遺跡	包含地	縄文
2	日向窯跡	窯跡	古代	8	戸花山窯跡	窯跡	平安	14	貝吹城跡	城館	平安
3	下大沢遺跡	包含地	縄文（前）	9	合戦原遺跡	集落他	古墳（中・後）	15	上台遺跡	包含地	弥生
4	窯後遺跡	包含地	古代	10	北名生東窯跡	窯跡	古代	16	原遺跡	包含地	古代
5	大久保遺跡	包含地	縄文・古墳・古代	11	窯原遺跡	包含地	古代	17	北鹿野遺跡	包含地	古墳
6	中島館跡	城館	中世	12	北の原遺跡	包含地	縄文（早・前・後）				

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

にある南権現遺跡は縄文時代早期から前期にかけての遺跡として知られており、ほかに縄文時代の遺跡が数遺跡存在している。弥生時代の遺跡としては谷底平野を挟んで合戦原遺跡の南側にある上台遺跡があり、古墳時代の遺跡としては北鹿野遺跡や原遺跡が知られている。いずれも谷底平野に面する丘陵裾野にあり、谷底平野を利用して稲作を行っていたものと考えられる。合戦原遺跡の南東約 2.5ｋｍのところには３基の円墳からなる狐塚古墳群があり、合戦原遺跡は古墳や古墳群としての規模においてこれを上回る遺跡である。古代になると合戦原遺跡の立地する丘陵上に多くの遺跡が営まれるようになる。特に、合戦原遺跡の東側にある戸花山窯跡、西側に隣接する北名生東窯跡、北側に隣接する館下窯跡は、合戦原遺跡内に存在する窯跡群とともに、古代においてここが須恵器の一大生産地であったことを物語るものであろう。中世になると東に広がる沖積地を臨む丘陵上に館跡が作られるようになる。合戦原遺跡の北側に隣接する中島館跡は、奥州藤原氏の祖である亘理権太夫藤原経清の居館であったという伝承がある遺跡で、その全容の解明が待たれるところである。また、合戦原遺跡の南方約2ｋｍの丘陵上には愛宕山館跡と呼ばれる戦国時代の城館が知られており、『奥相秘鑑』には城主であった坂元大膳と相馬氏との戦いの記録が記されている。戦国時代末には、愛宕山館跡の南側の丘陵に蓑首城が築かれ、江戸時代には大條氏が移り住んで坂元を治め、明治に至っている[2)]。

合戦原遺跡の西側、阿武隈山地の山沿いには「東海道(あずまかいどう)」と呼ばれる古道がある。この古道は江戸時代に整備された「江戸浜海道」ができるまで陸奥国南部の浜通りの基幹道であったと考えられている[3)]。江戸浜海道は、奥州街道を岩沼で分かれて中村・水戸を経て江戸に通ずる街道で、合戦原遺跡のすぐ東側を南北に延びている。この街道が合戦原遺跡と接するところに「金子坂(かなござか)」と呼ばれる鉄滓やフイゴの羽口が多数見つかる場所があり、時代は不明であるが、合戦原遺跡の周辺で製鉄が行われていたことを物語るものであろう。

以上のように、合戦原遺跡はすでに古代から遺跡が数多く隣接し、また、古墳時代においても前方後円墳を中心とした古墳群が存在することから考えると、当時からすでにこの地域の中心的な位置にあったと考えられよう。

３．調査の経過

本遺跡の調査は、合戦原古墳群として登録された範囲内における宮城県山元養護学校のグラウンド造成に係わるものである。まず、その工事に先立って、グラウンド造成予定地となった国立療養所宮城病院の旧用地部分の遺跡の状況を把握するため、平成２年５月に２日間の日程で確認調査を行った。その結果、古墳時代の住居跡をはじめとする遺構群

が確認されたため、７月から約１ヵ月間の事前調査（本格調査）を行い、古墳時代の竪穴住居跡や古代の窯跡、古墳時代以降の土壙・溝跡などを検出した。これらの遺構の発見によって、合戦原遺跡内に古墳時代の集落跡が存在することや、古代の窯跡の広がりを新たに把握することができた。また、調査の結果、５世紀末から６世紀初頭にかけての良好な資料が得られたほか、当時の有力者が居住していたと考えられる大型の竪穴住居跡が発見され、調査した部分が遺跡内の中枢部分であった可能性が考えられた。

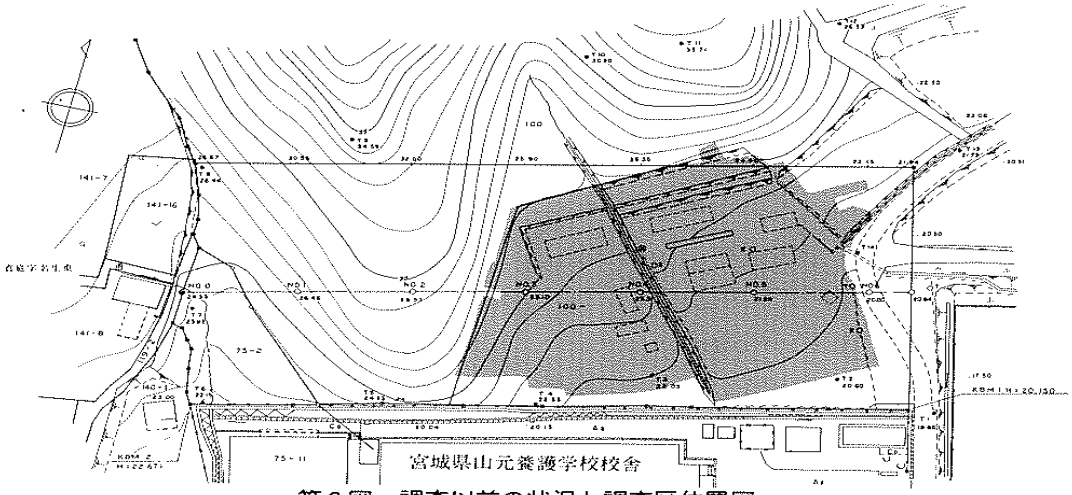
調査は、まず調査区の表土除去を重機によって行い、その後に遺構の精査を行った。次に遺構確認後にグリットの設定を行った。グリットの基準には工事の際に基準となる№０を用い、グリットは基準杭№０と№６を結ぶ線を基準線として３m単位で設定した(第２図)。基準線は真北より東へおよそ 76°30′偏している。

今回の事前調査では、宮城県山元養護学校と宮城県教育庁財務課と協議の結果、竪穴住居跡８軒のうち４軒、窯跡３基のうち１基、土壙22基のうち５基、溝６条のうち１条などを現状保存することとなり、残りの竪穴住居跡４軒、窯跡２基（うち１基は前庭部の一部のみ)、土壙17基、溝５条などを精査した。

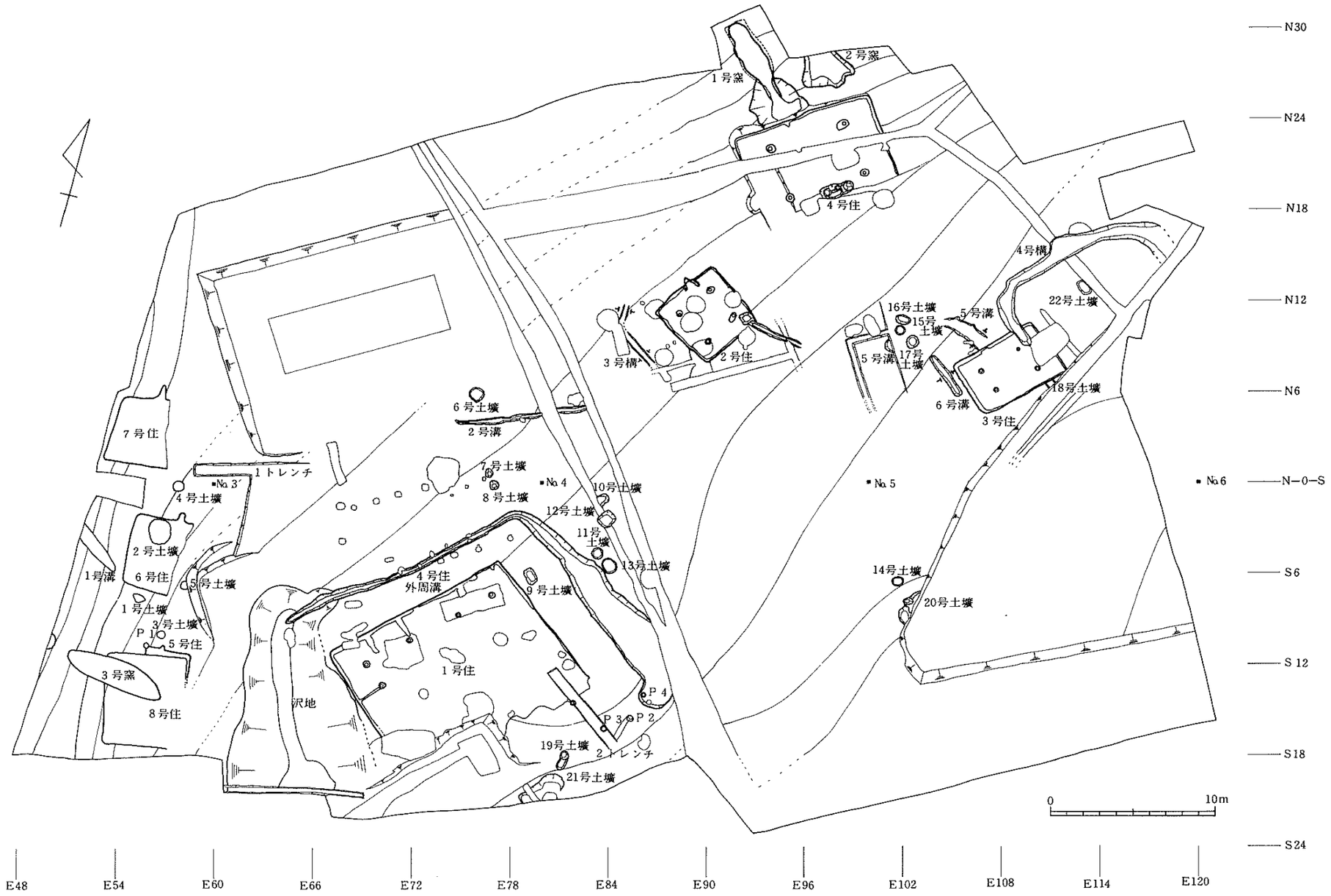
また、以上のような遺構の精査がほぼ終了に近づいた８月４日には一般県民を対象とした現地説明会を開催し、三百人におよぶ多くの方々の参加を得た。

調査で検出された遺構については、遺構を精査した部分については簡易遣り方測量を行い、その他は平板測量によって平面図を作成し、精査した遺構については必要に応じて断面図も作成した。また、35mmモノクロ写真･同カラーリバーサル写真および 60mmモノクロ写真による記録を併せて行った。

報告書作成に関しては、11月から本格的な整理を開始し、事実報告と、その中から提起



第２図　調査以前の状況と調査区位置図


N30
N24
N18
N12
N6
N−0−S
S6
S 12
S18
S24
E48
E54
E60
E66
E72
E78
E84
E90
E96
E102
E108
E114
E120
0
10m
1 号窯
2 号窯
4 号住
4 号構
22号土壙
16号土壙
15号土壙
5 号溝
17号土壙
5 号溝
18号土壙
6 号溝
3 号住
3 号構
2 号住
6 号土壙
2 号溝
7 号住
1 トレンチ
No. 3′
4 号土壙
No. 4
7 号土壙
8 号土壙
10号土壙
12号土壙
11号土壙
13号土壙
No. 5
No. 6
14号土壙
20号土壙
2 号土壙
1号溝
6 号住
5 号土壙
1 号土壙
3 号土壙
P 1
5 号住
3 号窯
8 号住
4 号住
外周溝
9 号土壙
1 号住
沢地
P 4
P 3
P 2
19号土壙
2 トレンチ
21号土壙

第 3 図　遺構配置図

される問題とに分けて記述することにした。なお、遺構検出に際して、堆積土が地山に極めて似ていたことなどから確認作業に困難が伴い、発掘調査時に登録した遺構番号に欠番が多数出たため、原図の遺構名と本書の遺構名は下記のように変更した。

なお、現地説明会資料の遺構名は原図によるものと異なっていたことを明記しておく。

(原図)　(報告書)	(原図)　(報告書)	(原図)　(報告書)
6号住居跡→1号住居跡	ピット9 →第7号土壙	ピット28 →第19号土壙
7号住居跡→2号住居跡	ピット10 →第8号土壙	ピット29 →第20号土壙
8号住居跡→3号住居跡	ピット11 →第9号土壙	ピット30 → ピット2
9号住居跡→第22号土壙	ピット13 →第21号土壙	ピット31 → ピット3
12号住居跡→4号住居跡	ピット15 →第11号土壙	ピット32 → ピット2
ピット1 →第1号土壙	ピット16 →第12号土壙	第2号溝 → 第1号溝
ピット2 →第2号土壙	ピット17 →第13号土壙	第3号溝 → 第2号溝
ピット3 → ピット1	ピット23 →第14号土壙	第4号溝 → 第3号溝
ピット4 →第3号土壙	ピット24 →第15号土壙	第5号溝 → 第4号溝
ピット5 →第4号土壙	ピット25 →第16号土壙	第6号溝 → 第5号溝
ピット6 →第5号土壙	ピット26 →第10号土壙	第7号溝 → 第6号溝
ピット8 →第6号土壙	ピット27 →第18号土壙	

（岩見和泰）

註１）志間泰治氏の研究（志間：1956）、鍛冶一郎氏の論考（鍛冶：1971）による。

２）『山元町誌』による。

３）渡辺信夫･齋藤鋭雄『歴史の道調査報告書　江戸浜海道（岩沼－坂元）』による。

引用･参考文献

志間泰治：1956「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』地域社会研究会

田崎敬修：1971「沖積地における海面変化（高度・時期）について」『福島考古』12 福島考古学会

鍛冶一郎：1971「合戦原古窯址群」『山元町誌』山元町役場企画広報課

松本秀明：1984「沖積平野の形成過程からみた過去一万年前の海岸線変化」『宮城の研究』1　清文堂

渡辺信夫・齋藤鋭雄：1980『歴史の道調査報告書　江戸浜海道（岩沼－坂元）』宮城県教委

Ⅱ　発見された遺構と遺物

１．竪穴住居跡

調査区内からは８軒の竪穴住居跡を検出した。これらのうち、調査区南西部分から発見された第５～８号住居跡は、当地点が現状保存されることとなったため、確認調査のみを行い、掘り下げを行っていない。

第１号住居跡（第４～14図）

[位置･確認面]　第１号住居跡は調査区南西側に位置しており、西側の傾斜地に近い平坦にある。全体が削平を受けており、特に南側の削平が著しく、残存するのは北半分のみである。確認できたのは北壁と東壁・西壁の北側部分である。住居内も削平・撹乱を受けており、堆積土も良好な形で残っていなかった。確認面は地山である。

[重複]　撹乱が数ヶ所で見られるものの重複はない。

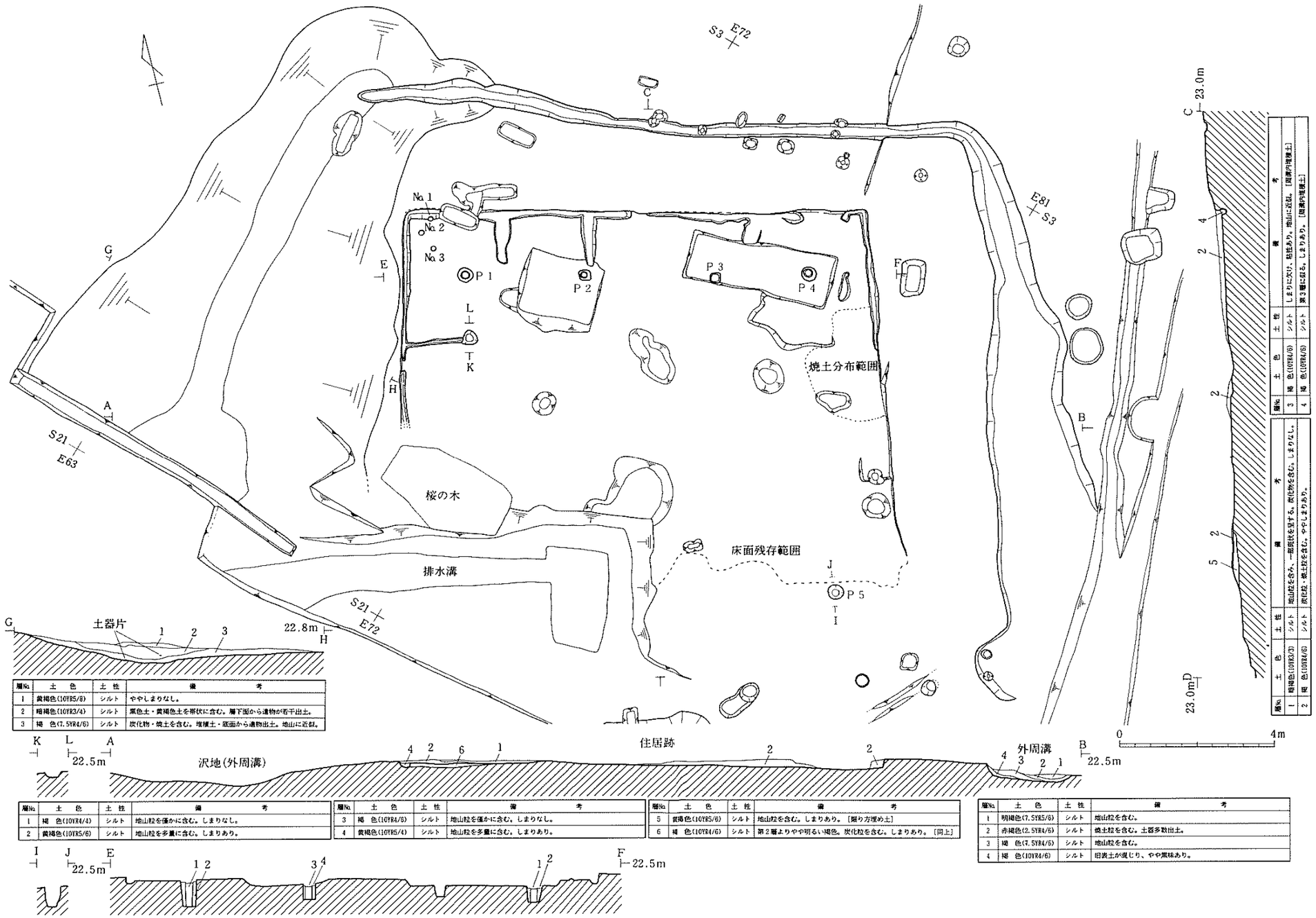
[平面形･規模]　正方形ないしは長方形を呈するものと思われる。規模は東西軸で 12.6mあり、南北は床面の範囲から10m以上あったものと思われる。方向は北壁が真北から約47°東へ振れている。

[堆積土]　堆積土は自然流入土で、４層に分層できた。第１層が黒褐色シルトで、第２～４層はいずれも地山とよく似た褐色シルトである。第１層と第３層は部分的に見られ、第２層は住居跡全体に分布していた。第４層は周溝内堆積土である。

[壁]　北壁が比較的よく残っており、もっとも高いところで 19ｃｍある。壁は周溝から立ち上がるところで外側に抉れているが、上半部はほぼ垂直に立ち上がる。

[床面]　地山面を床面としているが、南側と西側の一部は掘り方埋め土上面を床面としている。床面はほぼ平らであるが、北東部分で床面が高くなっているところがある。平面形は掘りすぎたところがあり、正確な形をつかめないが、台床状遺構と考えられる。また、やや北側が高く南側へ僅かに傾斜している。

[柱穴]　第４号住居跡に伴う柱穴として捉えることができたのは、５個（Ｐ１～５）で、Ｐ１を除き他の柱穴は撹乱を受けている。Ｐ１～４は北壁に沿って並んでおり、掘り方は、Ｐ１とＰ４は径40ｃｍほどの円形、Ｐ２とＰ３は一辺26～30ｃｍほどの隅丸方形状を呈し、Ｐ５は長径34ｃｍ･短径26ｃｍの楕円形である。柱痕跡はいずれも平面形がほぼ円形で、径は19～23ｃｍであった。柱穴の深さはＰ１・４・５がやや深く、最も残りの良いＰ１の深さは 76ｃｍあった。柱間はＰ１とＰ２が 3.1m、Ｐ２とＰ３が 3.1m、Ｐ３とＰ４が 2.4m、Ｐ４とＰ５が 8.7mである。



層No.	土色	土性	備考
1	黄褐色(10YR5/8)	シルト	ややしまりなし。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	黒色土・黄褐色土を帯状に含む。層下面から遺物が若干出土。
3	褐　色(7.5YR4/6)	シルト	炭化物・焼土を含む。堆積土・底面から遺物出土。地山に近似。

層No.	土色	土性	備考
1	褐　色(10YR4/4)	シルト	地山粒を僅かに含む。しまりなし。
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山粒を多量に含む。しまりあり。

層No.	土色	土性	備考
3	褐　色(10YR4/6)	シルト	地山粒を僅かに含む。しまりなし。
4	黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山粒を多量に含む。しまりあり。

層No.	土色	土性	備考
5	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山粒を含む。しまりあり。［張り方埋め土］
6	褐　色(10YR4/6)	シルト	第2層よりやや明るい褐色。炭化粒を含む。しまりあり。［同上］

層No.	土色	土性	備考
1	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	地山粒を含む。
2	赤褐色(2.5YR4/6)	シルト	焼土粒を含む。土器多数出土。
3	褐　色(7.5YR4/6)	シルト	地山粒を含む。
4	褐　色(10YR4/6)	シルト	旧表土が成じり、やや黒味あり。

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を含み、一部帯状を呈する。炭化物を含む。しまりなし。
2	褐　色(10YR4/6)	シルト	炭化粒・焼土粒を含む。ややしまりあり。

層No.	土色	土性	備考
3	褐　色(10YR4/6)	シルト	しまりに欠ける。粘性あり。地山に近似。［周溝内埋積土］
4	褐　色(10YR4/6)	シルト	第3層に似る。しまりあり。［周溝内埋積土］

第４図　第１号住居跡

[周溝]　壁に沿って周溝が認められたが、全周はしておらず、東壁の中央から南側では見つかっていない。また、周溝があるところでも部分的に切れるところがある。周溝の大きさ･形状は、幅が10〜30ｃｍ・深さ 3〜11ｃｍで「U」字状を呈するが、北壁を中心に周溝が壁側へ大きく抉れた状況で検出されている。

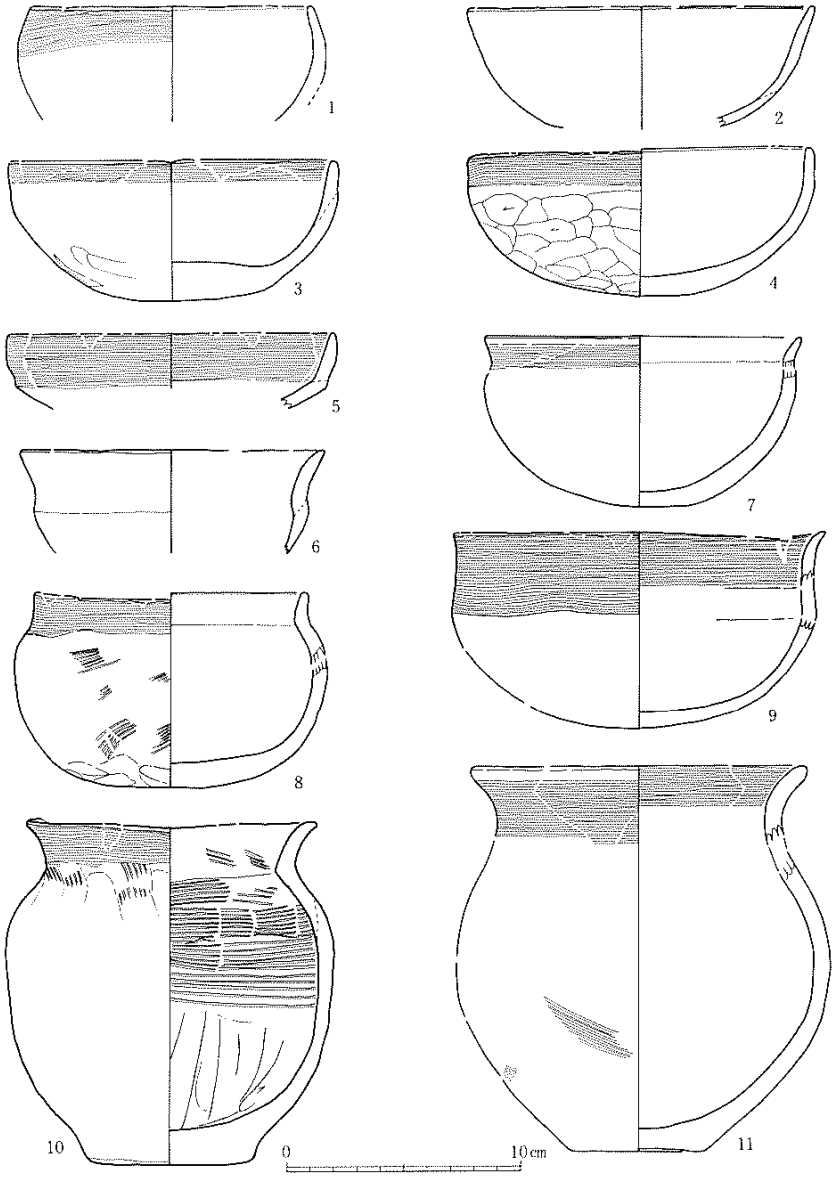
[炉･カマド]　炉やカマドは検出していない。なお、東壁の中央部寄りのところで焼土が分布する範囲が認められたが、撹乱が床面まで及んでおり、性格は不明である。

[貯蔵穴状ピット]　貯蔵穴と見られるピットは検出していない。

[その他の溝]　周溝からほぼ直角に住居内へ延びる溝が、北壁側で３ヶ所、西壁で１ヶ所認められた。幅・深さは周溝とほぼ同じである。西壁で検出した溝の先端はピット状になっている。

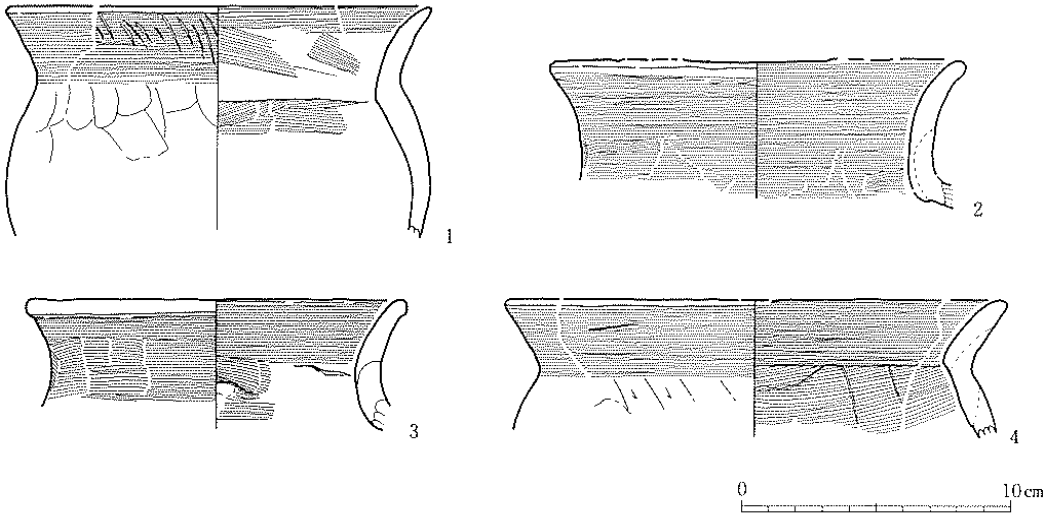
[外周溝]　住居跡の北側と東側で、住居を囲むような形で検出した。外周溝東側の南端部は撹乱により壊されている。場所によって形状が異なり、北側は幅 24〜62ｃｍ･深さが 5〜21ｃｍと規模が小さく、東側は北から南へと幅が広がっており、北寄りの部分が幅 50ｃｍ・深さ15〜35ｃｍ、北寄りの部分が残存部で幅2.62m･深さ 6〜25ｃｍある。西側は浅く幅の広い沢地状を呈している。北側の外周溝はこの沢地状の部分に達するところまで掘られている。沢地状を呈する部分の断面は人工的に掘り凹めた形跡に乏しい。また、外周溝として明確に掘られた部分は、住居跡の外縁から２〜３ｍほどの間隔があり、西側の沢地状部分にはこうした状況は認められず、以上のことから判断すると、自然地形を利用した可能性が高いと考える。また、出土している土器に大きな時期差が認められないことから、自然地形を利用し、同時に機能していたものと考えられる。堆積土は東側で４層に分層でき、第２層から土器が多量に出土している。また、西側の沢地部分は３層に分層でき、第２層から若干土器が出土しているものの、ほとんどは第３層中ないしは第３層底面から出土しており、特に西側斜面からの出土が多い傾向が認められた。

[遺物]　住居内から土師器が出土した。堆積土の遺存状況が悪かったためか、面積に比して遺物の量は少なく、住居内から出土した土器は破損品や破片が多い。その中で図示できたのは15点である(第５図１〜11、第６図１〜４)。第５図１〜４は体部から内彎しながら立ち上がる坏で、１は口縁部が内彎しながら立ち上がるもの、２は口縁部が外に開くもので、両者とも底部は欠損している。３・４は体部と口縁部の境がやや凹んで、口縁部が短く直立する坏である。５は体部と口縁部を稜線で画する坏で、稜線のやや上の部分で凹み、口縁部は直立気味に外反している。６・７・８は口頸部が屈曲して外反する坏である。６は底部を欠損しているが、体部外面に稜線を持ち、口縁部がやや長く、緩やかに外反しているものである。７は半球状の体部と短く外反する口頸部を持つもので、内面に弱い稜線



No.	種　別	層　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　　面	内　　面	底　部	分　類	残存率	備　考	登録	写真図版No.
1	土師器　坏	第1層	(18.6)	——	(5.2)	口縁部：ヨコナデ、体部：丁寧なナデ	磨滅しており不明	————	Ⅰa類	1／4		1	
2	土師器　坏	床　面	(14.8)	————	(5.2)	磨滅しており不明	磨滅しており不明	————	Ⅰb類	1／5		2	
3	土師器　坏	第1層	14.3		6.1	口縁部：ヨコナデ、体部：丁寧なナデ・ケズリ	ヨコナデ、丁寧なナデ、ミガキ	丸　底	Ⅰc類	1／2		3	7
4	土師器　坏	床　面	(14.7)		6.5	口縁部：ヨコナデ、体部：粗いナデ	磨滅しており不明	丸　底	Ⅰc類	1／1	取り上げNo.2	4	7
5	土師器　坏	第2層	(14.1)	——	(3.2)	口縁部：ヨコナデ、体部：磨滅しており不明	口縁部：ヨコナデ	————	Ⅴ類	1／7		5	
6	土師器　坏	床　面	(17.0)	——	(4.4)	磨滅しており不明	磨滅しており不明	————	Ⅳc類	1／6		6	
7	土師器　坏	床　面	(13.6)	——	7.3	口縁部：ヨコナデ、体部：磨滅しており不明	磨滅しており不明	丸　底	Ⅳa類	4／5	取り上げNo.3	7	7
8	土師器　坏	床　面	(11.7)	——	8.4	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ、ハケメ	磨滅しており不明	丸底風 平底	Ⅳa類	3／4	取り上げNo.1	8	7
9	土師器　坏	第1層	(15.9)		8.4	口頸部：ヨコナデ、体部：丁寧なナデ	ヨコナデ、丁寧なナデ	丸　底	Ⅵ類	1／2		9	7
10	土師器　甕	床　面	(12.5)	7.3	12.8	口頸部：ヨコナデ、体部：ハケメ、（ナデ）	ハケメ、ヘラナデ	平　底	Ⅱ類	2／5		10	7
11	土師器　甕	第1層	(14.4)	(5.8)	(16.5)	口頸部：ヨコナデ、体部：磨滅しており不明	口頸部：ヨコナデ	平　底	Ⅱ類	1／7		11	

第5図　第1号住居跡出土遺物（1）

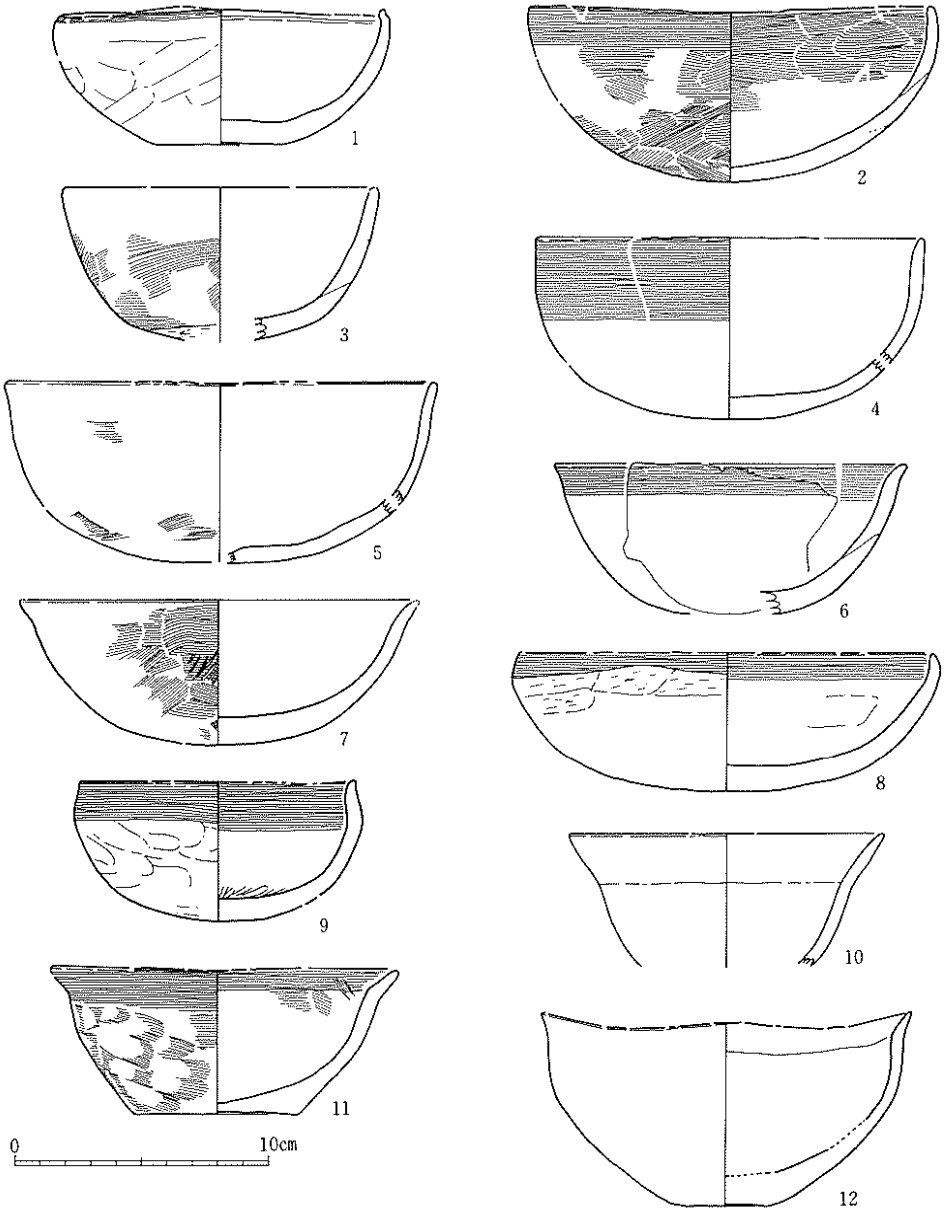


No.	種別	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	土師器 甕	第2層	(15.7)	——	(9.7)	口頸部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	口頸部：ヨコナデ、ヘラナデ	———	Ⅱ類	1／5		12	
2	土師器 甕	床面	(14.1)	——	(4.9)	口頸部：ヨコナデ、ヘラナデ	口頸部：ヨコナデ、ヘラナデ	———	Ⅰ類	1／4	取り上げNo.4	13	
3	土師器 甕	床面	(15.4)	——	(5.2)	口頸部：ヨコナデ、ヘラナデ	口頸部：ヨコナデ、ヘラナデ	--------	Ⅰ類	2／5	取り上げNo.4	14	
4	土師器 甕	第2層	(18.6)	——	(5.2)	口頸部：ヨコナデ、体部：粗いナデ	口頸部：ヨコナデ、ヘラナデ	———	Ⅰ類	1／6		15	

第６図　第１号住居跡出土遺物（2）

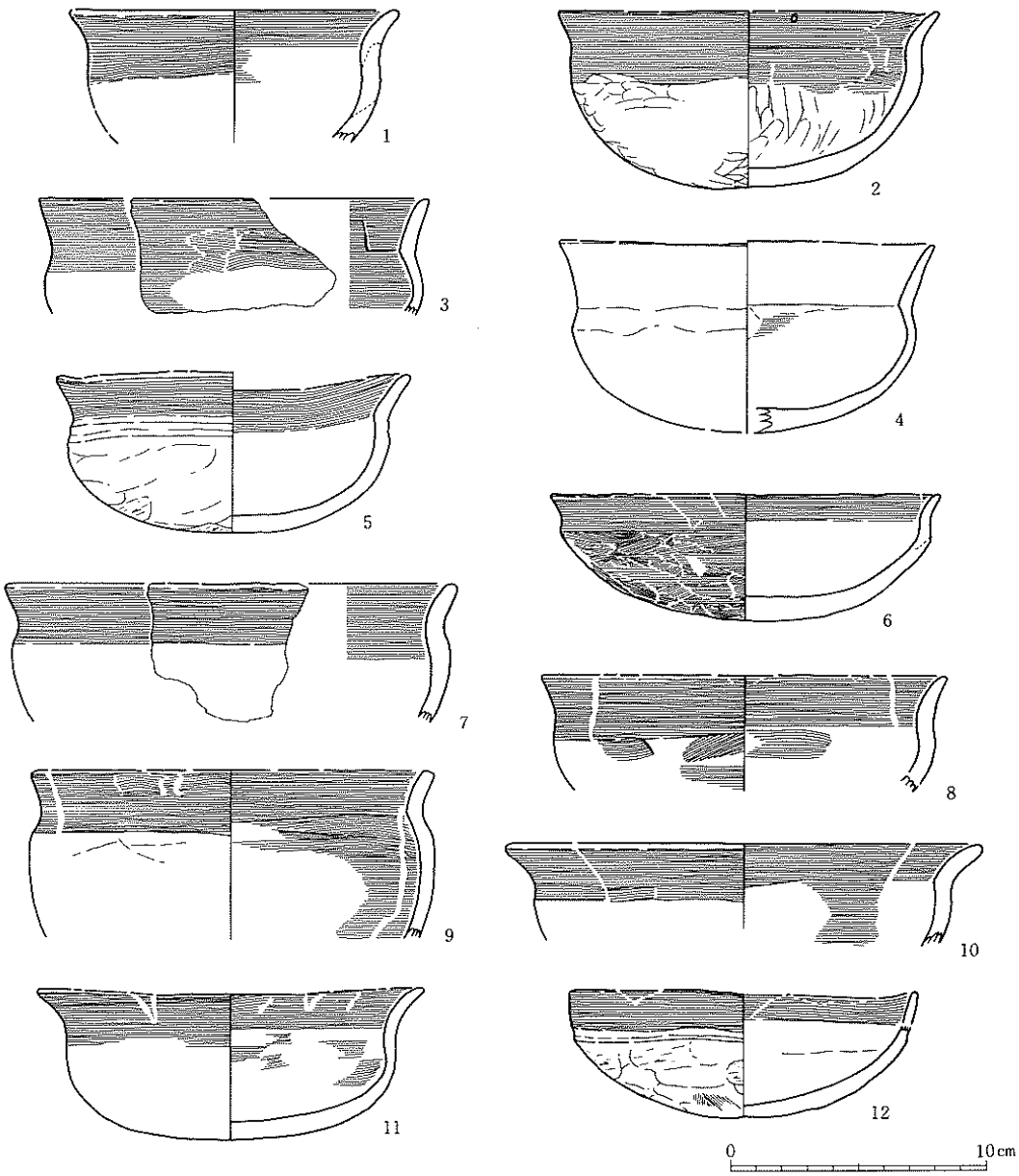
を持つ。８も胴部が強く張り出す半球状の体部と短く立ち上がる口頸部を持つ坏で、底部は丸底風の平底を呈する。９はやや扁平な丸底から体部と頸部を明瞭な稜線で画する坏で、長い口頸部が緩やかに外反気味に立ち上がる。10・11 と第６図１～４は甕または小型の甕である。10 は平底からやや張り出す体部上半へと緩やかに立ち上がり、口頸部が強く屈曲して外反するもの、11 は頸部で屈曲して緩やかに立ち上がる口頸部を有し、最大径を体部中央に持つもので、破片から復元したものである。第６図１も小型の甕と考えられ、やや張り出す肩部から強く屈曲する頸部へとつながり、口頸部が外反するものである。2･3･４は口頸部破片で、２は緩やかに外反するもの、３は頸部が直立気味に立ち上がり、口頸部が緩やかに外反するもの、４は頸部が強く屈曲し、やや短く外反する口頸部を持つものである。10 と第６図１・４は内面の頸部と体部の境に稜線が認められる。これらの土器のうち、床面から出土したものは第５図２・４・６・７・８・10、第６図２・３である。

外周溝からは多量の遺物が出土しており、完形に近い形で出土した土器も多い。なお、出土したのはほとんどが土師器であった。図示できたのは､54 点である(第７～13 図)。第７図の１～５は内彎しながら緩やかに立ち上がる体部を持つ坏で、１・２は口縁部が内彎気味に立ち上がるもの、３・５はやや外傾気味に立ち上がるもの、４はほぼ垂直に立ち上がるものである。１は平底で口縁部に凹線が１条巡るもので、２～５は丸底を呈する。６・７は丸底からやや内彎しながら外反するもので、口縁部は僅かに外へ開く。８・９は丸底



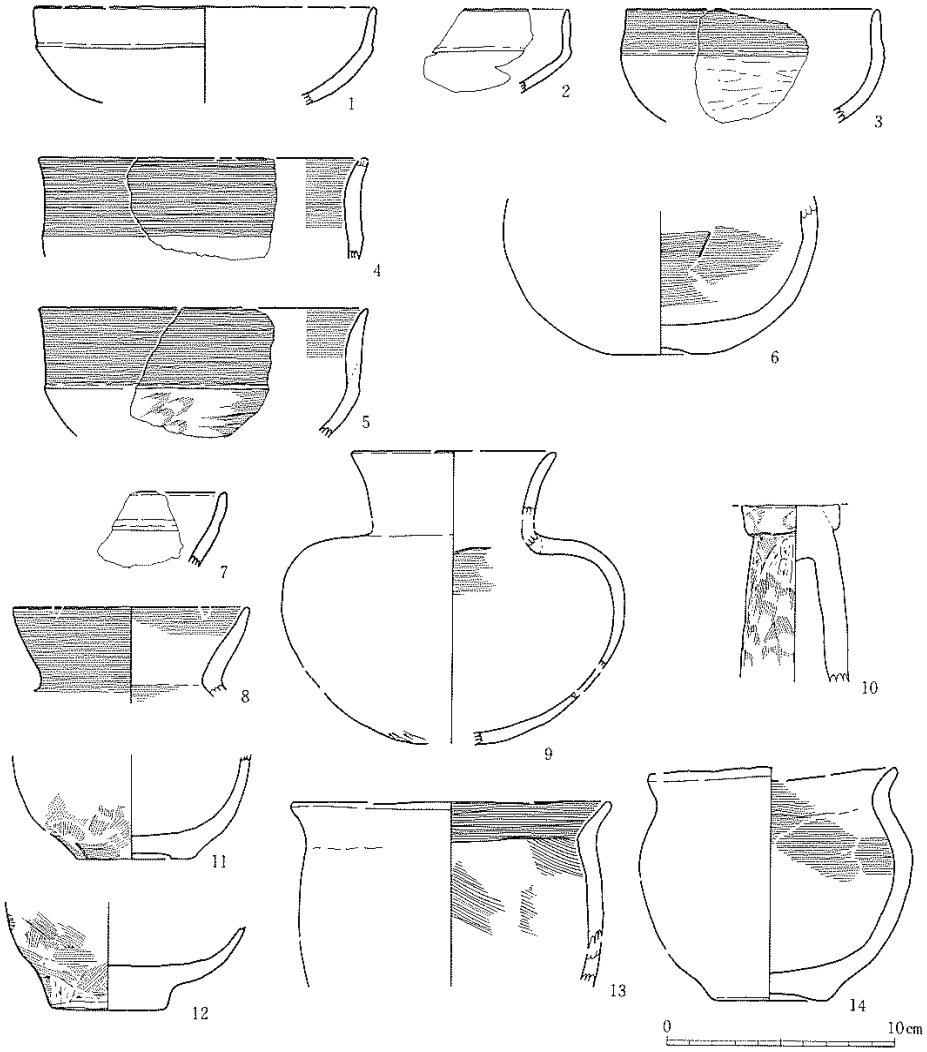
No.	種別	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	土師器 坏	第3層	(12.7)	5.1	5.4	口縁部に沈線1条あり、体部：ナデ	磨滅しており不明	平底	Ⅰa類	4／5	沢地出土	16	7
2	土師器 坏	床面	15.8		7.8	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	口縁部～体部：ナデ	丸底	Ⅰa類	3／5	東側出土	17	7
3	土師器 坏	第3層	(12.4)	——	(5.9)	口縁部：磨滅しており不明、体部：ナデ	磨滅しており不明	————	Ⅰb類	1／3	沢地出土	18	7
4	土師器 坏	堆積土	(17.0)		4.0	口縁部：磨滅しており不明、体部：粗いナデ	磨滅しており不明	丸底	Ⅰb類	1／12	東側出土	19	
5	土師器 坏	第3層	(15.3)	——	(7.0)	口縁部：ナデ（？）、体部：磨滅しており不明	磨滅しており不明	丸底	Ⅰc類	1／8	沢地出土	20	
6	土師器 坏	第3層	(13.8)	——	(5.8)	口縁部：ヨコナデ、体部：磨滅しており不明	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	————	Ⅱ類	1／6	沢地出土	21	
7	土師器 坏	第3層	(15.7)		(5.5)	口縁部～体部：ナデ、体部の一部にハケメあり	磨滅しており不明	丸底	Ⅱ類	1／6	沢地出土	22	
8	土師器 坏	第3層	(16.3)		5.4	口縁部：ヨコナデ、体部：ケズリ	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	丸底	Ⅲa類	1／4	沢地出土	23	7
9	土師器 坏	第3層	(10.9)		5.4	口縁部：ヨコナデ、体部：丁寧なナデ	ヨコナデ、ナデ、放射状ミガキ	丸底	Ⅲa類	1／2	沢地出土	24	8
10	土師器 坏	堆積土	(12.4)	——	(5.1)	磨滅しており不明	磨滅しており不明	————	Ⅳaii類	1／6	東側出土	25	
11	土師器 坏	堆積土	(13.7)	6.4	5.7	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ、底部：ケズリ	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	平底	Ⅳaii類	4／5	東側出土	26	8
12	土師器 坏	第3層	(14.6)	3.0	7.5	磨滅しており不明	磨滅しており不明	平底	Ⅳaii類	2／5	沢地出土	27	8

第7図　第1号住居跡外周溝出土遺物（1）



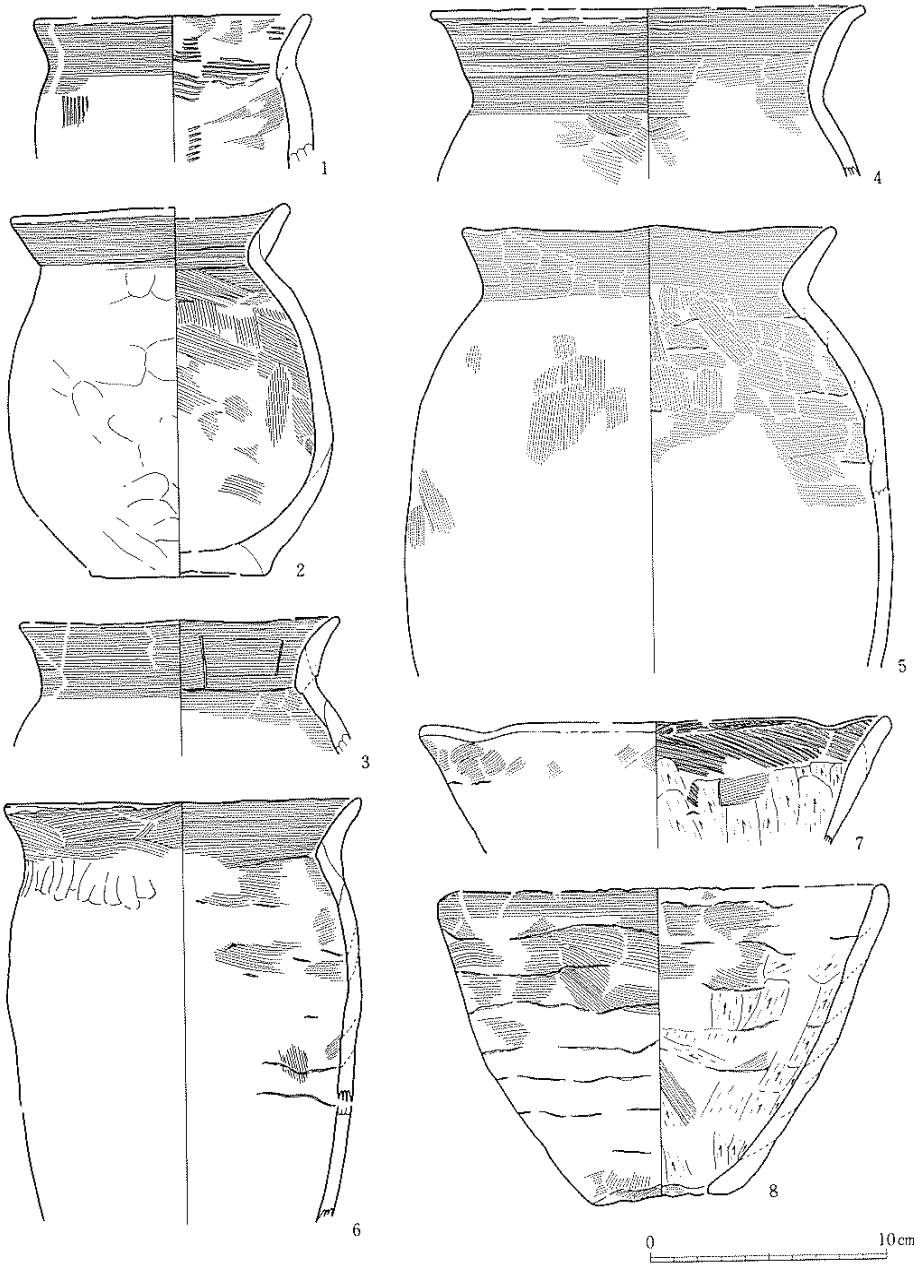
No.	種別	器種	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	土師器	坏	第3層	(12.8)	——	(5.5)	口頸部：ヨコナデ	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	————	Ⅳaⅱ類	1／4	沢地出土	28	8
2	土師器	坏	第3層	(14.8)		7.4	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ（単位は細い）	口頸部：ナデ、体部：ミガキ	丸底	Ⅳaⅱ類	4／5	沢地出土	29	8
3	土師器	坏	堆積土	(15.2)	——	(4.8)	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	————	Ⅳaⅳ類	1／8	沢地出土	30	
4	土師器	坏	第3層	(14.6)		7.9	磨滅しており不明	磨滅しており不明	丸底	Ⅳaⅳ類	1／4	沢地出土	31	8
5	土師器	坏	第3層	(13.8)		6.7	口頸部：ヨコナデ、体部：丁寧なナデ、ケズリ	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	丸底	Ⅳaⅳ類	4／5	沢地出土	32	8
6	土師器	坏	第3層	(15.2)		5.2	口頸部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	丸底	Ⅳb類	1／4	沢地出土	33	8
7	土師器	坏	堆積土	(17.6)	——	(5.8)	口頸部：ヨコナデ、体部：磨滅しており不明	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	————	Ⅳb類	1／10	沢地出土	34	
8	土師器	坏	第3層	(15.8)	——	(4.8)	口頸部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	————	Ⅳb類	1／7	沢地出土	35	
9	土師器	坏	第3層	(15.7)	——	(7.0)	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	————	Ⅳb類	1／6	沢地出土	36	
10	土師器	坏	堆積土	(18.6)	——	(4.2)	口頸部：ヨコナデ、体部：磨滅しており不明	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	————	Ⅳb類	1／7	沢地出土	37	
11	土師器	坏	第3層	15.1		6.3	口頸部：ヨコナデ、体部：磨滅しており不明	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	丸底	Ⅳc類	1／2	沢地出土	38	8
12	土師器	坏	第3層	(13.6)		5.3	口縁部：ヨコナデ、体部：不明（一部ケズリ）丹塗り	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	平底	Ⅴ類	4／5	東側出土	39	8

第8図　第1号住居跡外周溝出土遺物（2）



No	種別	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	土師器 坏	堆積土	(14.9)	——	(4.2)	磨滅しており不明	磨滅しており不明	———	V 類	1／6	東側出土	40	
2	土師器 坏	第3層	——	——	(3.0)	磨滅しており不明	磨滅しており不明	———	V 類	破片実測	沢地出土	41	
3	土師器 坏	堆積土	(11.1)	——	(4.9)	口縁部：ヨコナデ、体部：ミガキ？	磨滅しており不明	———	V 類	1／8	東側出土	42	
4	土師器 坏	第3層	(14.4)	——	(4.4)	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	———	VI 類	1／8	沢地出土	43	
5	土師器 坏	第3層	(14.4)	——	(5.6)	口頸部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	———	VI 類	1／8	沢地出土	44	
6	土師器 坏	堆積土	——	4.2	(6.8)	磨滅しており不明	体部：ヘラナデ？	上げ底	——	2／5	東側出土	45	8
7	土師器 壷	第3層	——	——	(3.3)	ナデ？	ナデ？	———	I 類	1／10	沢地出土	46	
8	土師器 壷	堆積土	(10.3)	——	(4.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	———	I 類	1／4	東側出土	47	
9	土師器 壷	堆積土	(9.0)	——	——	口頸部・体部：磨滅しており不明、底部：ナデ	磨滅しており不明	丸底？	II 類	1／4	東側出土	48	
10	土師器高坏脚部	第3層	——	——	(7.8)	ナデ	指による押え	———	——	1／1	沢地出土	49	9
11	土師器甕or壷	堆積土	——	4.8	(4.6)	体部：ナデ、底部：ナデ	磨滅しており不明	上げ底	——	1／1	沢地出土	50	
12	土師器甕or壷	第3層	——	5.0	(4.7)	体部：ナデ・ケズリ、底部：ケズリ後ナデ	磨滅しており不明	平底	——	1／1	沢地出土	51	
13	土師器 甕	堆積土	(14.0)	——	(8.0)	磨滅しており不明	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	———	II 類	2／5	沢地出土	52	
14	土師器 甕	堆積土	(10.0)	5.0	10.1	磨滅しており不明	口頸部～体部：ナデ	上げ底	II 類	4／5	東側出土	53	9

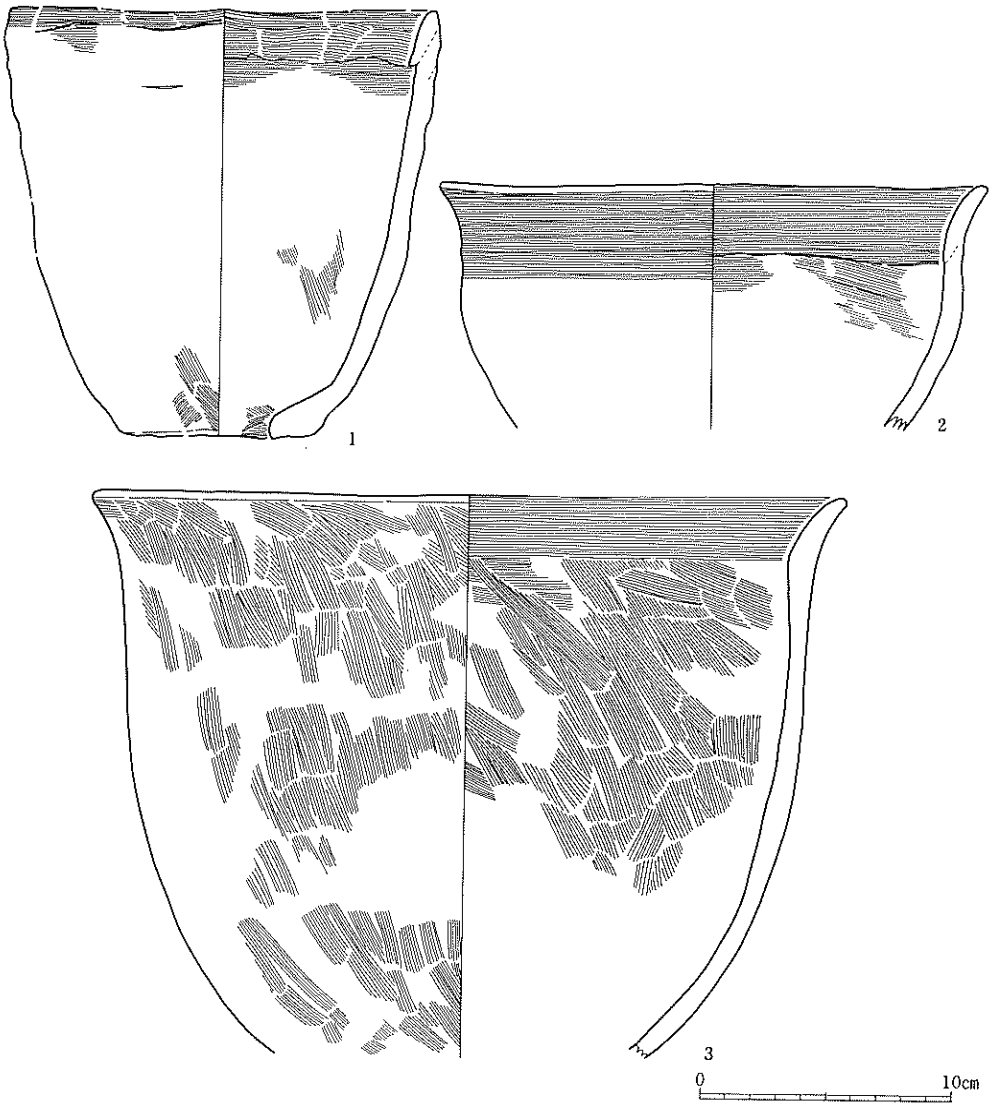
第9図　第1号住居跡外周溝出土遺物 (3)



No	種別	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	土師器 甕	堆積土	(11.7)	——	(6.4)	口頸部：ヨコナデ?、体部：不明（一部にハケ）	ナデ、ハケメ、ハケメ後ナデ	——	Ⅱ 類	1／5	沢地出土	54	9
2	土師器 甕	第3層	11.8	7.3	15.3	口頸部：ヨコナデ、体部：不明（ケズリ後ナデ?）	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	平 底	Ⅱ 類	3／5	沢地出土	55	9
3	土師器 甕	第3層	(13.5)	——	(5.7)	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ	——	——	1／4	沢地出土	56	
4	土師器 甕	第3層	18.3	——	(7.5)	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	——	——	7／8	沢地出土	57	9
5	土師器 甕	第3層	15.8	——	(18.5)	口頸部：ナデ、体部：磨滅しており不明（ナデ?）	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	——	Ⅰb類	1／7	沢地出土	58	9
6	土師器 甕	堆積土	(15.0)	——	(17.5)	口頸部：ナデ・粗いミガキ、体部：不明	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	——	Ⅰb類	1／4	沢地出土	59	
7	土師器 甑?	第3層	(19.9)	——	(5.3)	口縁部：ナデ、体部：不明	口縁部：ハケメ、体部：ケズリ	——	Ⅰ 類	1／4	沢地出土	60	
8	土師器 甑	第3層	19.0	(5.7)	13.1	口縁部：ナデ、体部：ナデ?	口縁部：ナデ、体部：ケズリ	無 底	Ⅰ 類	2／3	沢地出土	61	10

第10図　第1号住居跡外周溝出土遺物（4）

から緩やかに立ち上がり、口縁部が軽く内傾して、外面に稜線を持つものである。８は浅い体部を持つもの、９は口縁部が僅かに外へ開くものである。10 は丸底の体部から短く屈曲して外反する口頸部を持つもので、外面に明瞭な稜線を持つ。11・12 と第８図１は頸部で軽く屈曲し直線的に外反する坏で、体部は底部から緩やかに立ち上がるが、胴部の張りは弱いものである。11 は屈曲が弱く、頸部がやや長いもので、体部下半を欠損している。



No.	種別	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	土師器 甕	堆積土	(16.8)	(7.6)	(17.7)	口縁部：ヨコナデ、体部：磨滅しており不明	口縁部：ナデ、体部：ナデ	——	Ⅲ 類	1／6	沢地出土	62	
2	土師器 甕?	第3層	21.8	——	(10.1)	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	——	Ⅱ 類	1／2	沢地出土	63	9
3	土師器 甕?	第3層	30.0	——	(23.2)	口縁部～体部：ナデ	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	——	Ⅱ 類	1／3	沢地出土	64	

第11図　第１号住居跡外周溝出土遺物 (5)

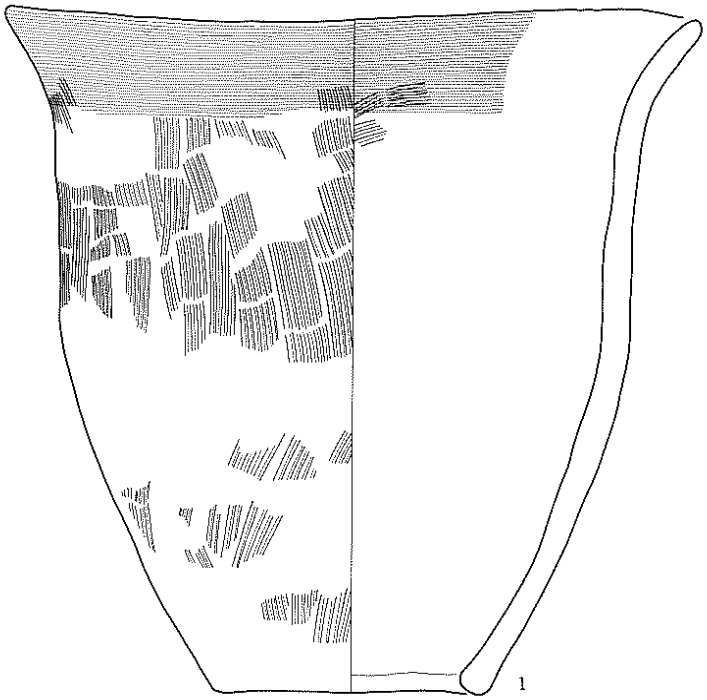
11は平底で口縁部が外へ大きく開くもので、底部は平底である。12は、体部上半でやや張り出して口縁部につながるもので、底部は僅かに上げ底になっている。第８図の１・２は、胴部の張りが弱く頸部で括れて外反する坏で、２は内面に籾痕を持つ。３～５は胴部が強く脹らんで、頸部で強く屈曲し直線気味に立ち上がる口頸部を持ち、内面には鋭い稜線を持つ。３は体部下半を欠損しているが、４・５は丸底を呈する。６～10は外面に強弱はあるが稜線を有するもので、９・10は内面にも稜線を持つ。６・８は口縁部がやや薄くなって尖るのに対し、７・９～10は口縁部においても体部とほぼ同じ器厚を持つ。これらは６以外は体部下半を欠損しているが、丸底を呈するものと思われる。11は内・外面には稜線を持たない坏で、大きく外反する口頸部を持つ。12と第９図１・２は体部と口縁部の境を稜線と段によって画される坏で、口縁部は直線気味に立ち上がる。須恵器坏身の模倣坏と考えられる。３はこれらに類似するもので、明瞭な稜線を持たないが、体部と口縁部の境に凹線が施されている。４・５は小破片であるが、他とは異なった特徴を有するため図化したものある。体部と口頸部の境を稜線が画するもので、頸部は長く直立気味に立ち上がるものである。底部は丸底を呈するものと思われる。６は口縁部が欠損しているもので、坏の底部破片である。小さい凹み底を呈する唯一の例として図示した。

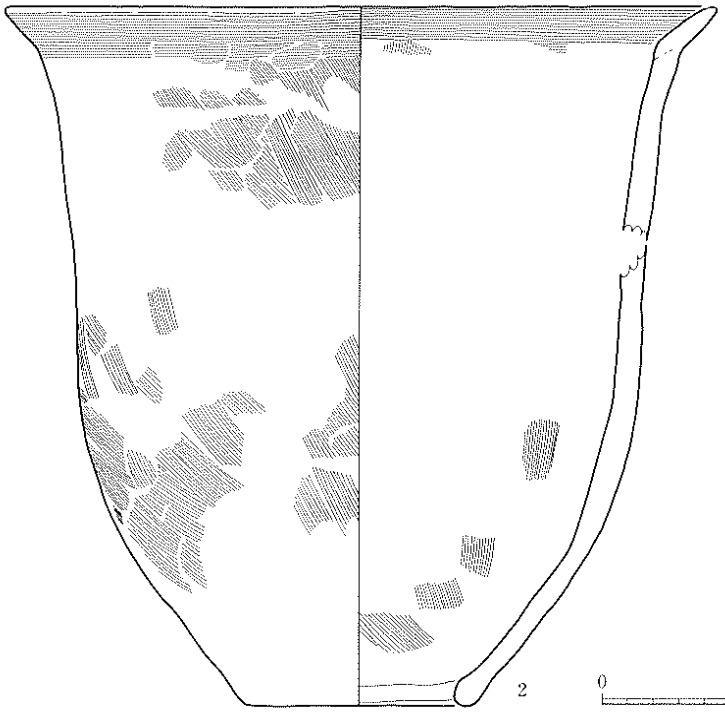
７～９は壷で、いずれも破片である。５・６は頚部が外反し口縁部が僅かに内傾するもので、７は頚部に凹線を施されており、８は体部から頚部にかけて強く屈曲するものである。９は破片により復元推定したもので、底部は丸底を呈し、緩やかに外反しながら強く張り出す肩部へと立ち上がる。肩部の上半で水平になった後、強く屈曲して外彎気味に外反する。

10は今回唯一出土した高坏で、脚部の破片である。やや裾脹らみの円柱状を呈し、坏部との繋ぎ部がやや肥厚している。

11・12は壷ないしは小型甕の底部破片で、底部形態に特徴が認められたものとして図示した。11は底部外縁が環状に高くなっているもので、高台に似たような形状を呈する。12は分厚い底部を持ち、底部から体部へと器壁がかなり薄くなっている。両者とも胎土が緻密で、作りが丁寧である。

第９図13・14、第10図１～６は甕で、第９図13・14と第10図１～２は小型の甕である。13・14は頚部で屈曲して比較的短い口縁部が外反するものである。13は最大径が口径にあり、胴部の張りが弱い。14は器高が低く、最大径が器高を上回るもので、底部は上げ底を呈する。第10図１・２は頚部で強く屈曲してやや長い頚部が外反するものである。１は体部下半を欠損しているが、口径と胴径がほぼ等しいものと思われ、２は最大径が体部下半にあり、内面には稜線が認められる。３・４は体部のほとんどを欠損しているが、両者と

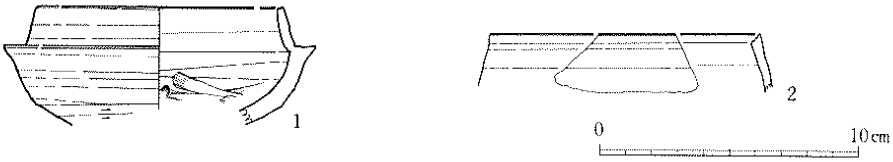




0　10cm

No.	種　別	層　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面	内　面	底部	分類	残存率	備　考	登録	写真図版No.
1	土師器　甕	第3層	(27.0)	(10.8)	27.5	口頸部：ヨコナデ、体部：ハケメ	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	無　底	Ⅳ　類	2／5	沢地出土	65	10
2	土師器　甕	第2層	(27.6)	8.7	(28.0)	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	無　底	Ⅳ　類	1／4	沢地出土	66	

第12図　第１号住居跡外周溝出土遺物（6）

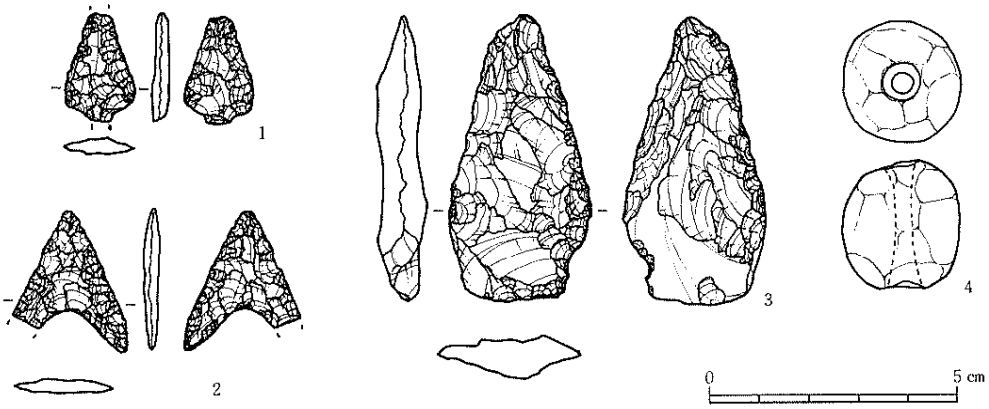


No.	種別	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	須恵器 坏身	堆積土	(9.5)	――	(4.4)	ロクロ調整、回転ヘラケズリ（時計回り）	ロクロ調整、底部に指ナデ	――	――	1／6	東側出土	67	19
2	須恵器 坏身	第3層	(10.4)	――	(2.2)	ロクロ調整	ロクロ調整	――	――	1／8	沢地出土	68	19

第13図　第１号住居跡外周溝出土遺物 (7)

も最大径は体部にあったものと思われる。３は内面に明瞭な稜線が認められるが、４は軽い稜線を持ち、３に比べて長い口頸部を有する。５・６は長胴の甕で、５は最大径が張り出す胴部にあり、６は肩部がやや張り出すものの、最大径が口縁部にある。両者とも内面に稜線を有する。

７・８と第11図１～３、第12図１・２は甑である。７・８は底部から直線的に外反する小型のもので、７は体部の大半を欠損しており、口縁部が僅かに外に開く。８はほぼ完形に復元された無底のもので、底径は 5.7ｃｍと比較的小さく、口縁部は僅かに内傾する。第 11 図１は胴部の張りが弱い有底の小型の甑で、平底の底部に孔を設けたものである。２・３は底部から緩やかに内彎しながら立ち上がり、体部上半でやや脹らみを持ち、口頸部が緩やかに外反するもので、両者とも底部を欠損している。２は小型のもの、３は大型のものである。３は内・外面の調整にケズリに近いナデを用いている。第12図１・２は大型の



No.	種別	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	備考	登録	写真図版No.
1	石鏃	第2層	2.25	1.40	3.5	第１号住居跡出土。珪質頁岩。	69	19
2	石鏃	第3層	2.95	2.35	2.5	第１号住居跡外周溝沢地出土。珪質頁岩。	70	19
3	スクレイパー	第3層	6.00	2.90	9.5	第１号住居跡外周溝沢地出土。珪質頁岩。	71	19
4	土錘	第3層	2.70	2.35	――	第１号住居跡外周溝沢地出土。	72	19

第14図　第１号住居跡及び外周溝出土遺物

長胴の甑で、無底である。胴部に僅かに脹らみを持ち、１は口縁部が緩やかに外反し、２はやや短く屈曲して外反する。

これらのうち、外周溝東側から出土しているものは、第７図２・４・11・12、第９図１・６・７・９・11・13・14の11点で、その他の遺物はすべて外周溝西側の沢地状部分から出土している。

なお、外周溝東側から古式須恵器の坏身破片１点と、西側の沢地状部分から古式須恵器の坏身の小片が出土している。第13図１は推定口径9.5ｃｍの坏身破片で、丸味を持つ体部からを持ち、受部はほぼ水平に伸び、先端は比較的鋭い。たちあがりはやや内傾しており、端面はやや丸味を持つ。２はたちあがり部分の小片で、推定復元した口径は10.4ｃｍ、たちあがりはやや内傾しているものと考えられ、端面の内傾度は著しい。

土器以外の遺物として、住居内堆積土から有柄の石鏃が１点(第14図１)、住居西側の沢地状部分からは無柄の石鏃１点(第14図２)、スクレイパー１点(第14図３)、土錘１点(第14図４)が出土している。

第２号住居跡（第15～17図）

[位置･確認面]　第２号住居跡は調査区中央やや北東寄りで検出した。確認面は地山である。

[重複]　住居内外に６個の円形の撹乱等が認められたが、重複はない。

[平面形･規模]　南西側は削平されており、周溝のみが残っていた。平面形はほぼ正方形で、規模は東西軸4.5m･南北軸4.6mである。方向は北壁が真北から約35°東へ振れている。

[堆積土]　堆積土は６層に分けられ、第１層が黒褐色シルト、第２層が褐色シルトである。第４層は周溝内堆積土、第３・５・６層はカマド内堆積土で、第６層は焼土である。

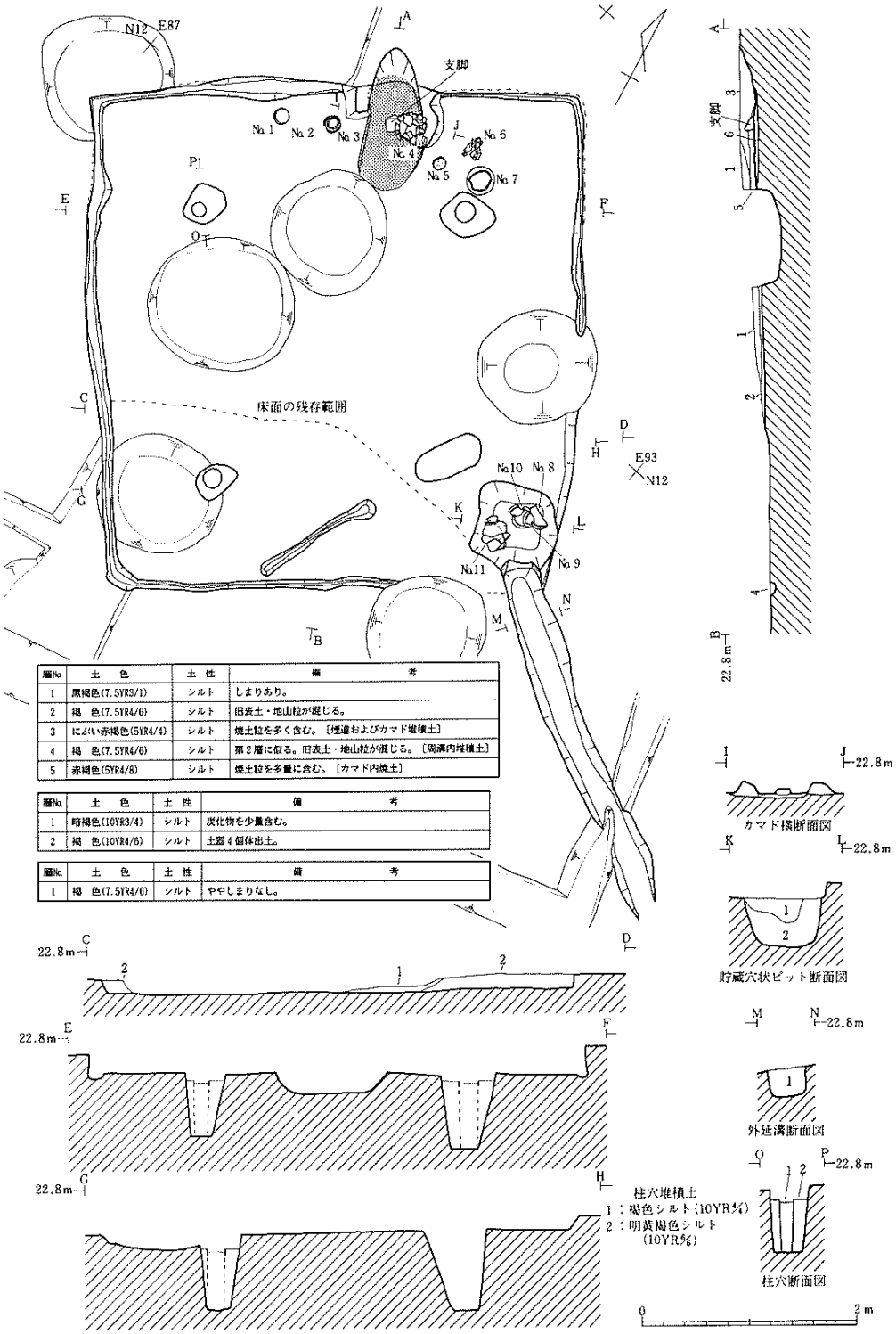
[壁]　壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最も残りのよいところで30ｃｍある。

[床面]　南西側が削平されており、住居床面の３分の１が失われている。地山を床面としており、ほぼ平坦である。

[柱穴]　床面からピットを４個検出しており、住居平面形の対角線上に位置していることから主柱穴と考えられる。ピットの平面形は一定でなく、深さは57～63ｃｍである。柱痕跡は柱穴４個のうち３個で確認でき、いずれも径14～20ｃｍの円形を呈する。

[周溝]　壁に沿って周溝が認められた。全周はしておらず、南東側で切れている。幅は5～23ｃｍ・深さ2～5ｃｍで断面形が「U」字状を呈する。

[カマド]　住居の北壁中央やや東寄りで検出した。上部が削平されており、燃焼部と煙道部の一部が残っていた。燃焼部は床面を利用し両脇に粘土を積み上げて側壁を構築したも

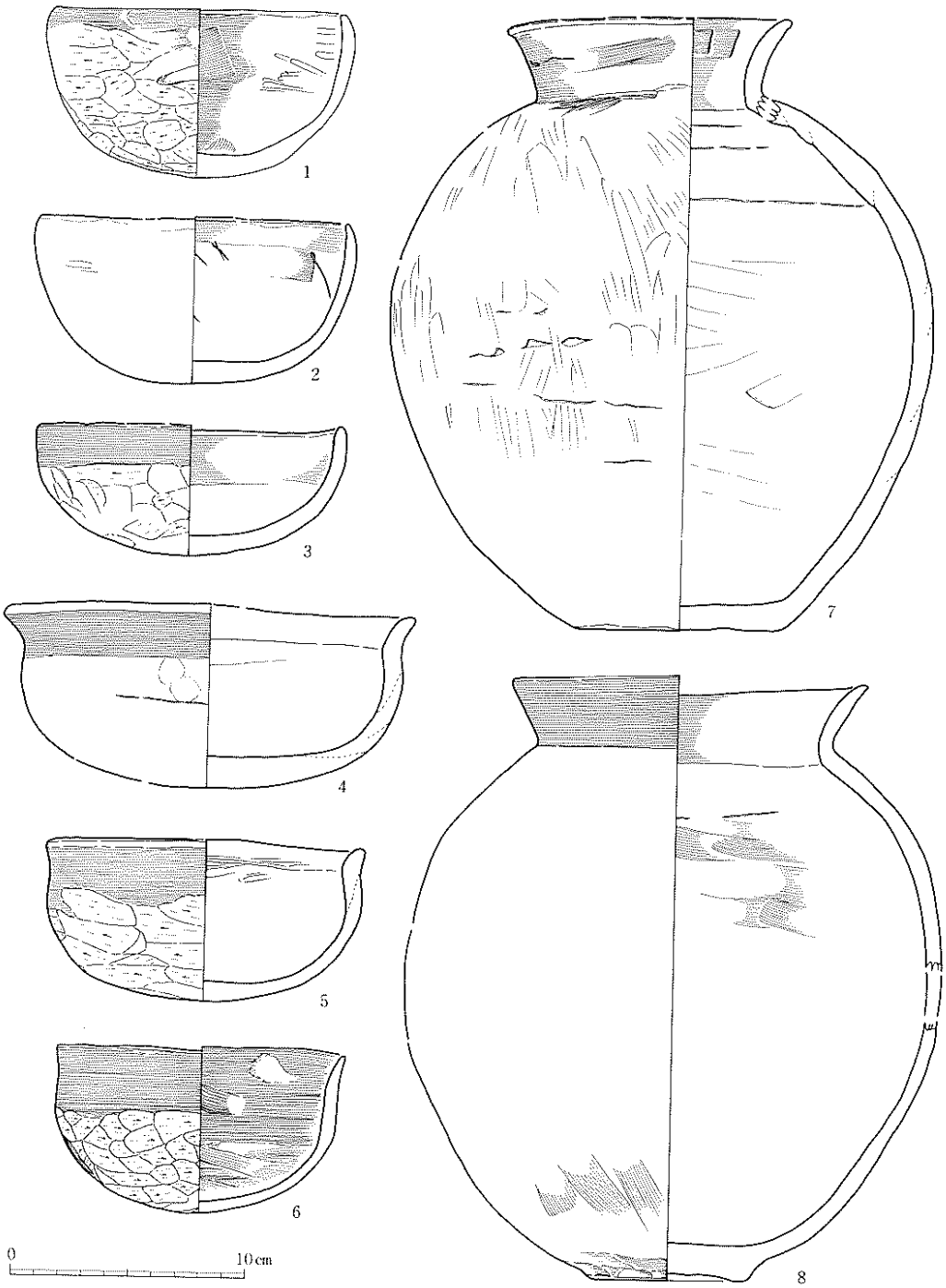


層No.	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	しまりあり。
2	褐　色(7.5YR4/6)	シルト	旧表土・地山粒が混じる。
3	にぶい赤褐色(5YR4/4)	シルト	焼土粒を多く含む。［煙道およびカマド堆積土］
4	褐　色(7.5YR4/6)	シルト	第2層に似る。旧表土・地山粒が混じる。［周溝内堆積土］
5	赤褐色(5YR4/8)	シルト	焼土粒を多量に含む。［カマド内焼土］

層No.	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物を少量含む。
2	褐　色(10YR4/6)	シルト	土器4個体出土。

層No.	土　色	土 性	備　考
1	褐　色(7.5YR4/6)	シルト	ややしまりなし。

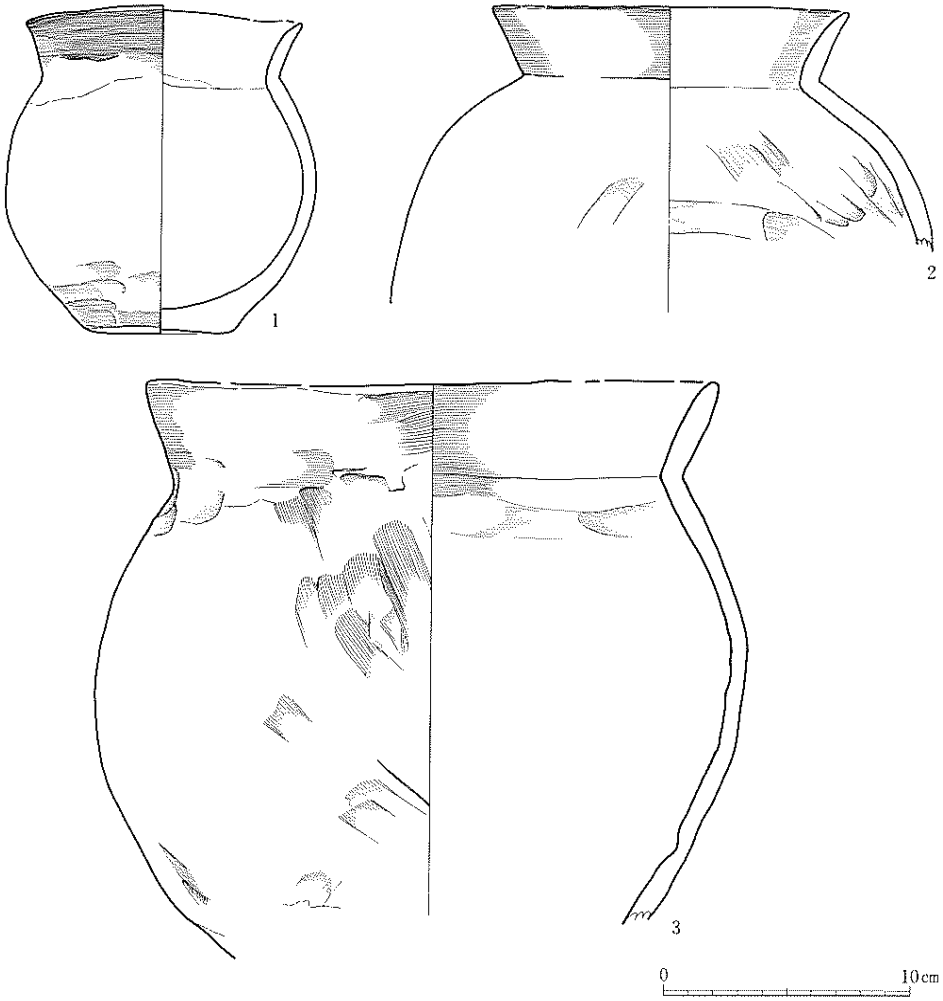
第15図　第2号住居跡



第16図　第２号住居跡出土遺物（1）

No.	種別	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	土師器 坏	床面	12.1		7.3	口縁部：ナデ、体部：ケズリ	ナデ、ヘラナデ、一部ミガキ	丸底	Ⅰa類	1／1	取り上げNo.2	73	11
2	土師器 坏	貯蔵穴	13.0		7.2	不明	ナデ（細い傷が数本あり）	丸底	Ⅰa類	1／1	取り上げNo.貯蔵穴3	74	11
3	土師器 坏	床面	13.1		5.7	口縁部：ヨコナデ、体部：ケズリ後ナデか？	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	丸底	Ⅰc類	1／1	取り上げNo.1	75	12
4	土師器 坏	貯蔵穴	17.6		8.2	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	不明	丸底	Ⅳa類	1／1	取り上げNo.貯蔵穴4	76	12
5	土師器 坏	床面	13.6		7.0	口頸部：ヨコナデ、体部：ケズリ	口頸部：一部ミガキ？、体部：不明	丸底	Ⅳa類	1／1	取り上げNo.3	77	11
6	土師器 坏	床面	12.3		7.2	口頸部：ヨコナデ、体部：ケズリ	口頸部～体部：ナデ	丸底	Ⅵ類	1／1	取り上げNo.5	78	11
7	土師器 甕	カマド	(12.1)	8.4	26.5	口頸部：ヨコナデ・ナデ、体部：ミガキ？	ヨコナデ・ナデ、ヘラナデ	平底	Ⅰa類	4／5	取り上げNo.4	79	11
8	土師器 甕	床面	15.1	7.0	26.2	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	口頸部：ナデ？、体部：ナデ	平底	Ⅰa類	3／4		80	11

第16図　遺物観察表



No.	種別	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	土師器 甕	床面	(10.1)	6.0	13.1	口頸部：ヨコナデ、体部：磨滅しており不明	磨滅しており不明	上げ底	Ⅱ類	3／5	取り上げNo.6	81	12
2	土師器 甕	貯蔵穴	14.4	---	(12.2)	口頸部：ヨコナデ、体部：磨滅しており不明	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	——	——		取り上げNo.貯蔵穴2	82	12
3	土師器 甕	床面	23.1	——	(23.1)	口頸部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	——	Ⅰa類	1／1	取り上げNo.7	83	12

第17図　第２号住居跡出土遺物（2）

ので、奥壁は住居壁を約10ｃｍ掘り込んでいる。焼け面の範囲は奥行106ｃｍ･幅57ｃｍであった。煙道はほとんど残っていないが、外側へ25ｃｍほど掘り凹めた部分が認められた。

[貯蔵穴状ピット]　住居跡南東隅で貯蔵穴状ピットを検出した。平面形は不整方形、規模は東西76ｃｍ･南北78ｃｍ、深さ45ｃｍである。堆積土は２層に分層でき、遺物は底面からまとまって出土している。

[外延溝]　貯蔵穴状ピットのすぐ脇から東へと外側に延びる外延溝を検出した。規模は残存長3.47m･幅31～41ｃｍ、深さ10～30ｃｍで、断面形は方形を呈する。貯蔵穴状ピットと接する部分には、高さ10ｃｍほどの土手状の高まりが認められた。

[柱穴]　住居内から５個のピットが検出され、規模や位置からＰ１～Ｐ４が主柱穴と考えられる。柱痕跡は認められなかった。平面形はいずれも円形ないし楕円形で、径が25～30ｃｍ、深さは22～53ｃｍである。

[遺物]　住居内から11点の土師器が出土した。第16図１～６はいずれも丸底の坏で、１～３は丸底の底部から口縁部へと内彎しながら緩やかに立ち上がるもので、１・２は口縁部が僅かに内傾するもの、３はほぼ直立するものである。４・５は軽く屈曲し口縁部が短く外反するもので、４は他と比して比較的口径が大きい。６は半球状の体部から口頸部が直線気味に長く立ち上がるもので、口縁部が僅かに外へ開く。７・８、第17図１～３は体部と頸部の境で強く屈曲して外反する口頸部を持つ甕である。７・８はやや縦に長い球形の体部を持つ大型の甕で、７は口径が小さい特徴を有しており、８は比較的小さい上げ底の底部を持つ。第17図１は小型の甕、２は体部上半がやや張り出す大型の甕である。３は口径が非常に大きいやや縦に長い球形の体部を持つ甕で、底部を欠損している。

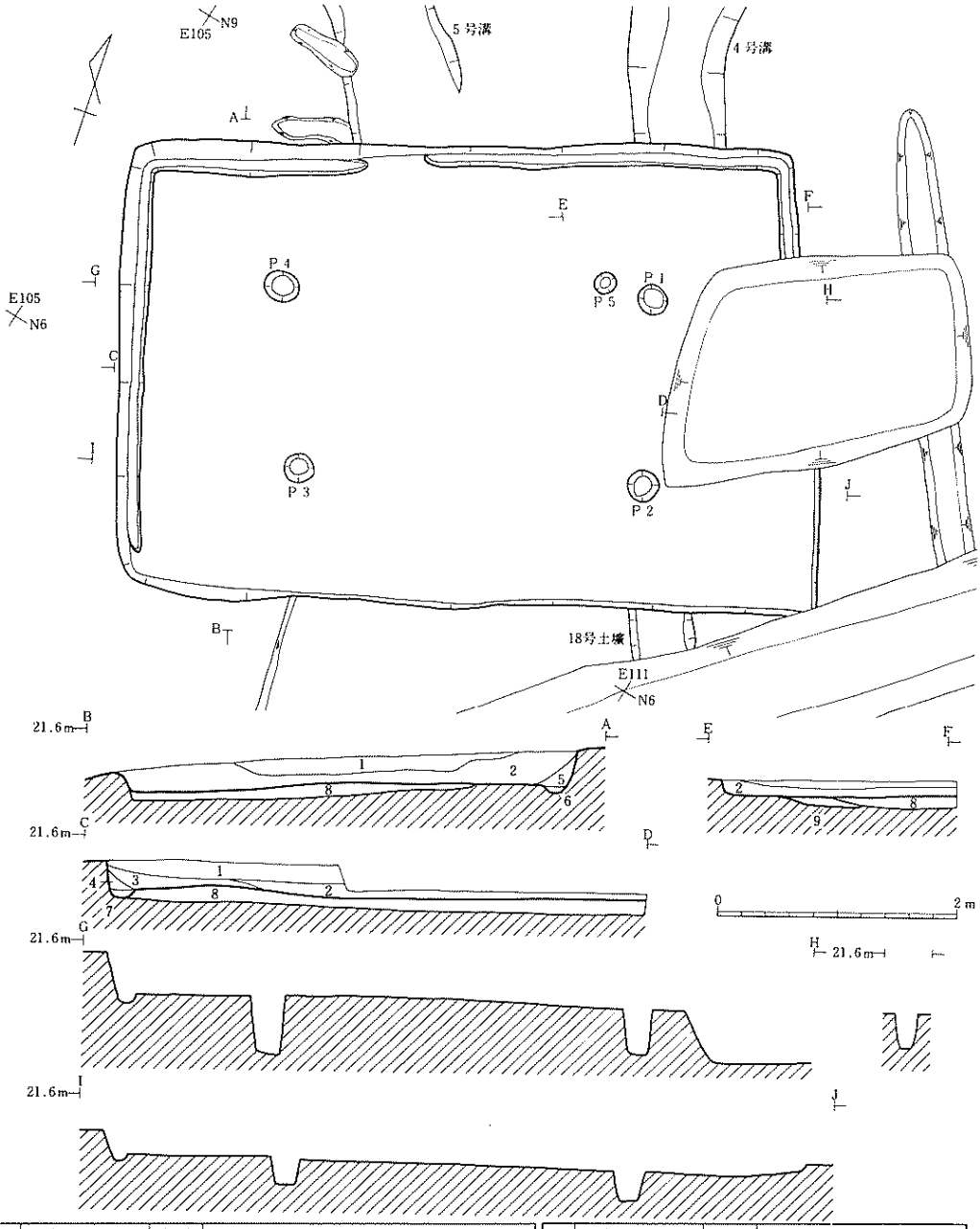
これらのうち、カマド左側の床面から第16図１(№２)・３(№１)・５（№３）が、カマド内から７(№４)、カマド右側の底面から６（№５）と第17図１（№６）・３（№７）の以上７点が出土し、貯蔵穴状ピットから第16図２・４と第17図２の３点が出土しているほか、床面から第16図の８が出土している。すべて住居床面及び貯蔵穴状ピットからの出土で、第16図１は５の上に重なった状況で発見されている。

第３号住居跡（第18・19図）

[位置･確認面]　第６号住居跡は調査区北西側に位置している。削平･撹乱を受けており、また、東壁の中央部分を撹乱によって欠いている。確認面は地山である。

[重複]　第18号土壙･第４・５号溝と重複し、第18号土壙･第４号溝を切り、第５号溝に切られている。

[平面形・規模]　平面形は長方形を呈し、規模は東西5.9m・南北3.9mある。方向は北壁が真北から約45°東へ振れる。



層No.	土　色	土 性	備　　考
1	黄褐色(10YR5/8)	シルト	地山粒・マンガン粒を含む。
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	暗褐色土を含む。
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	黄褐色・暗褐色土を含む。
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を含む。
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を含み、マンガン粒が僅かに混じる。
6	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山粒を含み、マンガン粒が若干混じる。［周溝内堆積土］
7	黄褐色(10YR5/8)	シルト	地山粒を含み、マンガン粒が若干混じる。［周溝内堆積土］
8	黄褐色(10YR5/8)	シルト	地山粒・焼土粒・炭化粒・マンガン粒を少量含む。［掘り方埋土］
9	褐　色(10YR4/6)	シルト	地山粒を含み、マンガン粒を僅かに含む。［第4号溝堆積土］

PNo.	土　色	土 性	備　　考
P 1	にぶい黄褐色(10YR7/4)	シルト	地山粒を含む。マンガン粒を若干含む
P 2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山粒を含む。マンガン粒を若干含む。
P 3	明黄褐色(10YR6/8)	シルト	地山粒を含む。マンガン粒を若干含む。
P 4	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山粒を含む。マンガン粒を若干含む
P 5	黄褐色(10YR5/8)	シルト	地山粒を含む。炭化粒・焼土粒を含む。

第18図　第3号住居跡

[壁]　西壁が最もよく残っており、壁面は29ｃｍある。壁は急に立ち上がる。

[床面]　床面の大半は地山を掘り下げた後、掘り方埋土を入れて平らに整えている。

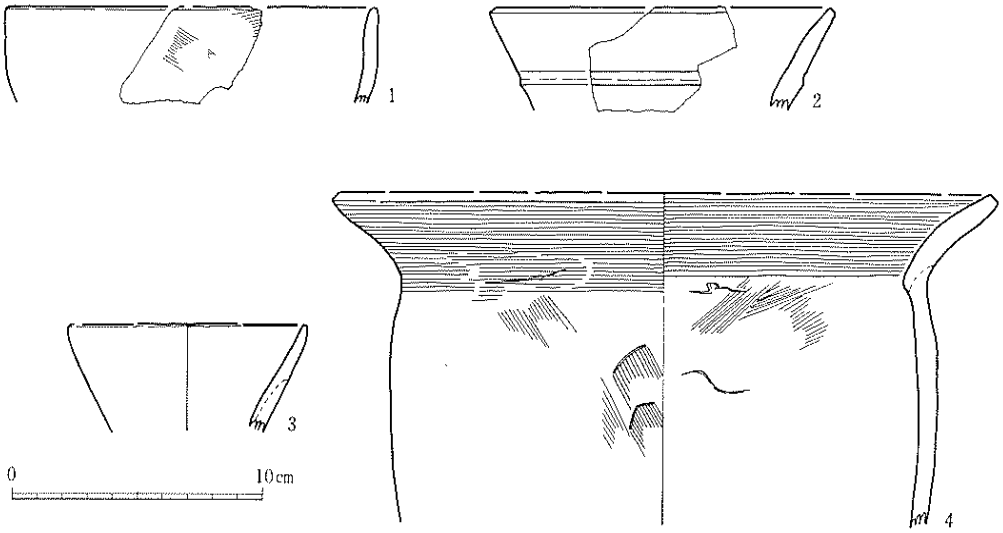
[周溝]　周溝は東壁の北寄りの部分、西壁・北壁で見られ、幅は16～30ｃｍ・深さは21～42ｃｍある。断面形は「U」字状を呈する。

[炉・カマド]　炉やカマドに関係する施設は発見されなかった。

[堆積土]　堆積土は５層に分層でき、いずれも地山の土に似た褐色を基調とした土で、自然堆積土である。

[遺物]　住居内から土師器が出土しており、ほとんどが小破片であった。図示できたのは４点である。第19図１は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる坏の破片で、体部下半は欠損している。２は須恵器甕を模倣したものの口頸部破片と考えられ、口唇部は面取りされており、頸部には凹線が１条施されている。いずれも鋭い稜線が形成されている。３は壷の口頸部で、体部は欠損している。直線的に外反し、口縁部は僅かに内彎気味である。４は甕または甑で、張りの弱い胴部から強く屈曲して大きく外反する口頸部へとつながる。口唇部は面取りされており、内面に稜線を持つ。最大径は口縁部にある。

これらのうち床面から出土したのは４のみである。



No.	種別	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	土師器 坏	第1層	(14.9)	——	(3.6)	口縁部～体部：ナデ	磨滅しており不明	——	Ⅰc類	1／12		84	
2	土師器 壺	第1層	(13.8)	——	(3.9)	磨滅しており不明（頸部に凹線1条あり）	磨滅しており不明	——	Ⅱ類	1／5		85	
3	土師器 壺	第1層	(9.4)	——	(4.0)	磨滅しており不明	磨滅しており不明	——	Ⅲ類	1／2		86	
4	土師器 甕	床面	(26.6)	——	(12.4)	口頸部：ヨコナデ・ナデ、体部：ナデ	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	——	Ⅰb類	1／8		87	

第19図　第３号住居跡出土遺物

第４号住居跡（第20～23図）

[位置･確認面]　調査区北東側の南斜面の下方に位置している。北壁と東・西壁の北側の一部が残っていたほかは、削平・撹乱により壊されている。確認面は地山である。

[重複]　第１・２号窯跡と重複しており、これらに切られている。

[平面形･規模]　平面形は方形ないしは長方形を呈するものと考えられ、柱穴の位置から推定して、東西方向に長い長方形である可能性が高い。南半部が削平されているため規模は不明であるが、東西軸で8.8mある。方向は北壁が真北から約57°東へ振れる。

[壁]　地山を壁としており、壁は緩やかに立ち上がる。壁高は最も残りのよい北西隅で90ｃｍほどある。

[床面]　地山を床としている。撹乱により床面も全体の半分近くが失われており、若干の凹凸があり、やや南に傾斜している。

[柱穴]　床面から合計８個のピットを検出した。これらのうち、位置関係や形態・規模から、Ｐ１～４が柱穴と考えられる。平面形・大きさは、Ｐ１を除いて楕円形ないしは隅丸方形で､径はいずれも50ｃｍ前後､深さは62～68ｃｍある。Ｐ１は掘り方が段掘りされており、平面形が楕円形で長軸78ｃｍ･短軸46ｃｍ、深さは上段33ｃｍ･下段が61ｃｍである。柱穴からは径20～23ｃｍの円形の柱痕跡が認められた。

[周溝]　壁や床面の残存状態の良好な北半分において認められ、東･西･北壁沿いに巡っている。西･北壁では幅 12ｃｍ前後であるが、東壁では 20～30ｃｍの幅がある。深さは最大10ｃｍで､底面が住居跡の外側に抉れている部分がある。また､北壁中央付近にはピット状に住居内側へ張り出す部分が認められた。

[焼け面]　北壁近くの中央部やや東寄りのところに、長径70ｃｍ・短軸50ｃｍほどの不整楕円形の堅く焼けしまった面が認められた。

[貯蔵穴状ピット]　Ｐ２とＰ３を結ぶ線より外側、東･西辺のほぼ中央部やや東寄りの所で、長軸2.1m・短軸0.9m程の不整楕円形を呈するピットを検出した。ピットは段掘りされており、深さは浅い部分が約30ｃｍ､深い部分が約60ｃｍである｡深い部分からは流れ込んだ形で２個のほぼ完形の坏が出土している。位置や規模・形態などより貯蔵穴の可能性がある。

[堆積土]　基本的には窯跡前庭部の整地層（第１・２層）とその下の自然堆積土（第３～７層）に分かれる。第３・４層は住居跡のほぼ全面に堆積し、第５～７層は北壁際に堆積していた。

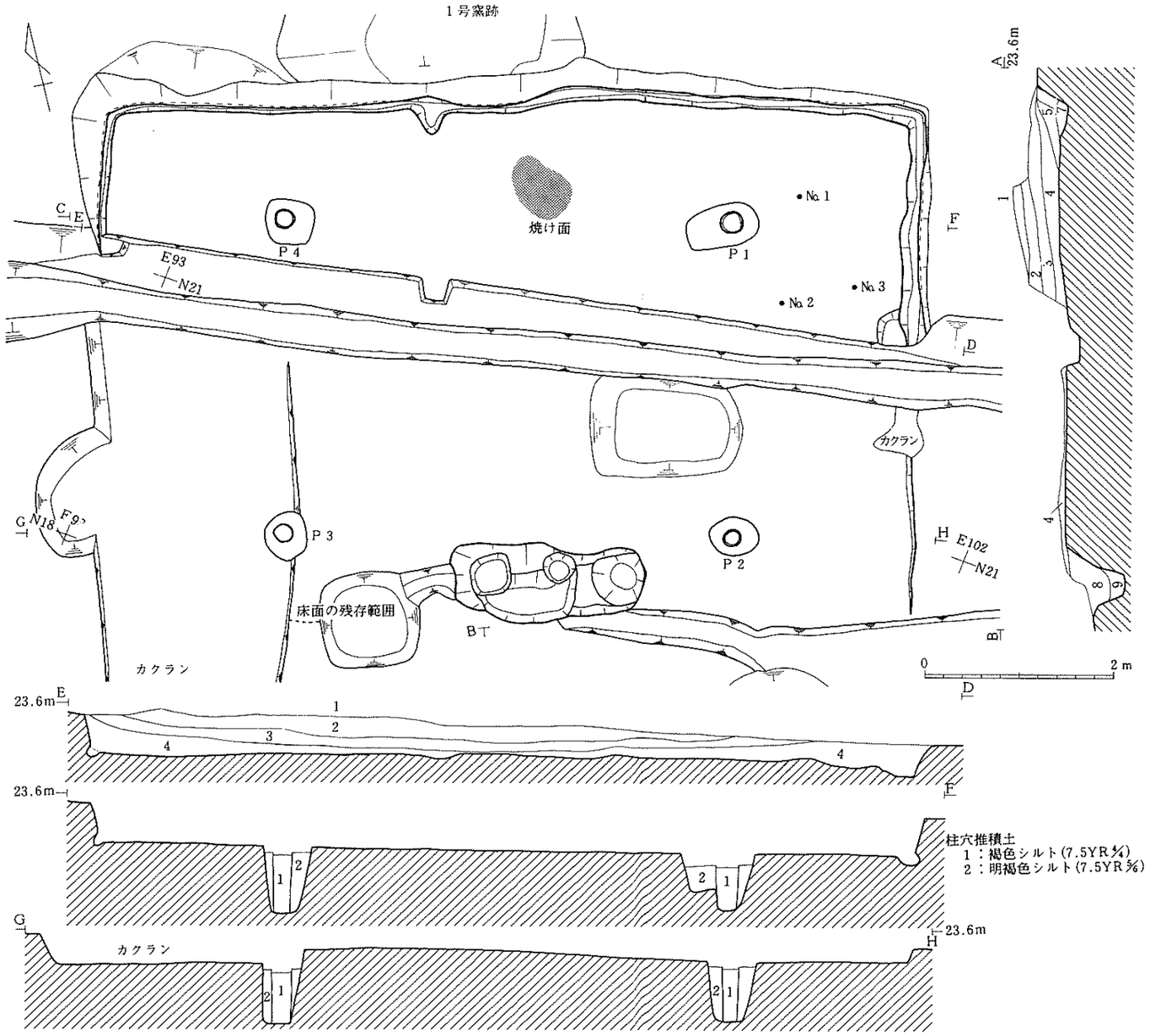
[遺物]　住居内から多くの土師器が出土しているが､図示できたのは24点である。第21図１は底部が平底気味の丸底を呈し、半球状の体部から口縁部が内傾する深めの坏である。

２～４は内彎しながら緩やかに立ち上がる体部を持つ坏で、口縁部が直立ないしは僅かに外に開くものである。いずれも底部を欠いている。５・６は内彎しながら緩やかに立ち上がり、口縁部が軽く内傾して外面に稜線を持つもので、両者とも底部を欠損している。７は５・６に近い器形を有し、口縁部が短く直立する特徴を持つ。口縁部と体部との境には軽い段が認められる。８は丸底風の平底から内彎しながら立ち上がり、口頸部と体部の境を稜によって画するもので、口頸部は外彎気味に直立し、口縁部が軽く外傾する。９はやや尖った丸底から内彎しながら立ち上がり、頸部と体部の境に稜が認められる。やや長い口頸部が緩やかに外反する。10～13 と第22図１は頸部で屈曲して外反する坏である。いずれも内面に稜線を有する。10 はやや上げ底の平底から緩やかに立ち上がり、頸部で屈曲し直線気味に外反する口頭部を持つ。11 は口頸部がやや短いものである。12・13 は胴部が強く脹らんで、頸部で強く屈曲し直線気味に立ち上がるやや長い口頸部を持つ。両者とも底部を欠損している。第22図１は口縁部が欠損するものの、第21図11・12 と同様の形態を呈するものと思われる。２は屈曲して外傾する口頸部がやや内彎気味に立ち上がるもので、底部を欠損している。３は壷口頸部の破片で、緩やかに外反するものである。４～９は甕で、いずれも内面に稜線を持ち、体部の大半を失っている。４は小型の甕で、張り出す胴部から頸部で屈曲して直線気味に外反し、口縁部が僅かに外に開くものである。５・６は強く屈曲して外反する口頸部を持つもので、５は直線気味に外反する長い頸部を持つもの、６は外反気味に外に開く長い頸部を持つものである。８は頸部が直線気味に外反するもので、口唇部は面取りされている。９は屈曲して僅かに外彎しながら外に開く頸部を有する。10 は長胴の甑と思われる口頸部破片で、緩やかに外反し、口縁部がやや肥厚するものである。11 はミニチュア土器で、口縁部が短く内傾するもので、坏を意識したものと考えられる。

これらのうち、床面から出土しているものは第21図７（№２）・８（№１）・10（№３）、第22図１・２・５で、貯蔵穴状ピットの堆積土から出土しているものは第21図１と第22図の４である。

土器以外の遺物には、床面から石製模造品（有孔円盤）が１点出土しているほか、同じく床面から鉄鏃が１点出土している(第23図)。１は不整な楕円形を呈する有孔円盤で、側面には金属器による加工痕が認められた。２は有柄の逆刺を持つ鉄鏃で、焼け面の周辺から出土した。破損が著しいものの矢柄の木質が片面に残っていた。

なお、貯蔵穴状ピットの底面で当ピットに切られた３個のピットが確認された。ピット内には砂質土が堆積しており、貯蔵穴状ピットの堆積土とは明らかに異なっていた。遺物は出土していない。

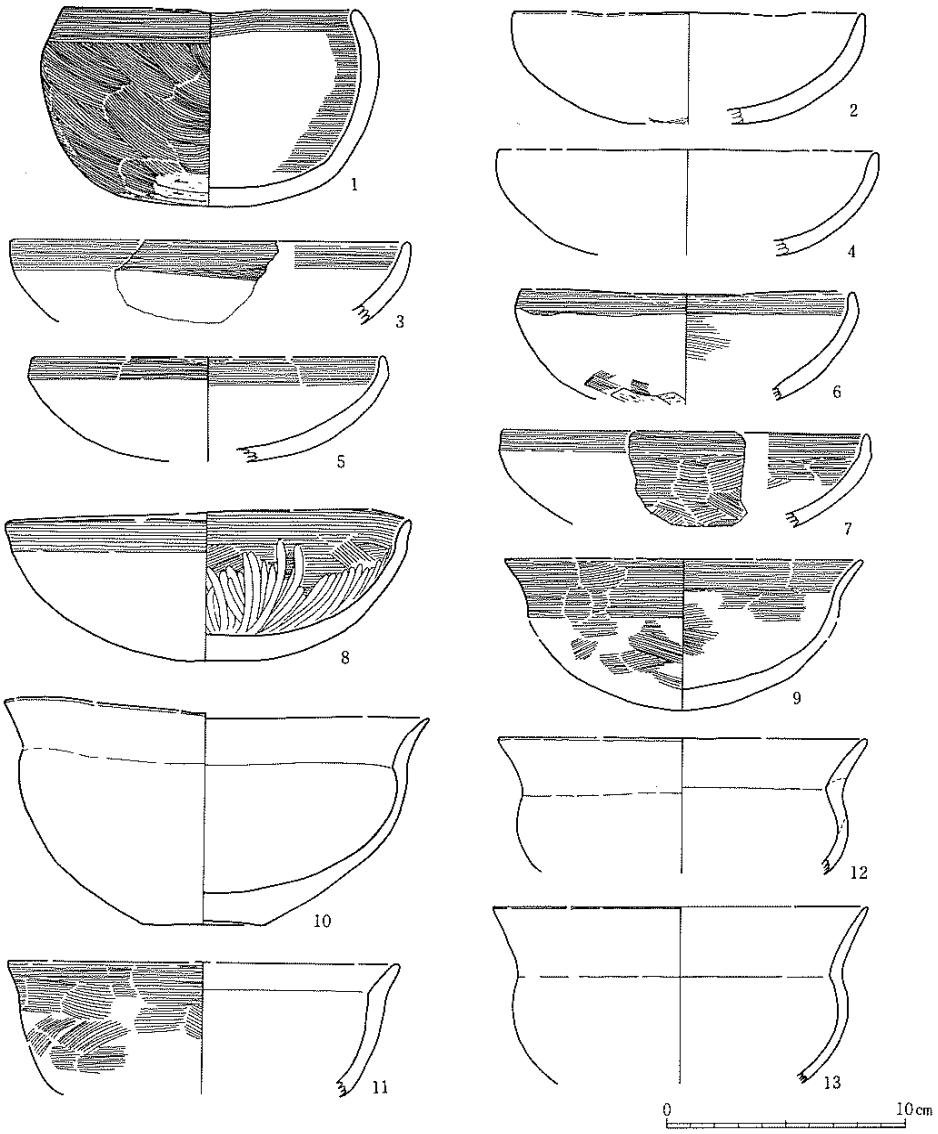


層No.	土色	土性	備考
1	明黄褐色(10YR6/8)	シルト	整地層第1層
2	黄褐色(7.5YR5/6)	シルト	明褐色土・暗褐色土をブロック状に含む。整地層第2層
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	しまりあり。

層No.	土色	土性	備考
4	褐色(7.5YR4/3)	シルト	しまりあり。
5	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	焼土を含む。炭化物を若干含む。ややしまりあり。
6	褐色(7.5YR5/6)	シルト	しまりあり。

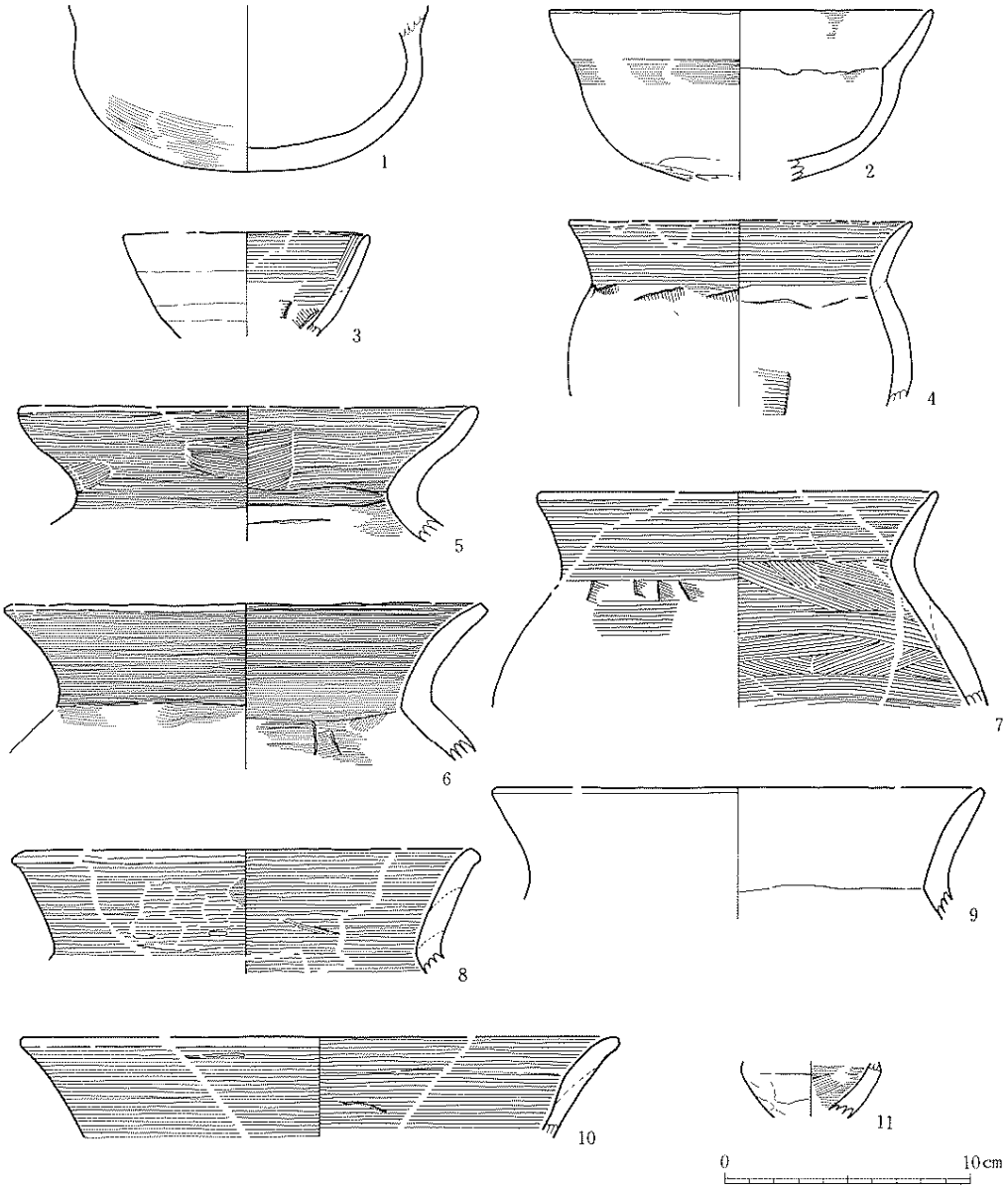
層No.	土色	土性	備考
7	黄褐色(10YR5/8)	シルト	第4層に似る。しまりあり。
8	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	【貯蔵穴状ピット堆積土第1層】
9	褐色(10YR4/6)	砂質土	しまりなし。【貯蔵穴状ピット堆積土第2層】

第20図　第4号住居跡



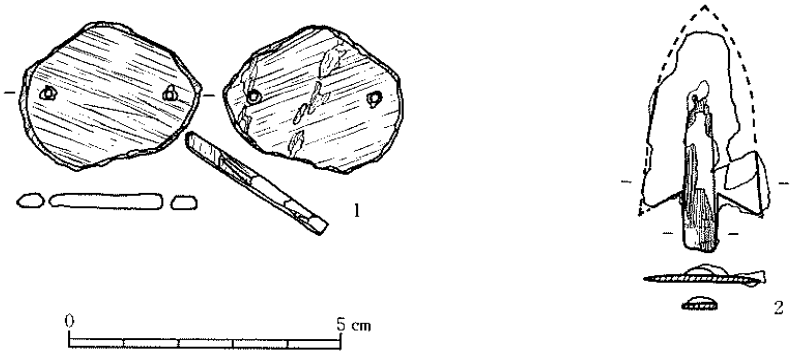
No.	種　別	層　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面	内　面	底　部	分　類	残存率	備　考	登録	写真図版No.
1	土師器　坏	貯蔵穴	12.2		8.5	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ、底部：ケズリ	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	平底風 丸底	Ⅰa類	1／1	貯蔵穴出土	88	12
2	土師器　坏	堆積土	(14.6)	——	(4.8)	磨滅しており不明	磨滅しており不明	————	Ⅰc類	1／4		89	
3	土師器　坏	第3層	(16.8)	——	(3.5)	口縁部：ナデ、体部：摩滅しており不明	口縁部：ナデ、体部：不明	————	Ⅰc類	1／10	破片実測	90	
4	土師器　坏	堆積土	(15.8)	——	(4.5)	磨滅しており不明	磨滅しており不明	————	Ⅰc類	1／5		91	
5	土師器　坏	堆積土	(14.7)	——	(4.5)	口縁部：ヨコナデ、体部：磨滅しており不明	口縁部：ヨコナデ、体部：不明	(丸底)	Ⅲa類	1／8		92	
6	土師器　坏	第3層	14.0	——	(4.9)	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ、底部：ケズリ	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	————	Ⅲa類	2／3		93	13
7	土師器　坏	床　面	(15.3)	——	(4.1)	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	————	Ⅲb類	1／10	取り上げNo.2	94	
8	土師器　坏	床　面	17.0		6.4	口縁部：ヨコナデ、体部：不明	ヨコナデ、ナデ、放射状ミガキ	平底風 丸底	Ⅲb類	1／1	取り上げNo.1	95	13
9	土師器　坏	第3層	(16.4)	——	(5.7)	口頸部：ヨコナデ・ナデ、体部：ナデ	磨滅しており不明	————	Ⅳaii類	2／5		96	
10	土師器　坏	床　面	18.5	5.0	9.6	磨滅しており不明、体部下端にナデ	口頸部：不明、体部：ナデ?	上げ底	Ⅳaiv類	4／5	取り上げNo.3	97	13
11	土師器　坏	堆積土	(15.5)	——	5.8	磨滅しており不明	磨滅しており不明	————	Ⅳai類	1／6		98	
12	土師器　坏	第1層	(15.7)	——	(7.6)	磨滅しており不明	磨滅しており不明	————	Ⅳaiv類	1／7		99	
13	土師器　坏	床　面	(15.6)	——	(6.9)	口頸部～体部：磨滅しており不明、一部ケズリ	磨滅しており不明、一部にナデ	————	Ⅳaiv類	1／4	第3層からも出土	100	

第21図　第4号住居跡出土遺物（1）



No.	種別	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	土師器 坏	第3層	——		(6.7)	口頸部欠損、体部：ナデ?	磨滅しており不明	丸底	Ⅳaⅱ類	——		101	
2	土師器 坏	第3層	(15.0)	——	6.5	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	口縁部～体部：ナデ?	丸底	Ⅳaⅱ類	1／6		102	13
3	土師器 壷	第3層	10.0	——	(4.2)	磨滅しており不明	ヨコナデ、ナデ	——	Ⅰ類	1／2		103	
4	土師器 甕	貯蔵穴	14.0	——	(8.3)	口頸部：ヨコナデ・ヘラナデ、体部：不明	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	——	Ⅱ類	1／4		104	
5	土師器 甕	床面	(18.6)	——	5.5	口頸部：ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	——	Ⅰ類	1／5		105	
6	土師器 甕	堆積土	(20.7)	——	(6.4)	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	——	Ⅰ類	1／2		106	13
7	土師器 甕	堆積土	(16.4)	——	(8.6)	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ・ヘラナデ	ヨコナデ、ナデ	——	Ⅰ類	1／3		107	
8	土師器 甕	第3層	(19.0)	——	(5.0)	口頸部：ヨコナデ	口頸部：ナデ	——	Ⅰ類	1／6		108	
9	土師器 甕	第3層	(20.1)	——	(5.3)	磨滅しており不明	磨滅しており不明	——	Ⅰ類	1／6		109	
10	土師器 甑?	第3層	(24.4)	——	(4.0)	口頸部：ヨコナデ	口頸部：ナデ	——	Ⅳ類	1／10		110	
11	ミニチュア土器 坏?	堆積土	——	——	(2.4)	磨滅しており不明	ナデ	——	——	1／3		111	

第22図　第4号住居跡出土遺物 (2)



No.	種別	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	登録	写真図版No.
1	石製模造品	床面	2.9	3.3	2.9	有孔円盤。結晶片岩製。側面には金属器の加工痕あり。	112	19
2	鉄鏃	床面	(4.4)	(2.3)	1.1	柄部に木質が残る。逆刺あり。短柄で柳葉形を呈する。	113	19

第23図　第４号住居跡出土遺物（3）

第５号住居跡

[概要]　調査区南西隅の東側に傾斜する斜面で確認した。確認面は地山である。重複により、北辺の一部が僅かに残っているのみである。第８号住居跡・第３号窯跡・ピット１と重複しており、これらに切られている。平面形は方形を基調とすると思われる。北辺でカマドの煙道の一部が認められた。方向は北壁が真北から約84°東へ振れている。

第６号住居跡（第24図）

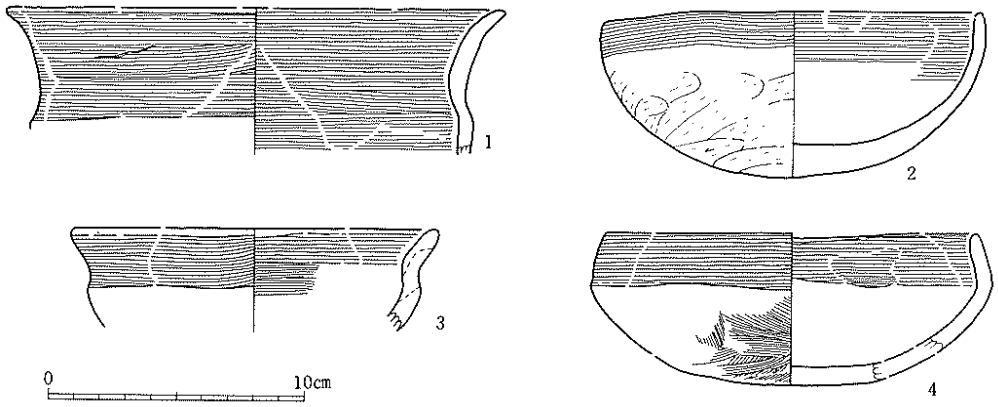
[概要]　第５号住居跡の北側で検出した。確認面は地山である。撹乱によって東半分を失っており、西壁と南・北壁の一部が残っていた。第２号土壙と重複しており、これに切られている。平面形は方形ないしは長方形を呈するものと思われる。規模は南北軸で５mほどある。北辺でカマドの煙道の一部が認められた。方向は北壁が真北から約87°東へ振れる。

[遺物]　遺構確認の際、住居内堆積土から土師器が出土した。第24図の１に示したのは甕の口頸部破片で、頸部がやや直線気味に外反するものである。

第７号住居跡（第24図）

[概要]　第６号住居跡の北側で確認した。確認面は地山で、東側の半分近くを失っており、西壁と南・北壁の一部が残っていた。重複は認められなかった。平面形は方形を基調とするものと思われる。規模は南北軸で 4.5mほどある。北辺でカマドの煙道の一部が認められた。方向は北壁が真北から約89°東へ振れている。

[遺物]　遺構確認作業中に住居内堆積土から土師器が出土している。いずれも破片であるが、坏を３点図示することができた。第24図の２は口縁が内彎気味に立ち上がるやや深め



No.	種別	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	土師器　甕	堆積土	(19.5)	——	(5.8)	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	——	Ⅰ　類	1／8	6号住出土	114	
2	土師器　坏	堆積土	14.6		6.7	口縁部：ヨコナデ、体部：ケズリ	口縁部：ナデ、体部：ナデ	丸　底	Ⅰa類	1／1	7号住出土	115	13
3	土師器　坏	堆積土	(14.4)	——	(4.1)	口頸部：ヨコナデ、体部：不明	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	——	Ⅳb類	1／7	7号住出土	116	
4	土師器　坏	堆積土	14.6		6.2	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	口縁部：ナデ、体部：不明	丸　底	Ⅴ　類	2／5	7号住出土	117	13

第24図　第６・７号住居跡出土遺物

の坏で、丸底を呈する。３は口縁部が軽く屈曲して外反する坏で、体部下半は欠損している。４は体部やや上のところで稜を持ち、段状を呈する丸底の坏で、口縁部がやや内傾しながら立ち上がる。須恵器坏蓋を模倣したものと考えられる。

第８号住居跡

[概要]　第５号住居跡を切り、第３号窯跡に切られている。確認面は地山で、東側は第１号窯跡に伴うと思われる堆積土により不明である。西壁と南・北壁の一部が残っていた。平面形は長方形を呈するものと思われ、規模は長辺が約６ｍ・短辺が約５ｍほどある。方向は北壁が真北から約84°東へ振れる。遺物は出土していない。

（岩見和泰）

２．窯跡

調査区内より、３基の窯跡を検出した。このうち第３号窯跡は現状保存されることとなったため、精査を行ったのは第１号窯跡と第２号窯跡の前庭部である。

第１号窯跡（第25～28図，第30図３・４）

[概要]　発掘区北東隅、北側の丘陵南東斜面の下部に位置する地下式窖窯である。第２号窯跡が隣接するが重複はなく、新旧関係は不明である。また、前庭部が第４号住居跡と重複しており、第４号住居跡が自然堆積によりある程度埋まった後、その凹みに焚口部から焼成室を構築した際の土を用いて整地を行い、前庭部の下半分を造成している。窯は前庭部・焚口部・燃焼室・焼成室から成り、天井は燃焼室と焼成室の境付近に一部残存していたが、発掘時に崩落し、その他の部分はすべて崩落していた。そのため、焼成室上部の天井に穿たれていたと思われる煙出し穴については不明である。

[焼成窒]　平面形はほぼ左右対称の胴張り形を呈し、奥壁は直線的で両端が角張る。燃焼室寄りに最大幅があり、燃焼室に向けて強くすぼまる。断面形は、残りの良好であった燃焼室近くでは床面が浅く凹み、壁は緩やかに外彎しながら立ち上がり、天井に向けて内彎する。壁と天井との明確な変曲点はない。中央部から奥にかけても天井は不明であるが、同様の形態を基調として幅の広がった形態を呈していたと考えられる。床面は上半部で約22°、下半部で約17°の傾斜を持つ。天井・壁・床面ともに還元され硬化している。

[燃焼室]　平面形は焚口部に向かってゆるく開く形態を呈する。焼成室との境は明瞭である。断面形は、壁が上方に開き、床面が浅く凹む「U」字状を呈する。床面は還元も硬化もしていない。壁面は焼成室側が還元され硬化しているのに対し、焚口部側は酸化しているのみである。

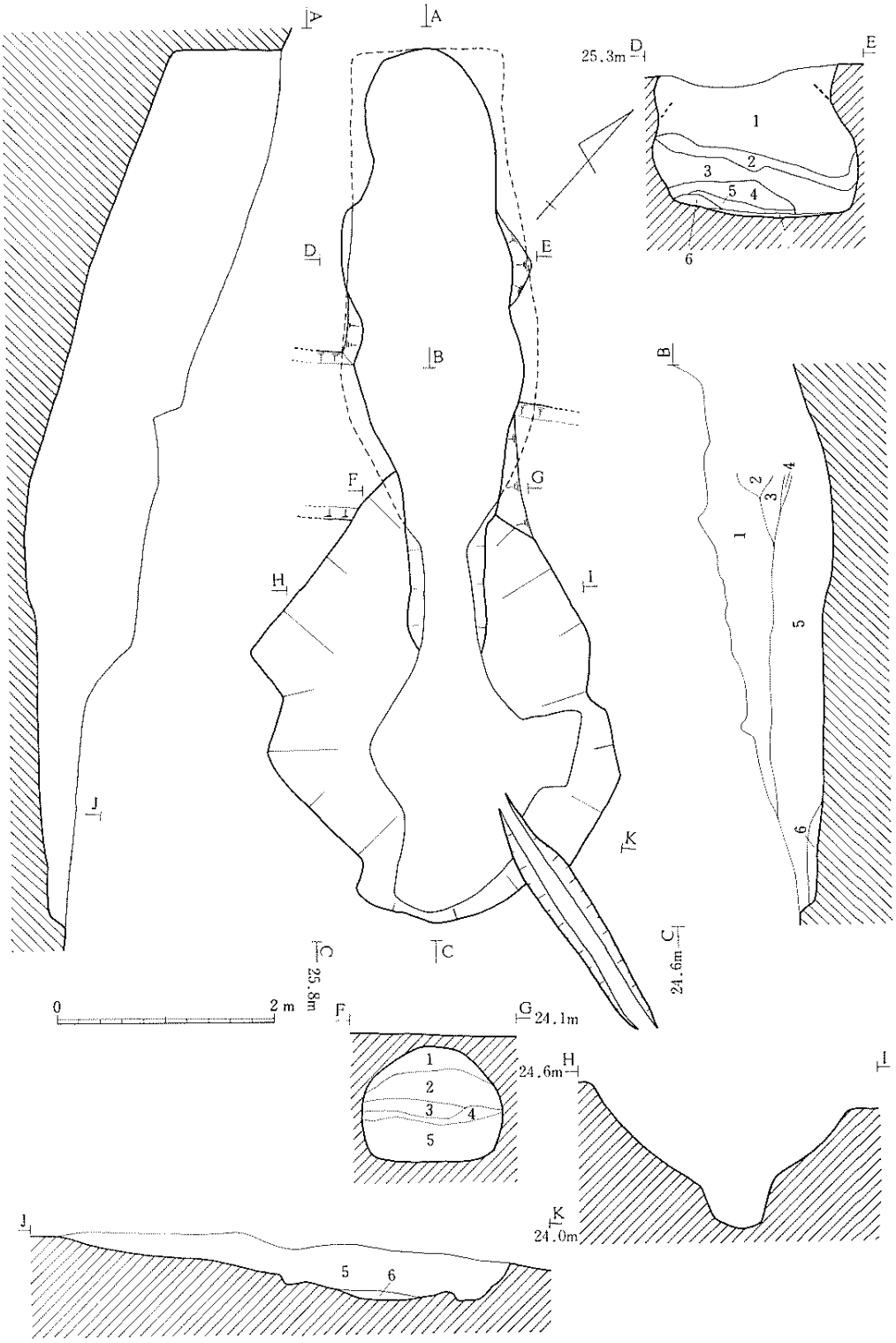
[焚口部]　平面形は、燃焼室からさらに朝顔状に開く形態を呈する。横断面は床面がやや浅く凹み、壁が緩やかに立ち上がる幅広の逆台形状を呈する。また、床面は燃焼室よりもやや高くなっている。特に施設は認められなかった。

[前庭部]　平面形は不整な半円形の土壙を呈し、床面は中央が凹んだ皿状である。前庭部の南東側床面から、長さ約 2.6mの断面「U」字状の溝が直線的に斜面下へ延びており、排水溝の可能性が考えられる。前庭部から焼成室にかけて、木炭を多量に含む層が堆積しており、最も厚い前庭部で60ｃm程の層厚が認められる。

[規模]　全　体…長さ　9.1m　　確認面からの深さ　1.4m

焼成室…長さ　4.6m　　幅　2.0m　　残存高　1.1m

燃焼室…長さ　1.0m　　幅　0.6m　　残存高　1.4m



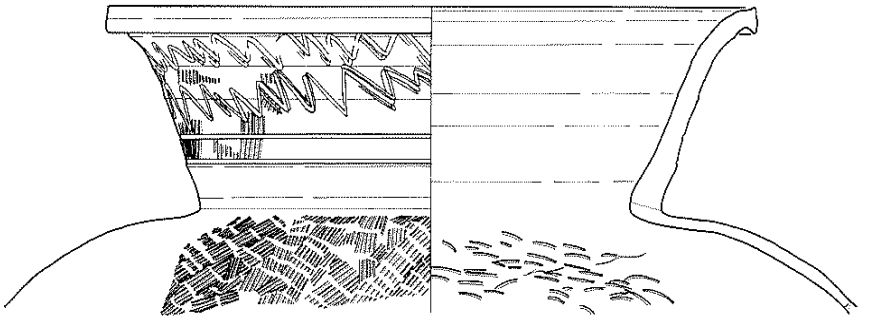
第25図　第１号窯跡

層No.	大別	土色	土性	遺物取り上げ層	備考
1	地山崩壊土	明褐色(7.5YR5/8)	砂質シルト	1	炭化物を含む。
2	窯壁崩壊土	赤褐色(5YR4/8)	砂質シルト	1	
3	地山崩壊土	明褐色(7.5YR5/8)	砂質シルト	1	純粋な地山層。
4	窯壁崩壊土	赤褐色(5YR4/8)	砂質シルト	—	炭化物・焼土・地山ブロックを少量含む。
5	木炭層	黒色(7.5YR1.7/1)	砂質シルト	2	焼土を含む。
6		黒褐色(7.5YR2/2)	砂質シルト	—	焼土を含む。

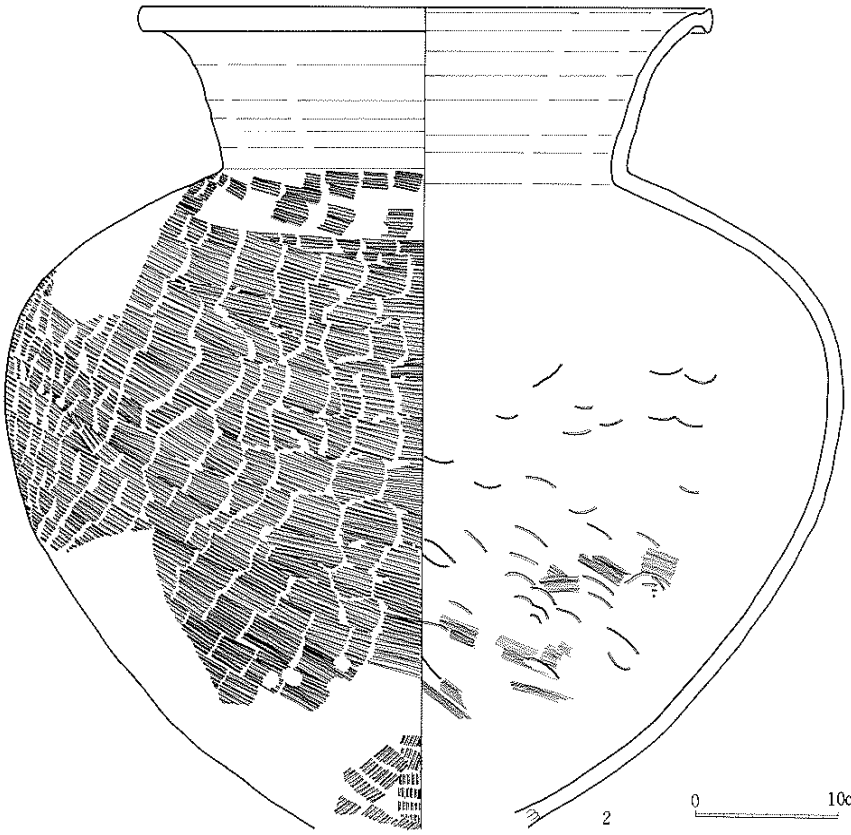
第25図　第１号窯跡セクション観察表（１）
—ＢＣ．ＦＧ．ＪＫ

層No.	大別	土色	土性	遺物取り上げ層	備考
1	地山崩壊土	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	——	炭化物・焼土・地山ブロックを少量含む。
2		褐　色(10YR4/6)	砂質シルト	1	
3	天井崩壊土	——		1	酸化土と還元土が混じる。
4	天井崩壊土	——		1	各層が酸化土（暗赤褐色：5YR3/6）と還元土（オリーブ褐色：2.5Y4/6）の互層。
5		——		——	
6		——		——	
7	木炭層	——	——	——	

第１号窯跡セクション観察表（２）—ＤＥ



1

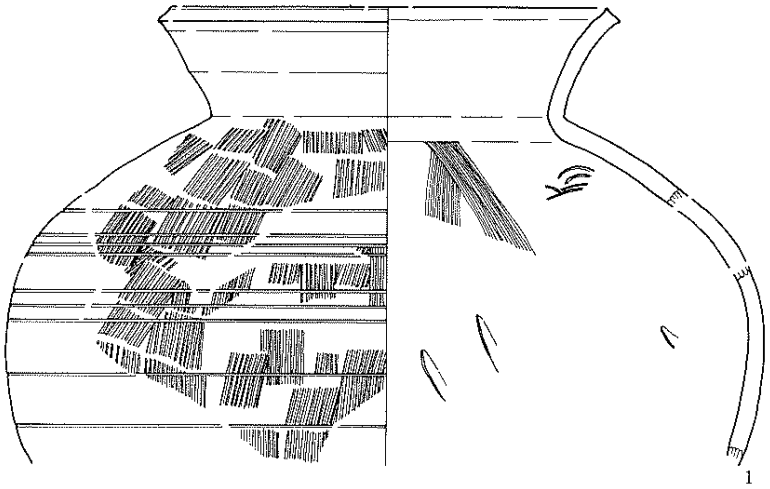


2

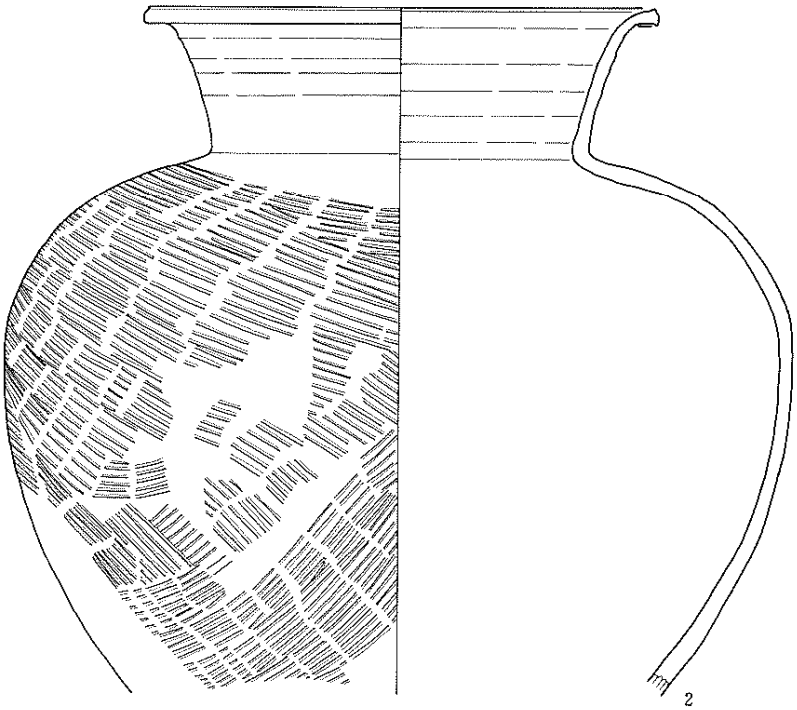
0　10cm

No.	種別	口径(cm)	体径(cm)	層位	登録No.	図版No.
1	須恵器　甕	39.8	—	1	118	14
2	須恵器　甕	45.2	45.2	1	119	14

第26図　第１号窯跡出土遺物（1）



1

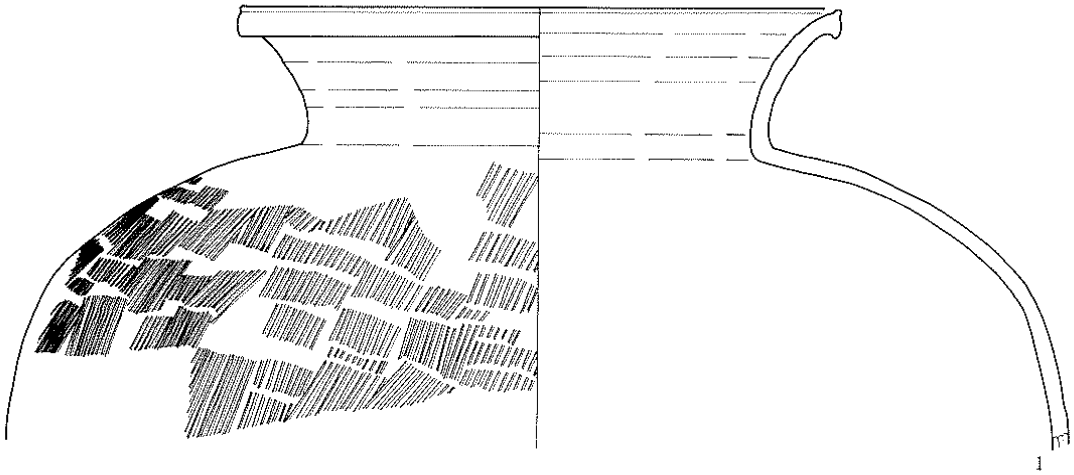


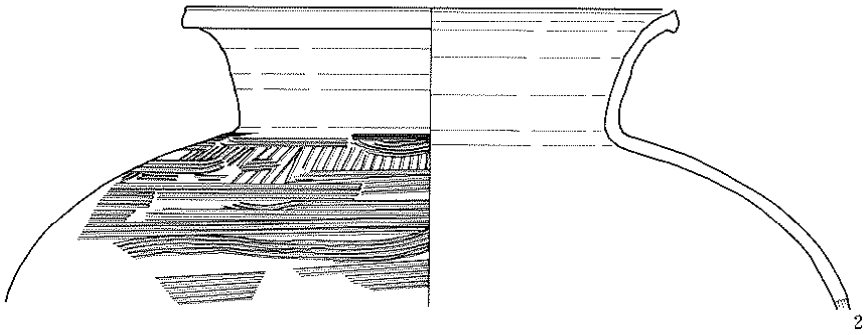
2

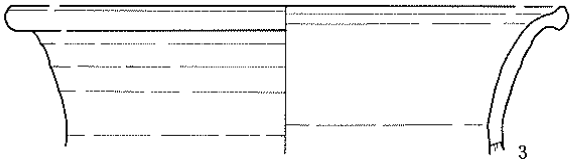
0　　10cm

No.	種　別	口径(cm)	体径(cm)	層位	登録No.	図版No.
1	須恵器　甕	17.8	31.0	1	120	13
2	須恵器　甕	20.6	32.2	1	121	15

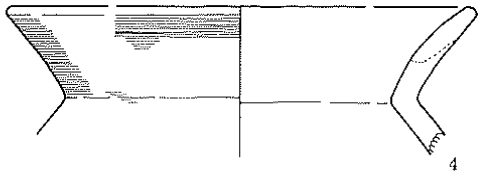
第27図　第１号窯跡出土遺物 (2)

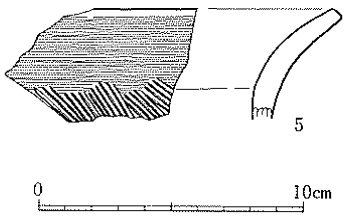






No.	種　別	口径(cm)	体径(cm)	層位	登録No.	図版No.
1	須恵器　甕	22.4	(40.2)	1	122	15
2	須恵器　甕	18.2	(38.0)	2	123	13
3	須恵器　甕	(21.0)	——	2	124	16
4	須恵器　甕	——	——	1	125	16
5	須恵器　甕	——	——	1	126	16





第28図　第１号窯跡出土遺物（3）

焚口部…長さ　0.85m　　幅　1.4m　　残存高　0.9m

前庭部…長さ　2.65m　　幅　上端 3.5m　下端　　1.95m

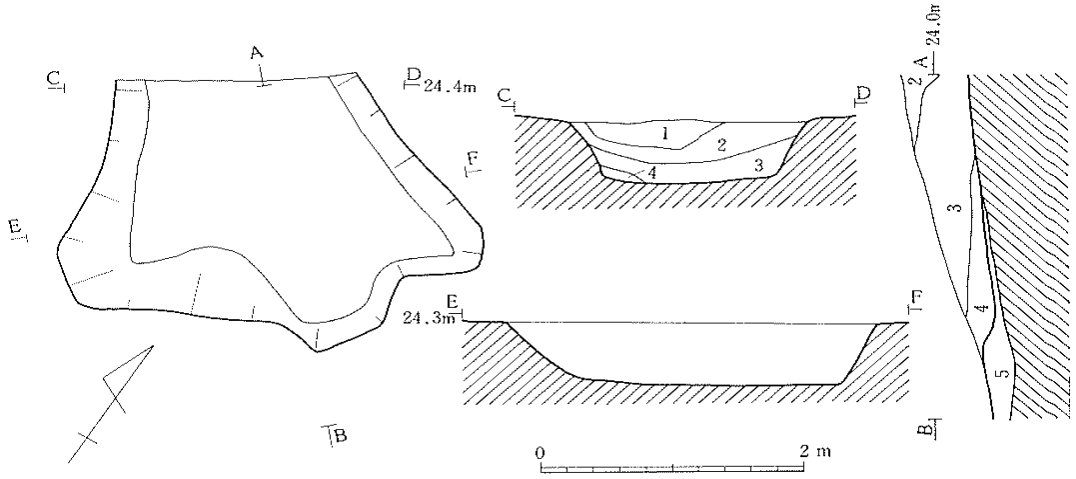
[遺物]　前庭部から焼成室にかけて床上に堆積した、灰原へと続く木炭層から須恵器の甕が口縁部および体部の破片も含めて約６点、また、窯壁の崩壊土中から須恵器の甕が２点、土師器甕の口縁部の破片、羽口の破片がそれぞれ２点ずつ出土している。須恵器の甕の内、第26図の１・２は大型のもので、特に１は口頸部に平行沈線と櫛描き波状文が描かれている。土師器は胎土・調整などから奈良時代以前のものと考えられ、何らかの原因により混入したものと思われる（第26～28図、第30図２・３）。

第２号窯跡（第29図，第30図５・６）

[概要]　第１号窯跡の北東に隣接する。発掘区には前庭部がかかったのみで全体の構造は不明であるが、主軸は第１号窯跡と同じと考えられ、第１号窯跡よりもやや上の斜面に位置する。また、第２号窯跡も第１号窯跡と同様第７号住居跡と重複しており、前庭部下半分を整地により造成している。確認面は地山である。

[前庭部]　焚口部付近より上部は発掘区外であるため前庭部の全体像は不明であるが、平面形は歪んだ三角形状を呈し、その底辺がやや張りだしている。床面は中央が凹んだ皿状である。また、ここでも最大45ｃｍの厚さで木炭を多量に含む灰原層が堆積していた。規模は現存長2.6m、幅上端3.2m・下端2.4m、残存高0.55mである。

[遺物]　前庭部のみの調査であったが、堆積土１層から、ほぼ完形の羽口と破片がそれぞれ１点ずつ出土している(第30図５・６)。



層No.	土　色	土　性	備　考
1	黒色(7.5YR2/1)	砂質シルト	炭化物を含む。
2	暗褐色(7.5YR3/4)	砂質シルト	
3	黒色(7.5YR2/1)	砂質シルト	炭化物を多く含む。焼土を含む。
4	暗褐色(7.5YR3/4)	砂質シルト	炭化物・焼土を含む。
5	明黄褐色(10YR6/8)	砂質シルト	整地層

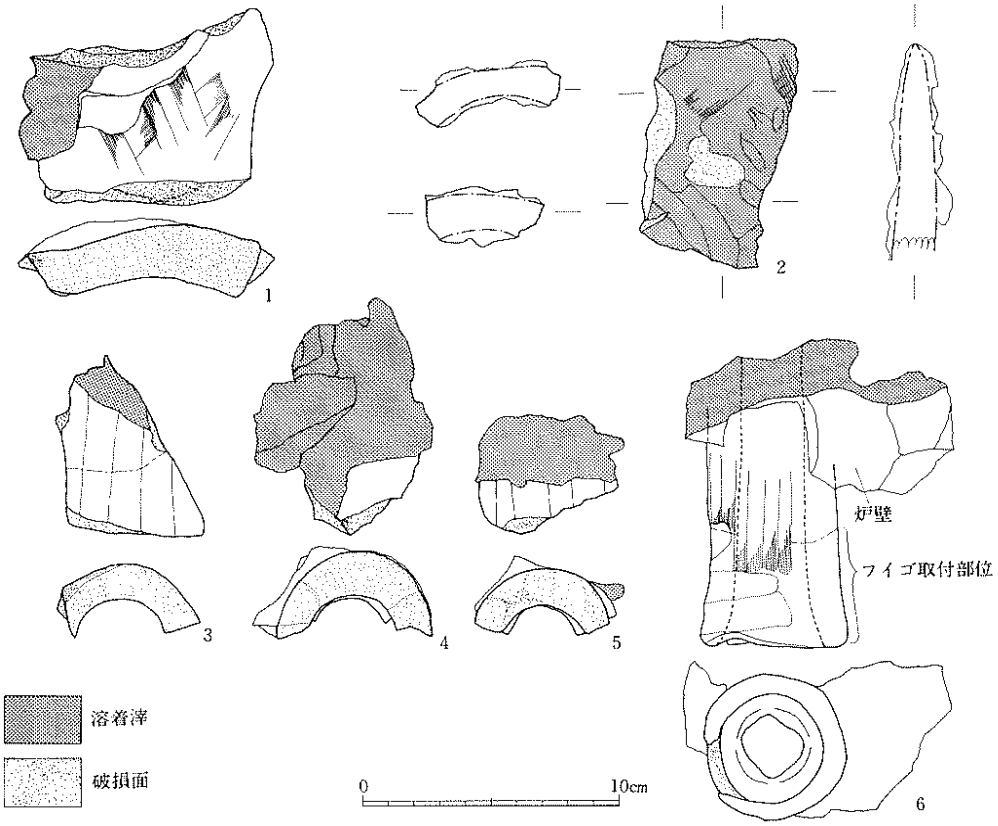
第29図　第２号窯跡

第３号窯跡（第30図１・２）

[概要]　調査区南西隅の東側に傾斜する斜面で、灰原･前庭部と焚口部を検出した。第５号住居跡と第８号住居跡と重複しており、これらを切っている。確認面は地山である。詳細は不明であるが、灰原・前庭部はほぼ西側へ延びており、前底部の西端部で焚口部を確認している。

[遺物]　遺構検出の際、灰原内堆積土から大型の羽口（通風管）と思われる破片が出土している。図示できたものは２点のみであるが、その他にも同様の破片が１点出土している。第30図１の破片は炉壁が付着しているのに対し、２は鉄滓が付着しており違いが見られる。

（須田良平・佐藤憲幸・岩見和泰）



No.	出土窯跡	層位	先端部内径(cm)	吸気部(cm) 外径	吸気部(cm) 内径	最大長(cm)（残存長）	備　考	登録	図版No.
1	３号窯跡	堆積土	——	(15.2)	(11.2)	(8.1)	通風管	127	16
2	３号窯跡	堆積土	(8.8)	——	——	(9.4)	通風管　鉄滓付着	128	16
3	１号窯跡	１層	——	(6.0)	——	(7.2)		129	16
4	１号窯跡	１層	(2.6)	——	——	(9.8)		130	16
5	２号窯跡	１層	(2.6)	——	——	(4.9)		131	16
6	２号窯跡	１層	2.5	5.7	4.1	12.6		132	16

第30図　窯跡出土羽口及び通風管

３．その他の遺構

(1)　土壙（第１～22号土壙）

調査区内から合計22基の土壙を発見した。これらのうち、調査区南西部分から発見された第１～５号土壙は、当地点が現状保存されることとなったため、確認調査のみを行い、掘り下げは行っていない。

各々の土壙は調査区南西の斜面や調査区中央部分・東側などの緩斜面に分布し、その分布に偏りは認められなかった。検出された土壙には、土壙相互の切り合いは認められず、切り合いが認められるのは、第２号土壙と第18号土壙の２基のみである。ここでは、平面形によって類型を設定し、類型毎に説明を行っていく。

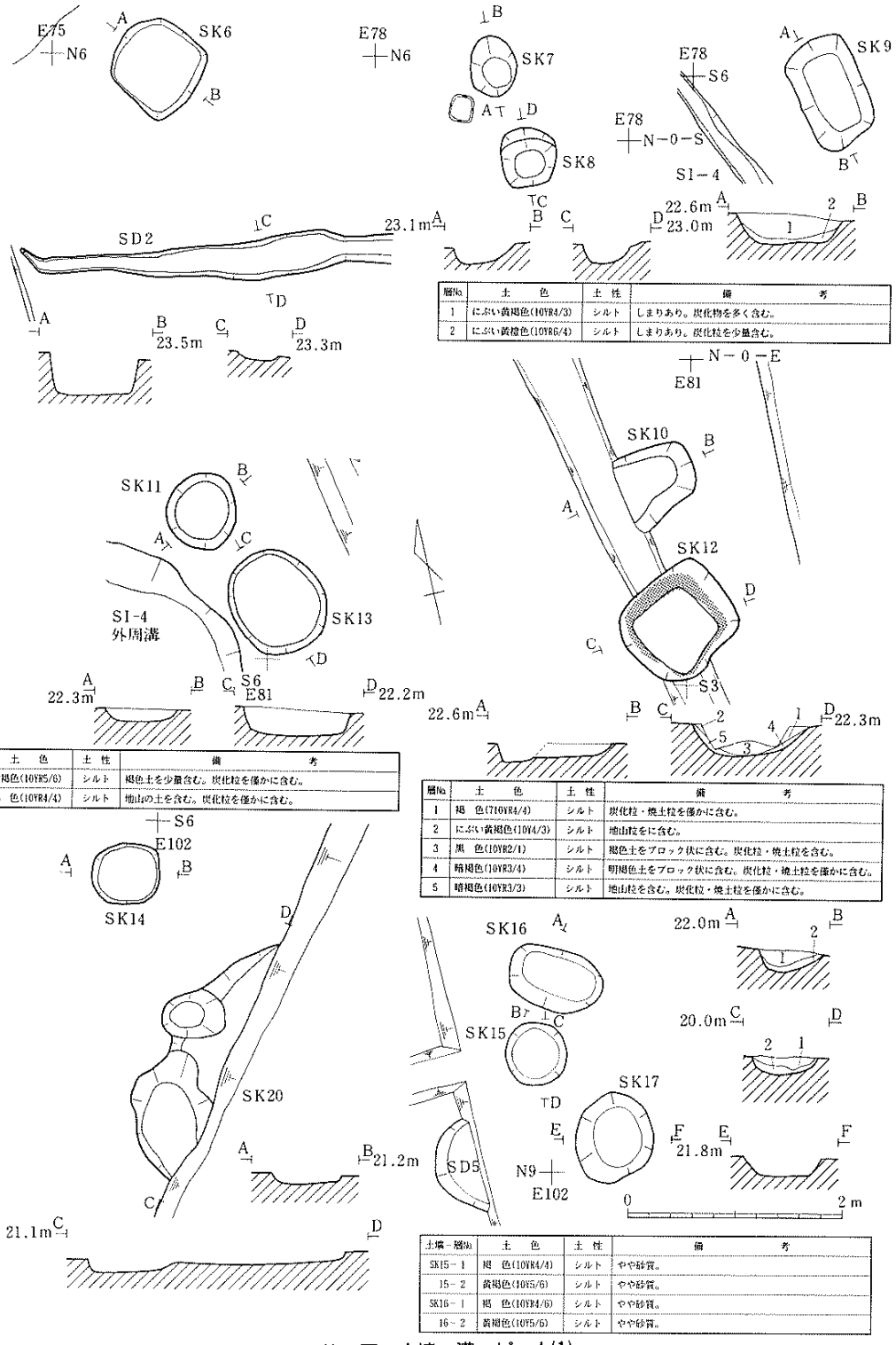
平面形には、大きく分けて円形を基調とするもの(Ａ)、方形を基調とするもの(Ｂ)、不整形のもの(Ｃ)の３種類がある。円形を基調とするものには、円形を呈するもの（Ａ－①）と楕円形を呈するもの(Ａ－②)とがある。その平面形による分類を示すと、次のようになる。

Ａ　①円形を呈するもの　：第３・４・８・11・15号土壙
　　②楕円形を呈するもの：第２・７・９・13・14・16・17・22号土壙
Ｂ　方形を基調とするもの：第１・６・12号土壙
Ｃ　不整形のもの　　：第19・21号土壙
Ｄ　平面形が不明のもの　：第５・10・18・20号土壙

規模は、Ａ①は直径が 40～70ｃｍ、Ａ②は第２号土壙を除き、長軸が 57～101ｃｍ･短軸が 42～85ｃｍと幅があり、長軸が 60ｃｍ前後のもの（第２・７・９号土壙）と長軸が 90～100ｃｍ前後のものに分けられる(第13・14・16・17・22号土壙)。

これらのうち、第１・２・６・12号土壙は壁の側面が焼けて赤化しており、第１・２号土壙は掘り下げを行っていないので詳細は不明であるが、第６・12号土壙は底面が焼けていなかった。これらは焼土遺構と考えられるが、遺物が良好な形で遺存していなかったため、時期は不明である。

また、形態の特殊なものとして第22号土壙がある。第22号土壙は第３号住居跡の北西側、第４号溝に囲まれたほぼ中央に位置する。地山を掘り込んで作られている。一部で撹乱を受けているが、平面形は南北に長い楕円形を呈し、大きさは長軸 101ｃｍ･短軸 59ｃｍ、深さは６～10ｃｍある。土壙内には焼土が厚く堆積しており、焼土上面には長軸 33ｃｍ･短軸 26ｃｍの範囲で竪く焼きしまった部分が認められた。また、焼土中には底部を欠いた土師器坏が逆さに置かれており(第36図４)、中には焼土が詰まっていた。この土器は支脚として



層No.	土　色	土 性	備　考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	しまりあり。炭化物を多く含む。
2	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	しまりあり。炭化粒を少量含む。

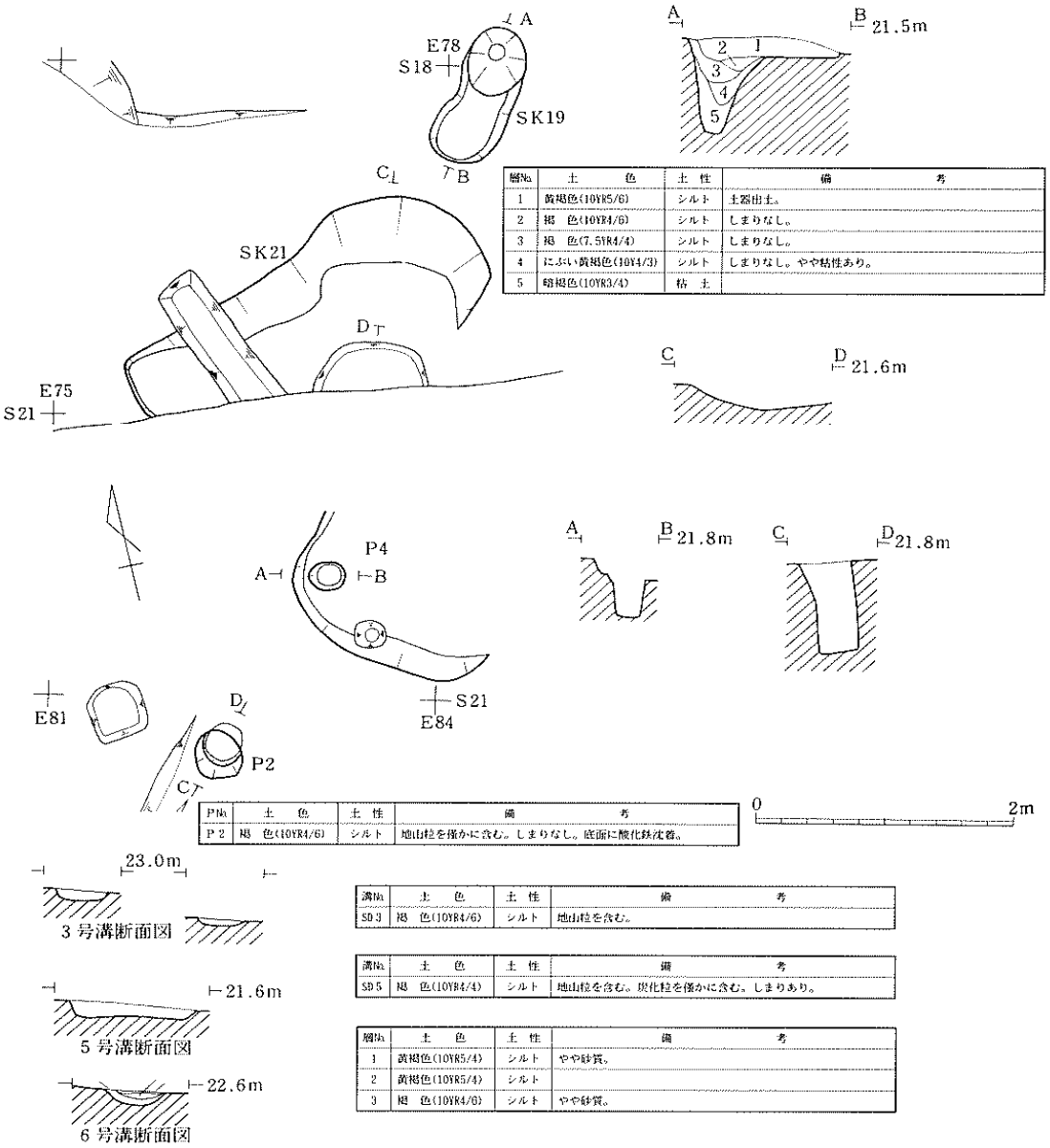
土壙No.	土　色	土 性	備　考
SK11	黄褐色(10YR5/6)	シルト	褐色土を少量含む。炭化粒を僅かに含む。
SK13	褐　色(10YR4/4)	シルト	地山の土を含む。炭化粒を僅かに含む。

層No.	土　色	土 性	備　考
1	褐　色(7/10YR4/4)	シルト	炭化粒・焼土粒を僅かに含む。
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒をに含む。
3	黒　色(10YR2/1)	シルト	褐色土をブロック状に含む。炭化粒・焼土粒を含む。
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	明褐色土をブロック状に含む。炭化粒・焼土粒を僅かに含む。
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を含む。炭化粒・焼土粒を僅かに含む。

土壙・層No.	土　色	土 性	備　考
SK15−1	褐　色(10YR4/4)	シルト	やや砂質。
15−2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	やや砂質。
SK16−1	褐　色(10YR4/6)	シルト	やや砂質。
16−2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	やや砂質。

第31図　土壙・溝・ピット(1)

使われたものと思われる。また、焼土の分布する範囲からすぐ西側のところからは、土師器の甕が良好な状態で出土し、口縁部側を下にして立ったような状況で出土するものがあった（第37図１）ほか、数点の土器がまとまって出土している。これらの土器の中には、第37図１のように、土壙の堆積土上面から出土した破片と接合しているものも存在することから、土壙と土壙西側の土器集中部分との関連が考えられる。これらの状況から、本土壙は住居跡の炉ないしはカマドとそれに伴う土器かと考えられたが、周りから柱穴等の住



層No	土　色	土 性	備　考
1	黄褐色(10YR5/6)	シルト	土器出土。
2	褐　色(10YR4/6)	シルト	しまりなし。
3	褐　色(7.5YR4/4)	シルト	しまりなし。
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	しまりなし。やや粘性あり。
5	暗褐色(10YR3/4)	粘　土	

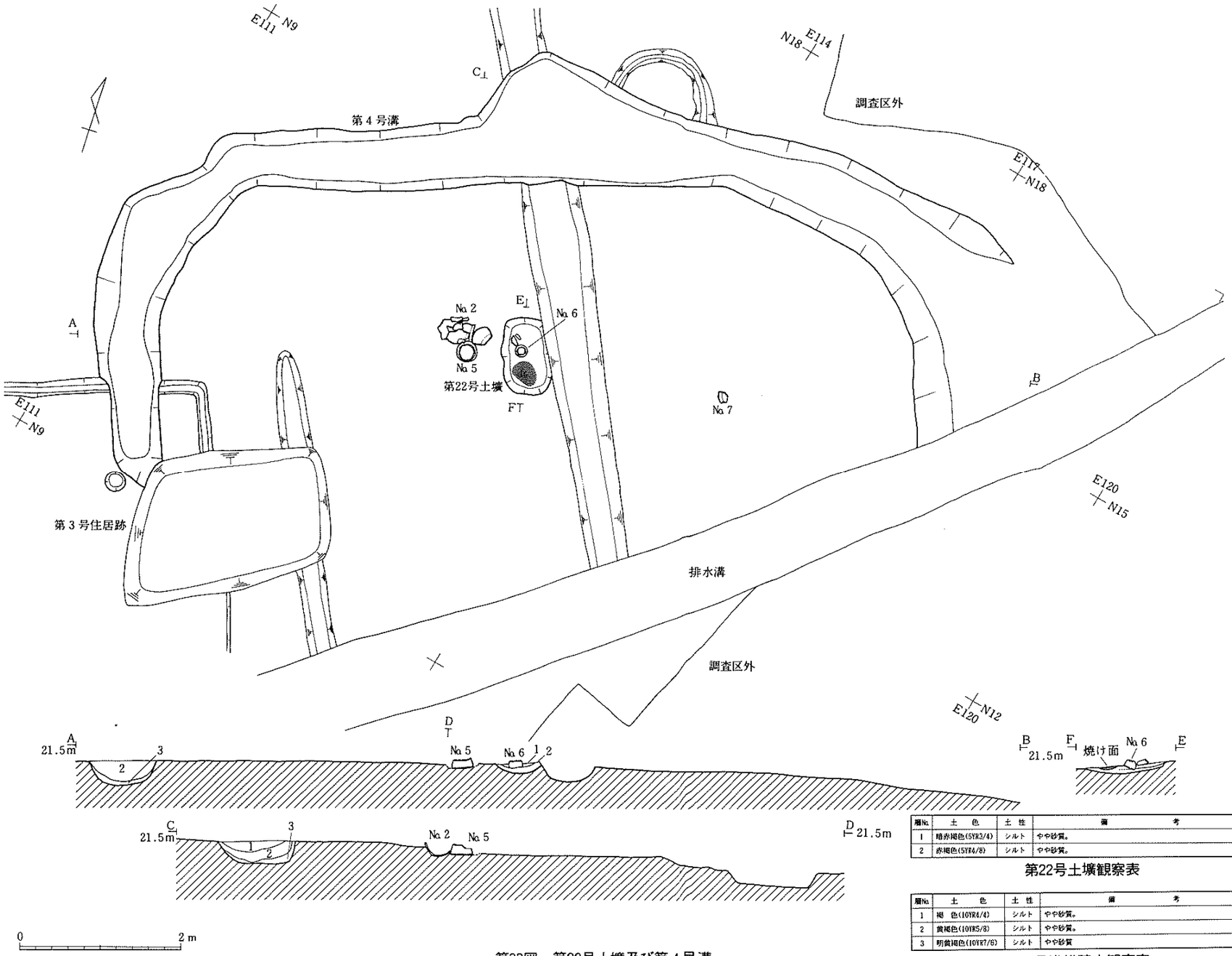
PNo	土　色	土 性	備　考
P 2	褐　色(10YR4/6)	シルト	地山粒を僅かに含む。しまりなし。底面に酸化鉄沈着。

溝No	土　色	土 性	備　考
SD 3	褐　色(10YR4/6)	シルト	地山粒を含む。

溝No	土　色	土 性	備　考
SD 5	褐　色(10YR4/4)	シルト	地山粒を含む。炭化粒を僅かに含む。しまりあり。

層No	土　色	土 性	備　考
1	黄褐色(10YR5/4)	シルト	やや砂質。
2	黄褐色(10YR5/4)	シルト	
3	褐　色(10YR4/6)	シルト	やや砂質。

第32図　土壙・溝・ピット(2)



第33図　第22号土壙及び第4号溝

層No.	土　色	土 性	備　　考
1	暗赤褐色(5YR3/4)	シルト	やや砂質。
2	赤褐色(5YR4/8)	シルト	やや砂質。

第22号土壙観察表

層No.	土　色	土 性	備　　考
1	褐　色(10YR4/4)	シルト	やや砂質。
2	黄褐色(10YR5/8)	シルト	やや砂質。
3	明黄褐色(10YR7/6)	シルト	やや砂質

4号溝堆積土観察表

居跡に伴う施設が発見されなかった。

第４号溝はこの土壙を囲むように巡っている。この溝は東西方向に延びる部分が約44°東へ振れており、第１号住居跡や第３号住居跡とほぼ同じ方向を向いている。第22号土壙の性格は種々の状況から、炉ないしはカマドの下部構造である可能性が考えられ、また、溝との位置関係から、本土壙は住居跡に関連するもので、第４号溝は住居に伴う外周溝であり、住居の他の施設は何らかの原因で失われた可能性も考えられる。

次に遺物であるが、22 基の土壙のうち、遺物が出土しているものは、第４・６・９・10・11・12・13・14・15・16・18・19・20・21・22 号土壙で、土師器の破片を少量出土しているものが多いが、第 10・11・13・14・20・21・22 号土壙からは比較的まとまった資料が出土している。以下、これらの土壙から出土した遺物について説明を行っていく。

[第10号土壙出土遺物]

堆積土中から土師器坏・甕破片が出土している。図示できるものはなかったが、体部が内彎しながら立ち上がり、口縁部が僅かに内傾する坏の口縁部破片が出土している。古墳時代のものと考えられる。

[第11号土壙出土遺物]

堆積土中から土師器破片が少量出土している。いずれも細片であるが、中には丹塗りされているものが含まれていた。古墳時代のものと考えられる。

[第13号土壙出土遺物]

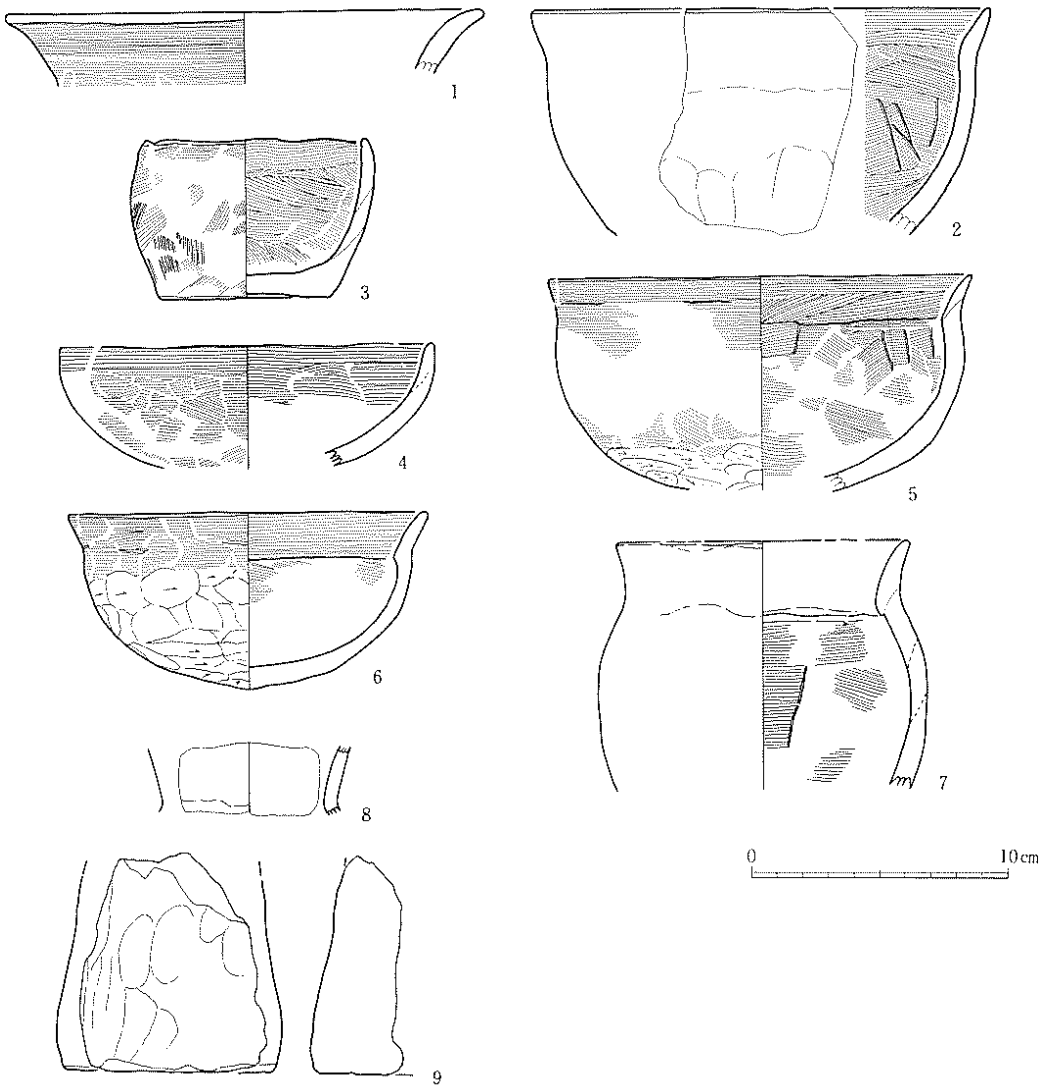
堆積土中から土師器坏・甕ないしは甑の破片が出土している。ほとんどが体部の破片であるが、第34図１に示したものは大型の甕ないしは甑の口頸部で、口縁部は大きく外反している。大半を欠損している。これらの土器は胎土・焼成などから、竪穴住居跡出土資料とほぼ同時期のものと思われる。また、土製支脚破片が１点出土している(第34図９)。

[第14号土壙出土遺物]

堆積土から比較的多くの土師器が出土しており、坏・甕・甑の破片が認められた。坏の破片には丸底のものがあり、甕の破片には円盤状の底部から大きく開いて立ち上がるものがある。また、体部下半を欠損しているが、口頸部が軽く外反する小型の甑と考えられる破片が出土しており(第34図７)、これらの土器の特徴から、時期は竪穴住居跡出土資料とほぼ同時期のものと考えられる。

[第20号土壙出土遺物]

堆積土中から土師器破片が出土している。また、球形を呈する土錘が１点出土している(第35図)。



No.	種　別	層　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　　面	内　　面	底部	分　類	残存率	備　考	登録	写真図版No.
1	土師器甕or甑	堆積土	(18.6)	——	(3.4)	口頸部：ヨコナデ	剥落により不明	——	——	1／4	第13号土壙出土	133	
2	土師器　甑？	堆積土	(17.9)	——	(8.8)	磨滅しており不明	ヨコナデ、ナデ、ヘラナデ	——	Ⅱ　類	1／10	第14号土壙出土	134	
3	土師器　坏	堆積土	8.8	6.6	6.2	口縁部：ナデ、体部：ナデ・ハケメ	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	平　底	Ⅰａ類	3／5	第21号土壙出土	135	17
4	土師器　坏	堆積土	(14.6)	——	(4.7)	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	——	Ⅰｃ類	1／6	第21号土壙出土	136	
5	土師器　坏	堆積土	(16.6)	——	(8.3)	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ・ケズリ	ヨコナデ、ナデ、ヘラナデ	——	Ⅳａⅱ類	1／4	第21号土壙出土	137	17
6	土師器　坏	堆積土	(14.0)		6.9	口頸部：ナデ、体部：不明（ケズリ後ナデ？）	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	丸　底	Ⅳａⅱ類	4／5	第21号土壙出土	138	18
7	土師器　甕	堆積土	(11.5)	——	(9.7)	磨滅しており不明	口頸部：不明、体部：ナデ	——	Ⅱ　類	1／6	第21号土壙出土	139	
8	土師器　壺	堆積土	——	——	(2.8)	磨滅しており不明	磨滅しており不明	——	——	1／6	第21号土壙出土	140	
9	土師器　支脚	堆積土	——	(8.0)	(8.5)	ナデか？	————	平　底	——	1／5	第19号土壙出土	141	

第34図　土壙出土遺物

[第21号土壙出土遺物]（第34図）

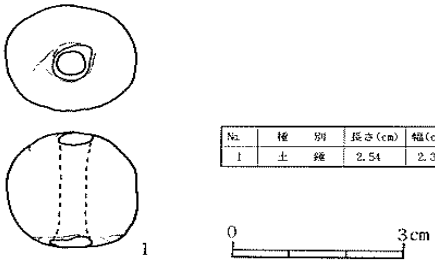
堆積土中から土師器坏・甕破片が比較的多く出土している。図示できたのは坏４点、壷の頸部破片１点である。第34図３は平底の底部から直立気味に立ち上がり、口縁部がやや

内傾するもので、小型の坏である。４は体部が内彎しながら立ち上がり、口縁部が短く直立するもので、底部を欠損している。５・６は胴部に張りを持ち、頸部で屈曲して外反するもので、５は体部の丸みがやや強いもので、６は底部がやや尖るものである。８は口縁部を欠損した頸部破片で、屈曲して緩やかに外反している。

[第22号土壙出土遺物]（第36・37図）

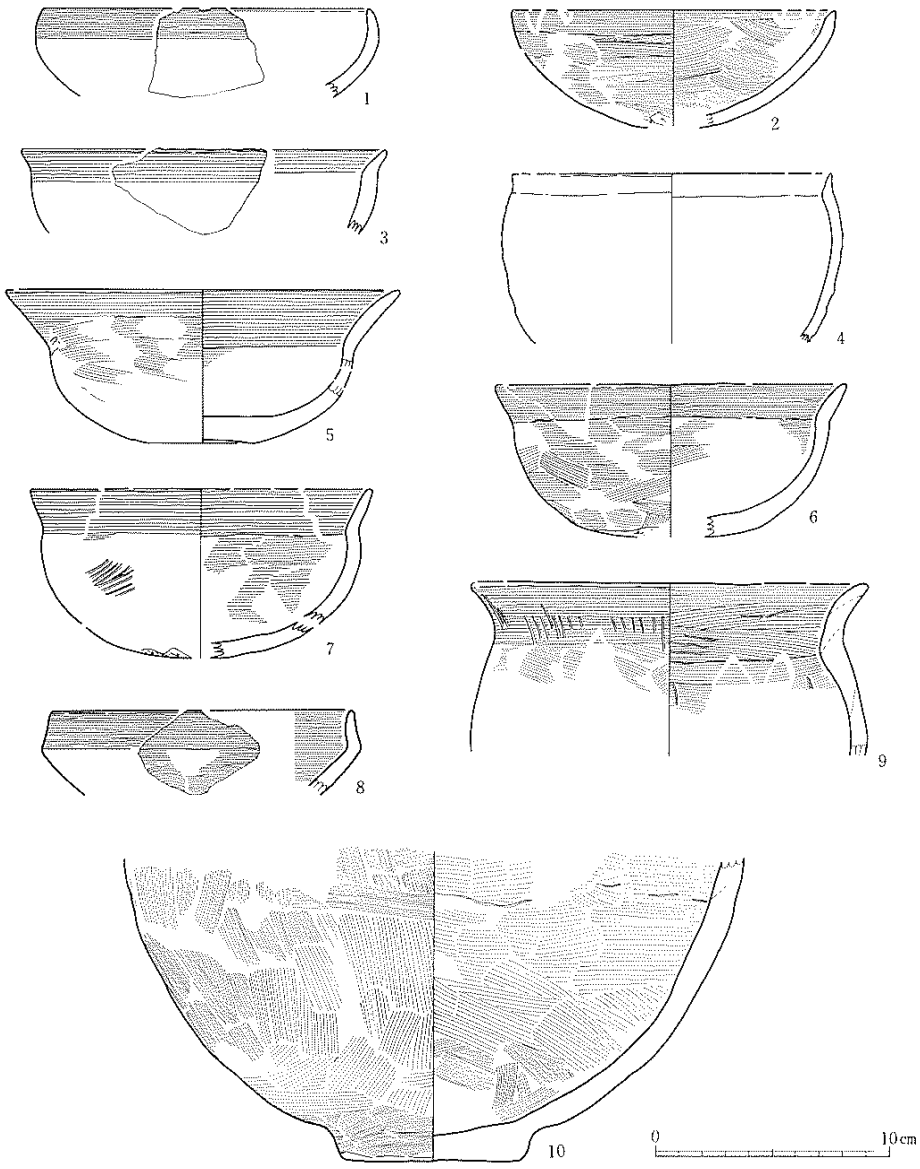
土壙内から出土したものと土壙周辺から出土したものをまとめて図示した。図示できたのは12点である。第36図１・２は体部から口縁部へと緩やかに立ち上がる坏で、１は口縁部が僅かに内傾するもの、２は短く僅かに直立するものである。いずれも底部を欠いている。３～７は頸部が屈曲して外反する坏で、３・４は僅かに胴部が張って短く外反する口縁部を持つもので、内面に稜線を有する。いずれも体部下半を欠損しているが、４はやや深いものと思われる(№６)。５は頸部で屈曲して大きく外反する長い口頸部を有するもので、底部は平底でやや上げ底を呈する(№７)。６・７は胴部が脹らんで、頸部で屈曲して直線気味に外反する短い口頸部を持つもので、両者とも内面に稜線を有する。８は体部と口縁部の境を稜線によって画される坏で、口縁部はやや内傾する。須恵器坏身を模倣したものと思われる。９は小型の甕で、脹らむ胴部から屈曲して緩やかに外反する口頸部を有するもので、口縁部はやや外傾している。10は大型の甕の底部から体部下半にかけてのもので、円盤状に作り出した底部から、大きく開いて緩やかに外反して立ち上がる。第37図２はほぼ完形の大型の甕で、球形の体部から軽く屈曲して僅かに外反する口頸部を持つ。第36図10はこの甕と同形のものと思われる。第37図１は底部から緩やかに立ち上がり、直線気味に外反して口縁部に至るもので、大型の甑と考えられる(№５)。出土状況や形態から、１と２はセットとして使用されていたものと思われる。

これらのうち、第36図２・６・８・10と第37図２は土壙西側の№２とした土器集中部分から出土したもので、第36図４（№６）は土壙内から出土したものである。



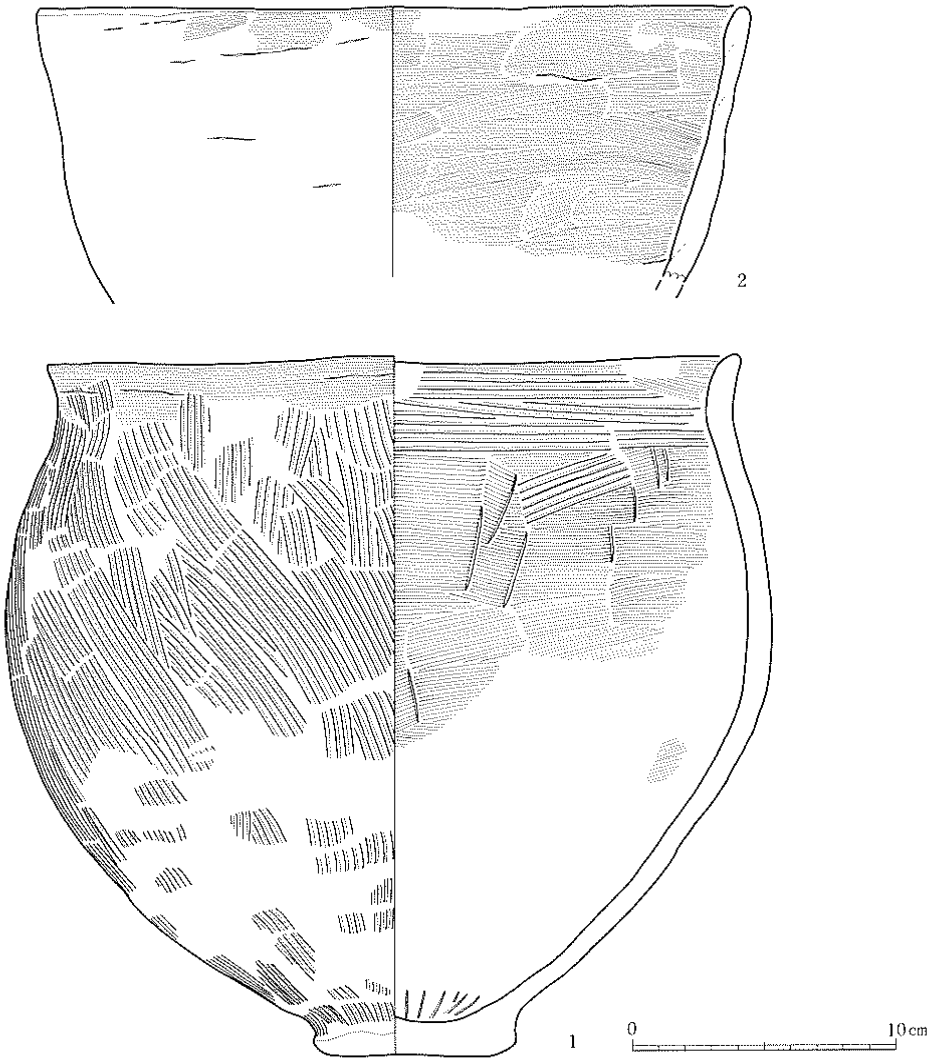
№	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	登録	写真(図版)No.
1	土　錘	2.54	2.30	——	142	

第35図　第20号土壙出土遺物



No.	種別	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	土師器 坏	——	(13.9)	——	(3.8)	口縁部：ヨコナデ、体部：不明	不明	——	Ⅰa類	1／12	破片実測	143	
2	土師器 坏	——	(13.8)	——	(5.0)	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	(丸底)	Ⅰc類	1／4	取り上げNo.1・2	144	
3	土師器 坏	——	(15.6)	——	(3.6)	磨滅しており不明	磨滅しており不明	——	Ⅳa i 類	1／12	破片実測	145	
4	土師器 坏	——	(15.6)	——	(7.2)	磨滅・剝落により不明	磨滅・剝落により不明	——	Ⅳa i 類	2／5	取り上げNo.1・6	146	
5	土師器 坏	——	(16.8)	4.6	6.5	口頸部：ナデ、体部：ナデ	不明	上げ底	Ⅳa ii 類	1／2	取り上げNo.7	147	18
6	土師器 坏	——	(14.6)	——	(7.2)	口頸部：ヨコナデ、体部：一部にハケメ	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	(丸底)	Ⅳa ii 類	1／8	取り上げNo.3	148	
7	土師器 坏	——	(15.0)	——	(6.5)	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ、底部：ケズリ	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	——	Ⅳa iv 類	1／4		149	
8	土師器 坏	——	(13.0)	——	(3.6)	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	——	Ⅴ 類	1／10	破片実測	150	
9	土師器 甕	——	(16.9)	——	(7.4)	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	口頸部：ナデ、体部：ヘラナデ	——	——	1／3		151	
10	土師器 甕	——	——	4.0	(13.5)	体部：粗いナデ、底部：磨滅しており不明	体部：粗いナデ	平底	——	1／4	取り上げNo.2	152	

第36図　第22号土壙出土遺物（1）



No.	種　別	層　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面	内　面	底部	分類	残存率	備　考	登録	写真図版No.
1	土師器　甕	──	26.0	7.7	28.2	口頸部：ヨコナデ、体部：ハケメ、底部：木葉痕	ナデ・ハケメ、ヘラナデ	平　底	Ⅱ　類	4／5	取り上げNo.2	153	17
2	土師器　甑？	──	26.0	──	(11.8)	口縁部：ナデ、体部：磨滅しており不明	口縁部～体部：ナデ	──	Ⅲ　類	1／1	取り上げNo.5	154	17

第37図　第22号土壙出土遺物（2）

（2）　その他の溝（第１～６号溝）

第１号溝

第６号住居跡の西側に位置する幅 80ｃｍほどの溝で、北西方向へ延びるものと思われる。現状保存されることとなったため、掘り下げは行っておらず、詳細は不明である。

第２号溝（第31図）

第６号土壙の南側に位置するほぼ東西に延びる溝で、残存長は 7.2m、幅は 14～38ｃｍある。深さは２～５ｃｍと浅く、断面形は「U」字状を呈する。方向は真北から約 70°東へ振

れている。

[遺物]　堆積土中から土師器破片が僅かに出土しており、胎土･焼成から古墳時代のものと考えられる。

第３号溝（第32図）

第２号住居跡の西壁外縁から約２m離れて「L」字状に巡る溝である。撹乱により部分的に壊されている。削平を受けており、幅は 27～42ｃm、深さは最も残りのよいところで８ｃmと浅く、断面形は逆台形状を呈する。方向は真北から西へ約 54°振れている。位置･形態から、第２号住居跡の外周溝の可能性も考えられる。

第４号溝（第33図）

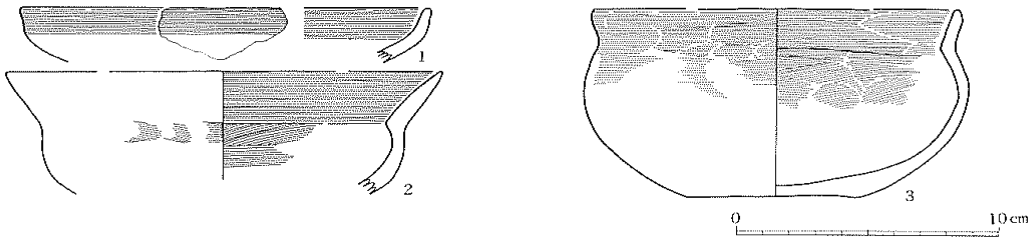
第３号住居跡と重複し、これに切られており、部分的に撹乱を受けている。第 22 号土壙の西側と北側を巡っており、長さは東西方向に約 11.2m、西側は南北方向に約 3.6mあり、幅は 60～171ｃmと一定ではない。東側は東へと緩やかに傾斜する自然地形によって途切れている。方向は東西方向に延びる部分が約 44°東へ振れている。

[遺物]　堆積土中から比較的多くの土師器破片が出土している。これのうち、図示できたのは３点で、第38図１は緩やかに立ち上がった体部から口縁部が短く直線気味に外反する坏の破片で、体部と頸部の境には稜線が認められない。２・３は胴部が張りを持ち、頸部で屈曲して直線気味に外反する口頸部を持つ坏で、両者とも内面に稜線が認められる。２は長い頸部を持ち、大きく外反するものである。３はやや短い頸部が軽く外反するもので、底部は平底でやや上げ底を呈する。

第５号溝（第32図）

第３号住居跡と重複し、これを切っている。削平・撹乱により途切れており、原型を止めていない。弧を描くように北西へ延びる溝で、幅は現状で 74～97ｃm、深さは残りのよいところで７ｃmであった。

[遺物]　堆積土中から土師器破片が出土しているが､時期を特定できる資料は見当らない。



No.	種　別	層　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面	内　面	底部	分　類	残存率	備　考	登録	写真図版No.
1	土師器　坏	堆積土	(15.7)	――	(2.7)	口縁部：ヨコナデ、体部：不明	口縁部：ヨコナデ？	――	Ⅲｃ類	1／10	破片実測	155	
2	土師器　坏	堆積土	(16.6)	――	(6.0)	口頸部：不明（一部にナデ）、体部：不明	口頸部：ナデ、体部：ナデ	――	Ⅳａⅳ類	1／8		156	
3	土師器　坏	堆積土	(13.9)	6.6	9.2	口頸部：ヨコナデ・ナデ、体部：ナデ	口頸部：ヨコナデ、体部：ナデ	平　底	Ⅳａⅲ類	1／2		157	18

第38図　溝出土遺物

胎土・焼成から古墳時代のものと考えられる。

第６号溝（第32図）

第３号住居跡の西側を平行して南北に延びる溝で、幅は31～50ｃｍ、深さは１～８ｃｍであった。方向は真北から西へ47°振れている。

[遺物]　堆積土中から土師器破片が僅かに出土している。胎土･焼成から古墳時代のもと考えられる。

(3)　ピット（Ｐ１～４）

ピット１

第５号住居跡を切っている。平面形は円形で、径は30ｃｍほどある。現状保存されることとなったため、掘り下げを行っていない。

ピット２（第32図）

第１号住居跡の南東側に位置する平面形が楕円形を呈するピットで、長径41ｃｍ･短径36ｃｍ、深さは64～78ｃｍあった。

[遺物]　堆積土中から大型の甑が出土した。第39図１はその甑で、底部から直線気味に立ち上がり、胴部で脹らんで頸部に至る。強く屈曲して外反する口頸部を有し、頸部はやや肥厚する。口縁部外面に沈線状の凹線が２条認められるが、うち１条は部分的に途切れている。底部は無底である。

ピット３

ピット２の北西側で検出した。平面形は径34ｃｍの円形で、柱痕跡が認められ、柱痕跡は径28ｃｍの円形であった。

ピット４（第32図）

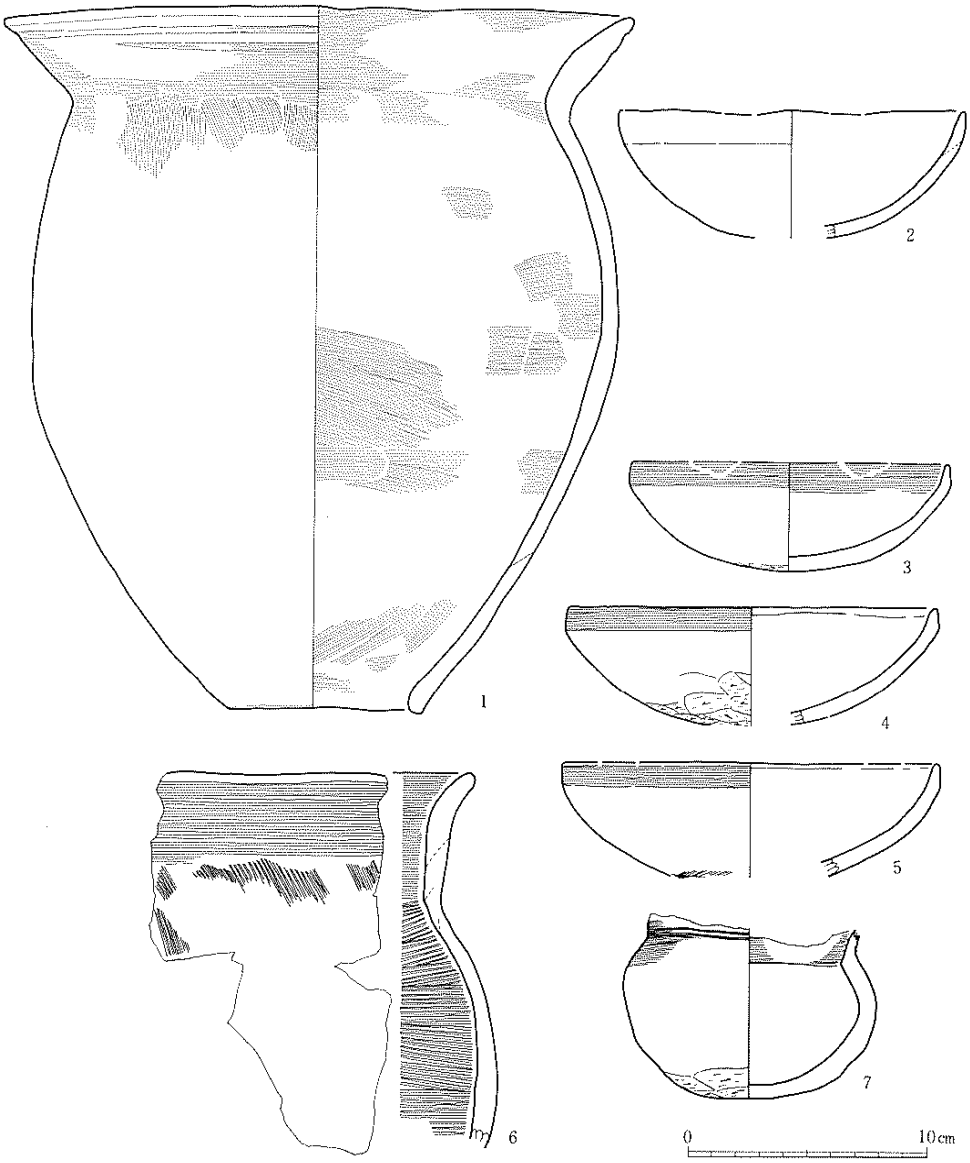
第１号住居跡外周溝の南東端に位置する径24ｃｍの円形のピットである。深さは39～45ｃｍであった。

(4)　その他の遺物

＜土器＞（第39図）

遺構に伴わない土器で図化することができたものを紹介する。

２～５は第４号住居跡南側から出土したもので、いずれも坏である。２は体部から口縁部へと緩やかに立ち上がる坏で、口縁部はほぼ直立する。３～５は底部から内彎しながら緩やかに立ち上がり、口縁部が軽く内傾ないしは直立し、外面に稜線を持つもので、４・５は底部を欠損している。６は出土地不明の大型の甕で、頸部が屈曲してほぼ垂直に立ち



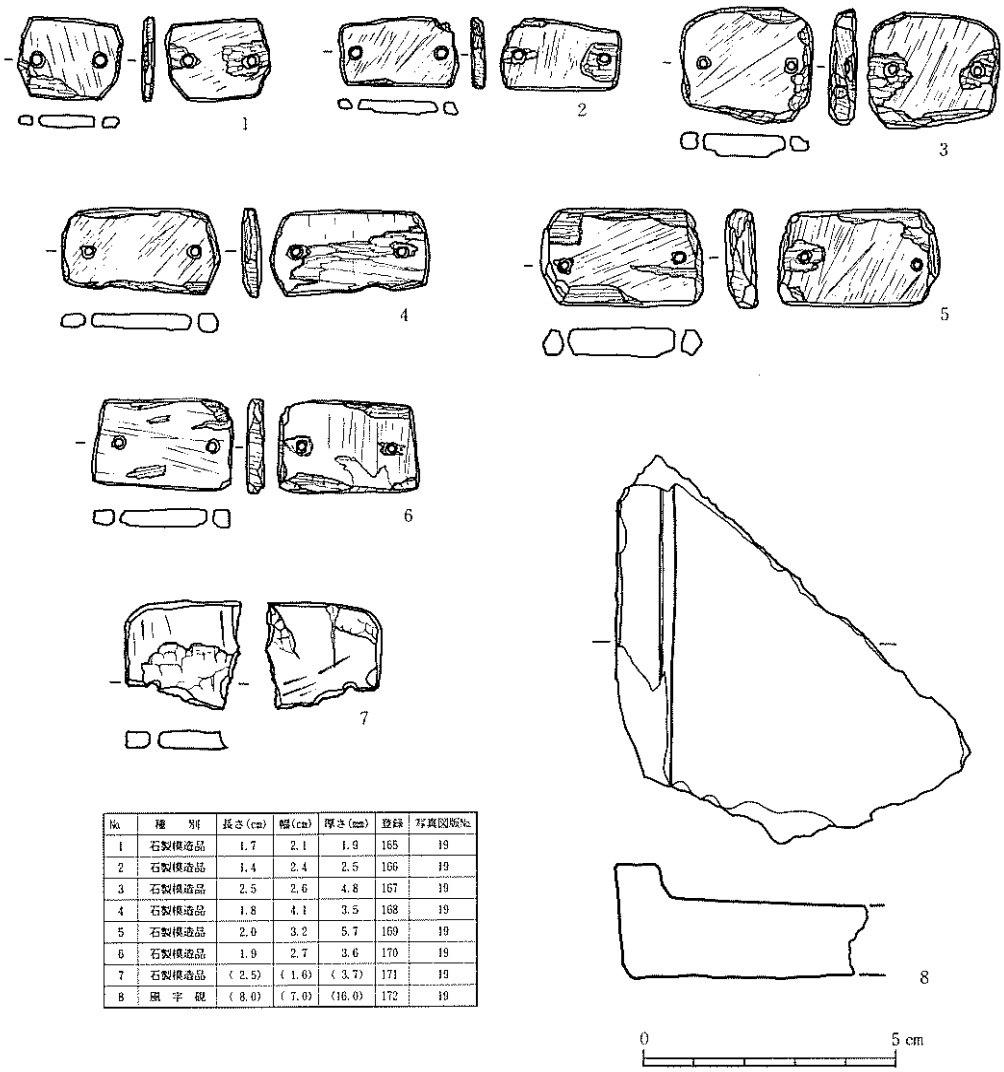
No.	種別	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底部	分類	残存率	備考	登録	写真図版No.
1	土師器 甕	堆積土	26.4	7.8	29.4	口頸部：ナデ、体部：不明（一部ナデ）	口頸部：ナデ、体部：ナデ	無底	Ⅳ類	2／3	P2出土	158	18
2	土師器 坏	表採	(14.5)	——	(5.3)	磨滅しており不明	磨滅しており不明	——	Ⅰc類	1／5	4住付近	159	
3	土師器 坏	表採	(13.3)		4.5	口縁部：ヨコナデ、体部：不明、底部：ケズリ	口縁部：ナデ、体部：不明	丸底	Ⅲa類	1／4	4住付近	160	
4	土師器 坏	表採	(15.3)	——	(5.0)	口縁部：ヨコナデ、体部：不明、底部：ケズリ	不明	(丸底)	Ⅲa類	1／4	4住付近	161	
5	土師器 坏	表採	(15.8)	——	(4.8)	口頸部：ヨコナデ、体部：不明、底部：ナデ	不明	——	Ⅲb類	1／4	4住付近	162	
6	土師器 甕	表採	(30.8)	——	(15.9)	口頸部：ヨコナデ、体部：ハケメ？	ヨコナデ、ハケメ	——	Ⅱ類	1／12	出土地不明	163	
7	土師器 坏	表採	8.8	——	7.8	口頸部：平行沈線？あり、底部：ケズリ	口頸部：ナデ、体部：不明	丸底	Ⅳa亜類	4／5	7住付近	164	18

第39図　ピット・その他出土遺物

上がり、口縁部が軽く外彎する。７は第３号住居跡の東側から出土したもので、球状の体部に短く直立するないしは外反する口縁部を持つ坏で、頚部下端に沈線を２条施されている。

＜石器＞（第40図）

遺構に伴わない石器としては、第１号住居跡に近接する南東部分で石製模造品が５点まとまって出土している（１～５）ほか、その近くから石製模造品が１点出土している（６）。また、同じく第４号住居跡の北西側からも石製模造品の破片が１点出土している（７）。



No.	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	登録	写真図版No.
1	石製模造品	1.7	2.1	1.9	165	19
2	石製模造品	1.4	2.4	2.5	166	19
3	石製模造品	2.5	2.6	4.8	167	19
4	石製模造品	1.8	4.1	3.5	168	19
5	石製模造品	2.0	3.2	5.7	169	19
6	石製模造品	1.9	2.7	3.6	170	19
7	石製模造品	(2.5)	(1.6)	(3.7)	171	19
8	黒 宇 硯	(8.0)	(7.0)	(16.0)	172	19

第40図　その他の出土遺物

１～６はいずれも結晶片岩製の２孔の有孔円盤で、同一の石材で作られている。形態はすべて方形または長方形を呈する。７も結晶片岩であるが、１～６とはやや石材を異にしている。形態は破損しているもの方形ないしは長方形を呈するものと考えられる。

＜その他＞（第40図）

その他の遺物としては、調査区南西部分から出土した風字硯の破片（８）がある。やや焼きがあまいものの窖窯焼成のものと考えられ、底部にはナデ調整が施されている。平安時代以降のものと考えられる。

土壙番号	平面形	大きさ(cm)	深さ(cm)	底面の状況	壁の状況	出土遺物	備考
1	(方形)	——	——	——	——	——	未調査
2	楕円形	170×130	——	——	——	——	未調査
3	円形	40×49	——	——	——	——	未調査
4	円形	70×79	——	——	——	土師器	未調査
5	(円形)	(50×55)	——	——	——	——	未調査
6	方形	82×77	31～37	平坦	急角度	——	焼土遺構
7	楕円形	57×42	14～16	丸底	緩やか	——	
8	円形	55×51	11～21	丸底	緩やか	——	
9	長方形	99×81	17～25	やや凹凸	緩やか	土師器	
10	不整	——	(8～13)	平坦	緩やか	土師器	
11	円形	65×70	7～11	平坦	緩やか	土師器	

土壙番号	平面形	大きさ(cm)	深さ(cm)	底面の状況	壁の状況	出土遺物	備考
12	方形	103×96	18～27	平坦	緩やか	土師器	焼土遺構
13	楕円形	99×85	17～24	平坦	急角度	土師器	
14	楕円形	62×55	3～10	平坦	緩やか	土師器	
15	円形	57×57	9～17	丸底	急角度	土師器	
16	楕円形	88×56	7～18	丸底	緩やか	土師器	
17	楕円形	84×72	12～19	平坦	緩やか	——	
18	不整	——	——	平坦	急角度	土師器	重複有り
19	不整形	118×44	17～83	平坦	急角度	土師器	段掘り
20	不整	——	7～12	凹凸あり	急角度	土師器	上層出土
21	不整形	234×196	8～11	平坦	緩やか	土師器	
22	楕円形	101～69	5～10	やや丸底	緩やか	土師器	焼け部有

土壙一覧表

（岩見和泰）

Ⅲ　考　察

１．遺物の検討

(1)　土師器について

土師器には坏・壷・高坏・甕・甑の５種類の器種がある。ここでは、それらの各器種について、主に形態的特徴から検討を行っていく。

＜土器の分類と特徴＞

坏

図示できたものは全部で84点ある。底部の形態から平底、丸底風の平底、丸底の３つに分けられる。体部はいずれも底部から内彎しながら外傾するものであるが、体部から口縁部にかけての器形から６類に大別し、細かな特徴から16類に細別した。各類の特徴は以下のようなものである。

Ⅰ類：体部から大きな変化がなく口縁部に至るもの。口縁部の特徴から、口縁部が内彎気味に立ち上がるもの（Ⅰａ類）、口縁部が直線気味に外反するもの（Ⅰｂ類）、口縁部がほぼ垂直に立ち上がるもの（Ⅰｃ類）の３つに細分される。

Ⅱ類：内彎気味に外傾し口縁部が僅かに外反するもの。

Ⅲ類：口縁部が僅かに屈曲して短く立ち上がり、外面に弱い稜線を持つもの。口縁部の特徴から、口縁部が内傾するもの（Ⅲａ類）とほぼ直立するもの（Ⅲｂ類）に分けられる。前者には口縁部が僅かに外反しながら内傾するもので（第７図９）と直線的に内傾するものがあるが、後者が主体を占める。

Ⅳ類：頚部で括れて外傾する口頚部を持つもの。本類型は多様な様相を示すが、器形や稜線の有無から３つに分けて捉えた。ａ類は内面にのみ稜線を持つもので、体部と口頚部の形状から４つに細分した。体部上位の張りが弱く短い口頚部を持つもの(Ⅳａｉ類)、体部上位の張りが弱くやや長い口頚部を持つもの(Ⅳａii類)、体部上位が強く脹らみ、やや短い口頚部を持つもの(Ⅳａiii類)、体部上位が強く脹らみ、頚部で強く括れて直線気味に外傾するやや長い口頚部を持つもの（Ⅳａiv類）がある。ｂ類は内・外面に稜線ないしは弱い稜線を持つもので、口頚部が短く括れて外反するものや頚部で軽く括れて直線気味に外反する坏で、内面に稜線ないしは弱い稜線を持つものもある。ｃ類は内・外面に明瞭な稜線を持たないもので、外反の度合が大きいものである。

Ⅴ類：体部と口縁部の境が稜線と段によって明確に画されるもので、やや短い口縁部が直

立するものとやや内傾するものとがある。第９図３や第36図８は明瞭な段や稜線を持たないが、これらに類似するものとして扱った。前者は体部と口縁部の境が調整により明確に捉えられるもので、口縁部が直立気味に立ち上がる。後者は体部と口縁部の境を稜線によって画され、やや長めの口縁部が内傾するもので、稜線が認められる部分は外に突出するような形態を呈する。

Ⅵ類：体部と口頸部の境を稜線ないしは軽い稜線によって画されるもので、頸部が長く直立気味に立ち上がり、口縁端部で僅かに外反するものである。

壷

図示できたのは７点で、ほとんどが口頸部のみの破片である。口頸部の形態から、内彎気味に外傾するもの(Ⅰ類)と緩やかに外反するもの(Ⅱ類)、直線気味に外傾するもの(Ⅲ類)に分類できる。Ⅰ類には頸部に凹線が施されているものもある(第９図７)。また、Ⅲ類の唯一の例である第19図２は口唇部を面取りし、頸部に浅い沈線を施したもので、須恵器𤮈を模倣したものの破片である可能性がある。Ⅱ類とした第９図９は推定復元されたもので、体部上半が強く張り出して体部から頸部にかけて平らな面を持つもので、強く屈曲して緩やかに外反する口頸部を持つ。底部は丸底を呈するものと思われる。

高坏

今回の調査で出土したのは１点のみである。中空の脚部破片で、やや裾脹らみの円柱状を呈し、坏部との繋ぎ部が肥厚している特徴を持つ。

甕

図示できたのは32点である。器形の全容をつかめるのものは少なく、多くは口頸部の破片である。甕には大きく分けて大型のもの（Ⅰ類）と小型のもの（Ⅱ類）とがあるが、口頸部の破片のみで大型の甕か小型の甕か断定できないものがある。

大型の甕はいずれも頸部で強く屈曲して口頸部が外反するもので、体部の形態からやや縦長の球状を呈するもの（ａ類）と胴部がやや長い円筒形のもの（ｂ類）とがある。

底部は平底のものとやや上げ底のものがある。口頸部の特徴から、外反するもの、直線気味に外傾するもの、頸部が直立気味に立ち上がった後、口縁部が外反するものの３種類が認められた。

体部の形状が捉えられるものから特徴をみてみると、小型の甕はいずれもやや長胴を呈し、口頸部が強く屈曲して外傾するものである。最大径は体部にあるが、体部上位にあるもの（第５図10、第９図14）や体部中位にあるもの(第５図11、第17図１)、体部下位にあるもの（第10図２）がある。

甑

図示したのは11点である。これらのうち、口頸部の形態から甑としたもの２点(第10図７、第22図10)、口縁部から体部上半の形態により甑と推定したものが４点（第11図２・３、第34図２、第37図２）ある。器形から４つに大別した。

Ⅰ類：底部から直線気味に外傾する鉢形を呈する小型の無底の甑で、調整は粗く、外面にナデを施しているが輪積痕を残すものである(第10図７・８)。

Ⅱ類：底部から丸味を持って立ち上がり、口縁部が外反することなく、体部から直線気味に口縁部に至るもので、胴部の張りが弱い有底・単孔の小型の甑（第11図１）と大型の無底の鉢形を呈するもの（第37図２）とがある。

Ⅲ類：頸部でくびれて緩やかに外反する口頸部を持つもので、体部上半がやや脹らむものである。いずれも口縁部から体部上半の資料から推定したもので、底部の形態が分かるものはない。

Ⅳ類：長胴を呈する大型の無底の甑である。頸部の屈曲が強く内面に稜線ができるもの（第39図１）と屈曲が弱く内面に稜線ができないもの（第12図１・２）とがある。前者は後者

分　類	分類内容	図版番号
坏Ⅰ類	体部から大きな変化がなく口縁部に至るもの［22点］	
a類	口縁部が内彎するもの（９点）	第５図１、第７図１・２、第16図１・２、第21図１、第24図２、第34図３、第36図１
b類	口縁部が直線気味に外傾するもの（３点）	第５図２、第７図３・４
c類	口縁部がほぼ直立するもの（10点）	第５図３・４、第７図５、第16図３、第19図１、第21図２～４、第34図４、第39図２
Ⅱ類	内彎気味に外傾し口縁部が僅かに外反するもの［２点］	第７図６・７
Ⅲ類：	口縁部が屈曲して短く立ち上がり、外面に弱い稜線を持つもの［11点］	
a類	口縁部が内傾するもの（６点）	第７図８・９、第21図５・６、第39図３・４
b類	口縁部がほぼ直立するもの（５点）	第21図７・８、第36図２、第38図１、第39図５
Ⅳ類：	頸部で括れて外傾する口頸部を持つもの［36点］	
a類	内面にのみ稜線を持つもの（27点）	
ⅰ類	体部の張りが弱く、短い口頸部を持つもの（３点）	第21図11、第36図３・４
ⅱ類	体部の張りが弱く、やや長い口頸部を持つもの（11点）	第７図10～12、第８図１・２、第21図９、第22図２、第34図５・６、第36図５・６
ⅲ類	体部が強く脹らんで、やや短い口頸部を持つもの（６点）	第５図５・６、第16図４・５、第38図３、第39図７
ⅳ類	体部が強く脹らんで、長い口頸部を持つもの（９点）	第８図３～５、第21図10・12・13、第22図１、第36図７、第38図２
b類	内・外面に稜線を持つもの（７点）	第５図７、第８図６～10、第24図３
c類	内・外面に稜線を持たないもの（２点）	第８図11、第22図２
Ⅴ類	体部と口縁部の境を稜線と段によって画されるもの［７点］	第５図８、第８図12、第９図１～３、第24図４、第36図８
Ⅵ類	口頸部が稜線によって画され、ほぼ直立する長い口頸部を持つもの［４点］	第５図９、第９図４・５、第16図６
壷Ⅰ類	内彎気味に外傾するもの［３点］	第９図７・８、第22図３
Ⅱ類	緩やかに外反するもの［１点］	第９図９
Ⅲ類	直線気味に外傾するもの［２点］	第19図２・３
高　坏	やや裾脹らみの円柱状を呈するもの［１点］	第９図10
甕Ⅰ類	大型のもの［７点］	
a類	やや縦長を呈するもの（４点）	第16図７・８、第17図３、第37図１
b類	やや長い円筒形を呈するもの（３点）	第10図５・６、第19図４
Ⅱ類	小型のもの［11点］	第５図10・11、第６図１、第９図13・14、第10図１・２、第17図１、第22図４、第34図７、第37図７
甑Ⅰ類	底部から直線気味に外傾する鉢形のもの［２点］	第10図７・８
Ⅱ類	頸部で括れて僅かに外反する口頸部を持つもの［３点］	第11図２・３、第34図２
Ⅲ類	体部から直線気味に口縁部に至るもの［２点］	第11図１、第37図２
Ⅳ類	長胴を呈する大型のもの［３点］	第12図１・２、第39図１、第22図10

第１表　土師器分類一覧

に比べて体部の張りが強い。

＜土器の共伴関係＞

土器の共伴関係であるが、まず遺構毎に遺物の出土状況の検討を行った後、各土器の共伴関係を検討する。その際、ある程度のまとまりを持って出土している遺構に限って検討を行うこととしたい。

第１号住居跡に関しては、床面出土資料と堆積土出土資料、外周溝東側出土資料と外周溝西側出土資料とに分けて検討する。

床面からは図示できたもので８点の土器が出土しており、第１号住居跡の床面からは坏Ⅰｂ・ｃ類、Ⅵａⅲ・ｂ類と甕Ⅰ・Ⅱ類が出土し、堆積土からは坏Ⅰａ・Ⅰｃ・Ⅴ・Ⅵ類と甕Ⅰ・Ⅱ類が出土している。外周溝東側からは坏Ⅰａ・Ⅰｂ・Ⅳａⅱ・Ⅴ類と壷Ⅰ類と甕Ⅰ・Ⅱ類が出土し、外周溝西側からは坏Ⅰａ・Ⅰｂ・Ⅰｃ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳａⅱ・Ⅳａⅳ・Ⅳｂ・Ⅳｃ・Ⅴ・Ⅵ類と高坏、甕Ⅰｂ・Ⅱ類、甑Ⅰ～Ⅳ類が出土している。堆積土からは同様に９点の土器が出土している。堆積土から出土した土器の多くは住居の南西側の第１層と第２層から出土している。第１層は床面の上に僅かに残っていた堆積土で、第１層出土の土器は床面に近く、第２層も同様であることから床面出土の資料と近い関係にあると考えられる。また、外周溝西側から出土した土器の多くは底面から発見された。外周溝西側から出土した土器は、こうした出土状況からある程度の一括性を持っていると考えられる。この沢地は第１号住居跡の外周溝の一部として利用されていたと推定しており、外周溝として機能していた時のものと捉えることが可能であろう。こうした考え方に立てば、外周溝西側から出土した土器は第１号住居跡と時間的に大きな差はなく、密接な関係にあると考えられる。同じく外周溝の東側から出土した土器はほとんどが堆積土中から見つかったものであるが、上記したように外周溝西側と東側の遺物は土師器坏を見る限りほぼ同じ組成であることから、両者はほぼ同一時期のものと考えて差し支えないであろう。住居と外周溝から出土した土器も土師器坏を見る限りほぼ同じ組成であり、同一時期のものと考えて良いであろう。

第２号住居跡からは11点の土器が出土しており、これらのうち床面から７点、カマド内から１点、貯蔵穴状ピットから３点出土している。いずれも明らかに本住居跡に伴うもので、同時性の高いものである。共伴している土器は坏Ⅰａ・Ⅰｃ・Ⅳａⅲ・Ⅵ類、甕Ⅰａ類・Ⅱ類である。

第３号住居跡からは４点の土器が出土している。床面から出土しているのは甕Ⅰｂ類の１点のみで、他の３点は坏Ⅰｃ類と壷Ⅲ類で、堆積土から出土している。

第４号住居跡からは図示できたもので24点の土器が出土している。床面から出土したの

は６点で、坏Ⅰａ・Ⅲｂ・Ⅳａiv類と甕Ⅰ・Ⅱ類である。貯蔵穴状ピットからは坏Ⅰａ類と甕Ⅱ類がそれぞれ１点ずつ出土している。堆積土からは図示できたもので14点の土器が出土しており、坏Ⅰｃ・Ⅲａ・Ⅳａｉ・Ⅳａii・Ⅳａiv・Ⅳｃ類、壷Ⅰ類、甕Ⅰ類、甑Ⅳ類が出土している。床面出土の土器と堆積土出土の土器に大きな差が認められないことから、これらの土器はほぼ同時期のものと考えたい。

住居跡以外の遺構で、比較的まとまって遺物が出土しているものとしては、第21・22号土壙と第４号溝があり、第22号土壙を除き、いずれも堆積土から出土している。

第21号土壙からは図示できたもので６点の土器が出土しており、坏Ⅰａ・Ⅰｃ・Ⅳａii類、壷、甕Ⅱ類が出土している。第22号土壙とその周辺からは図示できたもので11点の土器が出土しており、坏Ⅰａ・Ⅲｂ・Ⅳａｉ・Ⅳａii・Ⅳａiv・Ⅴ類と甕Ⅰａ・Ⅱ類、甑Ⅲ類が出土している。また、第４号溝からは坏Ⅲｂ・Ⅳａiii・Ⅳａiv類が各１点ずつ出土している。

次に、各遺構毎の関係を見て行きたい。器種組成と分類した土器の共伴関係を表にまとめたのが第２表である。壷・高坏・甕・甑は全体の器形を把握できるものが僅かであることから、資料が豊富で全体の器形を把握できる坏に着目し、検討していくこととする。

坏はⅠ類からⅥ類に大別し、さらに細かな特徴から16類に細分した。第２表によると、坏Ⅰａ・Ⅰｃ類を見る限り、第１号住居跡・第２号住居跡・第４号住居跡から出土しており、これらの住居跡の共通性が指摘できる。しかし、坏Ⅳａiii類・Ⅵ類は第１号住居跡と第２号住居跡から、坏Ⅳａiv類・Ⅳｃ類は第１号住居跡と第４号住居跡から、坏Ⅴ類は第１号住居跡から出土しており、住居跡ごとに見ればその組成に少なからず違いが認められる。この違いに関しては、器種の欠落によって生じた可能性と、限定された中でもさらに細かな時期差によって生じた可能性が考えられる。

そこで次の項では、他の遺跡の出土例との比較によって、これらの土器の違いが意味す

遺構名［出土層位など］	坏														壷			高坏	甕		甑				
	Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅱ	Ⅲa	Ⅲb	Ⅳａｉ	Ⅳａii	Ⅳａⅲ	Ⅳａiv	Ⅳb	Ⅳc	Ⅴ	Ⅵ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ		Ⅰａ	Ⅰb	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
第１号住居跡 ［床面］	1	1	1						2		1		1	1	1	1			2	1	2					
［堆積土］	1		1					2					1	1	1				1		2					
［外周溝東側］	1	1		2	2			3		3	5	1	3	2				1			2	2	2	2	1	2
［外周溝西端］	1	1																								
第２号住居跡［床面・貯蔵穴］	2		1						2					1					3			1				
第３号住居跡［床面］																	2				1					
［堆積土］			1																							
第４号住居跡［床面・貯蔵穴］	1					2				2										1		1				
［堆積土］			3		2		1	2		2		1			1					4						1
第６号住居跡［堆積土］																			1							
第７号住居跡［堆積土］	1										1		1													
第21号土壙 ［堆積土］	1		1					2								1						1				
第22号土壙 ［堆積土］	1					1	2	2		1			1						1			1			1	
第４号溝 ［堆積土］						1			1	1																
合　計	9	3	9	2	4	4	3	11	5	9	7	2	7	4	3	1	2	1	4		3	11	2	2	2	3

第２表　土器分類表

るところを検討していくこととする。

＜土器の編年的位置＞

①県内における該期土器の様相

合戦原遺跡から出土した土師器は坏・壷・高坏・甕・甑からなり、その器形的特徴から東北地方中部における土師器の編年で南小泉式の特徴を有するものが多く認められる(氏家：1957、白鳥･加藤他：1974、丹羽：1983、加藤：1990)。しかし、従来の南小泉式には見られない、より新しい特徴を持つ土器が含まれており、合戦原遺跡はその出土遺物から南小泉式から後続型式に跨がる時期の遺跡である可能性が高い。したがって、これまで発見されている南小泉式土器とこれらに後続すると考えられる資料とを比較・検討し、合戦原遺跡の土器群の位置付けを考えてみたい。

合戦原遺跡の土器分類に基づいて、他の遺跡の土器を検討したのが第３表である。その結果、これまで発見されている南小泉式土器とこれらに後続する土器群は、坏の各類型の出現と消長、さらに器種の消長から、坏Ⅱ・Ⅳａⅱ・Ⅳａⅳ・Ⅳｂ・Ⅳｃ・Ⅴ・Ⅵ類や甑が認められない土器群、坏Ⅴ・Ⅵ類が認められず、壷・高坏が減少し、新たに甑が伴う土器群、坏Ⅴ・Ⅵ類が量的に安定して認められ、坏Ⅳａｉ・Ⅳａⅲ・Ⅳａⅳ・Ⅳｂ・Ⅳｃ類や壷･高坏が基本的に認められなくなる土器群の大きく３群に分けて捉えることができた。これらの土器群はそれぞれ遺跡の報告で年代が与えられており、それらの年代観を考慮すると、これらの土器群はそれぞれ年代を異にするまとまりを示していると見られる。

遺跡名〔遺構番号など〕	坏															壷				高坏	甕			甑	須恵器編年(推定)	年代(推定)
	Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅱ	Ⅲa	Ⅲb	Ⅳai	Ⅳaii	Ⅳaiii	Ⅳaiv	Ⅳb	Ⅳc	Ⅴ	Ⅵ	その他	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	その他		Ⅰa	Ⅰb	Ⅱ			
山王遺跡 〔3号遺構〕	1	2			2	1	2											1	2	8	5		1		(TK73?)	
宮前遺跡 〔第42号住：床面他〕	1				2															1	1					
新堀崎遺跡〔土壙内出土〕	2	3	2	7	9	8	3		11		3		1			8		3	5	9	4	3	5			
岩切鴻ノ巣遺跡〔第1号住：床面他〕		1	1			1			2	1	1					2			1	2		1		1		
宮前遺跡 〔第45号住：床面他〕	1						1			1									1		2			1	(TK216)	
宮前遺跡 〔第25号住：床面他〕 〃 ：堆積土〕	1	1	1					1	1							1 1	1 1			1	3		1			
東館遺跡 〔竪穴住居跡：床面他〕			1		1			2													2			(1)		
台ノ山遺跡 〔第1号住：床面他〕 〃 ：堆積土〕				1			1 2			1	1					1		2		1	1	1			TK208	
高沢窯跡 〔窯跡2次床面〕	1						1		2				1		1				1				1	(1)		
諏訪館前遺跡〔第3号住：床面他〕	1		1				1	6		1											2					
合戦原遺跡 〔第4号住：床面他〕 〃 ：堆積土〕	1		3		2	2	1			2 2		1				1					1 4		1	1	(TK23)	(5C 第4四半期)
諏訪館前遺跡 〔第1号住：床面他〕 〔第2号住：床面他〕 〃 ：堆積土〕	1 1	1			2	1		3 2	1		2	1			1 1						2	1				
合戦原遺跡 〔第1号住：床面〕 〃 ：堆積土〕 〃 ：外周溝東側〕 〃 ：外周溝西側〕 〔第2号住：床面他〕	1 1 1 1 2	1 1 1 1	1 1 1 1	2	2			2 3	2 2	3	1 5	1	1 1 3	1 2 1		1 1	1			1	2 3	2	1 2 2 2 1	7	TK47	5C末
南小泉遺跡〔第1号住居跡：床面他〕								1					1	1						1	4		2			
名生館遺跡〔SK 430出土〕			1			2		1					2										1			
山前遺跡 〔第23号住：堆積土他〕	2	1											6		1						2	1	2		MT15	6C 前葉

第３表　他遺跡との比較

以下、各土器毎にその特徴を述べ、各器種の変化の有様を概観していきたい。

[第１群土器]

第１群土器として共通した内容を持つ土器群としては、多賀城市山王遺跡第３号遺構出土土器(高倉：1981)、同　山王遺跡ＳＸ　230 土壙出土土器を上げることができる。器種構成は、前者が坏Ｉａ・Ｉｂ・Ⅲａ・Ⅲb・Ⅳａｉ・Ⅳａiii類と壷、高坏、甕で、後者は坏Ⅲａ・Ⅳａｉ・Ⅳａiii類と壷、高坏、甕である。

坏Ｉ類は南小泉式において普遍的に存在するもので、平底のものと丸底のものがある。坏Ｉ類の変化は顕著でなく、明確には捉えられないが、大きな流れとして丸底ものが多くなる傾向が認められる。Ⅲ類もＩ類同様に普遍的に見られるもので、平底と丸底がある。平底のものは体部が直線気味に外傾する特徴を持つ。Ⅳ類はⅣａｉ・iii類とした屈曲して外反する短い口縁部を持ち、内面に稜線ないしは軽い稜線を有する坏を主体とし、坏の底部は小さな平底か上げ底を呈する。現在のところ塩釜式には坏Ｉ・Ⅲ類は認められず、坏Ⅳ類は塩釜式で見られた坩状の坏から変化したものと考えられ、口縁部の長さが短くなり、器高も低くなる[1)]。

壷は口頸部が強く内彎しながら立ち上がるものや頸部で屈曲して外面に稜線を有するものもあるが、直線気味に外傾する口頸部を持つものが多い。体部はやや器高が高く丸味の強いものが多い。塩釜式の壷は球形の体部に直線気味に外傾する口頸部を持つが、本群土器ではその特徴を残しているものが多いようである。

高坏は坏部が平底のものと丸底のものとがある。脚部は下位で屈曲して外に開くものが大半を占める。これらには脚部上位が中空で円錐形を呈するのものと中空で円筒状を呈するものがある。また、少数ではあるが、脚部下位が屈曲せずに緩やかに開くものがあり、これは塩釜式の特徴を残すものと考えられる。調整はミガキ・ナデが基本であるが、僅かにハケメを残すものもある。

甕は大型のものがほとんどで、小型のものも僅かに認められる。大型の甕は胴部が球形のものや胴部が強く脹らむものがあり、塩釜式の甕と近い様相を示す。また、体部中央が強く張り出して最大径を持つやや長胴のものもある。これらの中には部分的にハケメ調整を残すものが認められる。小型の甕は口径と体径がほぼ同じで、やや長胴を呈する。

これらに近い土器としては、亘理町宮前遺跡第42号住居跡出土土器（丹羽：1983）を上げることができる。宮前遺跡例は高坏に本群との共通性が認められるものの、器種の欠落が多く、本土器群に含めずにその可能性を指摘するに止めておく。

[第２群土器]

第２群土器として共通した内容を持つ土器群には、仙台市南小泉遺跡第１号住居跡出土

土器(兼田他：1987)、同　藤田新田遺跡第１号住居跡出土土器(真山：1991)、村田町新峯崎遺跡出土土器(阿部他：1991)[2)]、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡第１号住居跡出土土器(白鳥・加藤他：1978)、亘理町宮前遺跡第 25・45 号住居跡出土土器(丹羽：1983)、高清水町東館遺跡竪穴住居跡出土土器(加藤：1980)、大河原町台ノ山遺跡第５号住居跡出土土器(阿部・千葉：1980)、仙台市富沢窯跡（渡辺他：1974）などを上げることができる[3)]。器種構成は、坏Ⅰａ・Ⅰｂ・Ⅰｃ・Ⅱ・Ⅲａ・Ⅲｂ・Ⅳａｉ～Ⅳａⅳ・Ⅳｂ（・Ⅳｃ・Ⅳ）類と壷、高坏、甕、甑がある。

坏Ⅰ類には大きな変化が認められない。また、新たに坏Ⅱ類が認められるようになるが坏の中で主体を占めるものではなく、出土している遺跡も少ない。坏Ⅲ類は丸底を呈し、体部も内彎しながら外に開く丸味を持ったものが多くなる。Ⅳ類は多様な様相を示すようになる。前段階には短い口縁部が外反し、内面に稜線ないしは軽い稜線を有するもの(Ⅳａｉ・ⅲ類)がほとんどであったが、より新しい段階になると口頸部の屈曲の度合が強くなり、口頸部も長さを増す(Ⅳａⅱ・ⅳ類)。また、内面にのみ見られた稜線が外面にも認められるようになり(Ⅳｂ類)、内・外面に稜線を持たず、やや浅目で口頸部が大きく外反するもの（Ⅳｃ類）も見られるようになる[4)]。

壷は口頸部が強く内彎しながら立ち上がるものや頸部で屈曲して外面に稜線を有するものが僅かに残るものの、口頸部がやや内彎気味に外傾するものが多くなる。体部はやや器高が高く丸味の強いものから、器高が低くやや扁平なものへと変化していく。出土量にも変化が認められ、第１群土器に比べて量的に減少していく傾向が指摘できる。

高坏は坏部が平底のものがほとんどで、丸底のものは僅かに残る程度である。脚部は上位が中空で円筒状を呈し、脚部下位で屈曲して外に開くものが大半を占めるようになる。壷と同様に第１群土器に比べて量的に減少していく傾向が指摘できる。調整はナデとミガキが主体となるが、新峯崎遺跡では高坏に一部ハケメが認められる。

甕は大型のものと小型のものに分けられる。大型のものは、長胴化した球形を呈するものが主体となる。小型の甕は量的にあまり多くないが、明瞭な変化は認められない。調整もナデを基本とし、ハケメ調整を行っているものは認められない。

甑は現在確認されているもののほとんどが長胴のもので、口頸部が外に開く無底のものである。

[第３群土器]

第３群土器として共通した内容を持つ土器群には、仙台市南小泉遺跡第１号住居跡出土土器(兼田：1988)、古川市名生館遺跡ＳＫ430 土壙出土土器(白鳥・後藤：1986)、名生館遺跡第11次調査ＳＩ1217 住居跡出土土器（鈴木・高橋：1991）がある。器種構成は、坏

Ｉａ・Ｉｂ・Ｉｃ・Ⅲｂ・Ⅳａii・Ⅴ・Ⅵ類、甕Ｉａ・Ｉｂ・Ⅱ類である。これら３遺跡で共通して認められる器種は、坏Ⅳａii・Ⅴ類、甕Ⅱ類である。小牛田町山前遺跡第23号住居跡出土土器（小牛田町教委：1976、加藤:1990）は坏Ⅳａii類が認められないものの、坏Ⅴ類を主体としており、本群土器に含まれるものと考える。

坏Ｉ・Ⅲ類には器形的には大きな変化はないが、坏Ⅲ類ではⅢａ類が認められない。調整では内面の調整に放射状のミガキが施されるようになり、名生館遺跡ＳＫ430 土壙出土土器には内面を黒色処理したものが１点存在する。坏Ⅳ類ではⅣａii類が特徴灼なものとして位置付けられ、坏Ⅴ類とともに本土器群の重要な構成要素となる。坏Ⅴ類は各遺跡から発見されており、名生館遺跡第11次調査ＳＩ1217 住居跡と山前遺跡第23号住居跡では量的に他の類型を上回っている。坏Ⅵ類は南小泉遺跡と名生館遺跡第11次調査ＳＩ1217 住居跡で出土している。坏Ⅴ・Ⅵ類はこの段階に特徴的なもので、第２群土器に系譜を求めることはできず、この土器群における重要な構成要素として捉えることができる。

壷・高坏は４遺跡とも発見されておらず、本土器群においては壷と従来の長脚高坏は基本的には消滅していると考えていいだろう。

甕については、比較できる資料が少ないことから前段階と明確な差は指摘できないが、山前遺跡出土の甕や南小泉遺跡出土の甕はハケメ調整が施されているが、ハケメ調整は第１群土器に部分的に認められるものの、第２群土器には僅かに認められる程度で、新しい要素として捉えることができるだろう。また、山前遺跡出土の甕は他の遺跡のものと比べて長胴化が著しく、第２群土器とは明らかに異なる。

次に各器種毎にその変遷と器種の消長をまとめる。

まず、坏から見ていきたい。坏Ｉ・Ⅲ類は大きな変化がなく第３群土器まで続くが、大きな流れとしては平底のものから丸底のものへ変化していく様子が認められる。坏Ⅳ類は、第１群土器では口縁部が短く、外反の度合も小さいものがほとんどで、内面にのみ稜線が認められる坏Ⅳａｉ・Ⅳａiii類を主体とする。第２群土器では坏Ⅳ類が増加し、口頸部が外反する坏に様々な類型が出現し多様化する。体部が強く張り出して長い口頸部が外反する坏（Ⅳａiv類）や内・外面に稜線を持つ坏（Ⅳｂ類）が認められるようになる。また、第３群土器において盛行する、やや浅い体部に括れて外反する口頸部を持つ坏(Ⅳａii類)や皿状の浅い体部に大きく外反する口頸部を持ち、内･外面に明瞭な稜線を持たない坏(Ⅳｃ類)がより新しい要素として考えられる。坏Ⅴ類は、新峯崎遺跡や富沢窯跡から１点ずつ見つかっているが、口縁部が長くやや内傾している特徴を持ち、他の共伴している土器から第２群土器に含まれるものである。第３群土器において特徴的な坏Ⅴ類は、口縁部がやや短く直立ないしは僅かに外反するもので、量的にも坏の中で安定した位置を占めてお

り、第２群土器出土のものとは区別して考えたい。また、坏VI類とした稜線を持ち口頸部が長く直線気味に立ち上がる土器は、従来南小泉式として位置付けられてきた土器には認められず、坏Ⅴ類と同様に第３群土器に特徴的なものと考える。

壷は第１群土器においては体部の器高が高く、丸味が強いものが多いが、第２群土器になると体部の器高が低くやや扁平なものへと変化し、量的にも減少する傾向が指構でき、第３群土器になると基本的には認められなくなる。

高坏も同様で、第２群土器になると第１群土器に認められた脚部上位が円錐形を呈し、脚部下位が屈曲して外に開くものが姿を消し、脚部上位が筒状を呈するものが主体となるが、量的に減少し、第３群土器には従来の長脚高坏は基本的に認められなくなる。

甕は、第１群土器の段階には塩釜式の伝統を引く球形の体部を持つものと体部中央が強く張り出して最大径を持つ菱形に近いようなものが認められたが、第２群土器になるとやや長胴化した球形を呈するものが主体となり、この傾向は第３群土器にも引き継がれ、これに長胴のものが新たに加わることとなる。

甑は第１群土器では確認されていない。第２群土器に長胴の甑が伴うことは明らかであり、第３群土器ではまだ甑が発見されていないために内容は不明である。

②合戦原遺跡の編年的位置付け

以上に述べた土器群との比較検討から、合戦原遺跡出土土器の位置付けを考えると、第４号住居跡出土土器と第４号溝出土土器には第３群土器の要素として指摘し得る坏Ⅴ・VI類が出土していないこと、第２群土器でもより新しい要素として位置付けられる坏IVｃ類が出土していることから、第２群土器でも新しい様相のものと考えられる。第１号住居跡および外周溝出土土器は、若干の時間幅が存在する可能性は否定できないが、坏Ⅴ・VI類が出土していることから第３群土器に属するものと判断する。第２号住居跡出土土器は第３群土器に特徴的な坏IVａⅱ類や坏Ⅴ類が欠落しているものの、坏VI類が存在し、壷・高坏が認められないことから、本土器群に属するものと考えて良いであろう。

各土器群の編年的位置は、第１群土器と第２群土器が坏・壷・高坏の形態や甑の存在から南小泉式[5]に、第３群土器は第２群土器に主体を占める坏IV類が減少し、坏Ⅴ類とした須恵器模倣坏が量的に安定した状況で伴い、南小泉式には見られなかった坏VI類がこれと共伴すること、さらには長脚高坏や壷が基本的には認められないことから、南小泉式より新しい土器群と考える。

南小泉式に後続するのは住社式である。これは志間泰治氏が調査した角田市住社遺跡の竪穴住居跡から出土した土器を持って標式とする(氏家：1957、志間：1958)。これらの土器の特徴は、坏が「器の中央又は下部に一段の稜を有し、ゆるい丸底であり、口縁部がい

づれも外反している」こと、甕が長胴で最大径が体部下位にあることである(志間：1958)。氏家和典氏が「住社式」を設定する際にその特徴として示したのは、「外縁土器類似の形態をとる」坏や「口縁部と体部との接続部分が外側において稜線を形成する」坏(氏家：1957)であり、坏Ⅴ・Ⅵ類はこれらに共通した特徴を有する。特に氏家氏が「外縁土器」とした坏は、関東地方で５世紀末頃から量的にまとまって見られるようになる須恵器模倣坏とされるもので、坏Ⅴ類はこれに近似する。この坏は段・稜がついて口縁部が短く直立または内彎気味に直立するもので、鬼高Ⅰ式の重要な指標となっている(岡田他：1968)。また、体部と口頸部の境に稜ないしは段を持ち、長い口頸部が大きく外反する坏は住社遺跡出土資料に特徴的なものであるが、こうした特徴は住社遺跡ほど顕著ではないものの第２群土器や第３群土器から認められる傾向であり、口頸部が顕著に長くなる特徴は第３群土器の坏Ⅵ類にも認められる。以上のことから、第３群土器と住社遺跡で検出された竪穴住居跡から出土した土器は型式論的にその系譜を辿ることができ、時間的に連続するものと考えられる。しかし、住社遺跡に特徴的な坏と第３群土器に特徴的な坏には、器高が低くなることや底部が浅い丸底を呈することなど、形態や共伴する他の坏の類型においてなお大きなヒアタスが認められ、住社式は少なくとも２段階に分けられるものと考える。氏家氏は住社式を設定する際に、「住社出土のこの類はやや退化した形態である」としており、すでにこの差を指摘している。加藤道男氏はすでに住社式を２段階に分ける見解を提示しており(加藤：1990)、今回の検討結果はこれを裏付けるものと言えよう。

加藤氏が住社式第１段階の資料として取り上げた清水遺跡第 40･53 号住居跡出土土器は、坏Ⅴ類が認められるものの坏Ⅰ・Ⅲ類や坏Ⅳａⅱ類が共伴しておらず、また、１点ではあるが体部上位に沈線または段を持ち、口頸部が大きく外傾する坏がある。甕においては長胴化が著しく、ハケメ調整が顕著であることから、第３群土器と住社遺跡例の中間的な様相を示す(丹羽･阿部･小野寺：1981)。しかし、住社遺跡出土土器に特徴的な大きく外反する口頸部を持つ有段・有稜の坏が出土していないことから、資料が少ない現段階では住社式第１段階に含めて置きたい。

＜土器群の年代＞

ここでは共伴する須恵器から、その年代観によって各土器群のおおよその実年代を推察してみたい。

須恵器の年代観には田辺昭三氏によるものと白石太一郎氏によるものがある。田辺氏は、筑紫国造磐井の墓とされている福岡県岩戸山古墳から出土した須恵器の最古の一群をＭＴ15型式からＴＫ10型式への過渡期に併行するものと捉え、「これを磐井の墓の造営時点であ

る西暦527年前後の須恵器とすれば、ＴＫ10型式のはじめをほぼ同じ年代とすることができる」としている(田辺：1981)。また、埼玉県稲荷山古墳から出土した須恵器と鉄剣の銘文に記された「辛亥年」から、ＴＫ47型式は471年をさかのぼらないとした。白石太一郎氏は、同じ岩戸山古墳出土の須恵器からＭＴ15型式の下限を西暦530年前後に位置付け、稲荷山古墳出土資料から須恵器の初源（ＴＫ73型式）を４世紀末から５世紀初頭に想定した(白石：1985)。両氏の相違点は須恵器の初源をいつにするかにあり、田辺氏はその初源を５世紀中葉以降としている。ここではとりあえず田辺式の年代観に従い、実年代を考えていく。

まず、第３群土器から見ていくと、合戦原遺跡第１号住居跡外周溝から出土した２点の須恵器坏身破片は、口径が極めて小さいこと、底部の丸味が強いこと、たちちがり端面がやや丸味を持つものもあるが、内傾度が著しいものもあることから、ＴＫ47型式に比定できる。名生館遺跡ＳＫ430 土壙出土の須恵器坏身は口径が小さく、古い様相が認められるものの、底部の丸味に乏しく扁平であること、受部は外やや上方にのびて端部の稜があまいこと、たちあがりはやや内傾度が大きく端面は浅く凹んでいることなどから、ＭＴ15型式に比定できるものと考えられる。また、清水遺跡第40号住居跡から出土した須恵器無蓋高坏の破片は、小型であること、坏底部近くに櫛描き列点文をめぐらすこと、坏部の開きが弱いことなどの特徴からＴＫ10型式に比定できよう。したがって、第３群土器の年代は須恵器の編年でＴＫ47～ＴＫ10型式、実年代では５世紀末から６世紀第２四半期にかけての年代が想定できよう[6]。

第１・２群土器の年代は須恵器編年でＴＫ23型式以前、５世紀第４四半期以前と考えられる。このことは第２群土器として位置付けた仙台市富沢窯跡出土土器の年代が裏町古墳との関係から須恵器編年でＴＫ208型式以降と考えられることと矛盾しない。

註１）　塩釜式には坩状の坏やこれの系譜を引く長い口頸部を持つ坏が認められ、坏Ⅳａiv類に近いものが南小泉式にも残る可能性がある。

２）　新峯崎遺跡出土土器は坏が豊富で様々な類型を有する。坏の特徴からは第２群土器に含まれるが、高坏や甕を見ると第１群土器に近い様相を示す。これらのことから土器の形態変化は坏が他の器種に先行していた可能性も考えられ、坏は土器群の変化をより鋭敏に反映するものと思われる。

３）　村田町諏訪館前遺跡第１・２・３号住居跡からは坏Ⅳ類を主体とする土器群が発見されており、現在のところ他の遺跡では認められない坏Ⅳｃ類も出土している。坏内面の調整は放射状のミガキが施されているものが多い。筆者の実見による。

４）　福島県では大玉村上高野遺跡や東村板倉前Ｂ遺跡などに代表される５世紀後半の

土器には、坏Ⅰ・Ⅲ類とした土器が極めて少ない。かわりに坏Ⅳ類とした口頸部が外傾ないしは外反する坏が圧倒的に多く、宮城県とは明らかに様相を異にする。

5）　丹羽茂氏が示した南小泉式の細分案と比較すると、第１群土器は丹羽氏のＡ群土器にほぼ対応し、第２群土器はＢ・Ｃ群土器とおおよそ対応する。今回検討した結果では、丹羽氏が分類したＢ群土器とＣ群土器を時間的な前後関係を持つものとして分離する明確な要素は指摘できなかった。第２群土器において指摘した新しい様相を示すものとは、諏訪館前遺跡第１・２・３号住居跡や合戦原遺跡第４号住居跡から量的にある程度まとまって出土している坏Ⅳａⅱ類と坏Ⅳａⅳ類、また量的には少ないが坏Ⅳｃ類であり、丹羽氏が指摘したＣ群土器とは異なるものである。資料的に今だ不十分であり、新しい要素として指摘するに止めておきたい。

6）　須恵器模倣坏が量的にまとまりを持って認められるようになるのは、群馬県では須恵器編年でＴＫ47 型式からで、今回示した見解と矛盾しない(坂口：1987)。また、福島県では郡山市永作遺跡の第５号住居跡などからまとまって出土している（柳沼：1980）が、宮城県のように坏に中で須恵器模倣坏が主体となるような例は少なく、以前としてやや長い口頸部が外反する坏が主体を占める。また、山形県鶴岡市清水新田遺跡からは須恵器編年でＴＫ47～ＭＴ15 型式の坏身･坏蓋の破片とともに、坏Ⅰ類を主体に坏Ⅳ類を含む土器群が出土しており、これには内面を黒色処理した坏と短脚の高坏が伴っており、坏Ⅴ類とした須恵器模倣坏は見つかっていない (阿部他：1988)。このような地域差の問題は資料が少ないこともあり、今後の重要な課題と言える。

（岩見和泰）

引用・参考文献

阿部明彦　：1987「三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(2)」『山形県文化財発掘調査報告書』第 107 集　山形県教育委員会他

：1988「矢馳Ａ遺跡・矢馳Ｂ遺跡・清水新田遺跡」『山形県文化財発掘調査報告書』第 127 集　山形県・山形県教育委員会

：1989「福島県に於ける５世紀～７世紀の土師器」『シンポジウム　福島県における古代土器の諸問題』　万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委員会

阿部　恵他　：1991「新峯崎遺跡」『宮城県村田町文化財発掘調査報告書』第９集　村田町教育委員会

阿部・千葉　：1980「台ノ山遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第 62 集　宮城県教育委員会

氏家・大場　：1953「宮城県高倉村引田出土の土師器」『歴史』第８輯　東北史学会

氏家和典　：1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 14 輯　東北史学会
加藤道男　：1980「東館遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第 69 集　宮城県教育委員会
：1990「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』Ⅱ　寧楽社
兼田芳宏他　：1987「宮城県仙台市南小泉遺跡」『埋蔵文化財発掘調査研究所報告書』第４集　南小泉遺跡調査団・埋蔵文化財発掘調査研究所
兼田芳宏　：1988「宮城県仙台市南小泉遺跡」『埋蔵文化財発掘調査研究所報告書』第 11 集　南小泉遺跡調査団・埋蔵文化財発掘調査研究所
木村浩二　：1989「宮城地方の土師器」『シンポジウム　福島県における古代土器の諸問題』　万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委員会
日下部善己他　：1980「二重堀跡(含　下入ノ内遺跡)－伊達西部地区遺跡発掘調査報告」『福島県文化財発掘調査報告書』第 82 集　福島県教育委員会
坂口　一　：1987「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』４　群馬県埋蔵文化財調査事業団
：1988「東国須恵器の一様相」『考古学雑誌』第 74 巻第１号　日本考古学会
佐藤・石本　：1990「矢吹地区遺跡発掘調査５　山崎遺跡」『福島県文化財発掘調査報告書』第 225 集　福島県教育委員会
佐藤・菅原他　：1991「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 141 集　宮城県教育委員会
佐藤　洋　：1987「南小泉遺跡－第 14 次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第 109 集　仙台市教育委員会
白石太一郎　：1985「年代決定論」『岩波講座　日本考古学』１　岩波書店
白鳥・加藤他　：1974「岩切鴻ノ巣遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第 35 集　宮城県教育委員会
白鳥・後藤　：1986「名生館遺跡Ⅵ」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第 11 冊　宮城県多賀城調査研究所
高木・大越　：1979「板倉前Ｂ遺跡－母畑地区遺跡発掘調査報告書」『福島県文化財発掘調査報告書』第 74 集　福島県教育委員会
高倉敏明　：1981「山王・高崎遺跡発掘調査既報」『多賀城市文化財調査報告書』第２集　多賀城市教育委員会
田中　敏　：1981「福島県会津地方の土師器」『シンポジウム　福島県における古代土器の諸問題』　万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委員会
高橋信一　：1983「阿武隈川流域における古墳時代中期の土師器とその問題」『しのぶ考古』８　しのぶ考古学会
田辺昭三　：1981『須恵器大成』角川書店
玉川・大越　：1978「大玉村上高野遺跡出土遺物の再検討」『しのぶ考古』７　しのぶ考古学会
辻　秀人　：1986「Ⅳ　古墳時代」『発掘が語る日本史』１　新人物応来社
：1989「東北古墳時代の画期について（その１）」『福島県立博物館紀要』第３号　福島県立博物館
中村　浩　：1990『研究入門　須恵器』柏書房
中村　浩他　：1978『陶邑』Ⅲ　大阪府教育委員会

丹羽・阿部他　：1981「清水遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第 77 集
宮城県教育委員会
丹羽　茂　　：1983「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 96 集　宮城県教育委員会
橋本博幸　　：1989「福島県相双地方の土師器」『シンポジウム　福島県における古代土器の諸問題』
万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委員会
広岡　敏　　：1989「福島県いわき地方の土師器」『シンポジウム　福島県における古代土器の諸問題』
万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委員会
真山　悟　　：1991「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告』第 142 集　宮城県教育委員会
宮城県文化財保護課他：1976『山前遺跡』小牛田町教育委員会
目黒・佐藤他　：1978「佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区－母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ」『福島県文化財調査報告書』
第 67 集　福島県教育委員会
柳沼賢治　　：1980「永作遺跡」『郡山東部　7』福島県郡山市教育委員会他
：1989「福島県中通り地方の土師器」『シンポジウム　福島県における古代土器の諸問題』
万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委員会
結城慎一　　：1982「南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第 1 次調査報告」『仙台市文化財調査報告書』第 35 集　仙台市教育委員会
渡辺泰伸他　　：1974「富沢窯跡」『古窯跡研究会研究報告』第 3 冊　古窯跡研究会
渡辺　誠　　：1985「南小泉遺跡－第 13 次発掘調査報告」『仙台市文化財調査報告書』第 81 集
仙台市教育委員会
渡部・宮崎　　：1989「南小泉遺跡－第 15 次発掘調査報告」『仙台市文化財調査報告書』第 131 集
仙台市教育委員会

(2)　窯跡出土遺物について

出土遺物は須恵器甕、土師器甕、羽口、通風管[1]があり、須恵器甕が大半を占める。ここでは出土遺物を窯跡に伴うものと、その他のものとに分けて検討を行うこととする。

＜出土状況＞

第１号窯跡第１層から須恵器甕、土師器甕、羽口がそれぞれ２点、第２層から須恵器甕が５点（体部のみの破片も含めれば６点）出土している。

堆積土の状況をみると第１層は天井、窯壁、地山の崩壊土、第２層は掻き出しの際に堆積した灰原へと続く木炭層であり、崩壊土と木炭層の間に間層はなく、第１層は窯廃絶後短期間に堆積したものと考えられる。また、床面からの出土遺物はなく、窯跡に伴う遺物としては第２層出土の須恵器甕のみである。これらについては前庭部から焼成室手前側にかけて散らばった状態で出土しており、約半数は焼成不良のものや、歪みがあるものである。

第２号窯跡からは堆積土第１層から羽口が２点出土している。第１層は流入土であり、羽口は何らかの原因により混入したものと思われる。

第３号窯跡については確認のみの調査であるため省略する。

＜窯跡に伴う遺物の特徴と年代＞

Ａ：須恵器甕（第27図１・２、第28図１～３）

従来、須恵器の年代については坏による検討がなされてきたが、出土遺物の中で窯跡に伴うと考えられるのは甕のみであり、今回の調査では坏の出土は認められなかった。また甕については現段階では詳細な年代の検討はなされておらず、甕のみによって厳密な年代を導き出すことはできない状況である。そこで、ここではまず第１号窯跡出土の須恵器甕の特徴を述べ、次に本遺跡から約 400mの場所に隣接し、須恵器の甕や坏を出土している北名生東窯跡の出土遺物との比較によって須恵器甕の年代を検討していくこととする[2]。

[特徴]

すべて体部下半を欠損している資料のため、全体の器形を知り得るものはないが、口径が20ｃm前後のもので、次のような特徴を有する。

体部上半は肩が張り、口頸部はやや長く、第27図２は頸部で「く」の字に屈曲して直線的に立ち上がり、口縁部付近で外反する。それ以外は「く」の字に屈曲後、外反しながら口縁部まで立ち上がる。第27図２、第28図１～３は口縁端部外側はあまり脹らまず、上下端をほぼ垂直に引き出して口縁帯を作り出している。これらは口縁端部外側に凹線がつく

が、これは口縁上端部を細目につまみ出す時につけられたものである。第27図１は口縁端部をあまり引き出さず、平坦に仕上げている。頚部は全て無文であり、体部外面は平行タタキメを施しただけのもの（第27図２、第28図１）と、平行タタキメの後、平行沈線が描かれたもの(第27図１)、カキメが施されたもの（第28図２）とがある。タタキメについては第27図２のように斜行するものが認められる。内面の調整は、手法は不明であるがオサエメが消され平滑になっているものがほとんどで、オサエやヘラナデの痕を残すものは第27図１のみである。また破片の中にはカキメを残すものもみうけられた。底部に関しては不明である。

[年代]

本遺跡第１号窯跡出土の須恵器甕の特徴としていえることは、

(1)口縁端部を上下に引き出し、特に上端をつまみ出し、凹線がつくものが多い。

(2)タタキメが斜行する。

(3)タタキメを消すためにカキメを施す。

(4)内面にもカキメを施す。

といったものが認められることであるが、これと北名生東窯跡出土の須恵器甕を比較してみると、実見の結果、鍛冶氏の報告（鍛冶：1971）にもあるように須恵器甕の器面調整方法において、(2)から(4)のような本須恵器甕と共通する特徴を有し、さらに口縁部の形態においても(1)のように凹線がつくなど非常に類似したものが多くみられた。また、窯跡の形態についても、第１号窯跡にみられる焼成部奥壁が床面から急角度に屈曲して直線的に立ち上がり、両端が角張るといった点は北名生東窯跡はじめ「合戦原類古窯址群」(鍛冶：1971)内の窯跡の多くに共通するものである。これら遺物や窯跡の調整および形態的類似性から、隣接する北名生東窯跡と本遺跡第１号窯跡とは同様の技術系譜を持つ工人集団によって営まれ、断定はできないが、ほぼ同時期あるいは相前後して存在していた可能性が考えられる。

北名生東窯跡出土遺物には須恵器甕、坏（高台付坏も含む）のほかに蓋、台付長頚瓶などがある。それらの遺物の年代については鍛冶氏の報告によれば、須恵器甕は器面調整の特徴から「胆沢城存続期間に重なるもの」とされ、坏についても概ね平安期のものと考えられている。しかし、報告では糸切りのみとされた坏の底部切り離し技法は実見の結果、ヘラ切りと回転糸切りが混在しており、さらに回転ヘラケズリにより再調整されたものが存在し、器形的にも底径がやや大きめて古い様相を呈するなど、再考の必要があると思われる。ちなみにこれら二種類の切り離し技法を有する坏は同一窯跡の床面や灰原から出土したものであるという[3)]。

そこで坏によって年代を再検討してみると、器形は内彎気味に立ち上がるものと、外傾して、ほぼ直線約に立ち上がるものがあるが、口径、底径、器高などは、ほぼ同じである。これらに似たものとして県内に類例を求めると、窯跡出土の資料には適当なものは認められず[4]、住居跡出土のものとしては今熊野遺跡第13号住居跡（丹羽茂：1985）出土の坏があげられる。これらの遺物については年代が記されていないが、伴出した土師器についてみれば８世紀末から９世紀初頭とされた宮前遺跡第20号住居跡のものに類似し、ほぼ同時期の年代が想定される。さらに土師器坏の形態をみると、外面に軽い段、内面に稜があり、丸底風の平底を呈し、宮前遺跡第20号住居跡のものより古い様相を伺えるものがみられる。また須恵器坏についても、底径が大きめで同様のことがいえる。このことから今熊野遺跡第13号住居跡出土須恵器については、同時期の中でも８世紀末葉に限定される可能性も考えられる。また、県外の窯跡では福島県伊達郡伊達町伊達窯跡（木本元治他：1987）出土の坏に類似したものが認められ、これには８世紀後半の年代が与えられている。

以上のようなことから、北名生東窯跡出土の坏は８世紀後半から９世紀初頭までの年代幅におさまり、特に８世紀末葉を中心とした時期が予想される。したがって本遺跡第１号窯跡第２層出土の須恵器甕についても前述のように、ほぼこれに近い時期のものである可能性が考えられよう。

＜その他の出土遺物＞

Ａ：須恵器甕（第26図１・２）

[特徴]

口径が40ｃｍ～45ｃｍ前後の大型のものである。大きさは違うものの口頸部の形態は木炭層出土の第27図２とほぼ同様である。１は頸部上半に２段の櫛描き波状文と下半に２本の平行沈線が描かれるが、波状文は波長や櫛目の数が一定せず雑な印象を受ける。また、体部に比べて頸部にかなりの厚みがあるのも特徴の一つである。２は頸部は無文で、一部欠損しているが底部形態は丸底であると推定される。器面調整は１が頸部から体部上半にかけて、外面に平行タタキメが施されており、２は体部に第27図２と同様に、斜行する平行タタキメが施されている。内面はどちらも部分的に円弧状のオサエメを有する。

[年代]

前述のような理由により不明である。ただし、第27図２との類似性を考えれば、ほぼそれに近い時期のものの可能性も考えられるかもしれない。

Ｂ：土師器甕（第28図４・５）

[特徴と年代]

口縁部のみの破片であるので詳細は不明だがロクロは使用しておらず、少なくとも奈良時代以前のものであろう。

Ｃ：羽口および通風管（第30図）

羽口は第１・２号窯跡から２点ずつ、通風管は第３号窯跡から３点出土している。

[特徴]

まず、羽口について残存状況の良い６を中心に述べる。

残存部先端には炉壁と黒色で光沢のあるガラス質の溶着滓が付着している。形状は先端がやや細く、吸気部が漏斗状に開いたものであり、残存長 12.6ｃｍ、残存部先端内径約 2.5ｃｍ、吸気部外径約 5.7ｃｍ、内径約 4.1ｃｍで、他の羽口についても破片のため推定ではあるが、それぞれに近似値を示している。胎土は緻密であるが、吸気部はもろく一部欠損している。製作技法は粘土紐を巻き上げた痕がみられないことや、吸気部に残った手で握ったような痕跡から軸木に粘土を巻き付けて成形したと思われる。外面の調整は指のオサエと長軸方向の指ナデにより仕上げている。内面は軸木を吸気部から抜き、その際に軸木を回転させて漏斗状に押し広げ、その後、ナデにより調整している。吸気端部から約３ｃｍの幅で磨滅痕が認められるが、これはフイゴを取り付けた痕と考えられる。また熱による色調変化がみられ、炉壁に対し斜めに装着されていたことがわかる。他の羽口に関しても口径だけでなく、調整方法も判明するものについては、ほぼ同様のものであった。

次に通風管であるが、図示できたのは２点だけであり、１の残存部の口径は外径約 15ｃｍ、内径約 11ｃｍ、２は先端部内径約９ｃｍであった。いずれも粘土紐を積み上げて成形している。胎土はともに砂粒を少し含み、１はややもろいのに対し、２は非常に堅緻である。この違いは、２が先端部の破片であり炉内において非常な高温状態におかれていたために生じたものと思われる。また溶着滓にも違いがみられ、１が黒色で光沢のあるガラス質のものであるのに対し、２は鉄分を多く含み内外面に付着している。

[年代]

本遺跡の南約 10ｋｍに位置する製鉄遺跡として、福島県新地町武井地区製鉄遺跡群（寺島他：1989）がある。ここから非常に多数の羽口や通風管が出土し、特に羽口は形態・調整技法から以下のような分類が試みられている。

Ⅰ類：円柱状で指頭痕を残すもの（ａ：太い　ｂ：細い）。

Ⅱ類：漏斗状で指頭痕を残すもの（漏斗部を指ナデしたのみ）。

Ⅲ類：漏斗状で指ナデのもの。

Ⅳ類：円柱状でヘラケズリのもの。

Ⅴ類：漏斗状でヘラケズリのもの（ａ：長い　ｂ：短い）。

そこで本遺跡第２号窯跡出土の第 30 図６の羽口をその分類にあてはめると、漏斗状で指頭痕を残し、長軸方向の指ナデによって調整するといったⅡ類とⅢ類の要素を合わせ持つことになる。Ⅱ類は共伴する土器の年代観から８世紀中頃から後半、Ⅲ類は９世紀前半に属するとされており、６の羽口は８世紀中頃から９世紀前半の年代幅におさまるものと想定される。

通風管については、現段階では年代の検討はなされておらず、本遺跡においては確認調査による破片のみの出土であるので今後の課題としたい。

註１）羽口については福島県新地町武井地区製鉄遺跡群（寺島文隆他：1989）において、人口的に送風を行なうことを目的とする小型の羽口に対して、大型のものには自然通風を目的とするものとして通風管という名称がつけられており、以下これに従うこととする。

２）北名生東窯跡は宮城療養所窯跡・戸花山窯跡などとともに昭和37年から昭和38年にかけて調査されている(鍛冶一郎：1971)。また、昭和52年には志間泰治氏によって同一窯跡の再調査もなされ、須恵器の坏や甕が数多く出土している。この北名生東窯跡の遺物は志間氏が所蔵されており、氏のご厚意によって実見することができた。

３）志間泰治氏のご教示による。

４）現時点において、まだ本報告はなされていないが、去年調査された桃生郡河南町関ノ入遺跡第12号窯跡出土の坏に類似したものがみられる。

（佐藤憲幸）

引用・参考文献

鍛冶一郎　：1971　前掲書

寺島文隆他　：1989「相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ」『福島県文化財調査報告書』第 215 集　福島県教育委員会他

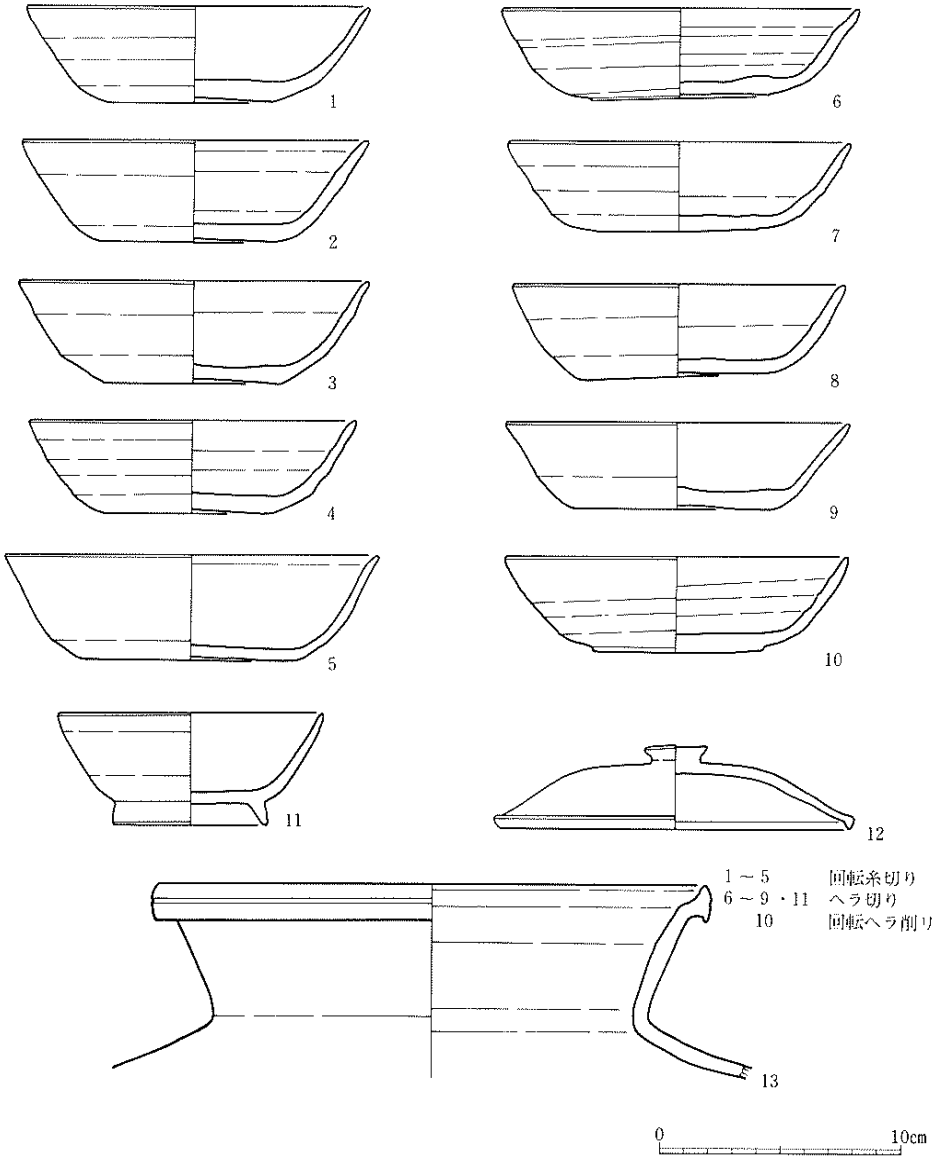
中野・佐藤　：1990「須恵窯跡群関ノ入遺跡」『平成２年度　宮城県内発掘調査成果発表会　発表要旨』

丹羽　茂　：1983　前掲書

丹羽　茂　：1985「今熊野遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 104 集　宮城県教育委員会

木本元治他　：1987「伊達窯跡調査報告Ⅰ」『伊達町文化財調査報告書』第３集　福島県伊達郡伊達町教育委員会

渡辺泰伸　：1976「陸奥国宮窯跡群」Ⅱ　古窯跡研究会



第41図　北名生東窯跡出土遺物（志間泰治氏所蔵、原図は芳賀寿幸氏による）

(3)　鉄鏃について

第４号住居跡床面から鉄鏃が出土した。逆刺を持つ平造りの有茎鏃で、柳葉形に近い長三角形を呈するものと思われる。残存長 4.4ｃｍ･残存幅 2.4ｃｍ、先端部をはじめとする刃部の大半を欠損している。茎部は長さ 1.2ｃｍ・幅 0.6ｃｍ・厚さ 0.1ｃｍと非常に短く薄い。逆刺は僅かに外に開く浅いものである。遺存した木質部分から有茎ではあるが、柄の部分を割って鏃身まで挟み込んで着装していたと考えられる。

この鉄鏃の位置付けであるが、栃木県の鉄鏃を集成してその変遷を検討した小森哲也氏の研究（小森：1984）によると、今回出土した鉄鏃は有茎長三角形式に位置付けられ、この型式は年代幅が広いが５世紀後半から６世紀前半にかけては非常に短い茎を持つ平造型式が認められるとのことである。さらに、古墳時代後期の鉄鏃を分類し編年を試みた関義則氏の研究（関：1986）によれば、本鉄鏃は広根系の柳葉形腸抉短柄式に該当し、５世紀の第４四半期になると広根系鏃群の中でも非常に短い柄を持つ短柄鏃は一部の地を除いて姿を消し、また、逆刺を持つものでは、それまでの直線的なものに代わって外反するものが多くなるとされている。

小森氏と関氏の鉄鏃の編年に当てはめると、第４号住居跡から出土した鉄鏃には５世紀第４四半期前後の年代が与えられ、共伴した土器の年代が５世紀後半でもより新しい時期のものと考えられることから、鉄鏃で得られた結果と土器の検討から得られた結果は矛盾せず、この年代はほぼ妥当なものと考える。

今回発見された鉄鏃は、住居内から見つかった希少な例というだけでなく、出土例の少ない５世紀末頃のものとして重要な資料と言えよう。

（岩見和泰）

引用・参考文献

池上　悟　　：1982「後期古墳時代集落出土鉄鏃に関する若干の問題」『東京考古』１東京考古談話会同人

小久保徹他　：1983「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ－鉄鏃について－」『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

小森哲也　　：1984「栃木県内古墳出土遺物考(Ⅰ)－鉄鏃の変遷－」『栃木県考古学会誌』第８集　栃木県考古学会

後藤守一　　：1938「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第 54 巻第４号　東京人類学会

末永雅雄　　：1980『増補　日本上代の武器』木耳社

関　義則　　：1986「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号　PHALANX（古墳文化研究会）

２．遺構の検討

(1)　大型住居跡について

＜はじめに＞

合戦原遺跡の調査で、東西 12.6m・南北 10m以上の大型の竪穴住居跡が見つかった。これまで宮城県内で最大とされてきた古墳時代の竪穴住居跡は、蔵王町大橋遺跡の第１号住居跡で一辺 10mあった。今回、合戦原遺跡で発見された竪穴住居跡はこれを大きく上回るもので、住居の外側には外周溝が巡り、他に発見された住居跡とは異なる特徴を有する。ここでは今回の調査で発見された大型住居跡について、その性格や位置付けを検討して行きたい。

＜合戦原遺跡の大型竪穴住居跡について＞

合戦原遺跡で発見された大型住居跡は、その大きさにおいて他の発見された住居跡をはるかに上回り、宮城県内でも過去最大の大きさを誇っている。東西 12.6m×南北 10.2m以上の規模を有し、住居跡の外側には竪穴の堀込みの外縁から２～３ｍ離れて方形に幅 0.24～2.62m･深さ 5～35ｃｍの外周溝が巡り、他の住居跡と画されている。住居の構造は、柱穴が北壁に沿って４本並び、周溝は住居の北側を中心に巡っており、外側に抉れるという特徴を持つ。また、周溝から住居内に間仕切り溝が延び、北東コーナーには台床状遺構と思われるものが見つかっている。建物の平面規模から想定すると、上屋の構造はかなりの高さと大きさを呈していたものと考えられ、大型の掘立柱建物に匹敵する大きさであったと思われる。ここには明らかに他の住居との差が認められ、建物における特殊性と隔絶性が指摘できるだろう。

遺物としては、外周溝東側や西側の堆積土から須恵器坏身の破片が出土している。また、住居の南東すぐ外側、外周溝の内側から石製模造品が比較的まとまった状況で７点出土している。遺構確認作業中に出土したもので、出土状況は必ずしも良好ではないが、住居との関連が想定される。

存続期間については、遺構には第６号住居跡と第４号溝とに重複があり、前者が後者を切っているが、住居跡間に重複は認められず、土器の検討からも大きな時間差は認められない。今回発見された遺構の実年代は、第４号住居跡外周溝出土の須恵器坏身が陶邑古窯跡群Ⅰ期末のＴＫ47 窯式に比定されることから５世紀末から６世紀初頭と考えられ、土師器の編年的位置付けとも矛盾しない。存続期間は土器型式で二型式、実年代で 25～50 年ほどと推定することも可能であろう。

＜類例との比較＞

合戦原遺跡の大型住居跡に類似する例としては、岡山県北房町谷尻遺跡 191 号住居跡、群馬県群馬町井出村東遺跡第 129 号住居跡、群馬県伊勢崎市原之城遺跡第１号住居跡がある。

谷尻遺跡例は一辺 12mの方形の竪穴住居跡で、竪穴の堀込みの外縁から約３～５m離れて五角形状に幅 0.7～1.3m･深さ 60～70ｃmの溝を巡らし、溝に囲まれた面積は約 400 ㎡ある。住居内には一辺９mの方形を呈する周溝、間仕切り溝、ベッド状遺構があり、主柱穴が４本見つかっている。炉跡は住居中央東寄りに３ヶ所認められる。床面からやや浮いた状態で巴形銅器が出土している。時期は古墳時代初頭である(岡山県教委：1976)。井出村東遺跡例は 10.7×11.0mの方形の竪穴住居跡で、柱穴は12 本確認されており、東壁にカマドがあり、カマドの右側には貯蔵穴が見つかっている。また、壁際から住居内に延びる１～1.5m程の間仕切り溝が 18 条見つかっており、規模だけでなく構造にも他の住居と相違点が認められる。時期は古墳時代後期鬼高式期前半で、すぐ北側には三ツ寺遺跡があり、関連が注目される(大賀他：1981、前沢：1988、群馬県教委：1988)。原之城遺跡は東西 105m･南北約 165mの範囲を幅 20m、深さ 1.5mの濠が巡る遺跡で、方形の突出部があるほか､土塁の存在が認められている。内部には溝で囲われた中に倉庫と考えられる方形の総柱建物が６棟確認され､その溝の外側には中央付近に５×５間の大型の掘立柱建物が２棟、４×４間の掘立柱建物２棟、２×２間の総柱建物１棟が検出されたほか、竪穴住居が８軒確認された。この中に第１号住居跡とされた 12.7m×10.4m以上の大型住居があり、西壁にカマドを持つ。建物に切り合いが認められるものの、時期は古墳時代後期、鬼高Ⅱ式期（６世紀中頃）とされている(中澤：1988)。豪族居館の主屋としては大型の掘立柱建物（第３・４号掘立柱建物）が注目されているが、大型の竪穴住居は平面規模では掘立柱建物を上回り、同時存在していなかったとすれば、主屋として機能していた可能性も指摘できるだろう。また、同時に存在していたとすれば、政治的な活動の場としての掘立柱建物と生活の場としての竪穴住居といった区別がなされ、機能的に区別して使われていた可能性もあろう。

今回、合戦原遺跡例の類例として取り上げることができたのは、以上の３例である。谷尻遺跡例は、広瀬和雄氏が４世紀段階での支配的共同体の首長の住居と想定しているほか(広瀬：1978)、橋本博文氏が豪族居館の一類型として設定しているが、竪穴住居１棟で首長層の生活・職域の万般をまかなったとするには問題があるとして、疑問も指摘している(橋本：1988)。谷尻遺跡では規模・住居内の施設・遺物に特殊性と隔絶性が認められ、外部区画施設として溝が住居を巡っている。合戦原遺跡例とは時期が約２世紀違うこと、他

の住居との関連が不明であることなどの問題はあるが、諸々の特徴から大型竪穴住居を中心とした豪族の居宅が類型として設定できるのではないだろうか。原之城遺跡で発見された大規模な外郭施設内に存在する大型の竪穴住居は、豪族居館を構成する施設の中でも同時に発見された大型の掘立柱建物とともに重要な位置にあったと考えられる。また、井出村東遺跡例は三ツ寺遺跡と近接し、時期もほぼ一致することから何らかの関連が指摘されているが、三ツ寺遺跡は豪族居館として明確に位置付けられることから、豪族居館として捉えることはできないであろう。在地首長層を頂点とした支配機構が成立していたとすれば、その下にあってなお支配者為り得た階層があったであろう。三ツ寺遺跡が在地首長層の居館であったとすれば、あるいは井出村東遺跡の第 129 号住居は、そうした在地首長層に続く階層のものであった可能性も指摘できよう。

類例との比較から、合戦原遺跡例は大型住居のみで機能していたか、あるいは他の住居跡をも組み込んで機能していたかは不明であるが、豪族居館との関連が想定される。

豪族居館としての位置付けを立地（交通の要衝に立地すること）と古墳との対応（居館の近辺に同時期の古墳が存在すること）から検討する試みも為されている(橋本：1988)。合戦原遺跡の場合、立地としては、中世にはすでに利用されていたと考えられる「東海道(あずまかいどう)」が合戦原遺跡の西側を南北に延びており、古道との関連もある程度想定できるかもしれない。また、古墳との対応であるが、今回の調査地点から北東へ約 500 mの地点に時期は不明であるが円墳を主体とする古墳群があり、その中に全長約 40mの前方後円墳が存在することが明らかとなっている。あるいはこれらの古墳との対応が考えられ、立地や古墳との対応においても豪族居館との関連がある程度考えられよう。

＜まとめ＞

合戦原遺跡で今回発見された大型住居の性格を明らかにするため、類例を上げて検討した結果、合戦原遺跡の大型住居は豪族居館との関連が想定されることを指摘した。

辻秀人氏や藤沢敦氏によると、東北地方において古墳時代中期後半に築造される古墳はそれまで古墳が築造されなかった地域や前期古墳とは築造場所を変えている場合が多く、宮城県ではこの時期に新たに成立する前方後円墳などを中心として、それ以後中小の円墳から成る群集墳が形成されている場合が多いとのことである(辻：1986、藤沢：1990)。合戦原古墳群のあり方はこれらの状況と一致し、合戦原古墳群は中期後半以降に築造がはじめられたと考えられよう。とすると、合戦原古墳群は今回調査した遺構鮮の時期と重なり、合戦原遺跡で今回発見された大型住居が有力者のものである可能性も考えられる。

宮城県内において豪族居館と考えられている遺跡には、小牛田町山前遺跡がある（小牛

田町教育委員会他：1976)。山前遺跡について、石野博信氏や橋本博文氏は豪族居館として位置付けているのに対し、阿部義平氏は「明瞭な防禦性と計画性を示す古墳時代の環濠集落の例」として位置付け、豪族居館の可能性を否定しているが、これは豪族居館の認定の際の判断基準に問題があることを示している。内部施設の特殊性と隔絶性に関しては未発掘部分があるため不明である[1)]が、外郭施設について見れば、古墳時代前期という時期において、上幅３～６m以上・深さ１～４m以上の規模を持つ断面逆台形状を呈する堀を持ち、方形の張り出し部をも有する点で、単なる環濠集落とするには特殊性・隔絶性において他を抜きんでている。古墳時代前期の集落の中でも特別な位置にあることは指摘できるが、内部施設が不明であるため、豪族居館として位置付けられるべきか、あるいは特殊な環濠集落として位置付けるべきかは断定できない。

古墳時代は支配・被支配の関係が前方後円墳に代表される古墳によって象徴される時代であり、古墳の研究によって、特に支配する側を中心にその関係が解明されてきた。近年の重要な発見や資料の増加により、豪族居館の研究は、一般の集落との比較によって支配・被支配の関係を捉えられる点で、古墳時代研究の重要なテーマとなっている。今後の集落の調査によって、宮城県内をはじめ東北地方においても豪族居館の発見例が増加することが予想され、資料の蓄積により合戦原遺跡や山前遺跡の位置付けが明らかになるとともに、東北地方の古墳時代の実態が明らかになることを期待したい。

註１）　阿部義平氏は古墳時代にも環濠の伝統の残存も過渡的にあったとして、豪族居館と区別して捉えている(阿部：1990)。橋本博文氏は、遺構の検討から、中枢部分は保存区域等の未発掘部分にあると推定している(橋本：1985)。

（岩見和泰）

引用・参考文献

阿部義平　：1990「宮殿と豪族居館」『古墳時代の研究』２　雄山閣出版

石野博信　：1990「総論」『古墳時代の研究』　雄山閣出版

井上唯雄　：1988「群馬県における豪族の居館跡」『三ツ寺Ⅰ遺跡』群馬県教育委員会

井上唯雄・下城 正　：1988「群馬県における豪族の居館跡」『考古学ジャーナル』289　ニューサイエンス社

大賀健他　：1981『井出村東遺跡－発掘調査の概要－』井出村東遺跡調査会

小笠原好彦　：1985「家形埴輪の配置と古墳時代豪族居館の居館」『考古学研究』31-4　考古学研究会

1986「豪族居館が語るもの」『季刊考古学』16　雄山閣出版

1990「住居と倉と井戸」『古墳時代の研究』２　雄山閣出版

小牛田町教育委員会他：1976『山前遺跡』

群馬県埋蔵文化財調査事業団他：1988『古代東国の王者－三ツ寺居館とその時代－』

清水真一　：1988「奈良県における豪族の居館跡－古墳時代の大型建物－」『考古学ジャーナル』289　ニューサイエンス社
下城　正　：1990「集落の形態　１東日本の集落」『古墳時代の研究』２　雄山閣出版
高畑知功他　：1976「谷尻遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査６』岡山県文化財保護協会
辻　秀人　：1986「Ⅳ　古墳時代」『発掘が語る日本史』１　新人物応来社
：1989「東北古墳時代の画期について（その１）」『福島県立博物館紀要』第３号　福島県立博物館
都出比呂志　：1984「農耕社会の形成」『講座日本歴史』１　東京大学出版会
中澤貞治　：1988『原之城遺跡発掘調査報告書』伊勢崎市教育委員会
中山　晋　：1988「栃木県における豪族の居館跡」『考古学ジャーナル』289　ニューサイエンス社
橋本博文　：1985「古墳時代における首長層居宅の構造とその性格」『古代探叢』Ⅱ　早稲田大学出版部
：1987「古墳時代における首長層の居宅と奥津城」『考古学雑誌』72-4　日本考古学学会
：1988「古墳時代における首長層居宅（総論）」『考古学研究』ニューサイエンス社
広瀬和雄　：1978「古墳時代の集落類型－西日本を中心として－」『考古学研究』25-1　考古学研究会
：1990「集落の形態　２東日本の集落」『古墳時代の研究』２　雄山閣出版
藤沢　敦　：1990「６東北　３宮城・岩手」『古墳時代の研究』11　雄山閣出版
前沢和之　：1988「三ツ寺Ⅰ遺跡の性格と意義」『三ツ寺Ⅰ遺跡』群馬県教育委員会

(2)　窯跡について

ここでは窯跡の形態的特徴と年代について述べることとする。

本遺跡第１号窯跡の主な形態的特徴としては、

(1)　地下式窖窯である。

(2)　焼成室は奥壁側の両端が角張る胴張り形を呈し、奥壁は床面から急角度で直線的に立ち上がる。

(3)　燃焼室は狭く、焼成室との境は明瞭である。

(4)　前庭部は土壙状を呈し、排水溝と思われる溝を有する。

といったことがあげられるが、これらは須恵器や瓦を焼成する窯跡には一般的にみられる特徴である。

ちなみに本遺跡の南約10kmに位置する前出の福島県新地町武井地区製鉄遺跡群(寺島文隆他：1989)から発見された木炭窯は、Ⅲ類とされたものが第１号窯跡と焼成室、燃焼室、床面などのプランが非常に類似しており、焼成室床面の勾配も第１号窯跡と同様に約 20°のものが存在している。また遺物の検討のところでも述べたように、(1)や(2)は北名生東窯跡や戸花山窯跡といった本遺跡周辺の窯跡の多くに共通して認められる特徴であり、今後「合戦原古窯跡群」というものを考えていく上で、一つの手掛りとなるように思われる。

窯跡の年代については須恵器甕に与えた年代観から、８世紀後半から９世紀初頭頃にほぼ近い時期の窯跡である可能性が考えられる。

（佐藤憲幸）

引用・参考文献

鍛冶一郎　　：1971　前掲書

寺島文隆他　：1989　前掲書

Ⅳ　まとめ

１. 合戦原遺跡は、従来知られていた古墳群・横穴墓群・窯跡に加えて、古墳時代の集落跡からなる遺跡であることが明らかとなった。

２. 検出された遺構には、竪穴住居跡８軒、窯跡３基、土壙 22 基、溝跡６条、ピット４個があり、事前調査を行ったのはこのうち竪穴住居跡４軒、窯跡２基、土壙16基、溝跡５条、ピット３個である。その他の遺構は協議の結果、現状保存されることとなった。

３. 出土遺物には、土師器、須恵器、鉄鏃、石製模造品、土玉、土製支脚、風字硯、通風管、羽口、鉄滓、石鏃、スクレイパー、弥生土器片がある。土師器は古墳時代南小泉式と住社式に比定されるもので、古式須恵器、鉄鏃、石製模造品、土玉、土製支脚はこれらと同時期のものと思われ、年代は５世紀末から６世紀初頭と考えられる。須恵器甕と風字硯、通風管、羽口、鉄滓は古代のもの、石器等は縄文・弥生時代のものと考えられる。

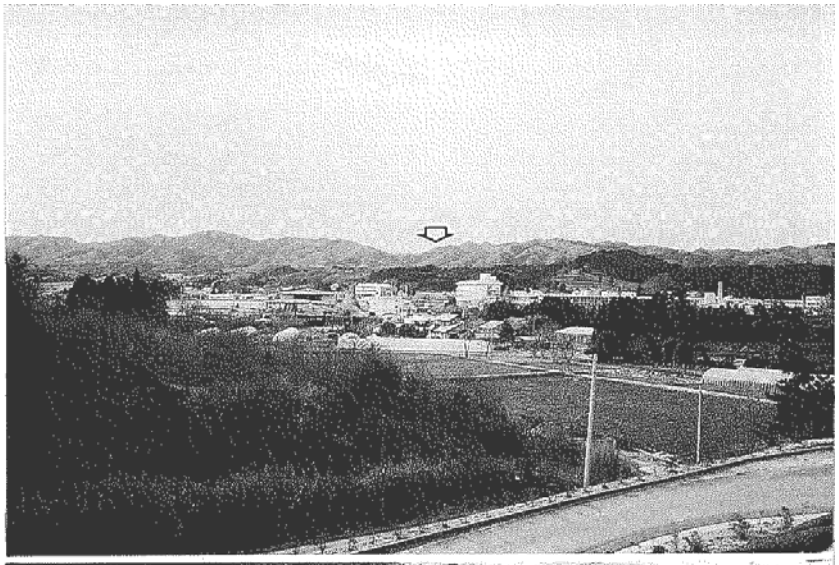
４. 集落の構成は、古墳時代においては第４号住居跡と第４号溝が南小泉式期、第１号住居跡と第２号住居跡が住社式期のものであるが、時間的に大きな差はなく連続していたものと考えられる。第３号住居跡もこの時間幅に含まれるものと考える。また、第１号住居跡は宮城県内でも過去最大のものであり、合戦原遺跡の他の住居跡と比べても面積で４倍近い大きさがある。その特殊性と隔絶性から有力者の住居跡であると推定した。本住居跡のみで有力者の建物としての機能を果たしていたのか、あるいは他の住居跡とともにその機能を果たしていたかは不明であるが、集落内において認められる建物の特殊性と隔絶性が階層差を示している可能性が考えられよう。

５. 窯跡は８世紀後半から９世紀初頭にほぼ近い時期のものである可能性が考えられ、合戦原遺跡周辺の窯跡を考える上で重要な資料である。

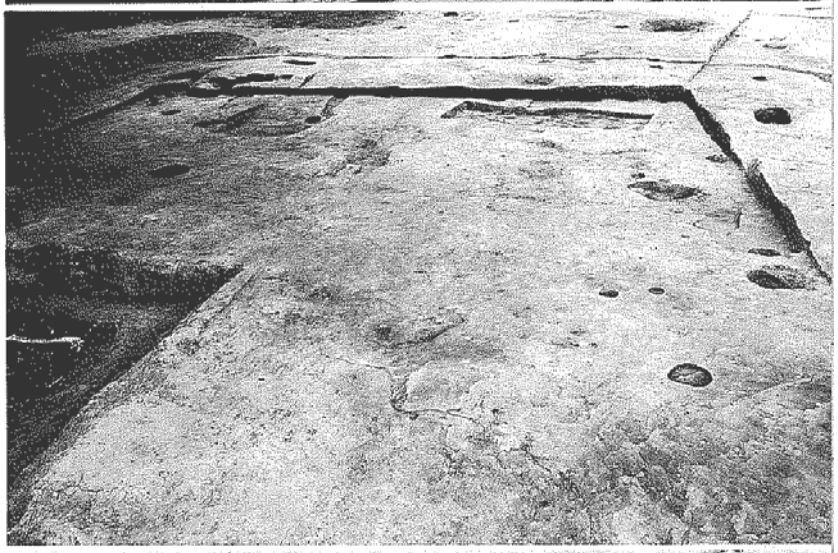
末筆ながら、本報告書を作成にあたり、以下の方々のご助言・ご協力を頂いた。記して感謝の意を評したい。（順不同）
井口祐二氏(松山町教育委員会)、押山雄三氏(郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団)、菊地芳朗氏(東北大学大学院)、後藤秀一氏(多賀城跡調査研究所)、斉藤彰裕氏(角田市教育委員会)、佐藤敏幸氏(河南町教育委員会)、志間泰治氏(日本考古学協会会員)、鈴木勝彦氏(古川市教育委員会)、高橋誠明氏(古川市教育委員会)、丹羽茂氏(多賀城跡調査研究所)、藤沢敦氏(東北大学大学院)、柳沼賢治氏(郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団)、渡辺泰伸氏(日本考古学協会会員)、角田市郷土資料館

写　真　図　版

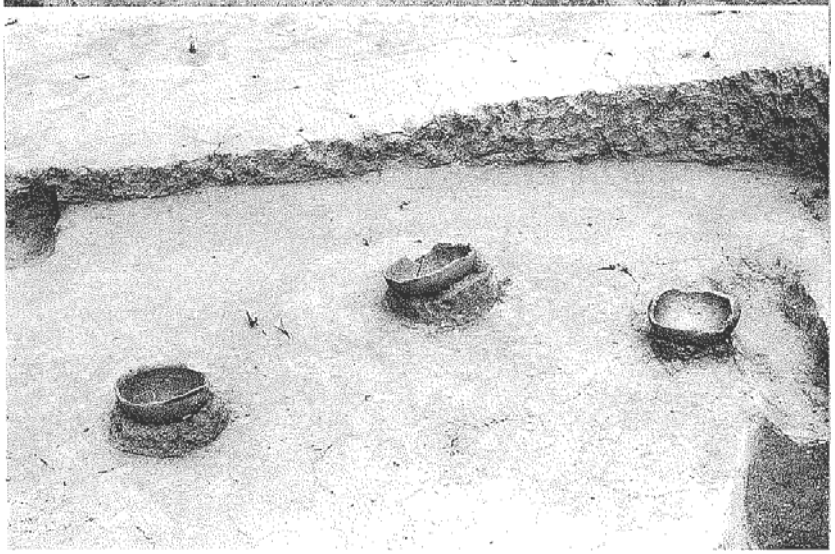
合戦原遺跡遠景
（東南東から）



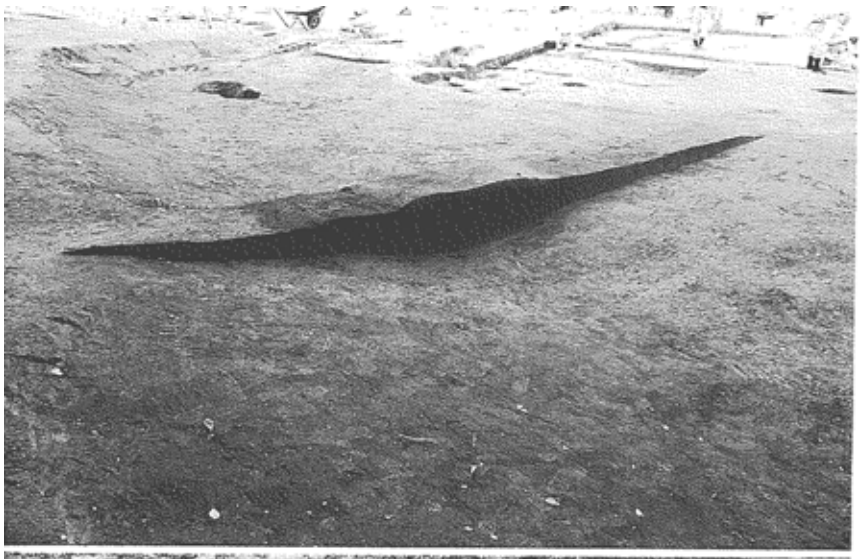
第１号住居跡
（南東から）



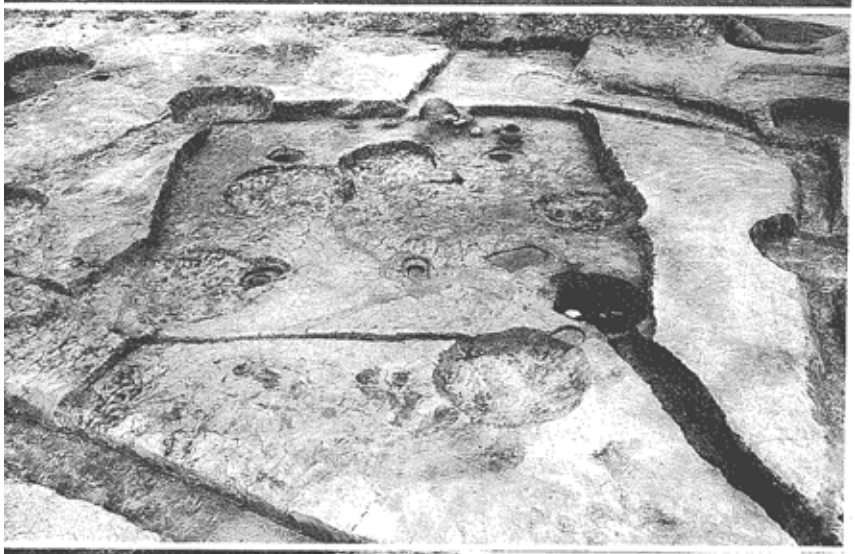
第１号住居跡
遺物出土状況
（東から）



図版１



第１号住居跡西側
沢地部分
（南西から）



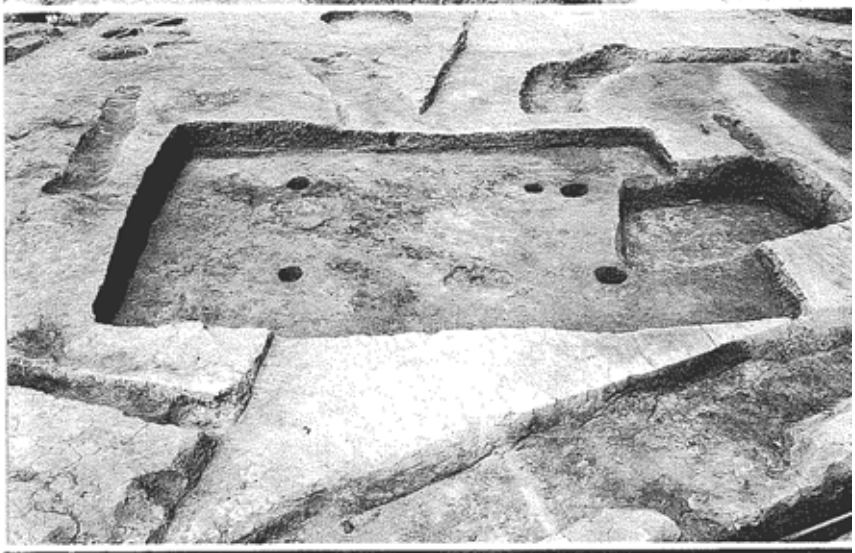
第２号住居跡
（南東から）

第２号住居跡
カマド及び遺物出土状況
（北東から）

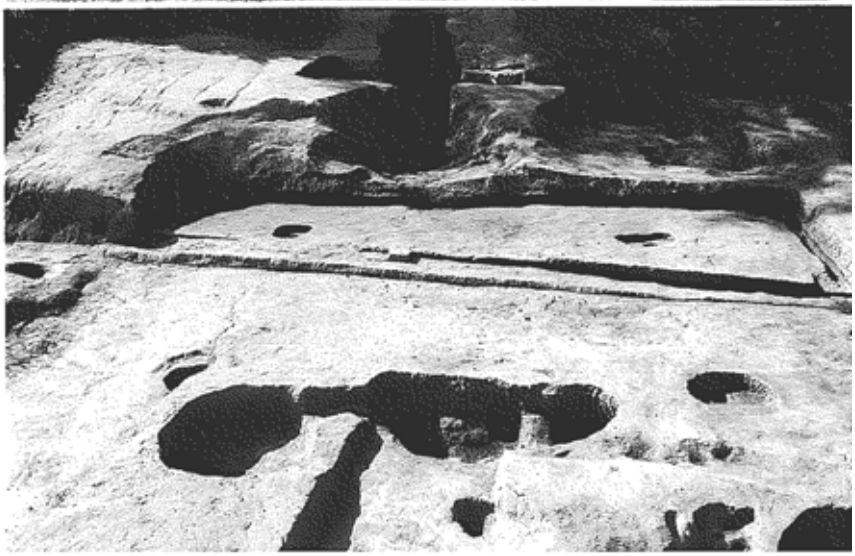
図版２

第２号住居跡
貯蔵穴状ピット
遺物出土状況
（南東から）

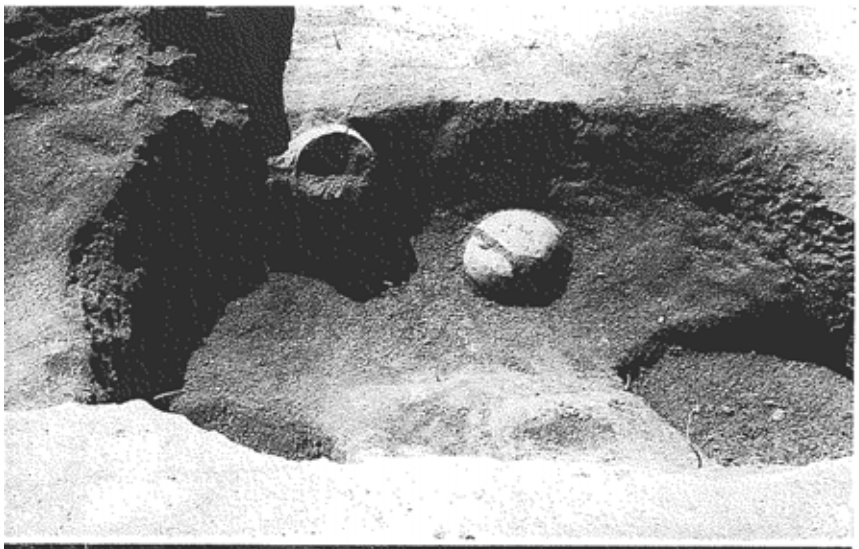
第３号住居跡
（南東から）



第４号住居跡
（南東から）

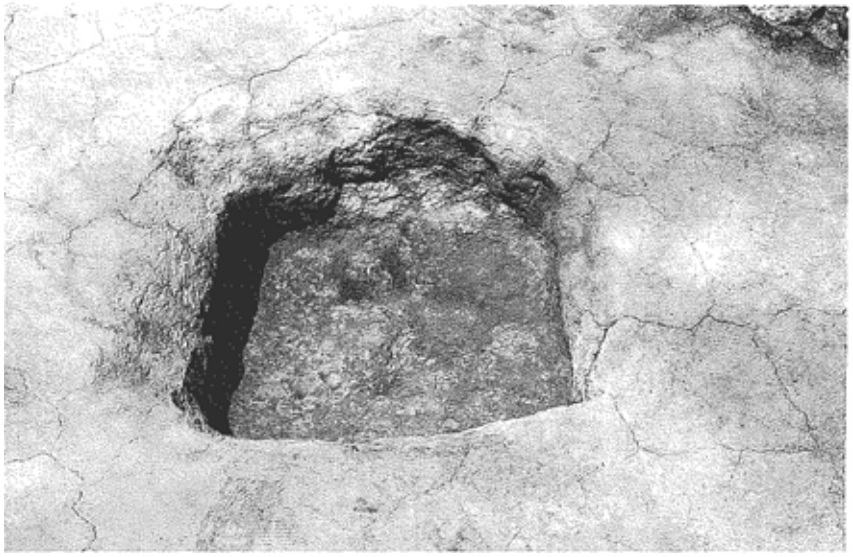


図版３



第４号住居跡
貯蔵穴状ピット遺物
出土状況（南東から）

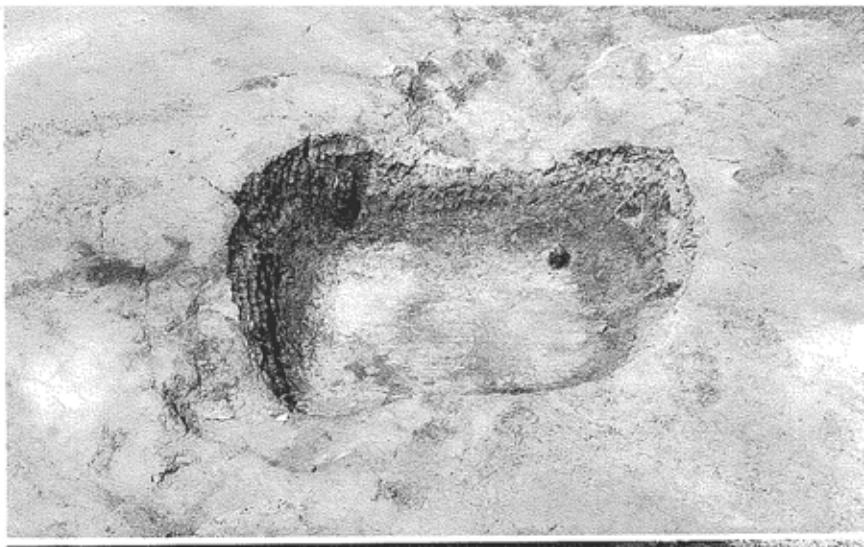
第１，２号竈跡
（南東から）



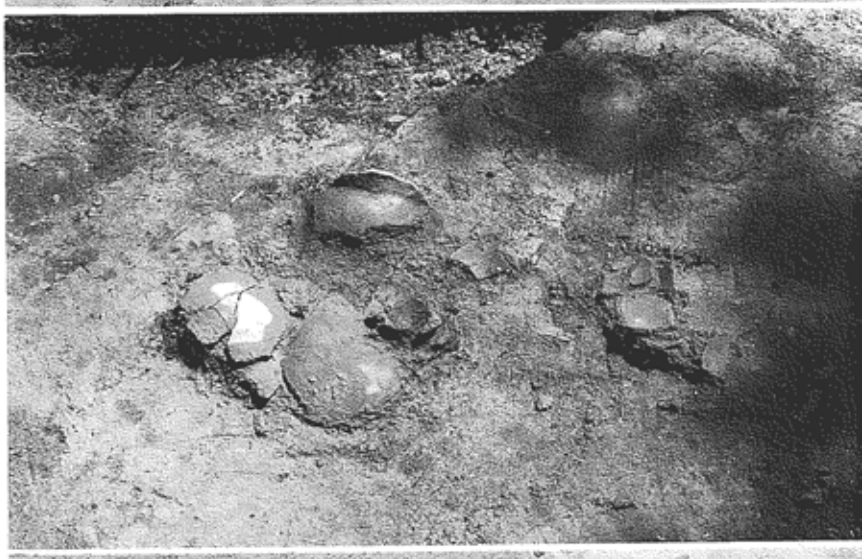
第６号土壙
（南東から）

図版４

第12号土壙
（南東から）



第21号土壙
及び遺物出土状況
（北東から）



第22号土壙
及び遺物出土状況
（南東から）

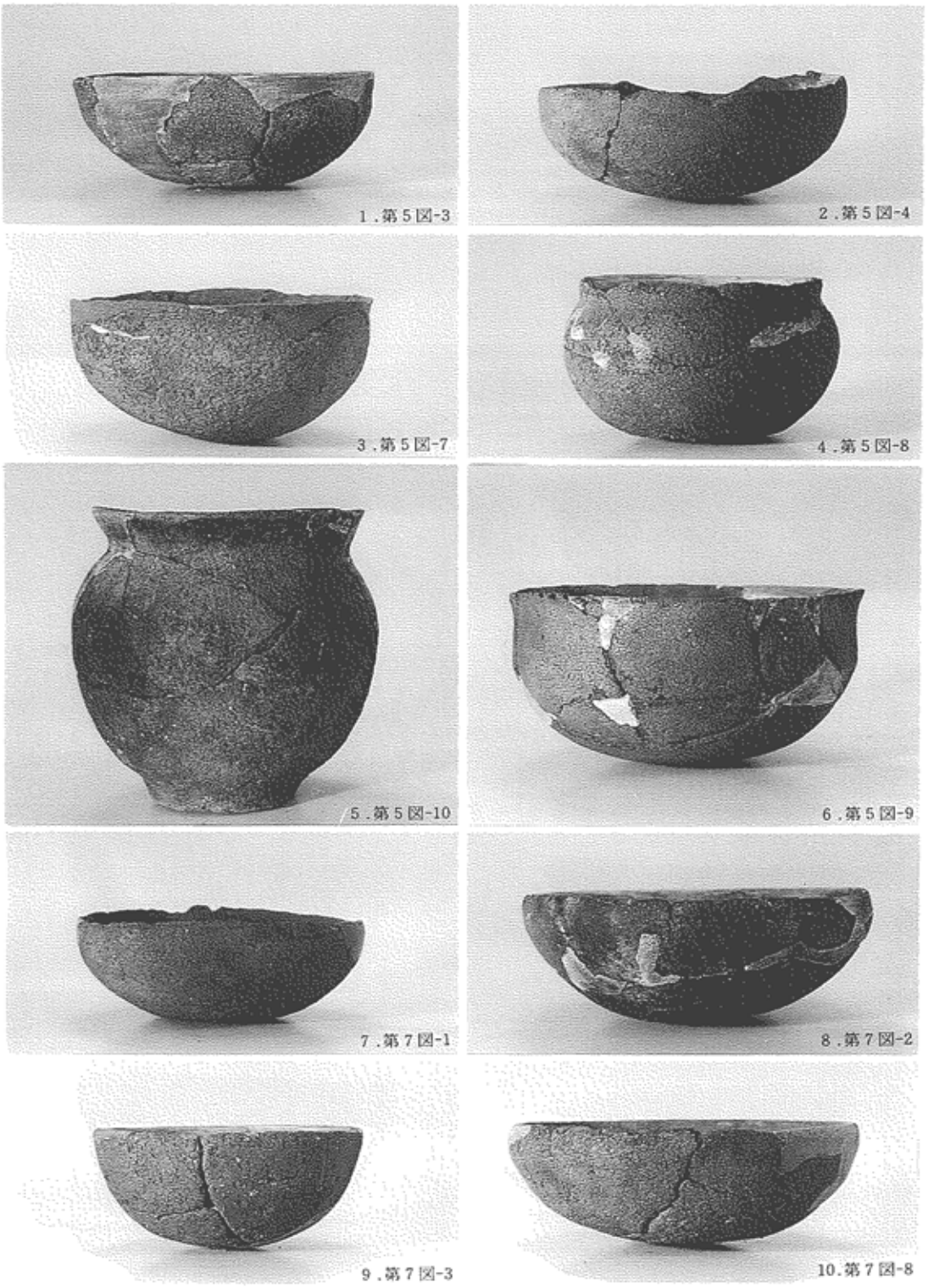
図版 5

第22号土壙
及び第４号溝
（南東から）

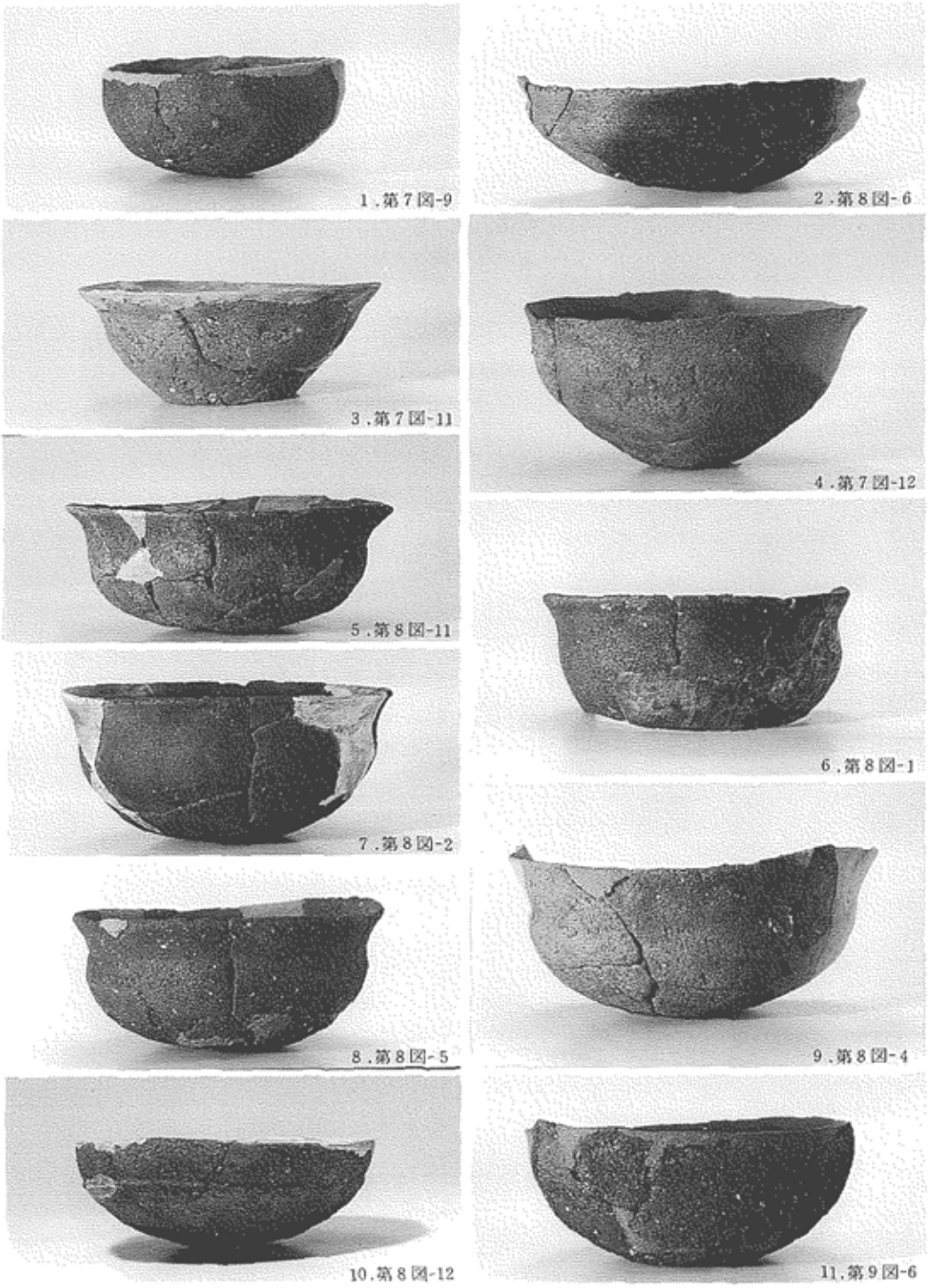
第２号溝
（東から）

現地説明会
風景
（南から）

図版６



図版７　第１号住居跡及び外周溝出土遺物



図版8　第1号住居跡外周溝出土遺物（1）

1．第９図-10

2．第９図-14

3．第10図-5

4．第10図-1

5．第11図-2

6．第10図-2

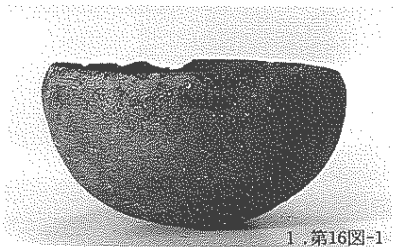
7．第10図-4

図版９　第１号住居跡外周溝出土遺物（2）

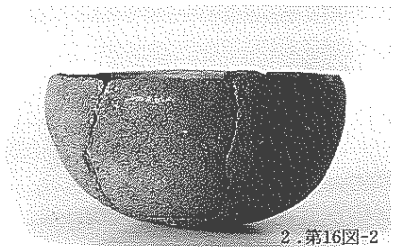
1．第10図-8

2．第12図-1

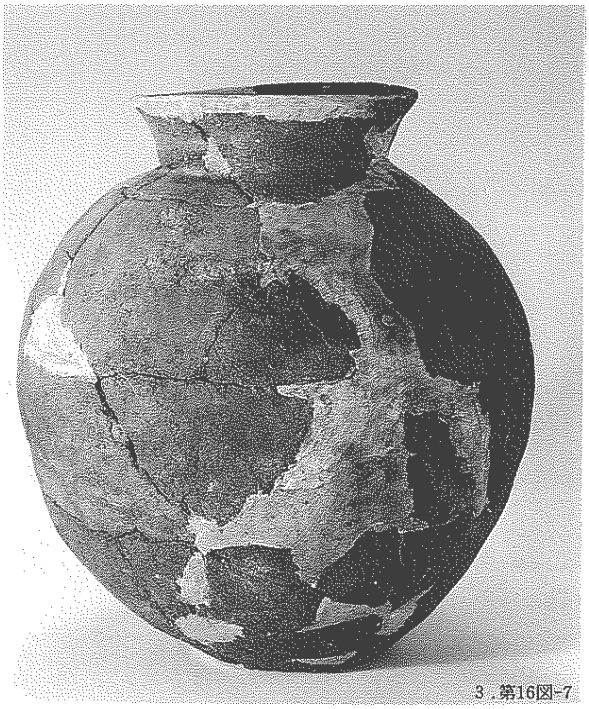
図版10　第１号住居跡外周溝出土遺物（3）



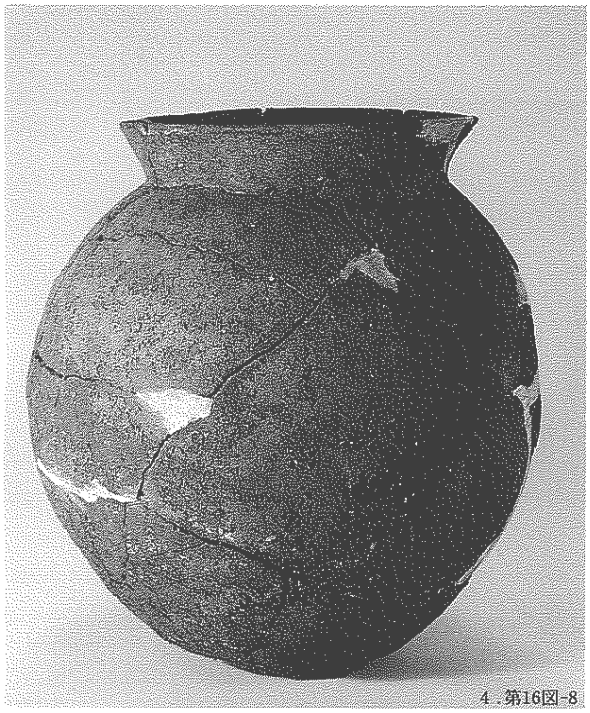
1．第16図-1



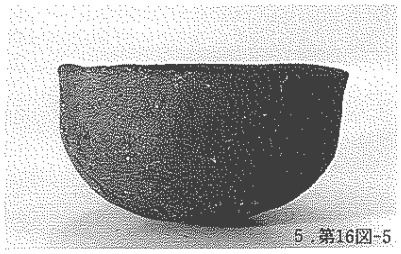
2．第16図-2



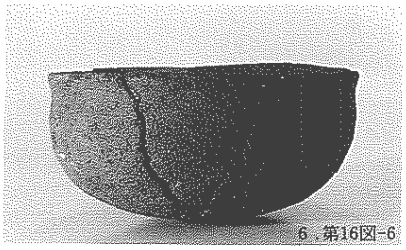
3．第16図-7



4．第16図-8



5．第16図-5

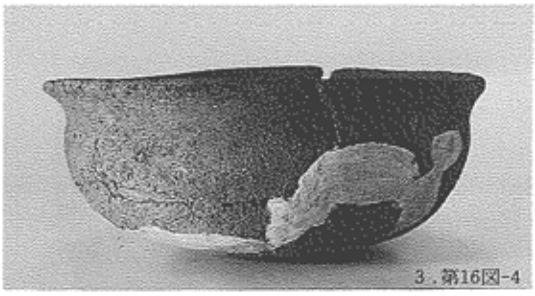


6．第16図-6

図版11　第２号住居跡出土遺物

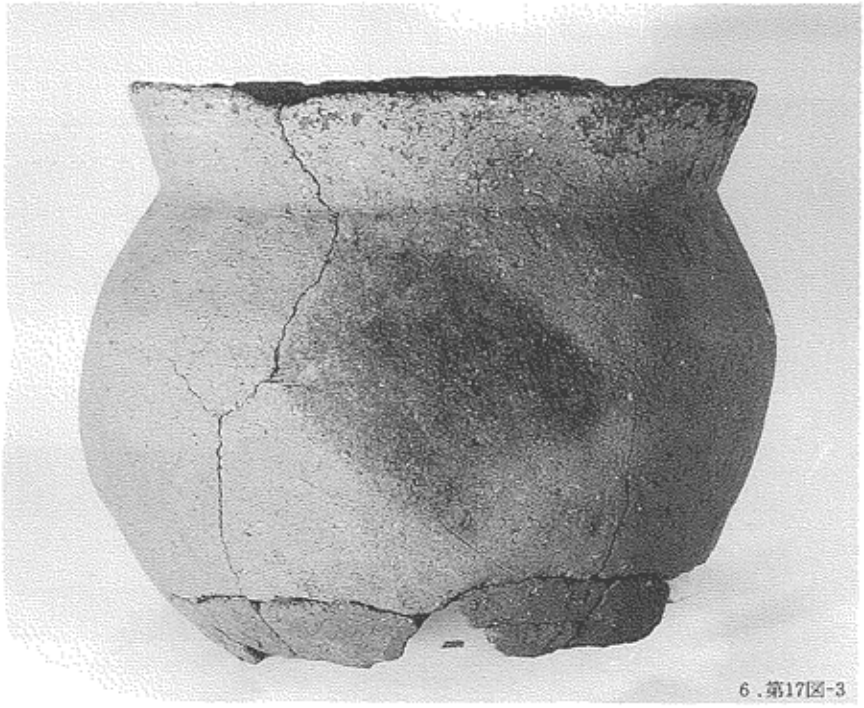
1．第16図-3

2．第17図-1


3．第16図-4

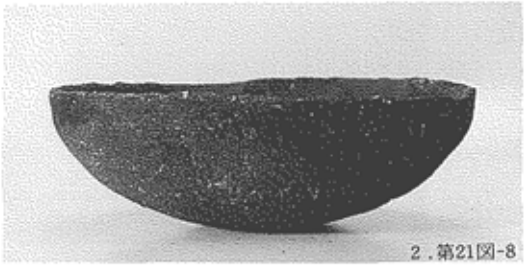
4．第21図-1

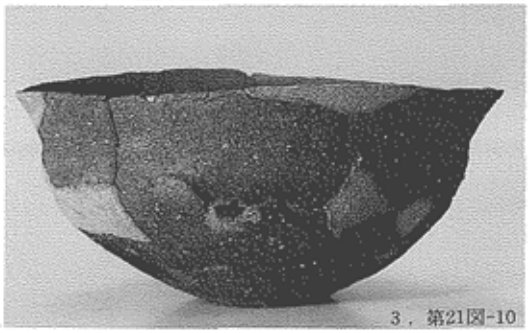
5．第17図-2


6．第17図-3

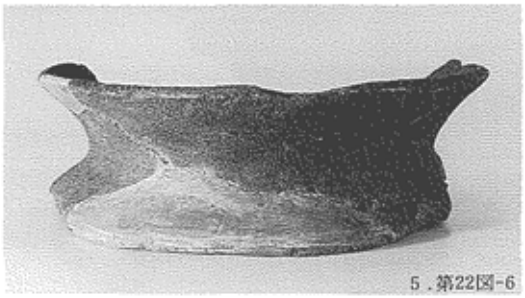
図版12　第２・４号住居跡出土遺物

1．第21図-6


2．第21図-8


3．第21図-10

4．第22図-2


5．第22図-6

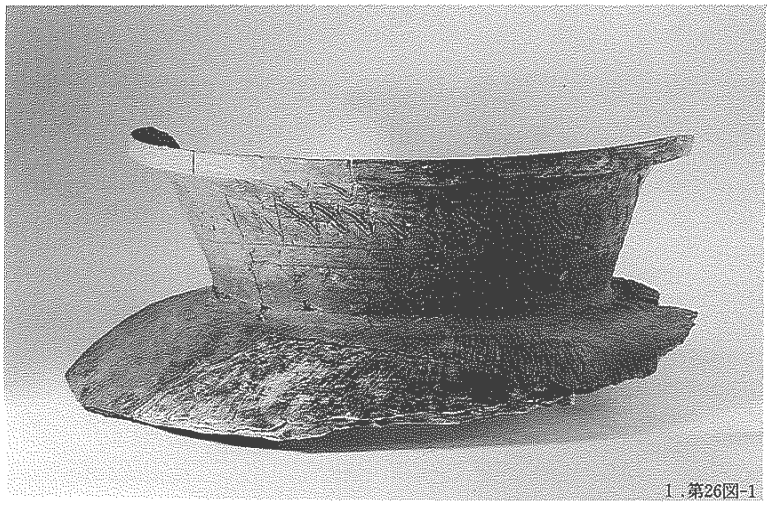
6．第24図-2

7．第27図-1

8．第28図-2

9．第24図-4

図版13　第４・６・７住居跡及び第１号窯跡出土遺物



1．第26図-1

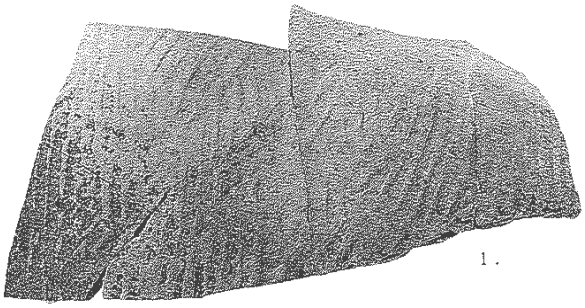
2．第26図-2

図版14　第１号窯跡出土遺物（1）

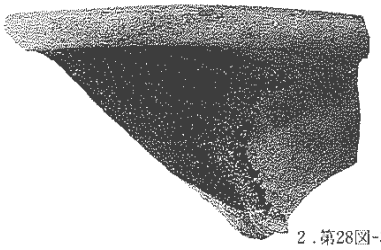
1．第27図-2

2．第28図-1

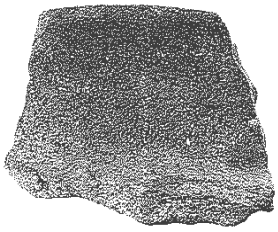
図版15　第１号窯跡出土遺物（2）



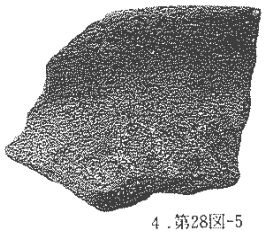
1．



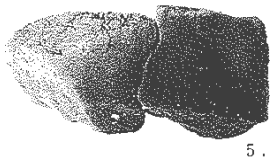
2．第28図-3



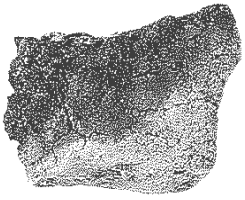
3．第28図-4



4．第28図-5



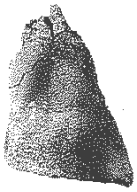
5．



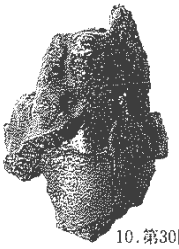
6．第30図-1

7．第30図-2

8．

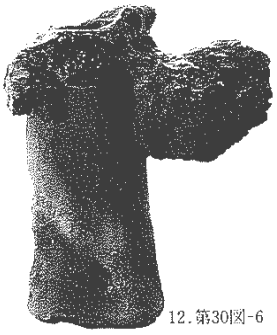


9．第30図-3



10．第30図-4

11．第30図-5



12．第30図-6

図版16　窯跡出土遺物

1．第37図-1

2．第37図-2

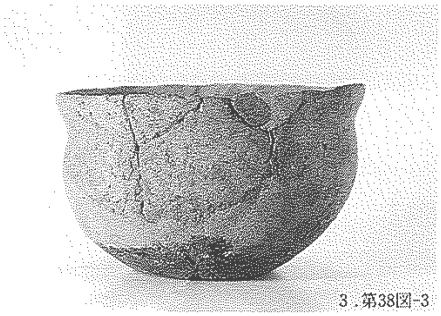
3．第34図-5

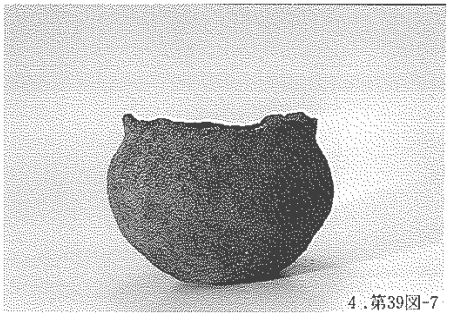
4．第34図-3

図版17　土壙出土遺物

1．第34図-6

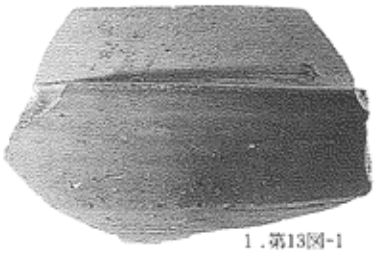
2．第36図-5


3．第38図-3


4．第39図-7

5．第39図-1

図版18　土壙及び溝出土遺物


1．第13図-1

2．第13図-2

3．第14図-1

4．第14図-2

5．第14図-3

6．第14図-4

7．第23図-2

8．第23図-1

9．第40図-1

10．第40図-2

11．第40図-3

12．第40図-8

13．第40図-4

14．第40図-5

15．第40図-6

16．第40図-7

図版19　その他出土遺物

田東山寂光寺跡（たつかねさんじゃっこうじあと）

目　　次

1　はじめに 123
2　調査の方法と経過 124
3　平坦面の形成と層序 127
4　発見された遺構 131
5　発見された遺物 137
6　考察 151
7　まとめ 155

調査要項

遺　跡　名：田東山寂光寺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 64007　ＫＰ）
所　在　地：宮城県本吉郡歌津町字樋の口
調 査 面 積：580 ㎡
調 査 期 間：平成２年（1991 年）８月27 日～９月27 日
調 査 主 体：歌津町教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課　白鳥良一・小井川和夫・阿部博志
古川一明・菅原弘樹・鈴木真一郎・木皿直幸・村上利雅
歌津町教育委員会　千葉雅久
調査参加者：阿部すみ子・阿部房江・菅原けい子・鈴木定一郎・山内亀一
山内とき子（敬称略）

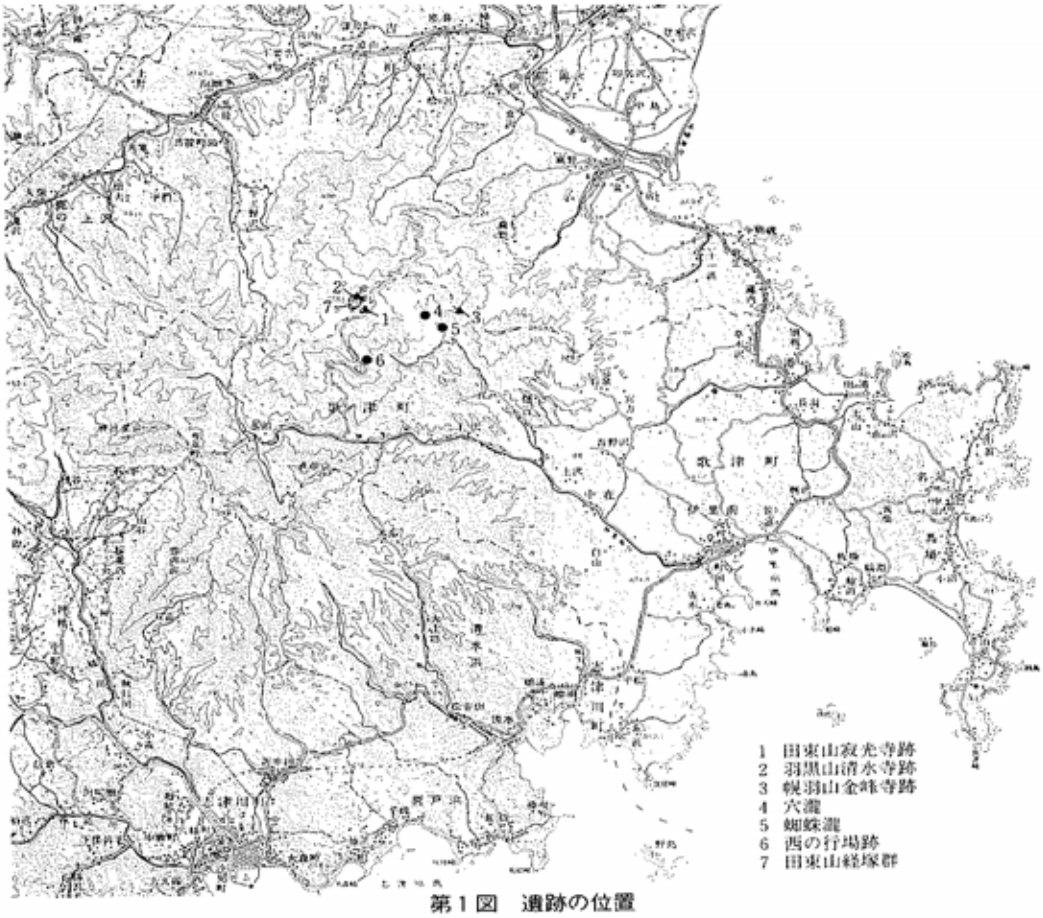
田東山寂光寺跡（たつかねさんじゃこうじあと）

1　はじめに

寂光寺跡は、本吉郡歌津町字樋の口に所在し、修験の山として知られる田東山(標高512m)の中腹に立地する。

田東山の歴史については、『奥羽観蹟聞老志』や『封内風土記』などによれば(これらの記載についてはいずれも由来が不詳であり不明な点が多いが)、平安時代末に平泉の藤原秀衡によって大規模な寺院が造営され、山頂に羽黒山清水寺、半腹に田東山寂光寺、北嶺に幌羽山金峰寺の七堂伽藍をはじめ、新たに七十余坊を造営したと伝えられており、さらに中世にはこの地を治めていた葛西氏によって再興されたとされている。

寂光寺については、山頂より50m程下がった山の中腹付近の、現在計仙麻大島神社が建



第１図　遺跡の位置

っている場所がその跡と言われている。拝殿は堂や坊の跡とみられる斜面を削り出した平垣面上に立地し、境内には礎石が多数残されている。また、その下の斜面上にも大小の平坦面が南向きと東向きに形成されており、これらが沢を囲むように「L」字形に並んでいることが明らかになっている(第２図)。一方、文献上では葛西氏が坊舎四十余宇を再興した後に、さらに再興されたという記録はなく、「田東根山由来記(出典不明)」や『封内風土記』、『細浦千葉家文書』などによると江戸時代には既に荒廃していることから、上記の平坦面や礎石が文献にみられる葛西氏あるいは奥州藤原氏の時代の寺院や坊の跡である可能性も想定される。

宮城県教育委員会と歌津町教育委員会では田東山に残されている遺構群を解明するため、３か年にわたる調査を実施した。昭和63年度の第１次調査は、現在の計仙麻大島神社（A・B区）とその下の平坦面（C区）を対象として行った結果、整地地業や礎石建物跡などが検出され、中世陶器や中国銭、懸仏などの遺物が発見された。平成元年度の第２次調査は、中世の遺物が多数採集される沢（第２図）の西側上方にある平垣面（D区）の調査を行い、多数の柱穴が検出され、中世陶器や鏡、古銭などの遺物が発見された。

予定の最終年度となる本年度の調査は、D区平坦面の全面について実施した。さらに前述のD区下の沢の形成過程を探るため、その沢についても調査を実施した。

２　調査の方法と経過

調査は８月27日に開始した。昨年度調査した後埋め戻した土も含め、表土を重機によって除去し、遺構を精査した。柱穴については平面形を確認するにとどめ、数個についてのみその堆積状況を調べるため掘形を半截した。盛土整地の部分は全体の４分の１ほどを掘り下げ、整地層中に石組・石敷の遺構が検出された部分ではそれらの遺構保全のためそれ以下の掘り下げは行わなかった。

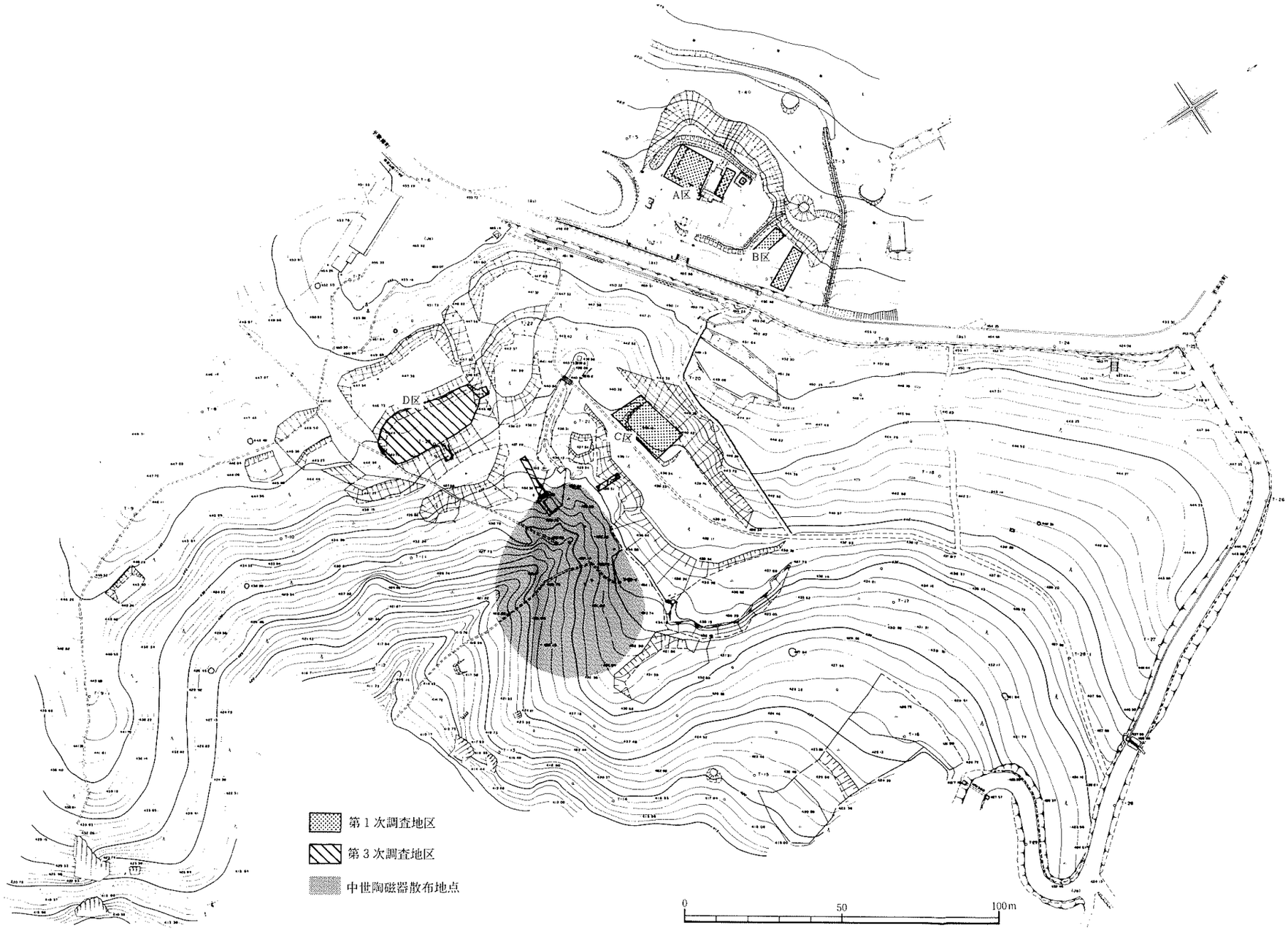
沢の調査は２か所にトレンチを設け、重機によって表土を除去し、その断面図を20分の１で作成した。

調査が終了に近づいた９月22日には、地元の方々を対象とした現地説明会を開催し、９月27日に調査を終了した。その後に調査区全面を埋め戻している。

遺構の実測については、基準線をD区平坦面の長軸方向に任意に設定し、３m方眼を組んだ。その際の原点の国土座標はX＝-139179.611、Y＝55497.063で、基準線の方向は座標北に対して3°01′11″東へ偏している。平面図は20分の１の遺形測量で行い、断面図もその縮尺にならっている。石組・石敷の遺構については10分の１で実測した。また既存の1000分の１の田東山地形図とは別にD区平坦面付近の地形図を100分の１の平板測量にて作成

田東山史跡地形測量図

S = 1 : 1,000



した。

写真記録については白黒が35mmおよび４×５フィルム、カラーはリバーサルフィルムによって行った。

３　平坦面の形成と層序（第５図）

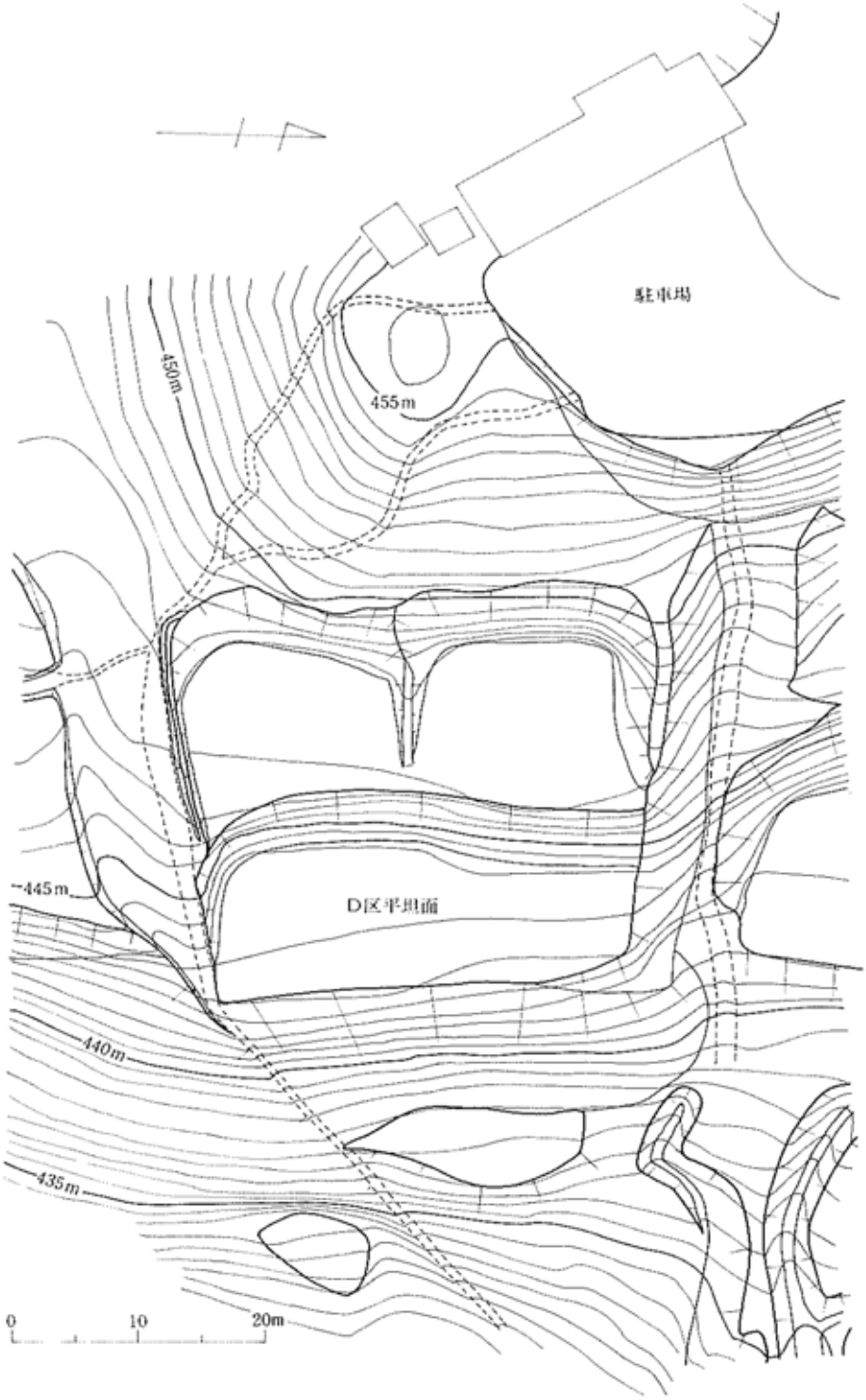
Ｄ区の平坦面は山腹斜面を造成することによって作り出されており、山側の西半部が斜面の切り出し、谷側の東半部が盛土整地および自然堆積層によって形成されている。平坦面の形状は傾斜に直交する（南北）方向に長い長方形を呈し、規模は南北33m東西15m面積約500㎡で、標高は444mである。なお、この平坦面の西側（山側）には３m近い段差を隔ててＤ区の上位にほぼ同規模の平坦面があり、また、平坦面の東側（谷側）にも６m近い段差を隔ててＤ区の下位に小さな平担面がある（第３図）。

調査区内の層は９枚の自然堆積層と３枚の盛土整地（以下整地層と記す）からなり、整地層はいずれも間に自然堆積層を挟んで形成されている。以下、各層の分布や特徴とあわせて平坦面の形成のありかたについて、時間的経過にしたがって述べる。

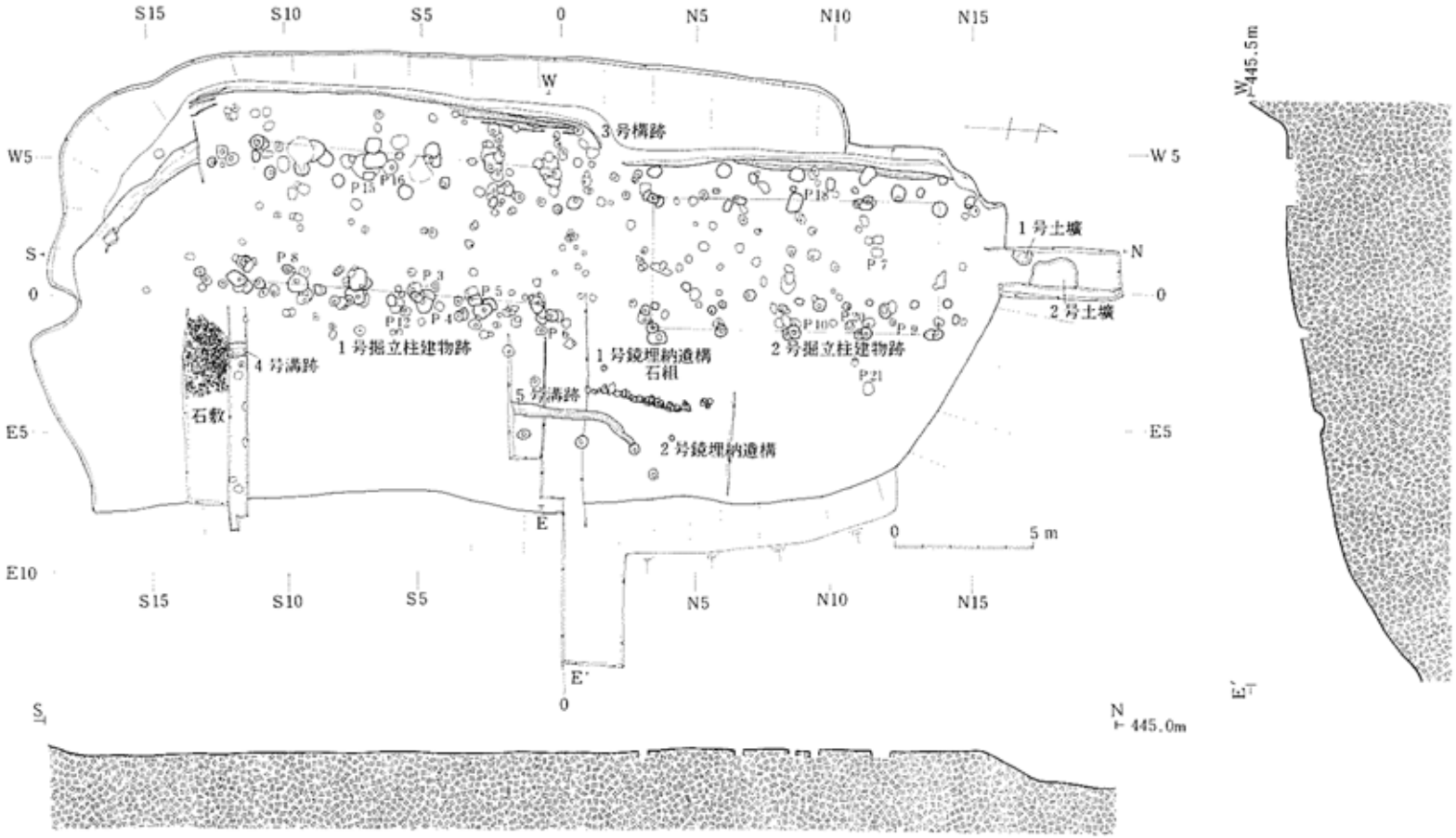
第Ｘ層：ＳＸ02Ａ切り出し整地（以下整地層に付された記号のＳＸ02を省略する）による地山である。

地山上面の残存状況をみると、山側の西半分がほぼ水平で、東半分は大変緩やかな斜面となっている。平坦面の奥壁は一直線状ではなく、ほぼ北側半分では南側に比べ下端が東側に１mほど張りだしている。奥壁沿いには重複がみられる溝跡が巡っており(３号溝跡)、これも奥壁に沿って折れ曲がっている。また、東側の緩斜面の中程には南北方向に20～40ｃmの段差が認められ、それに沿って浅い溝跡が巡っている(４・５号溝跡)。こちらの下端に溝を伴う段差も前者に対応するように曲がっている。この段差および溝跡によって、当初は平坦面が上下２段になっていたと考えられる。

ここで溝跡について特徴を記しておきたい。**３号溝跡**は平坦面の奥壁沿いにめぐる溝で、地山上面で検出されている。２度作り替えが認められ、新しい溝跡ほど平坦面の西側にずれて巡っている。規模は最も新しい3Ｃ号溝跡が上幅40～60ｃm、下幅15～40ｃm、深さ30ｃmで、次に新しい3Ｂ号溝跡が上幅20～30ｃm、下幅10～20ｃm、深さ10ｃmほどであり、最も古い3Ａ号溝跡については他の溝跡によって壊されているため不明である。堆積土は地山粒・礫・炭化物を含む褐色や黄褐色を呈する自然流入土である。**４・５号溝跡**は平坦面東側の地山上面で検出されており、一連の溝跡とみられるものである。規模は上幅30～35ｃm、下幅が15～20ｃmで深さが5～10ｃmである。堆積土は地山粒を含む暗褐色の自然流入土である。これらの溝跡は平埋面における排水溝としての役割を担ったものと考えられ



第３図　Ｄ区平坦面付近の地形図



第４図　Ｄ区平坦面遺構配置図

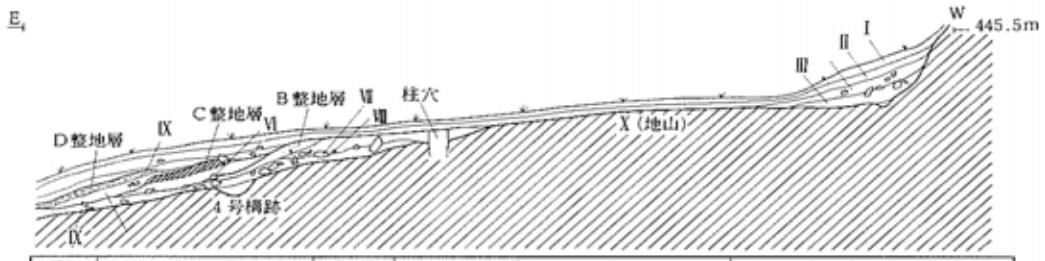
る。

第IX・Ⅷ層：いずれも平坦面の東側中央部のみに分布する褐色の自然堆積層で、IX層は地山面を、Ⅷ層はIX層および地山面を覆っている。この段階で前述の段差を伴う４・５号溝跡は大半が埋まり、最初の段階で平坦面にみられた上下２段の段差は不明瞭なものになっていたことが窺われる。

第Ⅶ層：平坦面の東半部から下方斜面にかけて分布する黄褐色の自然堆積層で、第Ⅷ・IX層および、地山面を覆っている。この層の上面で土留めのための施設と考えられる石組・石敷の遺構を検出している。**石組**（第７図）は平坦面の東側中央の第Ⅶ層上面で検出されている。南北方向に4.5mの長さを確認しており、石組の石の上面と第Ⅶ層上面とは最大30ｃmほどの段差が生じている。石は長軸30ｃｍ前後のふぞろいの角礫を南北に並べたもので、簡単な作りをしている。石材は粘板岩が１点あるほかは、安山岩系のもので占められている。**石敷**（第７図）は平坦面の南東側の第Ⅶ層上面で検出している。部分的に検出したのみであるのでその全体的な規模は不明だが、東西2.7m、南北は1.5m以上の範囲に長軸数ｃmの河原石（円礫）を疎らに敷きつめたもので、その上面はなだらかに東へ傾斜している。また、河原石にまじって鉄滓も散見されている。

Ｂ整地層：地山土を主体とする整地層である。平坦面東側の緩斜面の中ほどから南側にかけて分布し、第Ⅶ・Ⅷ層を覆っている。この層の上面では石組はまだ露出しているが、石敷は埋もれている。

第Ⅵ層：Ｂ整地層や第Ⅶ層の間に挟まれて、平坦面の東側に厚く分布する暗褐色土層で、



層位	土色	土性	備考	出土遺物
第Ⅰ層	黒色（10YR２／２）	シルト	表土	中世陶器、石製品
第Ⅱ層	にぶい黄褐色（10YR４／３）	シルト	地山粒、炭化物を含む。	中世陶器、かわらけ、瓦器質土器ほか
第Ⅲ層	褐色（10YR４／４）	砂質シルト	地山粒、地山礫、炭化物を含む。	中世陶器、土製品、石製品、銭ほか
第Ⅳ層	にぶい黄褐色（10YR４／３）	シルト	地山粒、地山礫、炭化物を含む。	古銭
D整地層	にぶい黄褐色（10YR４／３）	砂質シルト	地山粒、地山礫、炭化物を含む。	――
第Ⅴ層	褐色（７.５YR４／４）	シルト	地山粒、地山礫、炭化物を含む。	――
C整地層	褐色（７.５YR４／３）	砂質シルト	地山粒、地山礫、炭化物を含む。	中世陶器、瓦器質土器、土製品、石製品、銭
第Ⅵ層	暗褐色（10YR３／４）	砂質シルト	地山粒、地山礫を含む。炭化物を多量に含む。	中世陶器、かわらけ、石製品、銅製品
B整地層	にぶい黄褐色（10YR４／３）	砂質シルト	地山粒、地山礫、炭化物を含む。	中世陶器、かわらけ、銭、古銭
第Ⅶ層	にぶい黄褐色（10YR４／３）	砂質シルト	地山粒、地山礫、炭化物を含む。	中世陶器、瓦器質土器、刀子、鉄釘
第Ⅷ層	オリーブ褐色（２.５YR３／３）	砂質シルト	地山粒、地山礫を含む。炭化物、焼土を多量に含む。	中世陶器、かわらけ、鉄釘
第Ⅸ層	褐色（７.５YR４／４）	粘土	地山礫、炭化物、焼土粒を含む。	――
第Ⅹ層	にぶい黄褐色（10YR４／３）	シルト	基盤岩風化土	――

第５図　調査区内の層序

大量の炭化物を含むとともに遺物も数多く含んでいる。この層の上面では石組はその頭の部分が露出しているのみである。

C整地層：地山土を主体とする褐色の整地層である。平坦面の東側に広く分布し、第Ⅵ層を覆っている。この層の上面では当初の平坦面の段差は完全になくなり、一つの面となっている。

第Ⅴ層：C整地層を覆う褐色の自然堆積層である。平坦面の東南側に分布する。

D整地層：地山土を主体とする黄褐色の整地層である。平坦面の東南側に分布し、第Ⅴ層を覆っている。

第Ⅳ層：黄褐色の自然堆積層で、平坦面の東端に分布し、３枚の整地層（B・C・D整地層）および間層となる第Ⅴ・Ⅵ層を覆っている。

第Ⅲ層：褐色の自然堆積層で、奥壁斜面から平坦面にかけて分布し、地山面を覆っている。第Ⅳ層との新旧関係はない。

第Ⅱ・Ⅰ層：いずれも調査区全体を覆う自然堆積層で、第Ⅱ層は黄褐色土層、第Ⅰ層は黒色土層である。第Ⅰ層が表土である。

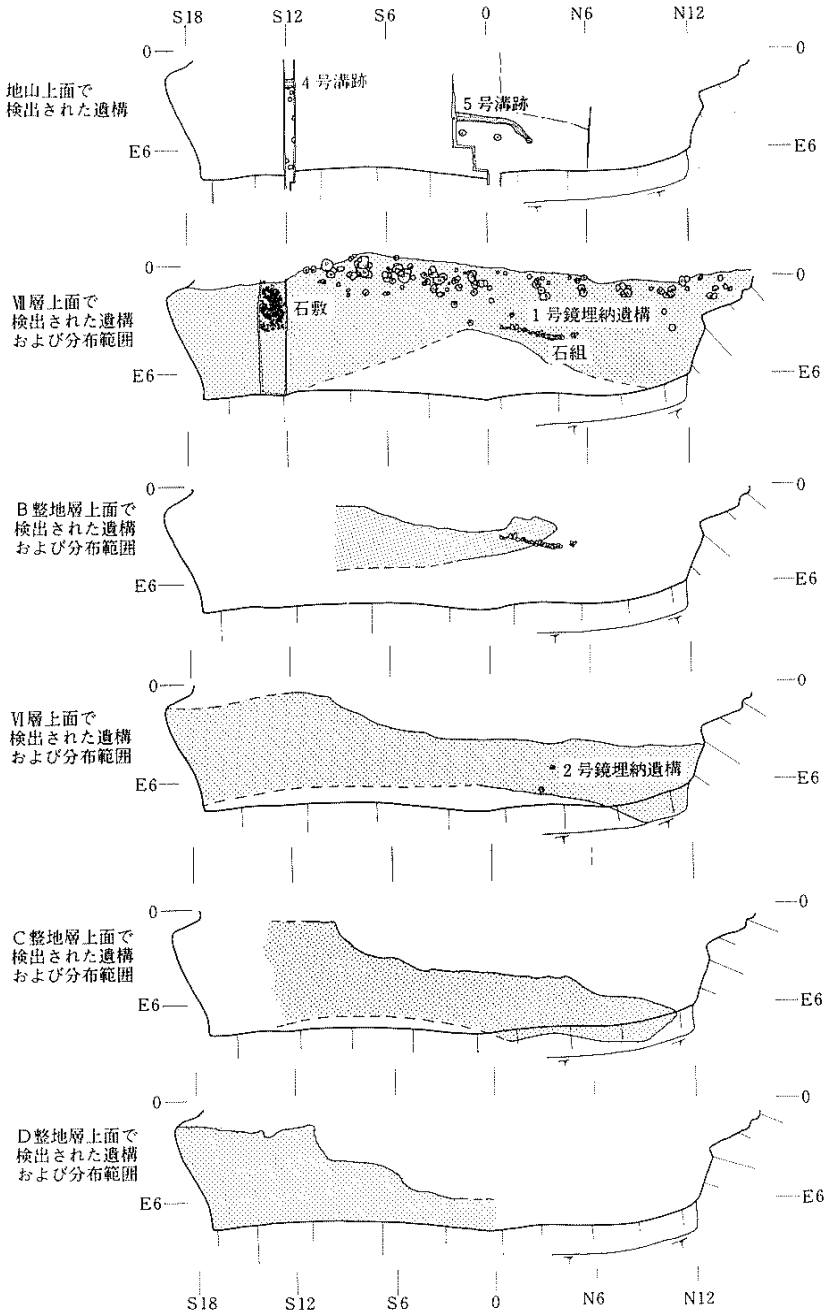
なお、昨年度の報告書に記載されている基壇土については、全面を調査した結果、基壇土とは認められず、地山の風化によるものと考えられたので、本報告書では特に記載していない。

４　発見された遺構（第４図）

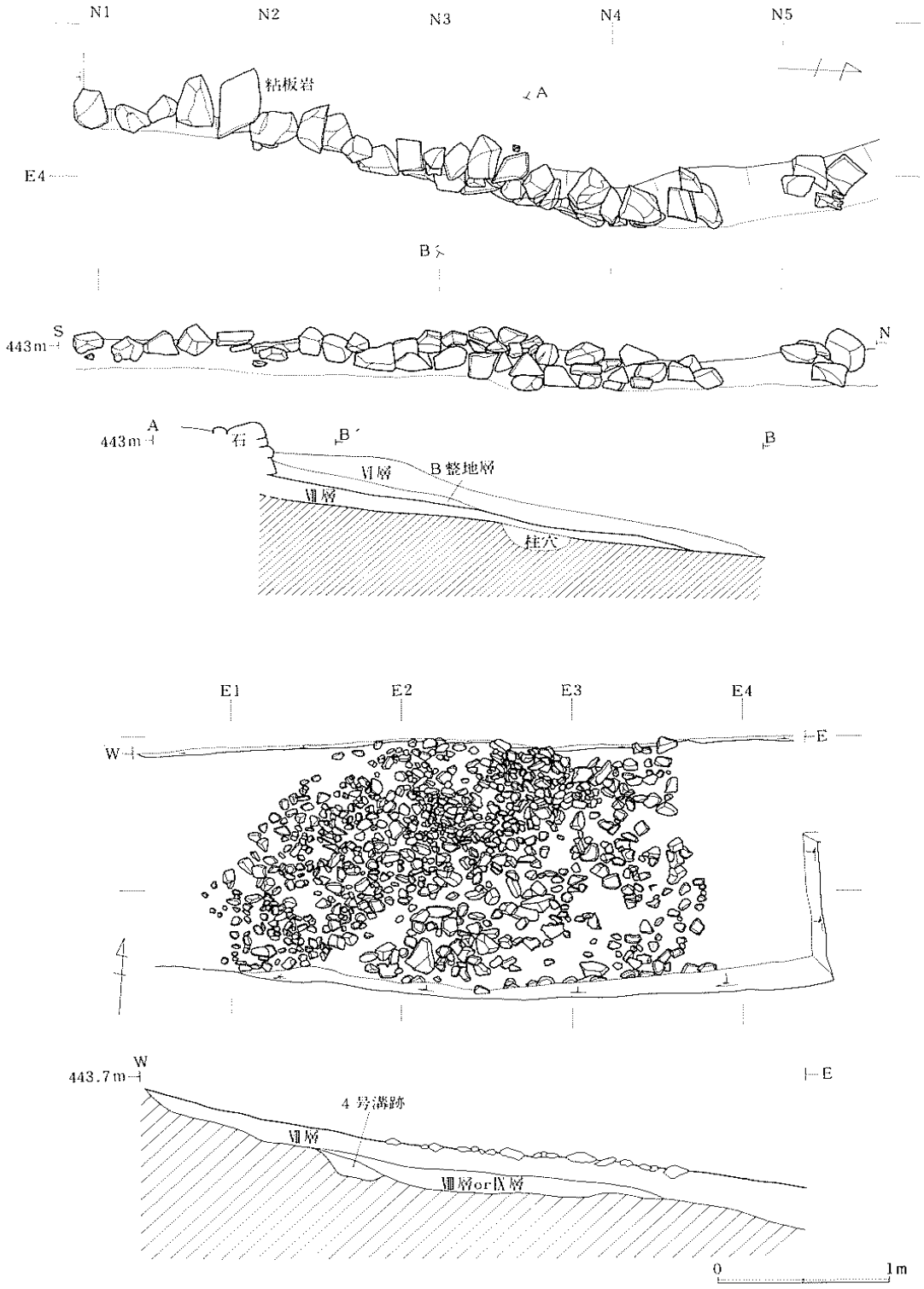
今回の調査で発見した遺構には、前章で述べた石組・石敷の遺構をふくむ整地地業や溝跡のほか掘立柱建物跡、鏡埋納遺構、土壙がある。

【掘立柱建物跡】　平坦面の西側（切土整地がなされている部分）の第Ⅶ層および地山上面で多くの柱穴が検出されている。それらの組合せを検討した結果、東側の桁行を概ね揃えた掘立柱建物跡が南北に２棟並び建つことが考えられた。

１号掘立柱建物跡　平坦面南側に位置する桁行５間、梁行１間の南北棟であるが、残りのよい東側の桁行では各々の横穴で10回以上の切り合いがあり、同位置で何度も建て替えられたことが窺われ、そのうち４棟分の組合せが判明している。建物総長は桁行が10.5～12m、梁行が4.0～4.5mである。桁行の柱間は2.0～2.5mで、桁行東側の方向N－７～12°－Eである。掘形は径40～80ｃｍの円形もしくは一辺が30～60ｃｍの方形であり、柱痕跡は径10～15ｃｍ程の円形である。いずれの数値も建て替えによって若干異なっている。なお、柱穴は新しいもの程径が大きくなるという傾向が認められた。さらに棟通りの、桁行の柱穴に対応する位置には掘形の小さな柱穴がいくつか重複して認められており、床束と考え


S18
S12
S6
0
N6
N12
地山上面で
検出された遺構
4 号溝跡
5 号溝跡
E6
Ⅶ層上面で
検出された遺構
および分布範囲
石敷
1 号鏡埋納遺構
石組
B 整地層上面で
検出された遺構
および分布範囲
Ⅵ層上面で
検出された遺構
および分布範囲
2 号鏡埋納遺構
C 整地層上面で
検出された遺構
および分布範囲
D 整地層上面で
検出された遺構
および分布範囲

第 6 図　前庭部の変遷


N1
N2
N3
N4
N5
粘板岩
A
E4
B
S
443m
N
A
443m
石
B′
B
Ⅶ層
B整地層
Ⅷ層
柱穴
E1
E2
E3
E4
W
E
W
443.7m
E
4号溝跡
Ⅷ層
Ⅷ層orⅨ層
0
1m

第7図　石組・石敷

られる。掘形埋土から、天目茶碗、かわらけ、開元通宝、元豊通宝、鉄釘が出土している。

２号掘立柱建物跡　平坦面北側に位置する桁行４間、梁行１間の南北棟で、これも１号掘立柱建物跡と同様に同位置で何度も建て替えられたことが窺われ、５棟分の組合せが判明している。建物総長は桁行が10～11m、梁行が4.5～5.0mである。桁行の柱間は2.5～3.0mであり、方向は桁行東側でＮ－２～８°－Ｅである。掘形は径40～70ｃｍの円形もしくは一辺が30～60ｃｍの方形であり、柱痕跡は径10～15ｃｍ程の円形である。いずれの数値も建て替えによって若干異なってきている。さらに棟通りの、桁行の柱穴に対応する位置には掘形の小さな柱穴がいくつか重複して認められており、床束と考えられる。掘形埋土から鉄釘、柱材が出土している。

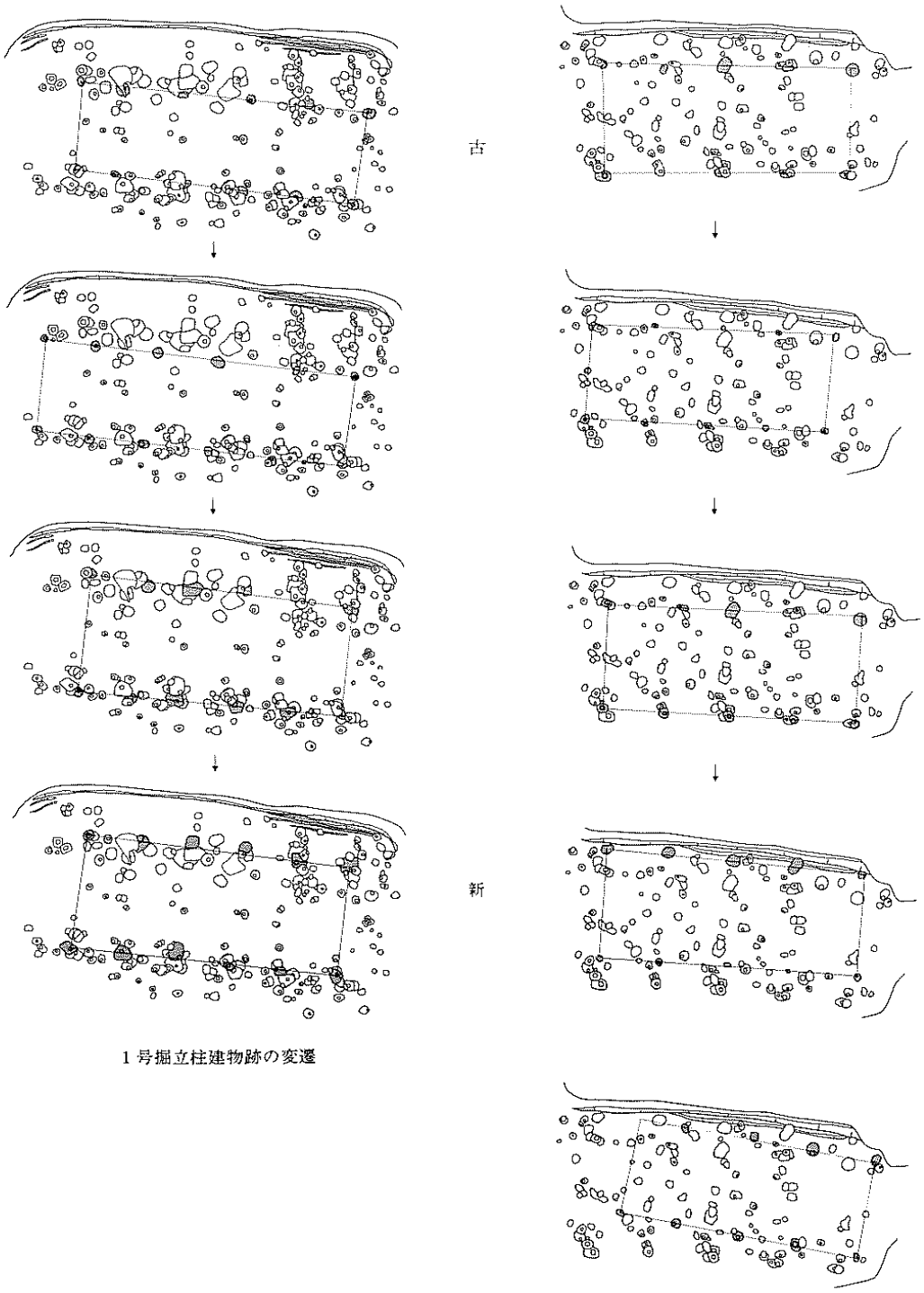
【盛土整地下の地山上面で検出された柱穴群】　平坦面の南東側および中央東側の盛土整地を除去した際に、地山上面で数個の柱穴が検出された。これらについては部分的にしか検出していないため詳細は不明であるが、５号溝跡の東側で検出された柱穴は柱間２間以上の柱穴列になることなどから、何らかの施設があったものと考えられる。

【鏡埋納遺構】

１号鏡埋納遺構　平坦面のほぼ中央、第Ⅶ層上面で検出している。鏡は径20ｃｍ、深さ10ｃｍほどのピットに鏡面を上にした状態で出土した(第９図)。鏡の表面には木質が付着しており、木製の箱に入れられて埋納されたものと考えられる。出土した鏡は、径11.5ｃｍ、厚さ0.2ｃｍ、重量180ｇの直角式縁をもつ三鱗地双鳥鏡である。鏡背の文様は二重圏によって区切られ、外区には鋸歯文帯と櫛歯文帯をめぐらし、内区には三鱗を地文に接嘴した双鳥（双雀？）を配している。鈕は、花形座鈕で菊を模している(菊花座鈕)。なお、内区左上方には鏡面から鏡背に貫通する穴が穿たれており、懸垂のための穴と推測される。鏡面に毛彫りや墨書などの痕跡は認められない。

２号鏡埋納遺構　平坦面の東側、第Ⅵ層上面で検出している。鏡は径25ｃｍ、深さ15ｃｍほどのピットに鏡背を上にした状態で出土した(第９図)。埋土は炭化物・地山粒が少量混じる粘土質の暗褐色土である。出土した鏡は、径9.4ｃｍ、厚さ0.2ｃｍ、重量160ｇ直角式縁をもつ菊花散双鳥鏡である。鏡背の文様は二重圏によって区切られ、外区には櫛歯文帯をめぐらし、内区には菊花を地文に接嘴した双鳥（双雀？）を配している。鈕は亀を模した亀鈕である。鏡面に毛彫りや墨書などの痕跡は認められない。

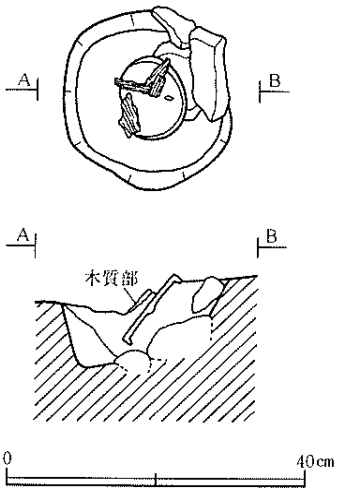
【土壙】　平坦面北斜面の第Ⅶ層上面で２基検出したが、部分的に検出したにとどまり全体の規模については不明である。埋土から瓦器質土器の破片が出土している。



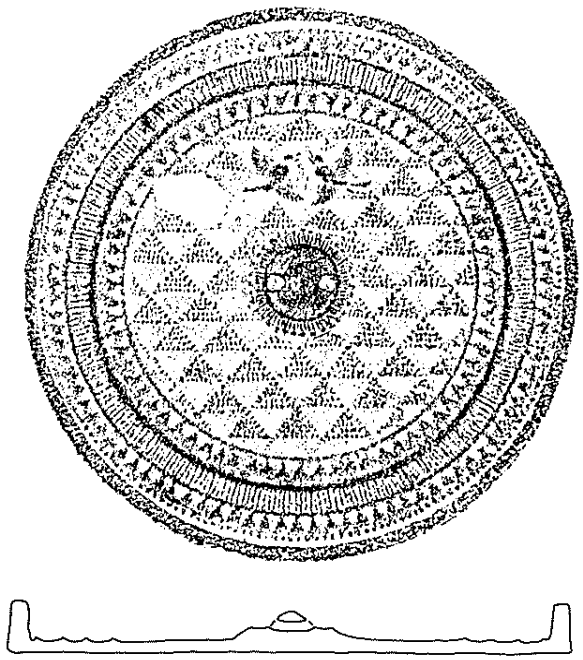
1号掘立柱建物跡の変遷

2号掘立柱建物の変遷

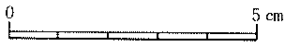
第8図　掘立柱建物跡変遷図

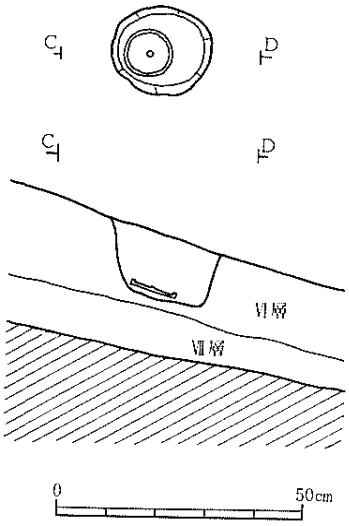


層位	土　色	土 性	層 の 特 徴
1	褐灰色 （10YR 4／1）	シルト	ややグライ化し、木質部を含む。
2	暗褐色 （10YR 3／3）	シルト	地山粒を含み、しまりがある。

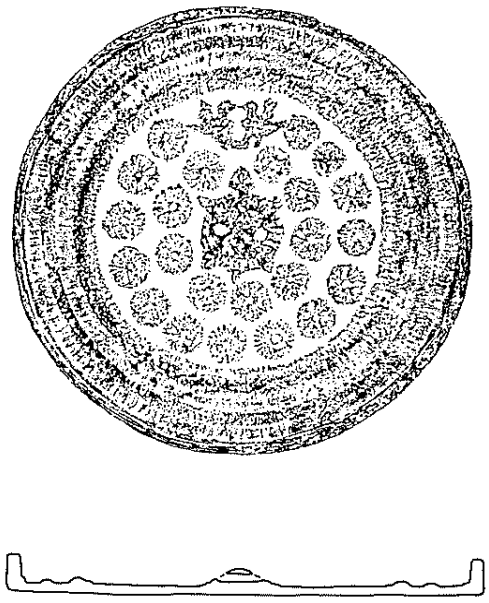


1 号鏡埋納遺構と出土鏡

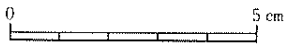




層位	土　色	土 性	層 の 特 徴
1	暗褐色 （10YR 3／3）	粘土質シルト	炭化物、地山粒を含む。



2 号鏡埋納遺構と出土鏡



第 9 図　鏡理納遺構と出土鏡

5　発見された遺物

整地層や自然堆積層、遺構から中世陶器、かわらけ、瓦器質土器、土製品、石製品、鉄製品、銅製品などが発見された。以下、出土層位ごとに説明する。

Ⅰ～Ⅲ層出土遺物（第10図～第14図）

中世陶器（第10図１～11）　１は天目茶碗の口縁部破片である。口縁は若干くびれ立ち上がる。２は瓶子の肩部破片である。瀬戸もしくは美濃産のものと思われる。５は摺鉢の体部破片である。16条以上を１単位とした筋目が施されている。３は大甕の口縁部破片で、口縁は外側に折れ、さらに上方に引き延ばされ、約2.5ｃｍの幅の広い口縁帯をつくる。いわゆる受口状口縁を示すものである。４は大甕の口縁から頸部にかけての破片で、口縁帯をもつものである。口縁は外反し内面に沈線がめぐり、口縁帯下端が下方にやや引き出される。８は常滑産と思われる大甕の肩部破片、６・７・９・10・11は大甕の体部破片である。10・11はともに産地は不明だが、同一個体と思われる。

かわらけ（同12～14）　12は手づくねによる小皿で、平底で体部が丸みを帯びながら立ち上がる。13・14はロクロ調整による坏である。

瓦器質土器（同15･16）　15は火鉢の肩部破片で二条の隆帯がめぐり、その間に径１ｃｍ程の円状の粘土板を0.5～0.8ｃｍ間隔で貼り付けている。二条の隆帯の直上部に窓(格狭間を意象したもの？)を有する。16は胴下部から脚部破片である。胴下部に一条の隆帯がめぐり、脚は獣足風の脚で、粘土塊を箆状工具で削って面取りされて作られている。その胎土などから15と同一個体と思われる。

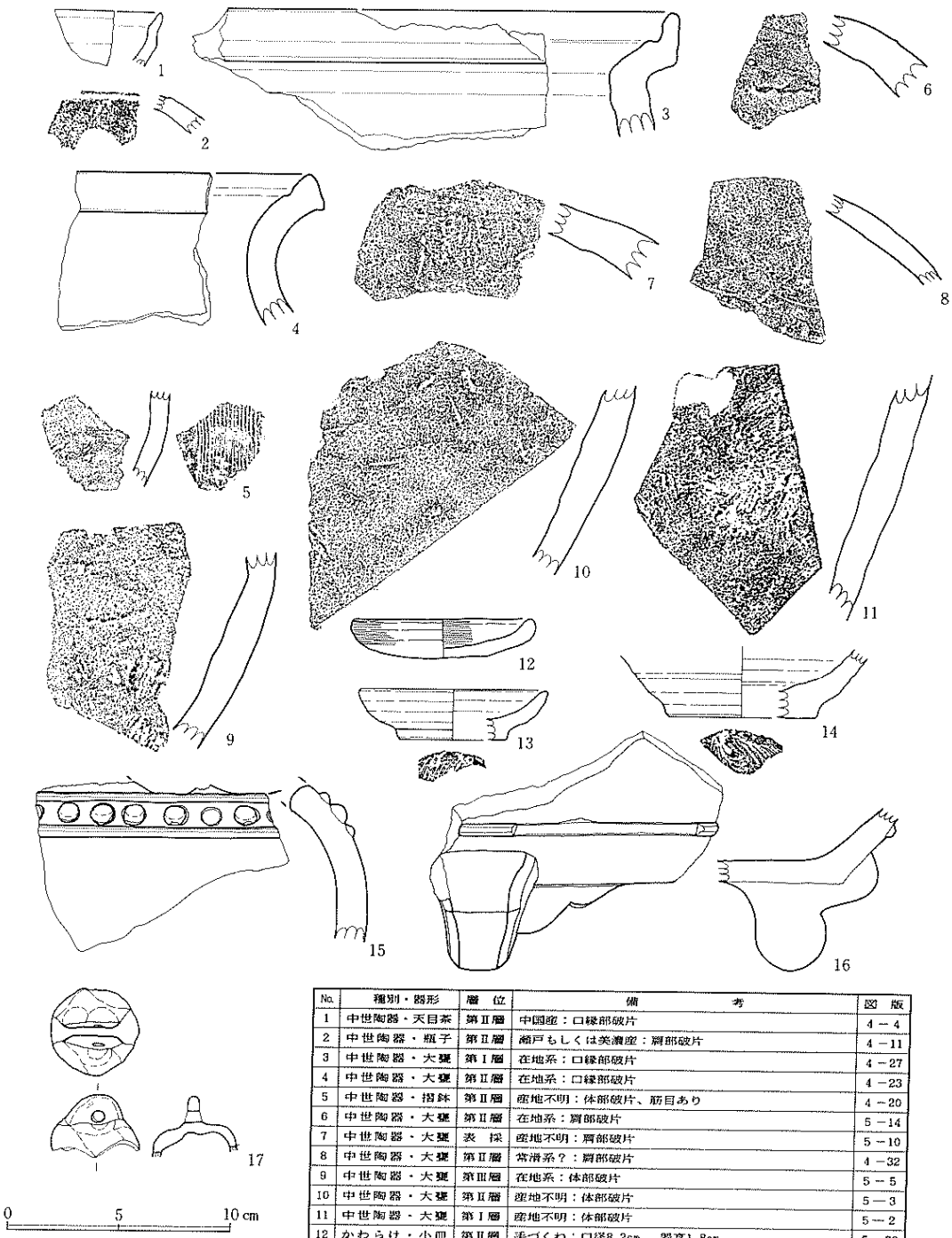
土製品（同17）　手づくねによる土鈴である。摩滅が著しい。

石製品（第11図１～４）　１は無茎の石鏃である。２・３は砥石で、２は使用面が５面、３は使用面が２面ある。３は使用時に折れたものと思われる。４は板状の粘坂岩を素材にし、一面に擦痕および金属器による加工痕が認められ、表裏両面の一部に自然面が残る石製品で用途は不明だが、何かの未製品（硯か？）と思われる。

板碑（第12図１）　種子hrihキリークの異体文字一字のみを薬研彫りで刻んだもので、碑面は平滑であるが調整は認められない。石材は粘坂岩である。Ｄ区西側奥壁の表土から碑面を下にして発見されており、本来の造立位置を離れ土留めに転用されていたものと思われる。

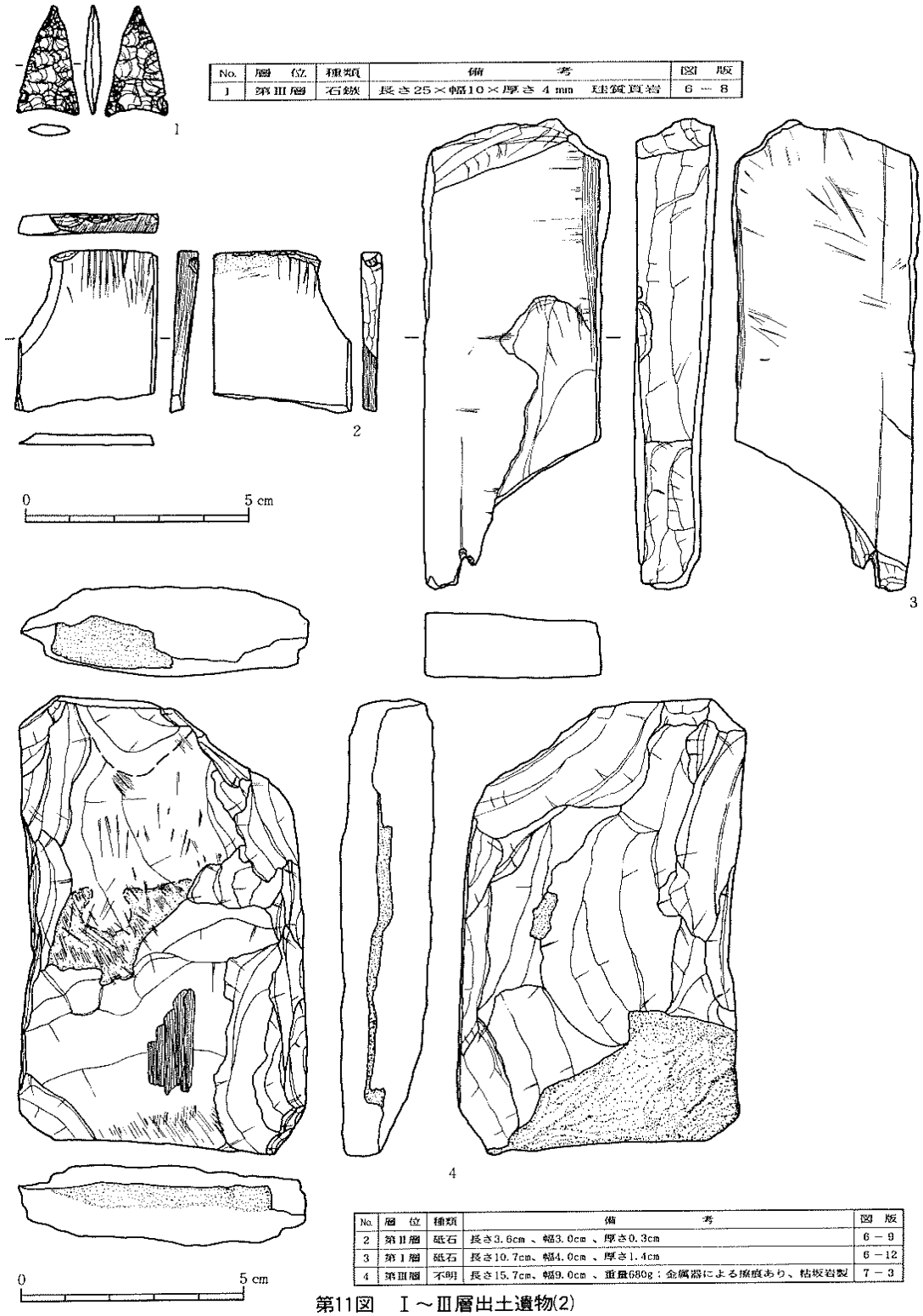
また、板碑の未製品かと思われる石材が１点出土している(写真図版７－５)。

鉄製品（第13図１～12）　１は刀子である。刀身部が平棟・平造り、両関で、茎部に目釘穴が一孔みられる。2ａ･2ｂは小型の剣で、2ａは長さ6.8ｃｍ幅1.6ｃｍで中央に鎬が認められ、2ｂが長さ6.4ｃｍ幅1.2ｃｍで、これにも中央に鎬が認められることから2ａと同一個



No.	種別・器形	層　位	備　　考	図　版
1	中世陶器・天目茶	第Ⅱ層	中国産：口縁部破片	4－4
2	中世陶器・瓶子	第Ⅱ層	瀬戸もしくは美濃産：胴部破片	4－11
3	中世陶器・大甕	第Ⅰ層	在地系：口縁部破片	4－27
4	中世陶器・大甕	第Ⅱ層	在地系：口縁部破片	4－23
5	中世陶器・摺鉢	第Ⅱ層	産地不明：体部破片、筋目あり	4－20
6	中世陶器・大甕	第Ⅱ層	在地系：胴部破片	5－14
7	中世陶器・大甕	表　採	産地不明：胴部破片	5－10
8	中世陶器・大甕	第Ⅱ層	常滑系？：胴部破片	4－32
9	中世陶器・大甕	第Ⅲ層	在地系：体部破片	5－5
10	中世陶器・大甕	第Ⅱ層	産地不明：体部破片	5－3
11	中世陶器・大甕	第Ⅰ層	産地不明：体部破片	5－2
12	かわらけ・小皿	第Ⅱ層	手づくね：口径8.2cm 、器高1.8cm	5－20
13	かわらけ・坏	第Ⅰ層	ロクロ調整：口径約8.5cm 、底径約4.8cm 、器高2.3cm	5－24
14	かわらけ・坏	第Ⅰ層	ロクロ調整：底径約6.6cm	5－25
15	瓦器質土器・火鉢	第Ⅱ層	胴部破片、外面黒色化	6－4
16	瓦器質土器・火鉢	第Ⅱ層	胴部～脚部破片、内外面黒色化	6－5
17	土製品・土鈴	第Ⅲ層	手づくね、内外面黒色化	6－6

第10図　Ⅰ～Ⅲ層出土遺物(1)



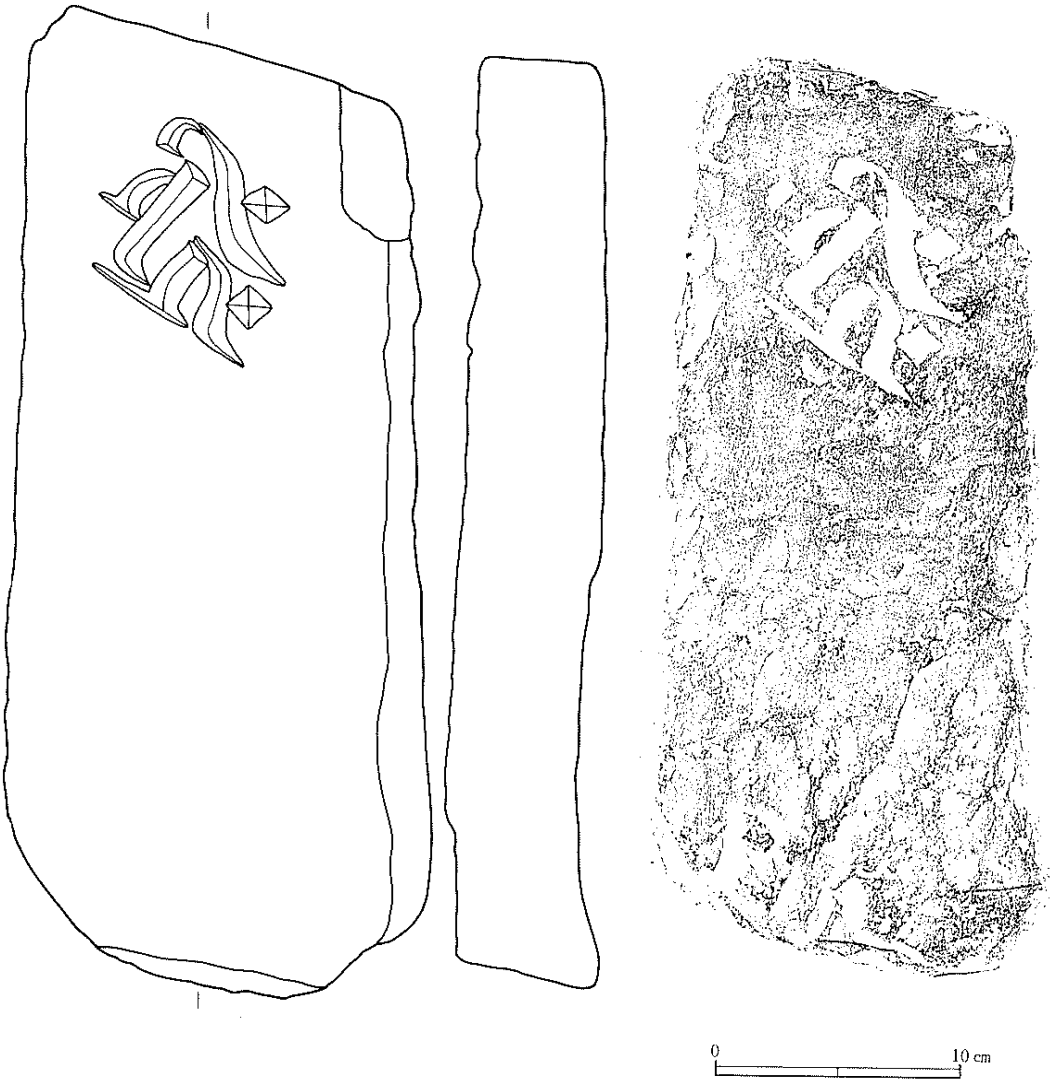
No.	層　位	種類	備　　考	図　版
1	第Ⅲ層	石鏃	長さ25×幅10×厚さ 4 mm　珪質頁岩	6 － 8

No.	層　位	種類	備　　考	図　版
2	第Ⅱ層	砥石	長さ3.6cm 、幅3.0cm 、厚さ0.3cm	6 － 9
3	第Ⅰ層	砥石	長さ10.7cm、幅4.0cm 、厚さ1.4cm	6 －12
4	第Ⅲ層	不明	長さ15.7cm、幅9.0cm 、重量680g；金属器による擦痕あり、粘板岩製	7 － 3

第11図　Ⅰ～Ⅲ層出土遺物(2)

体と思われる。３～10は釘で、５・７・８は先端が、４・６・９は頭部が欠損している。断面形は３～９が方形、10･11が長方形である。12は幅2.4ｃｍ、厚さ0.2ｃｍ程の板状の鉄製品であるがその形態および性格は不明である。

鏡(第14図33)　破損が著しく縁は欠損している。残存する径は10.5ｃｍ、厚さは0.15ｃｍほどで、鈕は菊花座鈕である。鏡背の文様については摩滅も著しく不明な点が多いが、細



No.	種類	層　位	備　　考	図　版
1	板碑	第Ⅰ層	長さ35×幅15×厚さ5.4cm　：粘板岩製	7 － 4

第12図　Ⅰ～Ⅲ層出土遺物(3)

線による単圏で区切られ、鏡背全体に草花と流水？を配している。こうした写実的な要素が濃く、かつ界圏にとらわれない文様構成は鎌倉時代のものに多くみられる特徴である(中野1969)。なお、縁については経筒の底などに転用するために意図的に取り去られた可能性もある。

他に鏡の縁が１点出土している（写真図版８－８）。

古銭（同１～31）　開元通宝、景祐元宝、元豊通宝、洪武通宝、永楽通宝などがあり、量的には洪武通宝が多く出土している。

Ｃ整地層出土遺物（第15図）

中世陶器（第15図１～５）　１は天目茶碗の口縁部から体部破片である。口縁部が若干くびれながら立ち上がる。２は平碗の口縁部から体部破片である。口縁部がわずかに外反しながら立ち上がる。３は平鉢の口縁部破片で、片口がつくものである。４は大甕の口縁部破片で、口縁帯をもつものである。口縁部の内面に沈線がめぐり、口縁帯下端が下方に引き出される。５は大甕の体部破片である。内面に粘土紐巻き上げ痕が認められる。

輸入磁器　青磁の小片が２点出土している（写真図版４－15・16）

鉄製品（同６～12）　６～11は釘、12は楔である。７・８は先端部が欠損している。

鏡（写真図版８－３）鏡面に毛彫が施されているものである。しかし破片であるため何の文様であるかはわからない。

古銭（第15図13～17）至道元宝、天聖元宝、皇宋通宝、元祐通宝が出土している。

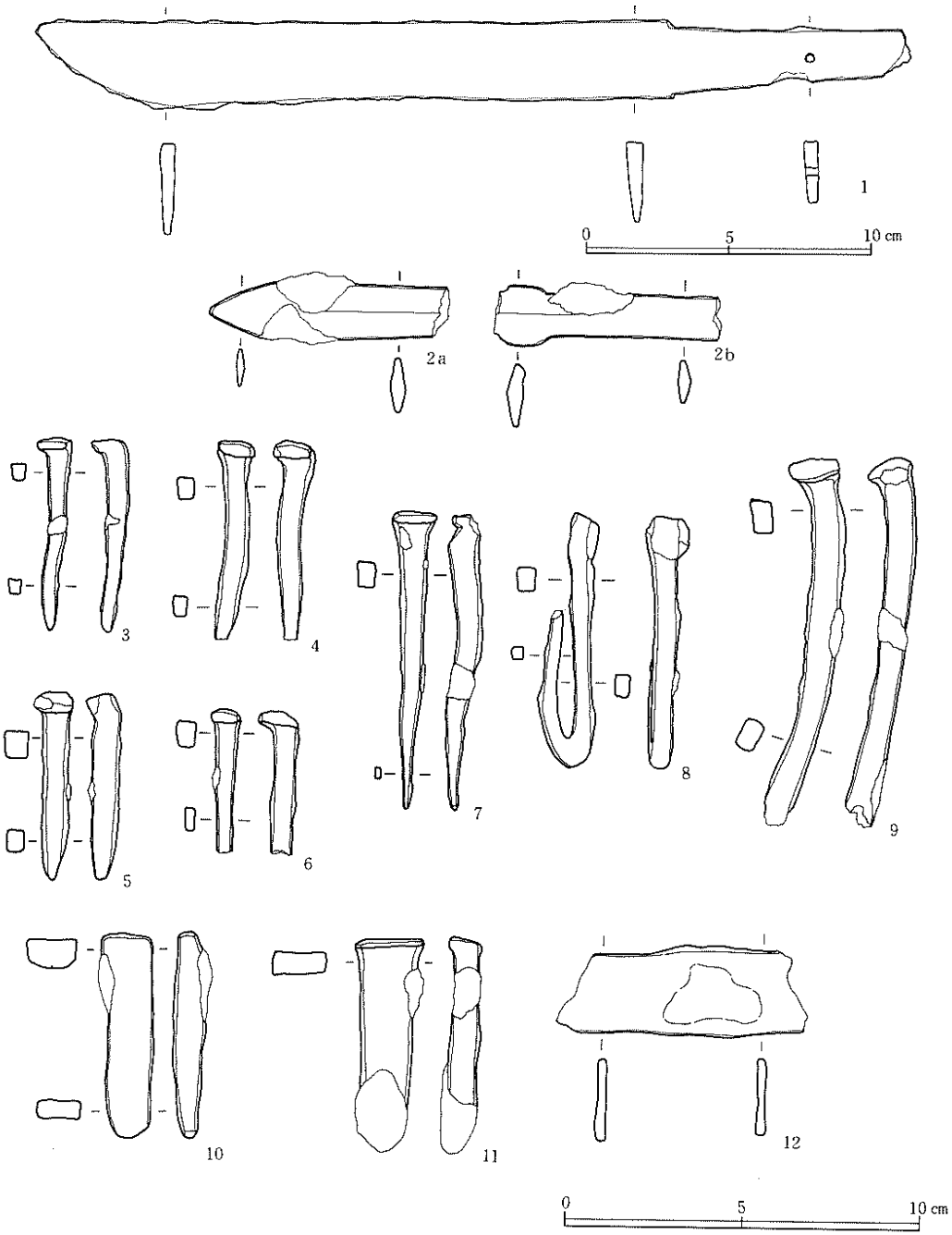
第Ⅵ層出土遺物（第16図～第17図）

中世陶器（第16図１～５）　１は天目茶碗の口縁部から体部破片である。口縁部が若干くびれ、わずかに外反しながら立ち上がる。２は折線皿の口縁部破片である。口縁は外側に折れ、わずかに内湾している。３は深皿の体部破片である。４・５は大甕の体部破片である。５には外面にヘラケズリ痕が認められる。

瓦器質土器（同６）　火鉢である。口縁部の下方に二条の隆帯をめぐらし、その間に唐草文の陰刻が施されている。隆帯はわずかに残るのみである。

石製品（同７・８、第17図１）　７は硯で剥離して海部の縁周辺のみを残すものである。縁には直交する二条の線刻があり、硯の縁と海部･陸部を分けるための製作時の線刻と考えられる。またこの他にも、陸部の破片が２点出土している(写真図版６－13･15)。８および第17図１は砥石である。８は使用面が４面あり、擦り切り技法によって切断されている。第17図１は使用面が４面ある。また、金属器による加工痕が認められる。

鉄製品（第17図２・３）　釘である。３は先端部が欠損している。両者とも断面形は方形である。

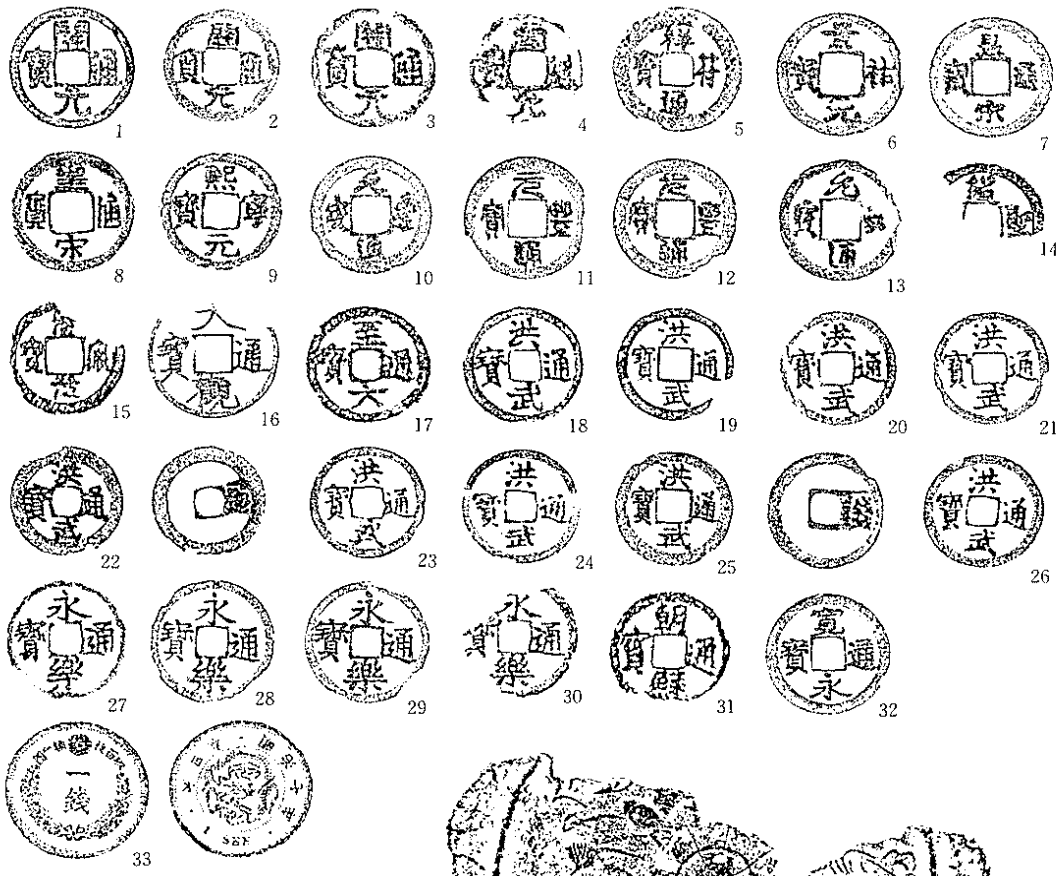


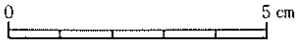
No.	種類	層位	備考	図版
1	刀子	第Ⅱ層	刀身部22.3cm、茎部8.5cm	7－1
2a	剣？	第Ⅲ層		7－2a
2b	剣？	第Ⅲ層		7－2b
3	鉄釘	第Ⅱ層		6－22
4	鉄釘	第Ⅱ層		6－20

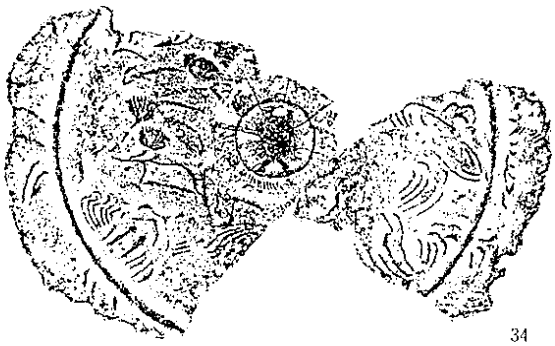
No.	種類	層位	備考	図版
5	鉄釘	第Ⅱ層		6－21
6	鉄釘	第Ⅲ層		6－23
7	鉄釘	第Ⅱ層		6－18
8	鉄釘	第Ⅱ層		6－27

No.	種類	層位	備考	図版
9	鉄釘	第Ⅱ層		6－17
10	鉄釘	第Ⅱ層		6－32
11	鉄釘	第Ⅲ層		6－30
12	不明	第Ⅱ層		6－35

第13図　Ⅰ～Ⅲ層出土遺物(4)

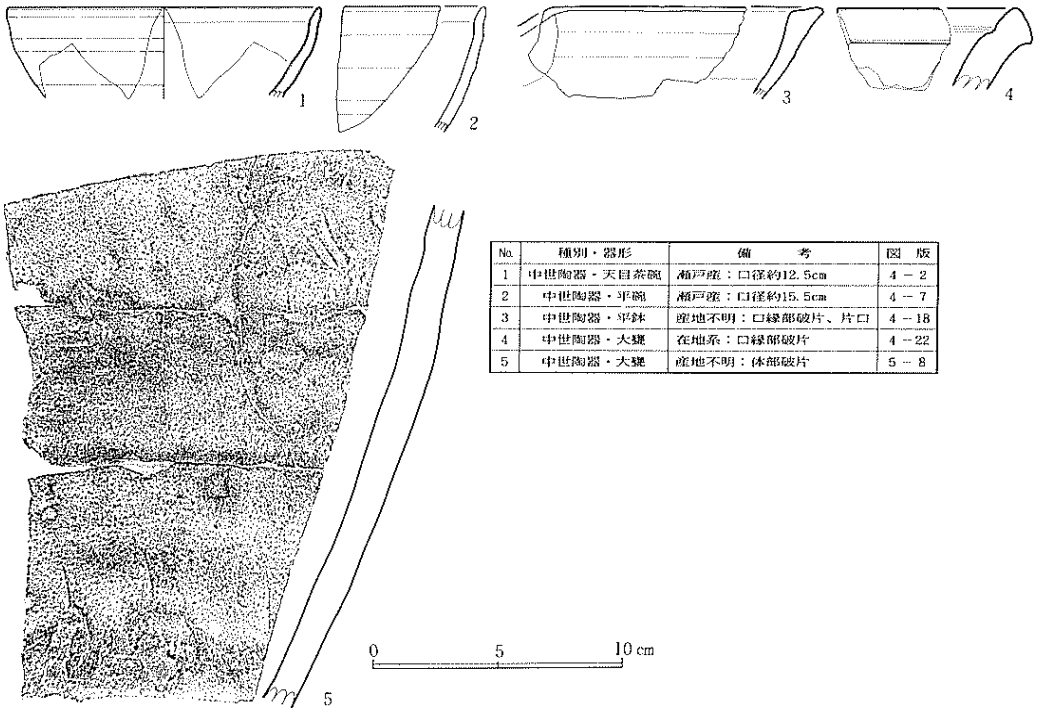




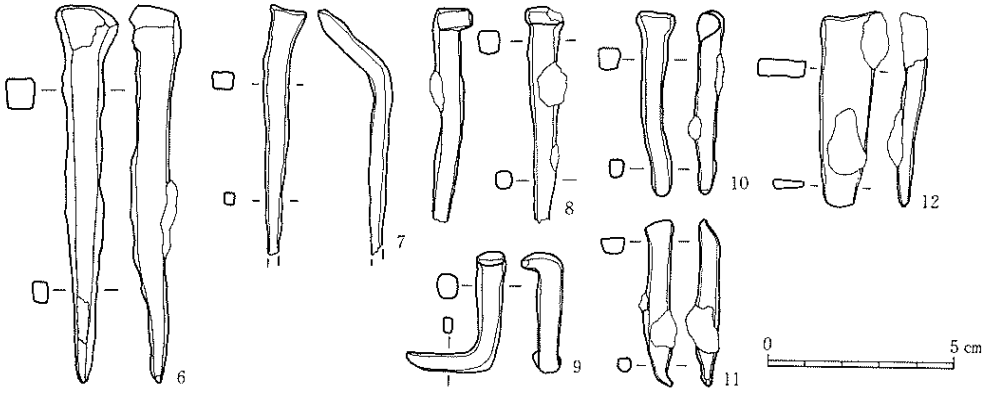


No.	貨幣名	層位	備考	図版	No.	貨幣名	層位	備考	図版	No.	貨幣名・種類	層位	備考	図版
1	開元通宝	第Ⅱ層		8－11	13	元祐通宝	第Ⅱ層		8－35	25	洪武通宝	第Ⅲ層	背右に「一銭」	8－53
2	開元通宝	第Ⅲ層		8－12	14	紹聖元宝	第Ⅱ層		8－39	26	永楽通宝	第Ⅲ層		8－57
3	開元通宝	第Ⅲ層		8－13	15	聖宋元宝	第Ⅱ層		8－41	27	永楽通宝	第Ⅲ層		8－58
4	開元通宝	第Ⅲ層		8－17	16	大観通宝	第Ⅱ層		8－42	28	永楽通宝	第Ⅲ層		8－59
5	祥符通宝	第Ⅱ層		8－19	17	至大通宝	第Ⅰ層		8－45	29	永楽通宝	第Ⅲ層		8－61
6	景祐元宝	第Ⅰ層		8－21	18	洪武通宝	表採		8－46	30	永楽通宝	第Ⅳ層		8－60
7	皇宋通宝	第Ⅱ層		8－22	19	洪武通宝	第Ⅱ層		8－47	31	朝鮮通宝	第Ⅱ層		8－63
8	皇宋通宝	第Ⅲ層		8－23	20	洪武通宝	第Ⅱ層		8－48	32	寛永通宝	第Ⅰ層		8－62
9	熙寧元宝	第Ⅱ層		8－28	21	洪武通宝	第Ⅱ層	背右に「一銭」	8－49	33	竜一銭銅貨	第Ⅰ層		8－64
10	元豊通宝	第Ⅰ層		8－30	22	洪武通宝	第Ⅲ層		8－50	34	鏡	第Ⅲ層	縁欠損	8－4
11	元豊通宝	第Ⅱ層		8－31	23	洪武通宝	第Ⅲ層		8－51					
12	元豊通宝	第Ⅱ層		8－32	24	洪武通宝	第Ⅲ層		8－52					

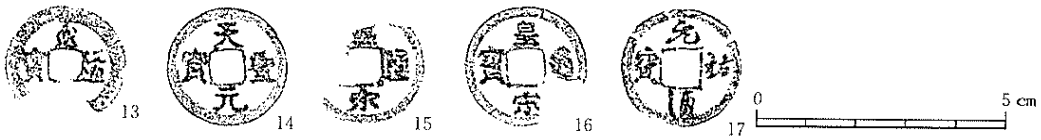
第14図　Ⅰ～Ⅲ層出土遺物(5)



No.	種別・器形	備　　考	図　版
1	中世陶器・天目茶碗	瀬戸産：口径約12.5cm	4 － 2
2	中世陶器・平碗	瀬戸産：口径約15.5cm	4 － 7
3	中世陶器・平鉢	産地不明：口縁部破片、片口	4 －18
4	中世陶器・大甕	在地系：口縁部破片	4 －22
5	中世陶器・大甕	産地不明：体部破片	5 － 8



No.	種　類	備　考	図　版	No.	種　類	備　考	図　版	No.	種　類	備　考	図　版
6	鉄製品・鉄釘		6 －16	9	鉄製品・鉄釘		6 －29	11	鉄製品・鉄釘		6 －24
7	鉄製品・鉄釘		6 －34	10	鉄製品・鉄釘		6 －25	12	鉄製品・楔？		6 －31
8	鉄製品・鉄釘		6 －19								

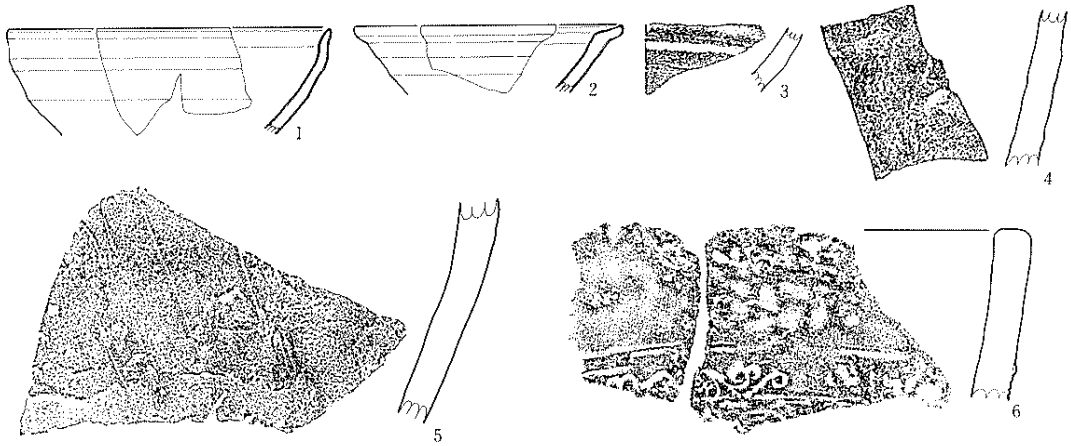


No.	貨幣名	備　考	図　版	No.	貨幣名	備　考	図　版	No.	貨幣名	備　考	図　版
13	至道元宝		8 －18	15	皇宋通宝		8 －24	17	元祐通宝		8 －36
14	天聖元宝		8 －20	16	皇宋通宝		8 －25				

第15図　C整地層出土遺物

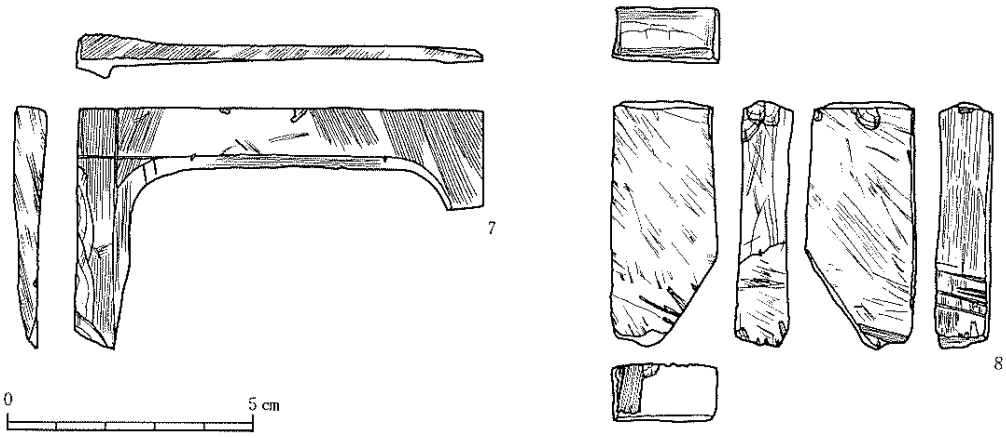
銅製品（同４）　法具の一種で六器（高台付の鋺に台皿を備えて、六個を一具として使うため六器と呼ばれる）の台皿である。台皿内面中央に鋺のずれを防ぐ円形の凸線が設けられる。この他、鏡の縁が１点出土している（写真図版８－６）。

古銭（同５～14）　開元通宝、至和元宝、治平元宝、熙寧元宝、元豊通宝、聖宋元宝、宣和通宝、洪武通宝が出土している。



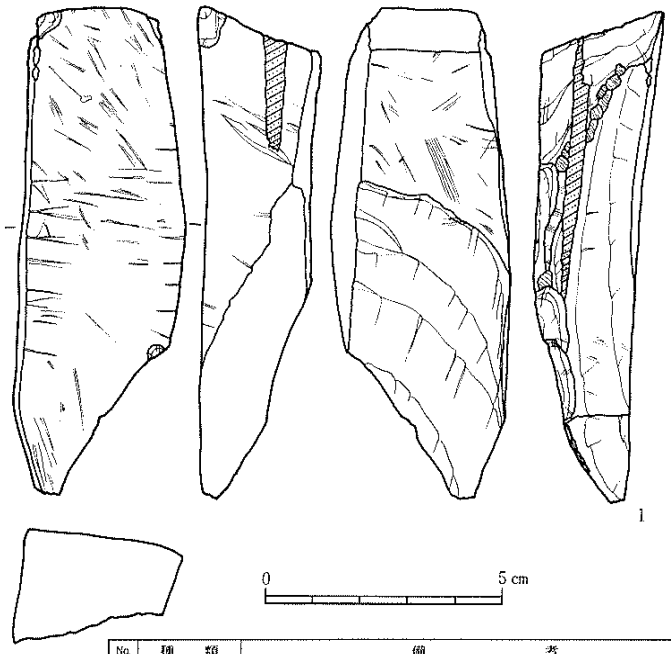
No.	種類・器形	備　　考	図　版
1	中世陶器・天目茶碗	瀬戸産：口径約13.2cm	4－1
2	中世陶器・折縁皿	瀬戸産：口径約10.8cm	4－6
3	中世陶器・深皿	瀬戸産：体部破片	4－9
4	中世陶器・大甕	常滑産：体部破片	4－26
5	中世陶器・大甕	在地系：体部破片	5－4
6	瓦器質土器・火鉢	内外面黒色化、唐草文の陰刻あり。肩部破片	6－3

0　5　10 cm

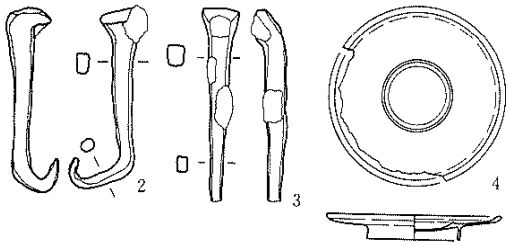


No.	種　類	備　　考	図　版
7	石製品・硯		6－14
8	石製品・砥石	長さ5.0 ×幅2.1 ×厚さ0.9cm ：擦り切り痕あり	6－10

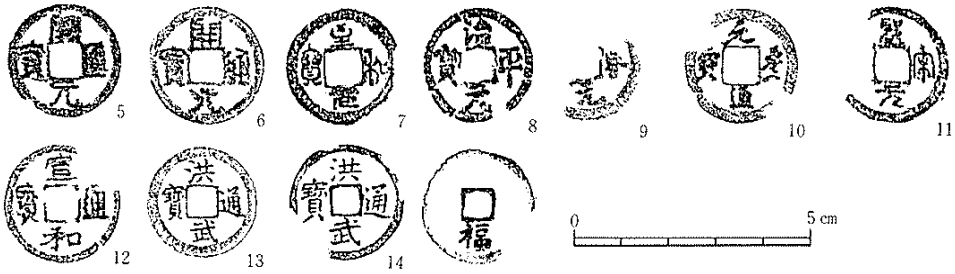
第16図　Ⅵ層出土遺物(1)



No.	種　類	備　考	図　版
1	石製品・砥石	長さ9.9cm 、幅3.3cm 、厚さ2.2cm ：金属器による加工痕あり	6－11



No.	種　類	備　考	図　版
2	鉄製品・鉄釘		6－28
3	鉄製品・鉄釘		6－19
4	鉄製品・六器の台皿	径5.0cm 、器高0.7cm	8－5



No.	貨幣名	備　考	図　版	No.	貨幣名	備　考	図　版	No.	貨幣名	備　考	図　版
5	開元通宝		8－15	9	景寧元宝		8－29	12	宣和通宝		8－44
6	開元通宝		8－16	10	元豊通宝		8－33	13	洪武通宝		8－56
7	至和元宝		8－26	11	聖宋元宝		8－40	14	洪武通宝	背下に「福」	8－55
8	治平元宝		8－27								

第17図　Ⅵ層出土遺物（2）

Ｂ整地層出土遺物（第18図）

中世陶器（第18図１）　大甕の体部破片である。外面にヘラケズリ痕が、内面には粘土紐巻き上げ痕が認められる。

かわらけ（同２）　ロクロ調整による坏の底部破片である。底部に回転糸切り痕が認められる。

鏡　鏡の縁が一点出土している（写真図版８－７）。

古銭（同３）　元祐通宝が出土している。

第Ⅶ層出土遺物（第19図）

中世陶器（第19図１・２）　１は柄付片口である。柄部が欠損している。また、柄部の周辺には指頭による押さえ痕が認められる。２は大甕の体部下半の破片である。

鉄製品（同３）　刀子である。刀身部が平棟・平造で、両関である。目釘穴はない。

銅製品　図示しなかったが、形態・用途が不明なごく薄い板状の銅製品が出土している（写真図版８－10）。

古銭（同４）　元祐通宝が出土している。

第Ⅷ層出土遺物（第20図）

中世陶器（第20図１）　小皿の口縁部破片である。口縁は外側に折れる。

かわらけ（同２）　手づくねによる小皿で、平底で体部が丸みを帯びながら立ち上がる。

その他の遺構出土遺物（第21図）

瓦器質土器（第21図１・２）　２号土壙埋土およびPit11埋土から出土している。摩滅が著しいが内外面に黒色化の痕跡を残す。また、内面には指頭による押さえ痕が認められる。ただし、破片のため器種・形態については不明である。

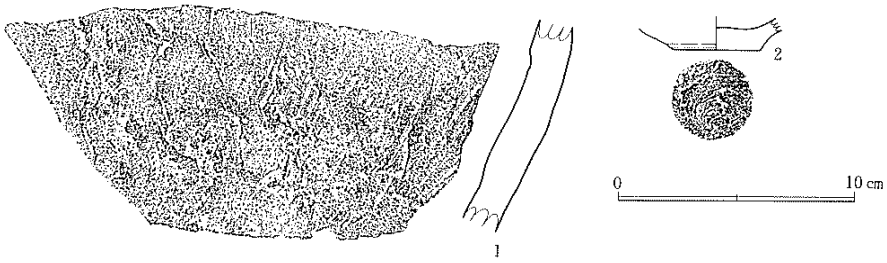
鉄製品（同３）　釘である。Pit17埋土から出土した。断面形は方形である。

古銭（同４～７）　Pit16埋土から開元通宝が、Pit16およびPit３埋土から元豊通宝が、Pit21から政和通宝が出土している。

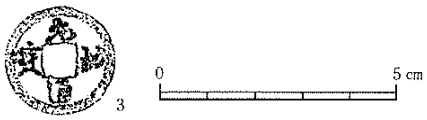
これらのほか、自然堆積層・整地層から鉄滓、水晶片、碁石状の小石が多数出土している（写真図版７－６・７・８）。

沢表採および沢出土遺物（第22図）

中世陶器（第22図１～25）　１は天目茶腕の口縁部破片である。口縁部は若干くびれるが、立ち上がりが強い。割れ口に漆による補修の痕が認められる。２は深皿の体部破片である。釉は淡黄色で刷毛塗りされている。また、体部下半にはヘラケズリ痕が認められる。３は瓶子の肩部破片である。貼花による花文を施している。４はおろし皿の底部破片で、内面に格子目状の卸目が刻まれている。底部には回転糸切痕が認められる。６は摺鉢の口

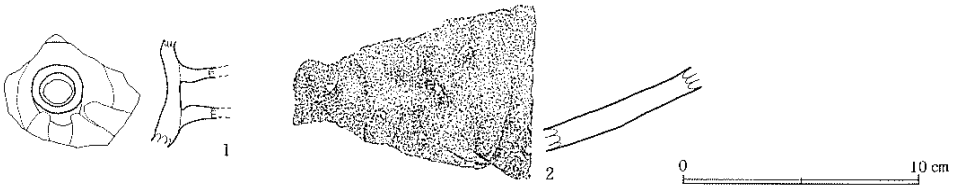


No.	種類・器形	備　　考	図　版
1	中世陶器・大甕	在地系：体部破片	5－6
2	かわらけ・坏	ロクロ調整：底径3.8cm、底部回転糸切り	5－26

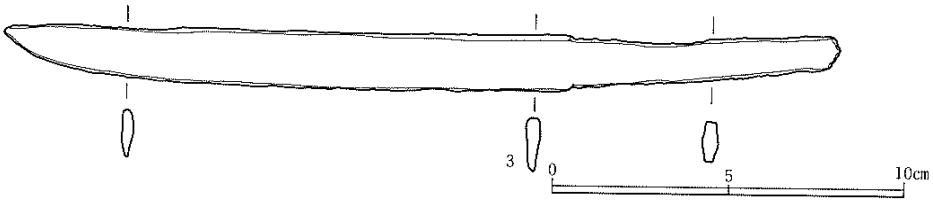


No.	貨幣名	備　　考	図　版
3	元祐通宝		8－37

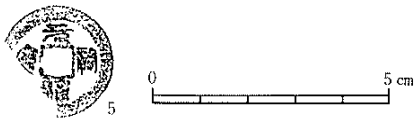
第18図　B整地層出土遺物



No.	種類・器形	備　　考	図　版
1	中世陶器・柄付片口	瀬戸産：指頭による押さえ痕あり。柄欠損	4－10
2	中世陶器・大甕	産地不明：体部下半破片	5－12



No.	種　類	備　　考	図　版
3	鉄製品・刀子	刀身部16.0cm、茎径7.6cm	―

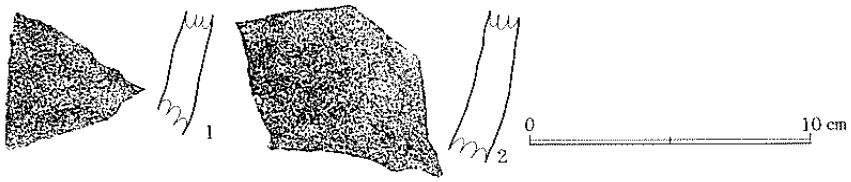


No.	貨幣名	備　　考	図　版
4	元祐通宝		8－38

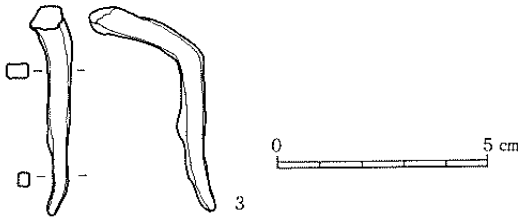
第19図　Ⅶ層出土遺物

No.	種類・器形	備　　考	図　版
1	中世陶器・小皿？	瀬戸産：口径約12.5cm	4－5
2	かわらけ・小皿	手づくね：口径9.4cm、器高1.8cm	5－19

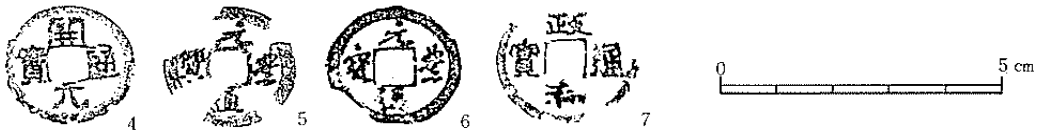
第20図　Ⅶ層出土遺物



No.	種類・器形	出土位置	備考	図版
1	瓦器質土器・器形不明	2号土壙埋土	内外面黒色化、内面に指頭による押さえ痕あり	6－2
2	瓦器質土器・器形不明	Pit11 埋土	内外面黒色化、内面に指頭による押さえ痕あり	6－1



No.	種類	出土位置	備考	図版
3	鉄製品・鉄釘	Pit17 埋土		6－33



No.	貨幣名	出土位置	備考	図版	No.	貨幣名	出土位置	備考	図版
4	開元通宝	Pit16 埋土		8－12	6	元豊通宝	Pit 3埋土		—
5	元豊通宝	Pit16 埋土		8－34	7	政和通宝	Pit21 埋土		8－43

第21図　その他の遺構出土遺物

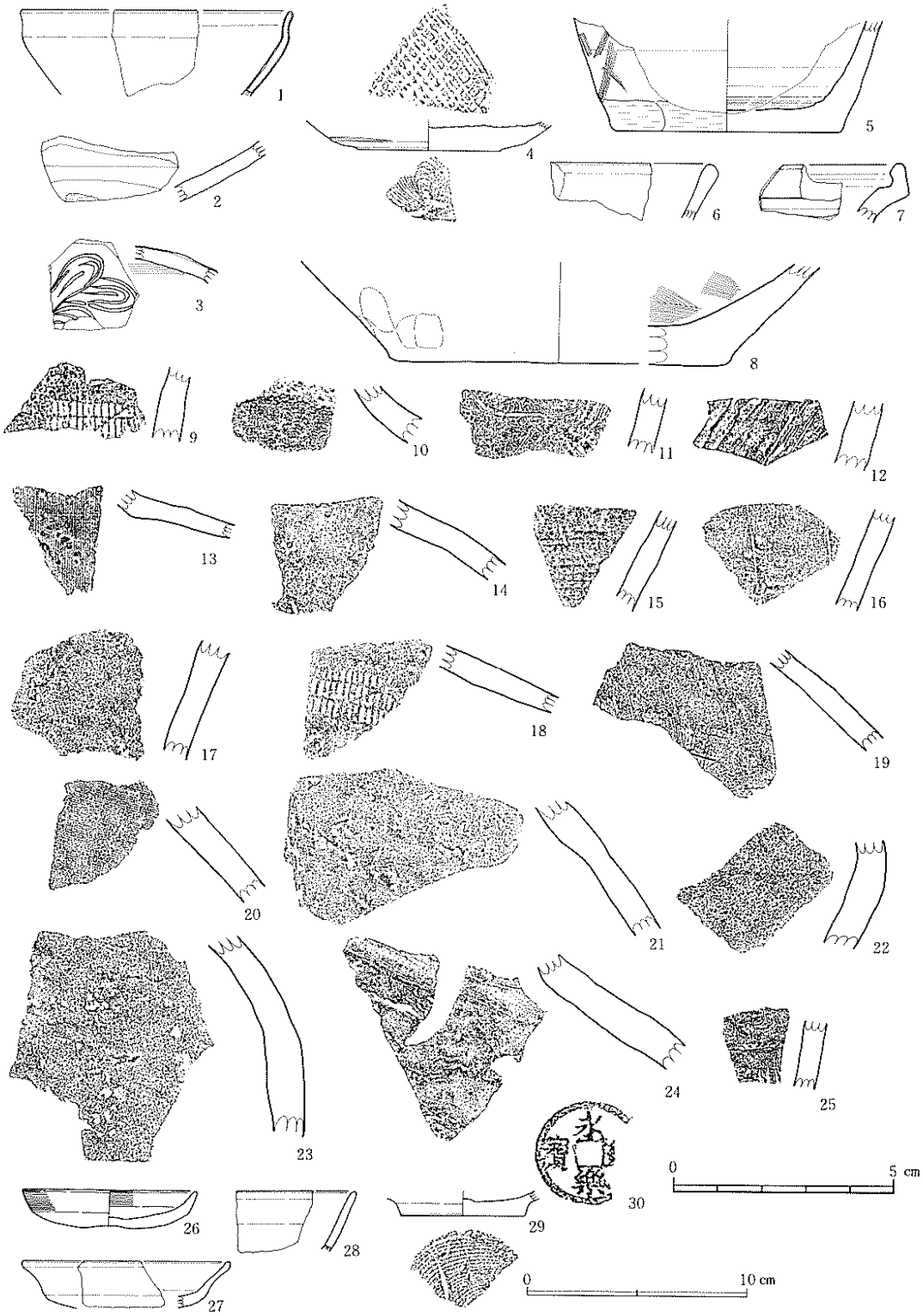
縁部破片である。口縁部が外傾し、その端部はやや丸みを帯びる。５は壷の体部から底部破片である。体部下にヘラケズリ痕、体部にヘラナデ痕が認められる。７は大甕の口縁部破片である。口縁部の内面に沈線がめぐり、口縁端部は上方に引き上げられ、幅1.7Áほどの口縁帯をつくる。いわゆる受口状口縁を示すものである。８は大甕の体部下半から底部破片である。体部外面にナデツケ痕、内面にヘラナデ痕が認められる。９～25は大甕の体部および肩部破片である。９・15・18は押印がある体部破片で、いずれも常滑産のものと思われる。他に常滑産のものとしては13・14・16などがある。12は産地は不明だが須恵器系の大甕である。21・23は体部および肩部破片で、同一個体と考えられる。

輸入磁器　鎬蓮弁文が施されている青磁碗の体部破片が１点出土している（写真図版４－14）。

かわらけ（同26～29）　26は手づくねによる小皿で、平底で体部が丸みを帯びながら立ち上がるものである。27はロクロ調整による坏で、体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに上方につまみ上げられている。28はロクロ調整による坏である。29はロクロ調整による坏で、底部に回転糸切り痕が認められる。

土製品　羽口の破片が１点出土している（写真図版６－７）。

鏡　鏡の縁が１点出土している（写真図版８－９）。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
5 cm
0
10 cm

第22図　沢出土遺物

No.	種別・器形	備　　考	図　版	No.	種別・器形	備　　考	図　版
1	中世陶器・天目茶碗	瀬戸産：口径約12.3cm、漆による補修の痕あり	4－3	16	中世陶器・大甕	常滑産：体部破片	5－15
2	中世陶器・大鉢	瀬戸産：体部下半破片	4－8	17	中世陶器・大甕	産地不明：体部破片	5－18
3	中世陶器・瓶子	瀬戸産：肩部破片	4－13	18	中世陶器・大甕	常滑産：肩部破片、格子目状の押印あり	4－31
4	中世陶器・おろし皿	瀬戸産：底径約8.4cm	4－12	19	中世陶器・大甕	常滑産？：肩部破片、瓣状格子目の押印あり	5－11
5	中世陶器・壺	在地系：体部～底部破片、底径約10.4cm	4－24	20	中世陶器・大甕	常滑産？：肩部破片	4－36
6	中世陶器・摺鉢	産地不明：口縁部破片	4－19	21	中世陶器・大甕	産地不明：体部破片	4－29
7	中世陶器・大甕	在地系：口縁部破片	4－21	22	中世陶器・大甕	在地系：体部破片	5－8
8	中世陶器・大甕	在地系：体部～底部破片、底径約15.6cm	4－25	23	中世陶器・大甕	在地系：体部破片	5－7
9	中世陶器・大甕	常滑産：体部破片	4－30	24	中世陶器・大甕	産地不明：肩部破片	4－28
10	中世陶器・大甕	産地不明：体部破片	5－16	25	中世陶器・大甕	常滑産？：体部破片、格子目状の押印あり	5－13
11	中世陶器・大甕	産地不明：体部破片	5－9	26	かわらけ・小皿	手づくね：口径8.0cm 、器高1.8cm	5－21
12	中世陶器・大甕	須恵器系・産地不明：体部破片	5－6	27	かわらけ・坏	ロクロ調整：底径約5.6cm	5－27
13	中世陶器・大甕	常滑産：肩部破片	4－34	28	かわらけ・坏	ロクロ調整	5－23
14	中世陶器・大甕	常滑産：肩部破片	4－33	29	かわらけ・坏	ロクロ調整：口径約9.5cm	5－22
15	中世陶器・大甕	産地不明：体部破片、平行叩き目状の押印あり	4－35	30	古銭・永楽通宝		8－61

第１表　沢出土遺物観察表

貨幣名	初鋳年	表採	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	C層	Ⅵ層	B層	Ⅶ層	A層	3溝	pit 3	pit 5	pit 7	pit12	pit16	pit21	沢	計
開元通宝	621			1	3			2									1			7
至道元宝	995						1	1												2
祥符通宝	1009			2																2
天聖元宝	1023						1													1
景祐元宝	1034		1																	1
皇宋通宝	1039			2	2		5													9
至和元宝	1055							1												1
治平元宝	1064							2												2
熙寧元宝	1068			1				2												3
元豊通宝	1078		2	3				1					1				1			8
元祐通宝	1086			1			1		1	1										4
紹聖元宝	1094			1																1
聖宋元宝	1101			1				1												2
大観通宝	1107			1																1
政和通宝	1111							1										1		2
宣和通宝	1119																			1
至大通宝	1309		1																	1
洪武通宝	1368	1	4	15	5	1														26
永楽通宝	1408		1	3	3	1													1	9
朝鮮通宝	1415			1																1
寛永通宝	江　戸		1																	1
竜一銭銅貨	1874		1																	1
不明銅銭			2	11	2	1	5		2		1	1		1	1	1			2	30
計		1	13	43	15	3	13	12	3	1	1	1	1	1	1	1	2	1	3	116

第２表　古銭集計表

古銭（同30）　永楽通宝が出土している。

6　考　察

(1)　Ｄ区平坦面とその周囲について（第３図）

Ｄ区平坦面の上方（西側）には３m近い段差を隔ててＤ区とほぼ同規模の平坦面があり、長辺方向も同じくし、また南北両辺を揃えている。また、Ｄ区の上の面では平坦な部分を南北に二分するように中央に若干の高まりがみられるが、これは後述するようにＤ区における平坦面の利用も南半北半で別棟になるなど差異がみられ、この点でも両者は類似している。このことから、この両者は同時に形成され機能していたこと、平坦面の使われ方も別々ではなく、密接に関連する複数の施設が２段に分かれて存在していたことが想定され

る。長方形を呈する平坦面は一昨年度調査したＣ区などいくつかみられるが、上下の平坦面で形を揃えているのは、田東山東側山腹ではここだけにしかみられないものである。

さらに上方（西側）には標高455.7mのゆるやかな頂きがある。その背後は近年造成された駐車場となり、旧地形が失われて復元できない状況にあるが、その頂きは先述のＤ区及び上段の平坦面の東西中軸線の延長上にあるという位置関係にある。頂上付近には江戸時代後半以後に造像安置されたとみられる阿弥陀仏如来の石仏が２体安置されており、それも併せて２つの平坦面と頂きとは何らかの関連があったものと思われる。また、Ｄ区の下方（東側）にも６ｍの段差を隔てて小さな平坦面がある。不整形を呈し、東西18m、南北７ｍ、面積70㎡ほどの規模で、長軸方向および東西の中軸線はＤ区のそれと概ね一致している。さらにこの平坦面の下方（東側）は、中世の遺物が採集される沢地形となっているが、この沢筋に沿った道筋は樋の口側から田東山へ昇るルートの一部であり、この道筋からＤ区平坦面方向へ昇ってくる場合、Ｄ区下の面はその通り筋となるので、Ｄ区平坦面へのアプローチには重要な役割を果たした面とみることができる。

(2)　平坦面の整地地業について

平垣面は地山切り出しによる整地（Ａ整地地業）と３回の盛土整地（Ｂ・Ｃ・Ｄ整地地業）の計４時期にわたる整地地業によって形成されている。

Ａ整地地業は斜面を切り出し平坦面を形成したものであり、さらに東側の盛土整地の下で一段低く地山を削り出した平坦面が検出され、当初は平坦面が上下２段になっていたと考えられる。Ｂ整地地業以降の３時期にわたる地業は、東側の低い部分に盛土し平坦な面を形成したものである。Ｂ整地地業は第Ⅶ層堆積後に行われ、Ｄ整地地業は第Ⅱ層によって覆われており、間に自然堆積層を挟むことから、相互に時間差をもちながら段階的に平坦面の規模を広げていったことが窺われる。また、奥壁側で斜面に沿って検出された３号溝跡には重複が認められ、新しいものほど西側にずれてめぐっていることから、平坦面の西側についてもＢ整地地業以降の地業に伴って、奥壁斜面を削り出し規模を広げていったと考えられる。ただし、南北方向については、平坦面の規模を拡張するような削り出しおよび盛土整地は認められなかった。

(3)平坦面上の施設について

平坦面上の施設は南北に並び建つ２棟の掘立柱建物跡によって構成されている。それぞれの残りのよい柱穴では10回以上の重複が認められたが、１号掘立柱建物跡ではほぼ同位置で少なくとも３回、２号掘立柱建物跡では少なくとも４回の建て替えが確認された。いずれも第Ⅶ層および地山上面で検出されており、Ｂ・Ｃ・Ｄ整地層とは直接的な重複関係をもたないのでそれらの対応関係はわからないが、これらは“第Ⅶ層堆積以降、第Ⅱ層堆積

以前”と言うB・C・D整地地業と同じ時間幅の中で捉えることができる。さらに、２号掘立柱建物跡では必ずしも明確でなかったが、１号掘立柱建物跡についてみると、建て替えによって柱穴の掘形が新しいものほど大きくなり、また、新しい建物ほど平坦面の奥壁側（西側）にずれて建てられているという傾向がある(第８図)。前述したように平坦面はその西側についても、奥壁斜面を削り出し何度か規模を西側へ広げていることが窺われ、これらの建物跡の変遷は平坦面の変遷と一致するということが言える。これらのことから平坦面全体としてはB整地地業以降の３時期にわたる整地地業に並行して、少なくとも３～４時期以上の遺構の変遷があったものと考えられる。

また、東斜面の盛土整地の下からいくつかの柱穴、柱穴列が検出されているが、これらは第Ⅷ層および第Ⅸ層によって覆われていることから、平坦面が形成された最も古い段階に関わる施設と考えられる。しかし、部分的に検出したのみであったため、その規模や性格は不明である。

以上のことから、平坦面上には少なくとも第Ⅶ層が堆積して以降、第Ⅱ層が堆積するまでの間、数期にわたって建物跡が存在していたことが明らかになった。また、これらの建物跡はほぼ同位置で何度も建て替えられていることから、その配置や性格は長期間踏襲されていたものと考えられる。

また、これらの他に１号鏡埋納遺構を第Ⅶ層上面で、２号鏡埋納遺構を第Ⅵ層上面でそれぞれ検出した。１号鏡埋納遺構で発見された鏡には、懸垂のためと考えられる穴が穿たれていることから、いずれかの場所で御神体あるいは御神宝など信仰の対象として奉懸奉納されていたものを地中に埋納した可能性が高い。これについては盛土整地や建物の建設・建て替えに伴う鎮壇的性格のものとも考えられる。

(4)遺構と遺物の年代について

今回の調査で発覚された遺物は、中世陶器、瓦器質土器、鉄製品、石製品、銅製品など多数あるが、いずれも破片であり形態を把握できないものが多い。量的に言えば中世陶器、とくに大甕の破片が最も多く出土している。ここでは天目茶碗、大甕、鏡について年代を検討し、その年代をもってこの平坦面が営まれた年代としたい。

天目茶碗は計５点出土しており、図示できなかった１点を除いて、すべて口縁部破片である。その胎土から第10図１の天目茶碗は中国産のものかと思われ、そのほかは瀬戸産のものと考えられる。瀬戸産の天目茶碗のうち、平坦面から出土したものについてその口縁部形態から年代を検討すると、第15図１は藤沢良祐氏の編年による中期様式の第Ⅲ期よりやや新しいものと考えられ、第16図１は同じく藤沢氏の編年による中期様式の第Ⅲ期よりやや古くなるものと考えられる。よって天目茶碗については14世紀以降のものと考えられ

る（藤沢1985）。

大甕については本遺跡出土のものはほとんどが体部もしくは肩部破片で、口縁部資料は４点（第10図３・４、第15図４、第22図７）しかなく、すべて在地系のものと考えられる。これら４点の口縁部資料について年代を検討すると、すべて口縁帯をもち内面に沈線がめぐるものであり、このような特徴を有する甕は、観音沢遺跡の甕ＡⅡ類（第118図６）に類似している。これには鎌倉中期から南北朝時代を含めた年代が与えられている。ここでも同様の年代に考えたい。また、第10図３の甕はやや口縁帯の幅が広く受口状になるものであり、これよりはやや新しくなるものと考えられる。

火鉢（第10図15･16）については工藤清泰氏の分類ＩＡ３類（工藤1989）に相当し、おもに14世紀後半～15世紀を中心とする年代が考えられる。

鏡の年代については、両者とも全体につくりが重厚であり、界圏が二重圏で、外区に鋸歯文・櫛歯文というような幾何学的な圏帯をめぐらすという特徴を有する。これらは漢式鏡にみられる特徴であり(擬漢式鏡)、これらのことから室町時代以降のものと考えられる(中野1969)。

古銭の出土状況をみると、今回の調査では開元通宝、皇宋通宝、元豊通宝、洪武通宝、永楽通宝など多数（計116枚）出土しているが、最も出土量の多い洪武通宝が第Ⅳ層より古い層からは出土しておらず(第２表)、それより新しい永楽通宝などの古銭も出土していない。このことから第Ⅳ層が堆積したのは洪武通宝が流通してから、つまり14世紀後半以降であるという可能性が指摘できよう。

以上のことから、この平坦面は概ね14世紀代の鎌倉時代後半から室町時代以降、すなわち葛西氏がこの地を治めていた頃に営まれたものであると考えられる。

(5)遺跡の性格について

田東山は前述したように修験の山として知られており、山頂に経塚群があるなど修験道とは密接な関係があると思われる。しかし今回の調査では鏡や六器の台皿が出土したものの、ほかに修験道に関わると断定できるような遺構・遺物は発見されておらず、今回調査したＤ区平坦面が修験に関わる遺構であるという考古学的な確証を得ることはできなかった。

しかし、前述したようにこの平坦面で鏡や六器の台皿が出土したことで、この場所が何らかの宗教に関わる場所であることは推定できる。また、出土遺物には日常品的なものも多く含まれ、ある程度恒常的な生活が営まれていたと考えられる。それらのことから２棟の掘主柱建物跡については何らかの宗教的な居住施設（宿坊跡？）であることが推定される。

今回出土した青磁などの輸入磁器、瀬戸産の天目茶碗などの施釉陶器、常滑産の大甕などの無釉陶器、かわらけ、砥石などの石製品などといったような遺物の組合せは、中世の遺跡に一般的にみられるものといえよう。それに加えて仏具類（鏡、六器の台皿など）が出土している点に本遺跡の宗教遺跡としての特殊性があるといえる。さらに遺跡の立地をも考えあわせれば、中世の山岳宗教の遺跡といえるだろう。

7　まとめ

① 調査の対象となった平坦面が、斜面を切り盛りした４時期にわたる整地地業によって形成されていることなど、平坦面の全容が明らかになった。

② 昨年度の調査で検出された柱穴群は掘立柱建物跡の一部であることが明らかになった。平坦面上は概ね桁行を揃える南北２棟の掘立柱建物跡で構成されており、それぞれ３回、４回の建て替えが確認され、これらの配置は長期間に渡り踏襲されていたことが窺われた。しかし、平坦面東側の整地地業とは直接的な重複関係をもたないためそれらの対応関係は明確にできなかった。

③ 建物跡の前面では整地地業のほかに新たに溝跡や石組・石敷が検出され、平坦面の具体的な造営方法が明らかになった。

④ 平坦面上の施設の年代については発見された中世陶器や鏡、古銭などの年代により、鎌倉時代の後半から室町時代以降に位置付けられ、田東山の山腹に存在する平坦面の一部はその年代が鎌倉時代まで遡ることが確認された。しかし文献にみられるような奥州藤原氏の時代まで遡れるような遺構・遺物は発見できなかった。

⑤ 田東山は修験の山として知られているが、出土遺物から修験道に関わると断定できるものはなかった。しかし、鏡埋納遺構２基をはじめ、多数の鏡の破片、六器の台皿などが発見され、この場所で何らかの宗教的な行為が行われたことが推定される。さらに遺跡の立地をもふまえれば中世の山岳宗教の遺構（宿坊跡？）と考えられる。

なお、出土遺物については東北歴史資料館の藤沼邦彦氏、常滑市民俗資料館の中野晴久氏に御教授頂いた。

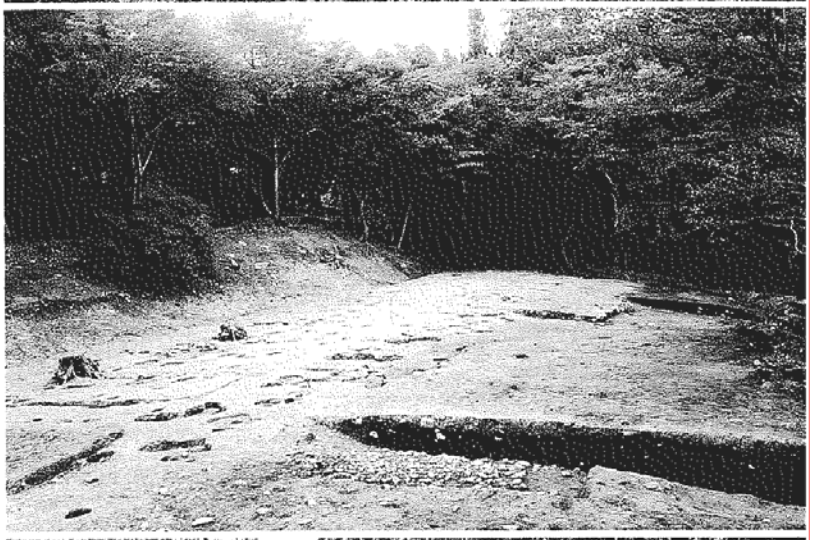
引用・参考文献

「奥羽観蹟聞老志巻之九」『仙台叢書』第16巻
「封内風土記巻之十四」『仙台叢書』　『封内風土記』第４巻
「風土記御用書出」『宮城県史』第26巻（資料編４）
「田東根山由来記」（出典不明）志津川町史編纂室所蔵
石田茂作（1973）：「修験道とその遺物」社団法人庄内文化財保存会
歌津町史編纂委員会（1986）：『歌津町史』歌津町
大坂市立博物館（1985）：『日本の古鏡－女装美のプロデューサー』
奥田直栄（1989）：『日本陶磁大系６　古瀬戸』平凡社
加藤・阿部（1980）：「観音沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第72集
工藤清泰ほか（1989）：「浪岡城　Ｘ」『昭和61・62年度浪岡城跡発掘調査報告書』
黒川古文化研究所編（1951）：古鏡図鑑（黒川古文化研究所所蔵品図録）
阪田宗彦（1989）：『密経法具（日本の美術282）』至文堂
沢田由治（1989）：『日本陶磁大系７　常滑　渥美　越前　珠洲』平凡社
菅原弘樹（1989）：「田東山寂光寺跡」『宮城県文化財調査報告書』第131集
菅原弘樹（1990）：「田東山寂光寺跡」『宮城県文化財調査報告書』第135集
東京国立博物館（1986）：『東京国立博物館図版目録－和鏡編』
中野政樹（1969）：『和鏡（日本の美術42）』至文堂
藤沢良祐（1984）：「“古瀬戸”概説」『美濃陶磁歴史館報』Ⅲ　美濃陶磁歴史館
藤沼邦彦（1975）：「宮城県の経塚について」『研究紀要』第１巻　東北歴史資料館
藤沼邦彦（1976）：「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」『研究紀要』第２巻　東北歴史資料館
藤沼邦彦（1977）：「宮城県出土の中世陶器について」『研究紀要』第３巻　東北歴史資料館

写　真　図　版

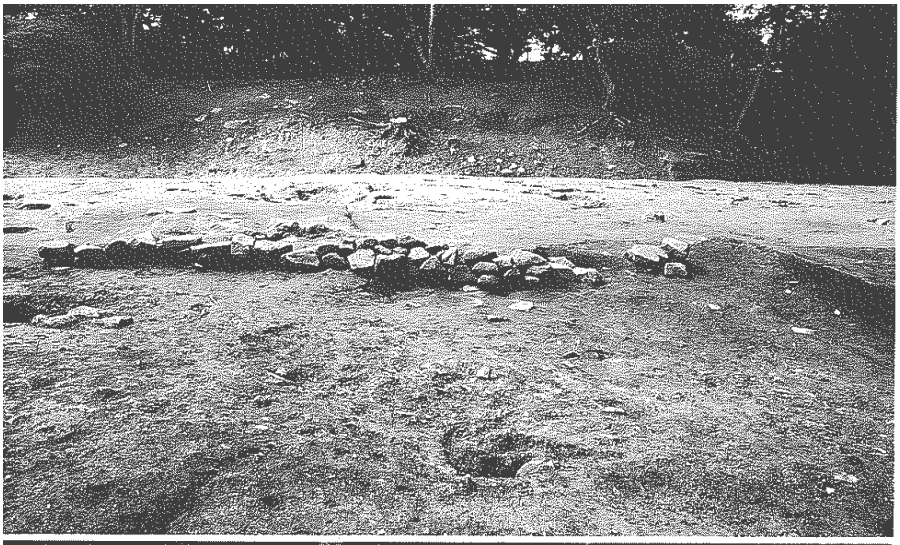
D区平面図・調査前
（南から）

D区平担面・調査後
（南東から）



調査風景
（北西から）

写真図版１



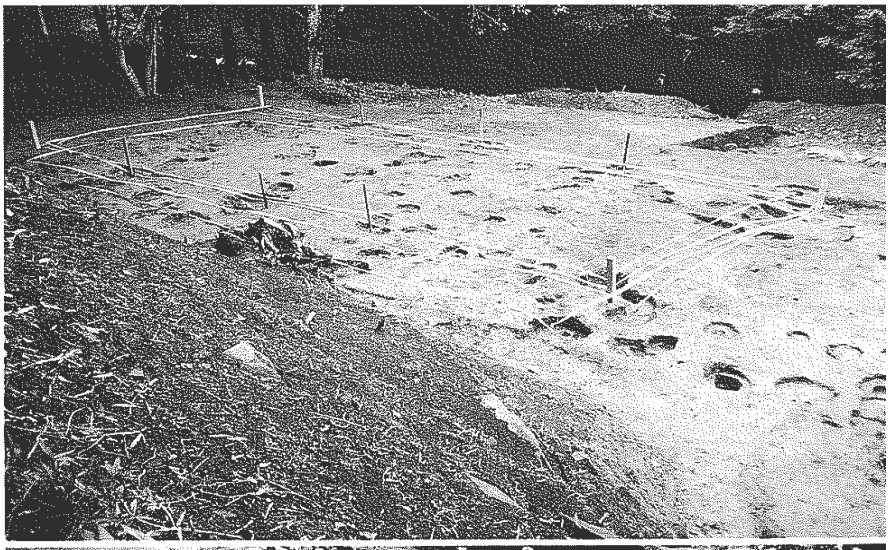
石　　組
（東から）

石　　敷
（南西から）

1 号掘立柱建物跡
（南から）

写真図版 2

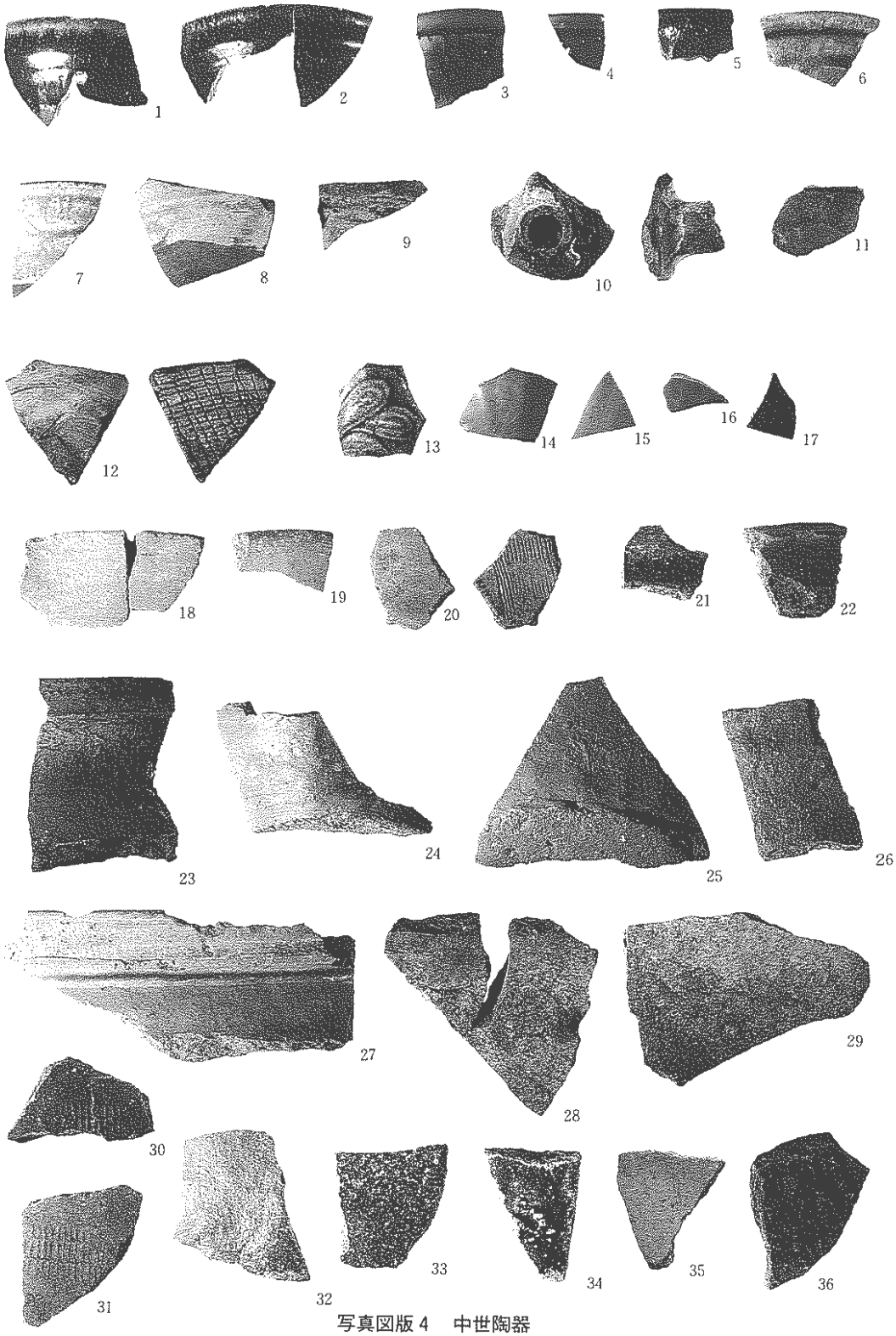
2号掘立柱建物跡
（南西から）



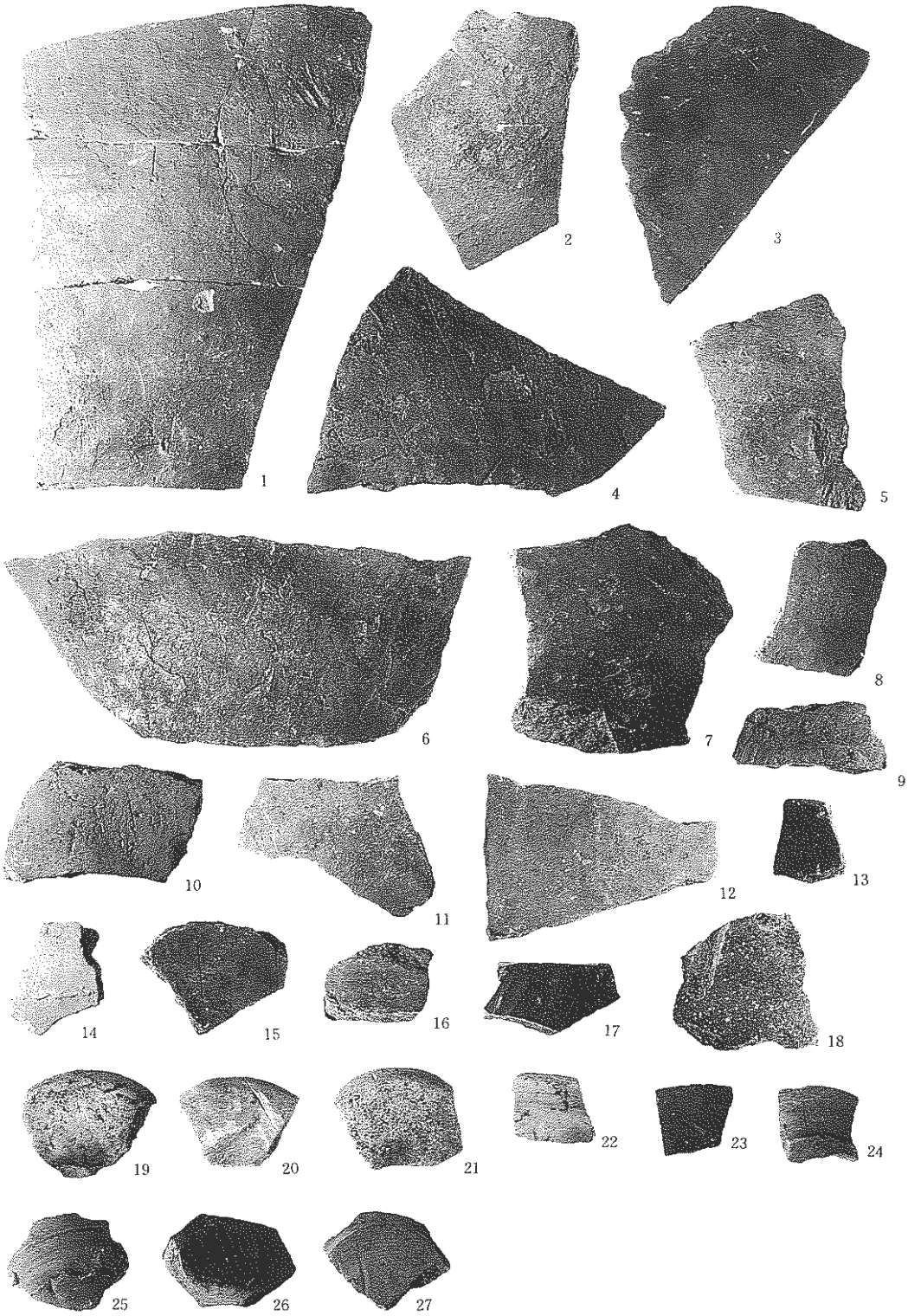
5号溝跡と柱穴列
（南から）

鏡出土状況
（2号鏡埋納遺構）

写真図版3

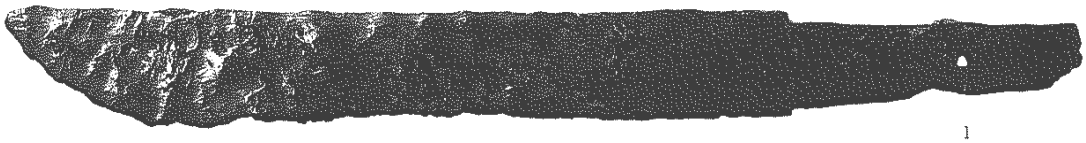

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

写真図版 4　中世陶器



写真図版５　中世陶器・かわらけ

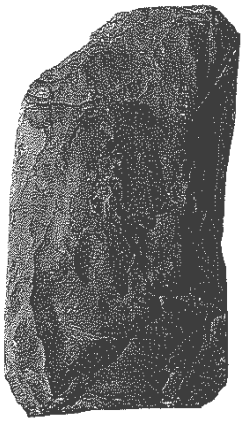
写真図版６　瓦器質土器・石製品・鉄製品



1

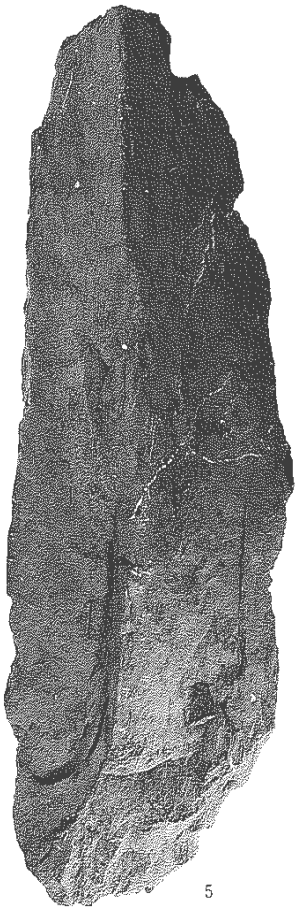
2a

2b

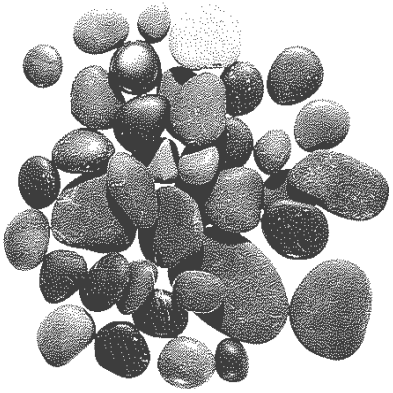


3

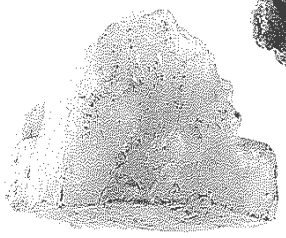
4



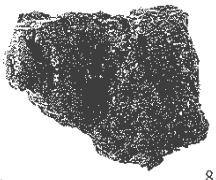
5



6

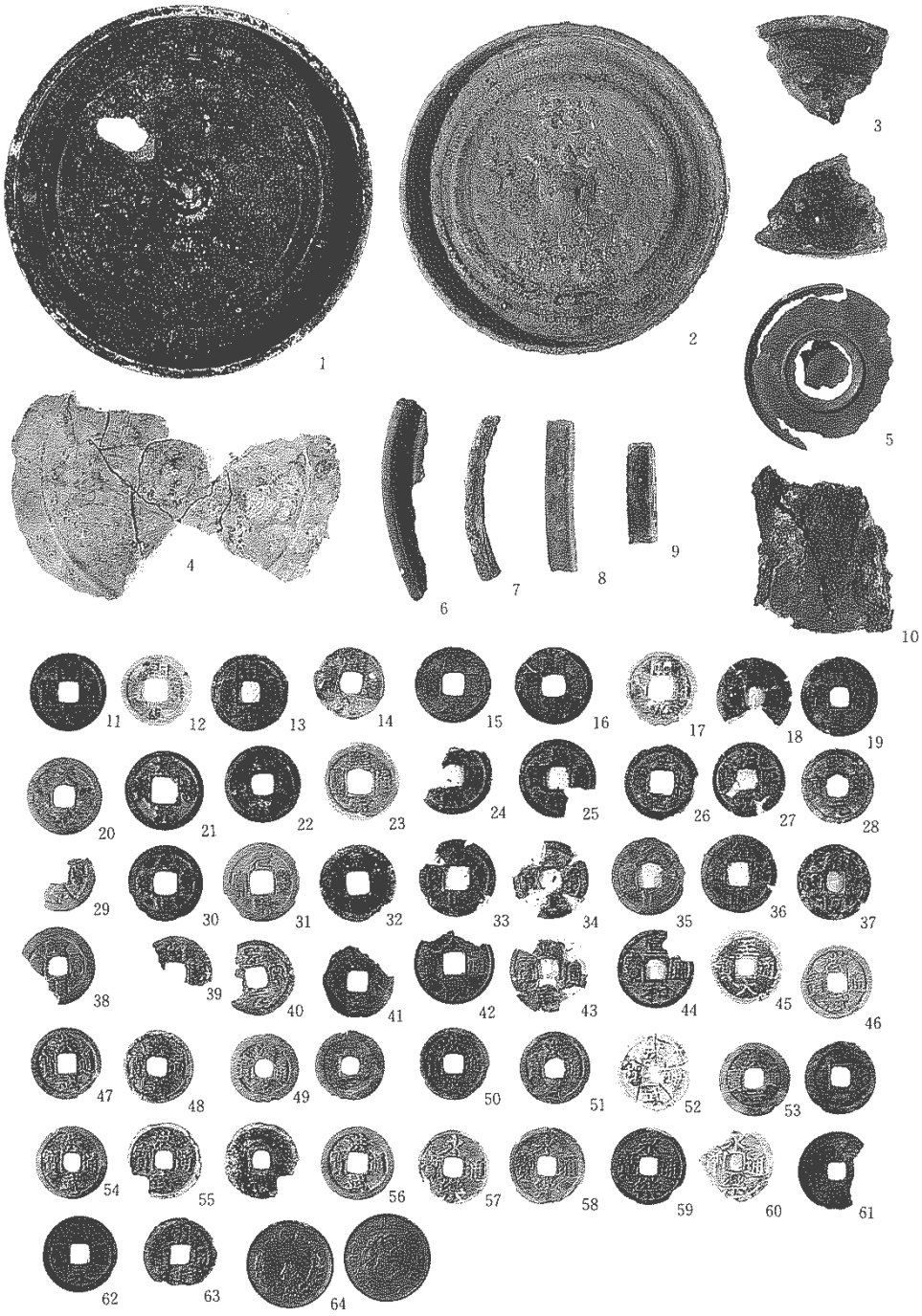


7



8

写真図版7　鉄製品・石製品・板碑・その他



写真図版８　鏡・古銭・その他